

ハイツのモン/ハン観 察日誌

ナツシーネコゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『書士隊は現場主義』

王立古生物書士隊が筆頭書記官、ジョン・アーサーが謎の失踪を遂げて七年経った今、そんな考えも古臭くなりつつあった。

大陸各地に根を張るハンター達の活躍により、希少な素材や情報が机を動かずとも入手できるようになった時代。書士隊の在り方が変わり始めていたその時、青年ハイנטツは見聞を広げるため、護衛ハンターのリイタたちと世界を巡る。

これは書士隊の青年が頑張ったり、頑張らなかつたりするお話。

目次

▼レポート1：『ナーバナ森丘・殺獣事件』	現場検証	犯人は……	二つの攻防	事の顛末	幕間く帰路にてく	▼レポート2：『砂漠に咲くは雪山草？』	フタコブに跨って	熱砂の歓迎	調査開始一日目	遭遇と観察	調査開始二日目	赤と白の鬼渡し―前―	赤と白の鬼渡し―後―	砂漠に咲くは……	雪山草？	調査開始三日目く満了く	▼レポート2・5：『ドンドルマの休日』	書士隊はいつか夢を見ていた	目覚めの朝に	後悔は人を強くする	再会の書士隊、猫を添えて	休日の終わり	▼レポート3：『ドウーヴ渓流マッピン グ、いびつな愛を測量せよ』	87	96	103	111	119	129	138	146	154	165	79	71	63	55	48	40	31	22	10	1
----------------------	------	-------	-------	------	----------	---------------------	----------	-------	---------	-------	---------	------------	------------	----------	------	-------------	---------------------	---------------	--------	-----------	--------------	--------	-------------------------------------	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

流れる時に	179
望まない探索	189
マープル・エフェクト	198
辿って上ってシンキング	208
視線の先に見据えるものは	219
青と紫の衝突―前	229
青と紫の衝突―後	237
激闘の溪流	245
覚悟を決めて、混じり合う大地へ	
▼ 253 マープル・エフェクト・メモリーズ	
▼ パーソナルレポート：『閑話休題』	265

登場人物紹介：1〜3章	277
▼ レポート4：『ミリオンキャベツとブルファンゴ』	
美味しい話	284
山の感情	293
テリトリ	302
鼻孔に響け	312
ブルファンゴ最前線	322
黄緑の風に誘われて	332
▼ レポート5：『オーバードーズにご用心』	
嵐の会談	350
流す汗にも限度がある	360

からから青空教室

—

366

過剰摂取のウワサ

—

376

▼レポート6：『火山の泪を掘り当てろ』

エア採掘（Ⅰ）

—

386

エア採掘（Ⅱ）

—

394

火山の泪（Ⅰ）

—

402

火山の泪（Ⅱ）

—

409

エア採掘（Ⅲ）

—

416

▼レポート1：『ナーバナ森丘・殺獣事件』

現場検証

調査終了の頃合いに地震は起こった。

大陸西方に位置するナーバナ村。

辺り一面は淡い新緑と土の匂い。水の青々とした湿気は幅広く行き届き、清く豊かな環境はヒトも動物も問わず多くの命へ平等に恵みを分け与える。共生する大地には自然と集落や縄張りが形成されていた。

赤々と燃える夕焼けが西方へ沈むまで幾ばくか。

橙に染まる地平線から覗かせる森丘の一角は、楽園を思わせる幻想的色合いを呈する時機じきに。観賞目的で立ち入った者ならば、例えどのような層の人間であろうとも、みな一定に心の揺らぎを感じさせるであろう光景。

そんな時と場合次第でロマンチスト御用達のスポットになり得る場では、青年と少女がそれぞれ複雑な面持ちで何かを見つめていた。

元々二人はとある生き物の求愛行動を観察するため、繁殖期に入ったこの辺境の地へ立ち寄っていた。根気のある作業であったが、遂に二人は見届けることができたのだ。

だから、せっかく目的も果たせたと言うのに。茫然と何かを見つめ続ける青年の心は、酷く曇ったものだった。

二人が佇む視線の先には、未発達な一本角を持つ四足動物の変わり果てた姿。

目の前に横たわる”ソレ”も自然の理ことわりたる弱肉強食という、絶対的なルールの中では然程珍しくもないことだ。志半ばで倒れ、冷たくなった身体は大地へ還り新たな生命を芽吹かせるための糧となる。この森も過去から現在に至り、廻り廻ってきたのだ。今更その事実が変わることはない。

「……見事なまでに食い散らかされてる」

少女はいたって落ち着いた様子で呟くが、目の前にある無残な四足動物の残骸を考え悩むように見下ろしていた。隣でうずくまる青年は直視できない様子で、口元を手で覆いながら恐る恐る視線を”ソレ”に向けようとしている。

紅に染まる夕日が、四足動物の腹から湧き出た赤い液体をカモフラージュする。しかし、だ。眼前の死骸はどうしてもこの場では不釣り合いに鎮座するのみ。

「腹から内蔵を一口で……これはひど、うっおええ……」

残骸から完全に視線をそらすと、青年は腹の底から湧き上がる不快感に耐えきれず嗚咽を漏らす。

原因は眼前にあるスプラッタな死骸そのものであったが、なまじ温かいそよ風と生々しい血の臭いが混ざりあうことで、青年の鼻孔をより一層強烈に刺激していた。相応にこたえるものがあるのか、腹の底から熱い何かがこみ上げ、不快な感覚が青年を襲う。すかさず身体を丸め込むと、青年は溢れ出しそうなナニカを押し戻すために抵抗を試みる。

「無理して見なくてもいい。少し待って」

「お、おいおい……何してるんだ」

喉元の酸味を飲み込んだ青年が涙を滲ませる中、少女は腰から一本の鋭利なナイフを取り出した。まさかと言った様子で声を震わせる青年に対して少女は

「ケルビの角は霊薬になる。使わない手はない」

と、凜とした声色でさらりと云ってのける。

さも当然といったような反応で、少女は腹部が食いちぎられたケルビの遺体に近づき屈むと、綺麗に残された頭部に生える一本角を手際よく切り取り始める。

ああ厄日だ。厄日だと、心の中で青年は反芻した。家に帰るまでが遠足だと言うが、まさにそれだと実感する。

「ああ。や——たくましいな君は……。僕はまだ、直視できそうにないよ。こいつを記録に残さなきゃならないと思うと、余計に気分が……うえ」

片手で口元を押さえながら、青年はもう片方の手で大事そうに抱えるスケッチブックをちらりと覗いた。時間にして数秒ほどだろうか。視線を現実から逸していた青年だが、やがて意を決してケルビの死骸へ灰色の瞳を向けると、ちょうど生々しい傷痕部分は少女が遮り、淡々と作業を進める姿が映り込む。栗色のセミロングで隠れるその横顔から、彼女の表情・感情を窺い知ることはできない。

ただ分かるのは、彼女が角を切り取る作業にやや時間をかけていることくらいか。まるで彼の復調を待つかのように。

「取れた。あとはあなたの記録だけど……？」

「……も、もう平気さ。情けないところ見せたけど、君はそのまま見張りを頼むよ」

時間をかけた分、丁寧な仕事で角を剥ぎ取り終えた少女。心配そうに覗き込む彼女に、青年も胸の灼熱感を抑えつつ、青ざめた顔でケルビの亡骸の前へ歩を進めた。

末席ながら”王立古生物書士隊”として名を連ねる彼としても、この事態は記録・報告する義務があると感じていた。そして現状で最もわかりやすいのが、線描^{クロッキー}として形に残すことにある。

そのためには実物をじっくり観察しないとならない訳であるが、まるで鉄製の錘^{おもり}を足にくくりつけたような感覚が、無意識に青年へと襲いかかる。これがただの思い込みであるのは重々承知しているが、終わり際の不意打ちほど憔悴するものはない。

再三覚悟を決めることになる青年は、ようやくケルビであったもの前で黙禱を捧げると、愛用のスケッチブックを開いて大まかなクロッキーを落とし込み始めた。

そんな無防備な彼の背中を守る少女は、ハンターとして周囲に満遍なく警戒を散らすのだ。

「可哀想に……まだ子供じゃないか。オスならこの二倍は大きいだろうに」

「この傷、少なくとも中型以上の何かが食いちぎった跡。……この森にそんなのいたっけ？」

カリカリと筆を進めながら、青年はポツポツとつぶやき始める。と、同時に思考が始まる。

偶蹄目・ケルビ科・ケルビ。

至って温和な性格をした動物だ。森の水辺で散見されることが多く、先に手を出さない限りは無害であるのも特徴の一つである。

少女は事前に説明された情報を遡っている様子であるが、そのような話は聞いたことが無いと青年も確信していた。

『少なくとも、ナニかがケルビを襲い、腹を満たした』

この事実と詳細を一刻も早く、近隣の村へ伝える必要がある。

「目の前にある惨状を見るに、間違いなく何かいるだろうさ。村に戻って皆に報告しな

いと。迂闊に人を出入りさせるのも危険だ」

筆を止めずに速写画を続ける青年の顔には、徐々に血の気が戻りつつあった。落ち着いた呼吸で撤退を仰ぐ彼に、賛同しかねると言った様子で顔をしかめるのは少女の方。

「このまま調査は進めないの？ 原因を排除しましょう」

「いや、村への報告が先だろう。ウインブルグさんも呼んだ方がいい。君一人でことにあたるよりも確実だ」

青年は至極まつとうな意見を言ったつもりであったが、対する少女は納得しない様子で

「そんなことない。あなたもいるし、囿役がいるだけで成功率は跳ね上がる」

と、真顔で首を傾げる。

物騒な発言をする少女の提案に、スケッチを続ける青年の筆跡が大きく乱れかける。

「いや君、さっさと凄いなこと言うね……」

緊張した場を和ませようとした少女なりのジョークなのだろうか、青年としても判断しかねてしまう。

「まずさ、なにが潜んでいるか候補が絞れてない。狩猟に入るにしても、情報が足りないだろう？」

「じゃあ原因がわかれば問題ない？」 書士「さんなら分からない？」

少女が指差す先には、青年の胸元で光る銀色のバッジがちらりと覗く。毎日手入れを欠かさないからこそその輝きは、夕日を綺麗に反射させ小粒ながらも存在感を主張する。このバッジこそ、王立古生物書士隊としての隊員証のようなものであった。

「そうは言ってもねえ。うーん……この”腹を食べられたケルビ”だけじゃ情報が足りないんだよ。ケルビを捕食する生き物はかなりいるし、候補が多いんだ」

「じゃあ何か他に証明する手はないの？」

まつすぐな少女の碧眼が、青年の瞳を覗き込んでくる。彼の灰色の瞳は即座に照れ隠し瞬きを要求すると、青年の背筋がピクリと反応した。

「い、いや。そりゃあ第一候補を絞る手段くらいあるけどさ……正直あんまりたくなかって言うか……」

ここで決して会心の出来とはいえないが、大まかな全体像と傷痕の詳細が分かる程度には書き込まれたクロッキーが完成する。やや線の乱れた形跡が散見されるものの、見れないレベルのものではない。本物と見比べながら確認すると、改めて青年は少女に目を合わせる。

クロッキー完成まで実に三分程度。この間に青年がタスクを割いて絞り出した候補を更に絞るには、あることを確認しなければならない。

「だからさ、一度戻って村に……」

「その証明手段は？」

「いや村に」

「方法は？」

「……」

これから青年がやろうとしていることは、彼にとつて苦痛なものであった。

青年は無残にも腸を食い荒らされた、幼きケルビの前に座り込んだまま天を仰いだ。既に沈み始めている太陽が青年の目を焼くことはなく、薄紅色の空が一面に広がる。

ほどよく生ぬるい風を感じていると、空を見上げた彼の目は恨めしげに少女ハンターへと向かった。しかし、少女に対して個人の感情と書士隊の誇りを天秤にかけるならば、それは間違いなく一方へ傾く。

「ほんとに追っっちゃう？」

「追う。死骸の状態から見ても、時間はそこまで経ってない。まだ森にいるはず」

「君はハンターだから、そう言えるのさ。僕は何をするにしても心の準備がいるんだよ。ふう——」

青年は改めて納得する。自分は非力な書士隊であるのに反して、彼女は手練のハンターであった事実を。そもそもの立場・価値観が違うのであれば、彼女の意見もまた、ハンターとしては真つ当な答えなのかもしれない。

淡々と述べる彼女の姿に対してもはや逃れられないと腹を括ったのか、徐々に青年の心も落ち着きを取り戻しつつあった。

不意打ちで受けた視覚的な衝撃と、嗅覚を刺激する血生臭さにも体と頭が慣れ始めた頃合い。脳裏には、この事態を引き起こした犯人像の候補。そこから更に現場の状態、地域特性などの要素を統合し、仮説を組み上げて更に絞り込む。

「じゃあ、ちよつと確認するから待つてよ……もし判らなくても怒らないでくれよ？」
「書土さんなら、大丈夫」

再び視線が腹を除いて綺麗に残された冷たい亡骸に向かうと、四度めの正直ばりに意を決した青年が深呼吸する。

あとは、仮説の検証。そして――

「君の期待が重いね――はあ……」

ケルビの首筋に素早く顔を寄せると――

――青年の舌は、真っ先に艶のある黒い毛皮を、ひと舐めした。

犯人は……

冷たいケルビの亡骸から口元を離すと、やや自虐的に青年は笑ってみせた。

「何かわかった？」

「え？ 舐めただけでわかるわけないじゃないか」

「……」

一瞬の無言で凍りつきかける場。

「い、いやいや！ 後もう一つ情報がアレばいいなと思つてさ。ほら、その辺に足跡が残つてはるはずだ。それが見つかれば検証は終わりだよ」

と、慌てて青年が付け加えるや否や、少女はそそくさと周囲を散策しだした。

小さなため息がもれ出るが、青年は答えが出るまでそう時間はかからないと踏んでいった。

さすがはハンターというべきか、間もなく少女が見つけたのは、偶蹄目の足跡とは似ても似つかない一回りも二回りも大きな足跡。明らかに異質とも言える足跡の大きさに、青年も少女も何かを確信した様子で互いを見やる。

「言っておくけど、僕はまだ村へ戻りたい派なんだが」

「心配ない。あなたのことは私が守るから。行こう」

「嬉しいこと言ってくれるけどさ。もう、いいや……」

彼女が発する真つ直ぐな視線から伝わるメッセージは変わらない。反論の余地もないと悟った様子で、観念した青年は首を縦に振る以外の選択肢が残されていなかった。

舌上に漂う柔らかな甘味に、鼻孔に漂う独特なクセのある匂いの残滓。

青年からすると、できれば朝食にでも摂取したいと感じる、ザラザラしつつも優しい口当たり。昼食に摂ろうものなら、心地よい睡眠導入剤に変貌するだろうと確信するその味は、彼の立てる仮説をぐつと答えに近づかせ、同時に不安も煽っていた。



惨劇のケルビ死体からしばらく離れた水辺。普段は温厚な草食獣の憩いの場として、穏やかな時が流れるはずであったその場所は、今は予期せぬ来訪者によって様相を変えている。

結果として青年の予想は的を射ており、茂みで息を殺す彼の隣では、少女が全身から溢れる闘志を静かに燃え上がらせていた。

「竜じゃない。残念」

「もし竜種だったら僕は全力で逃げてるからね？」

そつと呟かれる言葉に気がでないと、引きつった顔で青年は少女ハンターに目を向ける。冗談にしては如何せん笑えない。本当に冗談であるかも些か不安になってくる。

再び視線は水辺に戻る。すると、夕日に当てられて逆光する影が姿を露わにした。

その肢体は青い体毛と甲殻に覆われており、ケルビの全長を優に超えている。

鋭い牙の生え揃う顎は、ハラワタを挟った痛々しい傷痕の元凶か。これらの要素を備え、四足でゆつくりと大地を闊歩する姿から、青年の脳裏で連想されるのはただひとつ。

——青熊獸・アオアシラ。

できれば当たってほしくなかった異邦獣の登場に、若き書士隊の胸は焼け付くような不安と緊張で包まれていた。

少なくとも四メートルを超える体軀はモンスターの名に相応しい。丸太のような怪腕がひとたび振るわれれば、怪我だけで済まないのは遠くから観察を続ける青年でも感じとれた。彼がフィールドワークへ出る際に着込んだレーザー製の装備を見返すが、あの怪物に対してレーザーは薄皮一枚に等しく、防具としての意味はまったくなさないだろう。

対して少女が着こなすマカライト製のアロイ^{よろ}装備は、ハンター間でも非常に評判が良

い戦闘向けのものだと言う。そして彼女が背負うのは、ちょうど身の丈ほどある巨大な鉄剣。カテゴリとして”大剣”と呼ぶ、中型以上のモンスターに対して切り札となりえる武器だ。

獲物として目をつけられた子供ケルビの気持ちを思うと、仕方がなかったとは言え不憫で仕様がな。これからそんな文字通りの怪物に立ち合おうというのだから、ハンターとは恐れ知らずなのか、はたまた頼もしいのか。

「随分回りくどい。死骸まで舐めるなんて。足跡だけで分からなかったの？」

「判断材料は多いほうが良いだろうに。それにしても彼らは雑食と聞くけど、ケルビを襲ったなんて報告あまり聞かないぞ。一体どこから流れてきたんだ——」

「メンドくさい性格。今はそんなこと考えない。私は行くから、うまく隠れてて」

ぶつくさ独り言を呟く青年に対して、少女は静かに茂みの間を縫うように先行し始める。気配に敏感なモンスターの五感をかいくぐるため、細心の注意を払いながらゆっくり、ゆっくりと。

「任せたよ。もし逃げることもなくても、閃光玉くらい投げるよ」

「その心配はいらない。私としては帰りの素材持ちに期待してる」

「あはは……君は書士隊を何だと思ってるのさ」

「……」から先は本格的に”ハンター”の領分であった。”王立古生物書士隊”の青年

は見守る他にできることはない。それほどまでに根本から彼と彼女は違うのだ。

彼女らは採集を始めとして、運搬、護衛、狩猟まで様々な任務を現地でこなす。特に狩猟という部分では、大地を駆ける牙獣種から空を舞う飛竜種まで、ありとあらゆる脅威に立ち向かう。所謂叩き上げのエリートとも言える、生き残る技術の達人だ。

対して書士隊はというと、広大な自然に存在するモンスターの状態を日々研究することが本分にある。普段は机上で分厚い資料やサンプルとにらめっこであるが、時には現地に赴いて直接調査に出張することも。しかし、現場での彼らはあまりにも非力であり、ハンターの護衛が欠かせない。

青年は自分の無力さを痛感しながらも、今まさに青き脅威に立ち向かわんとする少女の背中に向かって、静かなエールを送った。

「僕はまだ死にたくないから、頼んだよ……」



ようやくこの時が来たと言わんばかりに、少女の心は静かな闘志で満たされていた。茂みの中で息を殺し、気配を殺しながら眼前に捉えるのは青き巨体。アオアシラと呼ばれる牙獣種の一角だ。この森の生態系で暫定的に頂点に居座る存在は、まるで自らの

庭のように水辺を闊歩する。

表情一つ変えずに、怪物を獲物として認識する少女は、更に近づく速度を上げた。

思えば事の始まりは、あの子ケルビの無残な亡骸。本来平和であるべき森に踏み入った部外者に対して、密かに少女の心は怒りで燃えていた。それは潜在的にモンスターへ対する畏怖の念からなのか、彼女の正義感ゆえのものなのか。

少なくとも彼女はハンターとしてモンスターと立ち会うことを望んでいたし、もしそれが竜種であるならば、なお良かったかとさえ思っている。

巻き込んだ青年に対しては、自分のわがままに付き合わせて多少の申し訳無さを感じつつも、勝利の報告に向けて着々と戦略を組み立てていた。

(そろそろ、かな)

静かに開戦の火蓋は切って落とされる。少女は前へ飛び出す。呑気に水を啜る青熊獣は空気の変化に気づいたのか、急に周りを見渡し始めた。

「——ッシー！」

少女が背中から抜くのは一本の鉄塊。身の丈ほどある剣身・バスターブレイドを引き抜くと、柄を両手で握り込みながら水平に地面を薙ぐ。青年よりも頭一つ分は小さい体軀から、信じられないほど大きな得物を振り回すその姿。いかにハンターが底知れぬ身

体能力を持つか、青年はその一端を垣間見る。

下方から挟り込むように放たれた一撃は相手を切るものではない。アオアシラからしてみれば、思わぬ来訪者である少女の姿にまごつくくと、鉄塊から逃れようと身体を後方へ大きくのけぞらせてバランスを崩す形となる。

切っ先はアオアシラの腹を掠め、体勢を崩した巨体は揺れるもなんとか踏みとどまる。

ようやく敵の姿を視認したアオアシラは一転、双眸に凶暴な光を宿した。獲物を見据え全身の筋肉を膨張させると、連動して体毛が逆立ちその姿を更に一回り大きく見せる。

—— オオオオオツ!!!

獣の咆哮が森全体に木霊し、互いの生死をかけた縄張り争いが始まる。

そして、大剣を握る少女は静かに笑うのだった。



(始まったか。実物を見るのは初めてだけど、やっぱり大きいな……)

時同じくして、闘いの庭から離れ気配を潜める青年は、巨大青熊と相対する少女の動向を見守る。

彼女の力量を信用していないわけではなかった。しかし、先刻の子ケルビの姿が脳裏にちらつくと、言いようのない不安に駆られるのも事実。書士隊とハンターは一蓮托生。ハンターが倒れば、次は必然的に青年自身がターゲットとして置き換わるだろう。彼は本能的にアオアシラには敵わないと感じているし、もしも自分が相対することになれば、間違いなく無傷では——生きては帰れないだろうと自覚している。

この森が安全だという事前情報を鵜呑みにしたわけではないが、広大な自然に身を投じるといふことは、いかなる事態にも備えねばならない。初めにアオアシラを追うと判断したその瞬間から、彼は自分の命を預ける覚悟を、少女ハンターの背中に託したのだ。(それにしても戦い慣れてる。センセイのお墨付きは伊達じゃないな)

視線は一人と一頭の大立ち回り。

彼女が大剣を振るえば、その巨体からは想像できない機敏さで身をよじる青熊獣。しかし、軽々と振り出される斬撃はアオアシラの回避能力を優に超えており、避けた次の瞬間に第二撃目のなぎ払いが巨体に迫る。

たまらず腕を丸めて、鎧のような甲殻で身を守ろうとするが、本来大剣は相手を”叩

き切る”コンセプトにある兵装。

少女が根を張るように右足で大地を踏み込むと、身体全体を軸にした遠心力と剣の重量をすべてのせた斬撃が空間を裂く。コンパスのように綺麗な円運動は、斬撃を重撃へと昇華させると、見事にその一撃はアオアシラの防御を弾き返し、腕の甲殻をひしゃげさせ形を変えるに至る。

「いいぞ、腕を潰した！」

少女の優勢に、思わず心の声が言葉になつて漏れ出る。青年は自らが前に出ていないにも関わらず、極度の緊張感と巨体を翻弄するハンターの姿に人知れず興奮していたようだ。

なるほどと、彼は悪趣味だと思つていた闘技場に人が集う理由が何となくわかった気がした。自らより遥かに大きな脅威と渡り合う姿は、それはそれは力を持たぬものから見れば気持ちの良いものらしい。

力任せに返される怪腕の一振りも、間合いから離れた彼女に届くはずもなく、空気を擦る鈍い音だけが残響する。

「行けっ！ そこっ！ あんなグズなんてケチヨンケチヨンにしちまえニヤーツ！」

青年の耳には、一度だけ後学のためにと覗いた闘技場で聞いた、あの熱狂的な声援が聞こえた気がした。立場から言えばベビーフェイスたる少女を応援したくなる気持ち

は、彼としても共感できるものがあつた。しかし、問題はそこでないということにすぐに気付く。

(つて、声援？ ニヤあ？)

「行けニヤーツ!!!」

「えあふおつ、し静かにしろ!!」

下手するとアオアシラが気付きかねない騒がしさに、青年は慌てて隣で騒ぐ何かの口を塞ぎにかかる。自らの声が洩れ出たことにも気付かないまま、彼の手はゴワゴワとした柔らかい感触に包まれる。

よくよく目を向けると、騒いでいたのは少女よりもさらに小さな体躯。青年の手のひらに負けじと跳ね返してくる硬めの体毛と、細長い手足に尻尾。小じんまりした二つの耳に、息継ぎの度スンスン鳴らす鼻の横には、愛嬌のあるピンと伸びた髭が数本。

(アイルーか?!)

「フゴにやにや……モゴにや……!!!」

「と、とりあえず静かに！ 気付かれでもしたらマズインだつて！」

自らを非力と嘆く青年ではあるが、彼も人並み以上に少しだけ大きな体格を持つ。そのガタイは見た目通りの力を有しており、がちり固定された手の中でもがく猫（アイルー）は、啄木鳥のように首を前後に振り回すと、途端に静かにピタリと動きを止めた。

ほっとした様子で手を離すと、コホンコホンと咳払いしながら一匹の小さな来訪者がちんまりと体を丸める。

「わ、悪かったにや。最近あいつが来てみんな困つてたニヤ。だからあの子を応援したくなつちまつたニヤ」

どうやらこのアイルー、アオアシラに縄張りを独占されるのが許せなかつたらしい。未だ興奮気味に戦いを追う視線は、ちょうどアオアシラの胸を袈裟斬りにした少女の姿へ向かう。剣の切っ先が深めに入ったようで、横一文字にパツクリと傷が開くと同時に、青い体毛が赤い血の色に染まり始める。

「他に君みたいなのは居ないよな？」

「勿論。あいつが居なくなるまで近づくにやーつて、長に言われてるニヤ」

「良かった……。いいかい、さつきみたい大声は出さないこと。ここで大人しく見てるんだ。いいね？」

ここでアオアシラが反撃に出る。

今までは傷の一つ一つに怯んだ様子だったが、所構わず甲殻が残る右腕を振り回し始めたのだ。青年から言わせてみれば、出鱈目で力任せな一撃が少女に当たるとは思えなかつたが、一度喰らえば卒倒するレベルなのは間違いない。

「分かつたニヤ。でもまあ、こんな痛快な気分はないにや。つまみとマタタビでもあれ

ば良かったんだけどニャー」

「アイルールのくせにおっさん臭いこと言うな君。まさか感性はヒトと変わらなかつたりするののか？」

少し離れた場では熾烈な縄張り争いが勃発しているというのに、やけにこのアイルールは樂觀的だ。

「ああそうにや！ つまみならさつき採った新鮮なのがあつたニャー！ ふふふ、お前にはやらないからニャー？」

「いらないうて。……今はご馳走でも喉を通る気がしないよ。あと静かにしろ」

衛生的かわからない小さなツボを取り出すと、アイルールはガサゴソと中身を引つ掻き回し始める。

数秒後、ツボから出した前足にはドロリとした何かが付着しているのと同時に、覚えのある甘い匂いが青年の鼻を掠める。

「……はっ」

「この森特産ニャー！ 美味しいニャー！ マタタビがあればもおつと最高なんだがニャー！」

この空気の読めない小さな来訪者に、青年の顔色はみるみるうちに青白くなった。

二つの攻防



アオアシラの怪腕に勝るとも劣らない一撃の数々は、着実に青い巨体の体力を抉り取り、勝負の天秤は一方へ傾きつつあった。

(そろそろ終わり、かな)

彼女の見据える先には、斑模様を全身を赤く濡らす青熊獣の姿。舌を出して肩で息をするその様子は『パンティング』というのだと、青年が得意げに話していたのを思い出す。接敵当初の獯猛さは影を潜めつつあり、このまま押し切れば勝利は目前だろうと心の中で確信していた。

沈み始めていた太陽も半分以上が地平線に飲まれ、辺り一帯は紫色に変容し始める。流石に暗闇での戦闘は避けたいと考えた少女は、柄を握る手は決して緩めずに闘争心が残る獲物の眼を見て身構えた。

次はどうくる、どう攻める。タッチアンドムーブが許されないチェスのような緊張感で、少女は最後の踏み込みのタイミングを見計らう。

(…………?)

ふと、アオアシラの纏う雰囲気が変わった気がした……と、少女の対獣センサーが捉える。どう仕掛けてくる、どこで隙が生まれる。注意深く観察し、コンマ一秒の世界で反応してみせると、少女は傾注してコトに備えた。

しかし、何故だか様子がおかしい。

先ほどまで鬭争本能に満ちた野生の眼光が、いつの間にか歓喜のそれとなり、少女を無視するようにある一点へ顔を向けているのだ。一体何が起きたのだろうか。

思わず釣られて向かった視線の先に、彼女の顔は初めて焦りの色を滲ませた。

両者は大地を踏み込む。



アオアシラの生態報告に、一つ面白い文献がある。それはアオアシラが戦闘中にも関わらず、ハンターの所持品からの確に”あるもの”を探り出し、目の前で無我夢中に貪りだしたというものだ。

青年は当時、話半分冗談だろうと笑い捨てた記憶が頭の隅にある。なぜ今になってそんなことを思い出したのだろうか。

「おいそれっ——いや今すぐ捨てるんだっ！」

もうすでに嫌な予感はしていた。

顔から血の気が引くのは本日もう何度目か。彼の定期的に悪化する顔色は焦り半分、怒気半分と、涙目ながら脳天氣に騒ぎ続けるアイルーの姿を睨みつけた。

「なーごころ？ やらないって言ったばかりニヤよ？ あいつ独り占めするからご無沙汰だったニヤ。ぜーったい、あげないのニヤー！」

「いや、そうじゃなくてっ……！」

彼が言いたいのはそこじゃない。まるでイエネコかと訝しむほどに警戒心が薄く、本能には従順過ぎるアイルーの姿に、青年は呆れを超えて感嘆すら覚えつつあった。なぜ警戒しない。なぜそこまで無防備になれるのかと。ついでに癩に障るのはわざとなのかと。

とにかく、青年としては今すぐにツボを取り上げ、森の彼方へ投げ捨ててやらねばと、生存本能いかなよかんに対する彼の答えとして全力で働きかけていた。

何といつても、それは青年が苦渋の思いで舐めとつたものと、”全くの同じもの”であつたのだから。

青年が本体ごと引つ掴みにかかる、先ほどの無防備から一転。アイルーは素早い身のこなしでひらりと躲して見せると、おちよくるように再びチロチロと前足を舐めるの

だ。

彼は自分の額にピクリと青筋が浮かんだのを感じ取った。同時に焦りで滲んだ脂汗の存在も。

「ハ、ハ、ハ……」

これ以上時間をかけるわけにいかない。こうなればと、いよいよ青年も不格好を気にしていられなくなる。ずっと脇に抱えていたスケッチブックを手放してまずは身軽に。そして間髪入れずに青年は跳んだ。

文字通り、身体そのものを宙に浮かばせながらだ。獲物に飛びつきかかる彼は、このとき自分がどのような形相をしていたか気付いていない。

そんな彼の修羅のような血相にギョツとしたのか、アイルーは反応がコンマ一秒遅れ、彼の腕に盛大なハグで迎えられることとなる。青年の感情が色々と混ざった熱い抱擁は、もがくアイルーを草むらの天然クッションに叩きつけると、堅牢な檻として小さな体軀を縛り付けた。

同時に落下した青年の身体も鞭打つが、怒りのせいに対して気にするところではない。

「は、離せにやー！ あげないったらあげないのニャー!!」

「うるさいよ……やつと、捕まえた……」

残るは青年の目からみると物騒極まりない、腕の猫が後生大事そうに抱えるツボを取り上げるだけ。安堵して身体を起こそうとすると——青年はどこかから、彼の聞き覚えのある声が聴こえた気がした。

同時に、地面が脈動するのを感じる。

「……さんー！」

急激に彼は、自分の中にあつた怒りの感情が引いていくのを感じ取る。

「……ツさん!!」

一時的な興奮状態で温まっていた身体は、瞬時に全身が縮み冷たい汗が噴出する。

「……ンツさん!!!」

”恐怖”で逡巡しかけた思考がようやく、ああ、それは自分の名前だと彼が気付いた時、巨大な地震は間近まで迫っていた。

「……逃げてっ!! ハインツさんっ!!!」

あまり感情を出さないと思っていた少女が、珍しく声を荒げていた。

青年が振り返る先には、顎から零れ落ちる唾液を滴したたせさせた、怪物の姿。

怪物の眼は青年など一切映していない様子で、彼の目線よりやや下を一心に見ている。

全身傷だらけで息も弱々しいはずなのに、青年は間近で見る本物の怪物モンスターの姿に、その生々しいまでの迫力に、彼の足は否応無しに竦んでしまった。

「あ……」

「逃げろニヤーツ!!!!!!」

腕の中の猫は、絶叫とともにアツパーカットで青年のあごを撃ち抜く。同時に青年がよろめくと、それまで彼のいた地点には覆いかぶさるような形で、アオアシラが地面を捕らえている。

視線は未だ青年——ハインツの腕の中に在り。

「~~~~~っ!!」

声にならない悲鳴が漏れた。

あの巨体で、質量で押し潰されようものなら身動き一つできないだろう。青年が理性を持って胸中の猫を捉えたハグとは比べ物にならないくらい、殺傷性に優れた熱い抱擁が飛んできたのだ。

「何してるニヤー!早く逃げるニヤー!」

続けて二撃、三撃目と猫パンチが彼の頬を掠めると、ようやくハツとして我を取り戻した。

恐怖を押し殺して茂みから距離をとると、無心に猫の持つツボをひったくる。そして今度こそ彼方へ投げ捨てようとした、のだが。

(空っぽ?!)

ツボの中身は既がない。胸の中にいる猫の様子を確認すると、手をべったりと何かで汚していた。その弊害が自身にも及んでいることに気が付くと、彼の焦りは再度噴出しかける。

無性に甘くツンとした匂いの付着する頬やあごを拭きたい気持ちに駆られるが、彼に今そのような余裕は残されていないかった。

身体を起こしたアオアシラの視線が、今度は確実に自身の顔も観ていることに気付くと、彼は胸中の猫と運命共同体になったことを悟る。

「し、死んだふりニヤ！ 死んだふりするのニヤ!!」

腕の中で騒ぎ立てるアイルーだが、死んだふりなどもつての外だ。何か武器はないかと天然自然を見回すも、体長四メートルに対して有効な自然物が都合良く見つかるわけもない。

アオアシラが二度目の抱擁に身体を逸らすと、ハインツは反射的に後方へ飛び退き、

お断りの姿勢を見せる。片腕のみにも関わらず間近で聞こえた空気摩擦は、彼の肝をいとも容易く冷やしてくる。これで弱っている状態だと思おうと失笑を禁じ得ない。

(だけど、避けられる……!)

避けたただけだと言うのに、ハインツは脳内麻薬の分泌に高揚感で胸が高鳴り始めてい

る。
「おお! 案外やるのニヤ! その調子で避けるのニヤ!!」

今すぐにも怪物めがけて投げ付けてやっても良いのだぞと、青年の中の後ろ暗い部分が出しかける。しかし、弱者が弱者を切り捨てて生き延びるなんて後味の悪いこと、ハインツの矜持が望まなかった。

アオアシラが三度抱擁みたびを迫る。

動きに小慣れてきたハインツは、つつい後方を確認しないまま跳んでしまった。が彼はすぐに後悔した。結果として怪腕が彼を捉えることはなかったのだが、ハインツの背後からは空間の気配が消えていたのだ。つまるところ、背後の大木が彼の行き場をなくさせていた。

「あ、あれ……?」

「おい何してるニヤ!? 早く動けニヤ!!」

巨大な影が立ち上がる。いくら逃げて外れない視線。今度はより間近で、より息遣

いのはつきりと、瞳に映る自分の姿を確認できてしまいそうだと感じるほどの存在感が目の前にいる。

「は、ははは……うぎつつつ!!!」

ズシリと胸に、今まで感じたことのないような衝撃がハインツを襲う。急激に圧迫される胸郭は肺の空気を強制的に排気させると、彼の視界は白一色に乗っ取られかける。かろうじて意識を繋いだ彼の眼には、反射的に解放していた腕から逃れたアイルーが一匹。顔は見えない。なぜなら猫は、アオアシラの豪腕に組み伏せられた自身の様子も見ないまま、恐怖に慄き走り去って行ったからだ。

(薄情な……ヤツめ……)

ハインツの思考が遅くなる。否、思考ではなく周囲の動きが途端に遅く感じ始める。アオアシラが右腕をゆっくりと振りかぶる。ああ、これが走馬灯なんだなと静かに理解すると、彼の意識は青い獣の相貌を見るとともに瞼を閉じた。

事の顛末

最後の瞬間まで瞼を開いて相對する度胸など、彼は持ち合わせていなかった。

視界を塞ぎ、細い糸で繋がった意識の中でハインツは苦痛に備えた。志半ばで燃え尽きたケルビの子供も、今の彼のような気持ちだったのだろうか。知りたくもなかった知識のために支払うには、あまりにも高い授業料だ。

ああ、死にたくない。しかしこれが結果だ。受け入れるしかないのか。本当に？と、心のなかで受け止めきれない葛藤がせめぎ合う。

「囿するならっ——、事前に言つてっ——、下さいっ!!」

荒い息遣いでありながらも凜とした声は響いた。途端に、ハインツの瞼の裏からは強烈な赤が透過してくる。瞼越しに照らされる光が人工のものだと確信したところで、彼の意識と気力は急速に浮上し始めた。

(閃光玉?)

「目を開けて——っ、離れてっ!!」

聞き覚えのある声は突き抜けるようにハインツの身に染み渡ると、彼に微かな希望を

抱かせる。恐怖から逃れるように閉ざしていた視界を開くと、眼前では巨体が何も無い空間に向かって藻掻いている。

この機を逃さんとばかりにハインツは起こそうとするが、身体がうまく動いてくれない。組み伏せられた時の衝撃が残存しているのか。

かろうじて上体を起こしたハインツが目にしたのは、アオアシラの背後に向かって大剣と言う驚異的な質量を抱えたまま地を駆ける少女の姿。

その圧倒的な身体能力を以って、走りながら不安定な体勢で鉄塊を大きく振りかぶる。弓のようにしならせた小柄な体軀は、必殺の間合いを詰めた。

縦から斜めに一閃。

まさに一瞬の出来事であった。

小さく声を漏らした巨体は、唸り声を発しきったのちに、次の一声を唱えることはなかった。重力に抗う力をなくしたその巨軀は、ゆつくりと大地にその身を預けようとする。

「や、やった……!」

「早くそこから離れて!!」

「あ……うぎつつつ!!」

ドスリと崩れる巨体。絶命した巨体に下敷きになるハインツは、またも肺を圧迫され

た。特上の漬物石を胸に置かれた気分で仰向けに叩きつけられた彼は、急に訪れた静けさと痛みに、自分がまだ生きていることを再確認する。

「痛い……」

「……生きてる?」

抑揚は最低限でポツリと囁かれた一言。

物言わぬ青熊獣を挟んで、そう時間は経っていないはずなのに、久々に会ったような気分でハインツは少女と向かい合った。

「——けほっ……や、やありイタさん。助かった、よ。君が声を荒げるなんて、珍しいものが見れたっ」

「……私としては、本当に囮になるなんて思ってませんでした。やるならやるって、事前には言わないと、じゃないと……」

必死に強がってみせるハインツだが、少女——リイタの反応は思いがけないものであった。

悲しげな表情を浮かべる彼女の姿に、ハインツも言葉を詰まらせてしまう。両手で握り続ける巨大な得物さえ見えなければ、その姿は儂げなものであった。

「わ、悪かったよ。こっちも想定外でさ。……それよりもここから出してくれないか?」

この布団、重たくて身体が起こせそうにないんだよ」

なんとか話題を別へ逸らそうと、ハインツは視線を胸元に覆いかぶさるアオアシラに向ける。

「……仕方ない人、ですね。少し体も鍛えた方がいいと思う」

「それはさつき常々思ったよ。さ、今度こそ帰ろうか」



太陽が地平の彼方へ沈み、ナーバナ森丘全体が深い闇で覆われる中、ある一帯だけはポツポツと明かりが点在している。そこが大陸地図にも載っていない、辺境のナーバナ村であった。

ナーバナ村の一角、ひと際大きい民家では、家の主と思われる老人がケタケタと笑いながら話を聞いていた。

「すまんのすまんの。ここいらにはたまーに、アオアシラが餌を求めて山を降りてくることがあつての」

革製の柔らかなソファに座り対面する老人は、向かい合うぼろぼろになった青年と小ざっぱりした少女に、笑顔絶やすことなく陳謝を述べる。この人物はナーバナ村の長なのだ、なんとも樂觀的に話すのだろうか。まるで先刻ハインツが遭遇した、あの恩知らずなアイルーを彷彿させる。

ちなみに、森に危険なモンスターはいないと伝えたのはこの人物だ。言ってしまうば、今回の件の元凶とも言える。

「して、どうやってケルビの死体からアオアシラだと断定したのかの？ 興味深い話での、ぜひ聞かせてくれんかの」

そんなことお構いなしと言った様子でグイグイ村長は切り込んでくる。怒る気も起きなかつたハインツは、やれやれと一つ間を置くと、静かに語り始めることにした。

「ええっと、アオアシラの食性は雑食なんですけど、大の好物がハチミツなのは有名ですよ。で、ケルビの死因はお腹から下をがぶりと一口。このとき、アオアシラはきつとケルビのことを組み伏せてたと思うんですよ。で、掴みやすい場所といたら首辺りかなと思って。事実、首筋には蜜が少しだけ付着してたんです」

ほうほうそれで、と言った様子で村長は催促するようにあごを撫でる。

「アオアシラの手の平はとても甘いつて話、かな？ いつもハチミツを食べてるから、手のひらに蜜がついてて。けど、それを狙って舐めようものなら命がけつて話」

ハインツの説明に、補足するようにリイタが続けた。

「そう。で、あと一つ気になったのがケルビを襲つた理由なんですけど——多分、子ケルビがアオアシラの縄張り知らずに、ハチミツを食べてしまったことが原因だと思えます。事実、首の蜜を舐めた時、似たようなものが口に付着してました」

「それでアオアシラが蜜を横取りされたと勘違いして、怒って襲ったというわけかの」「さすがに死骸とキスするのは億劫だったので、これは予想ですけどね」

手をぶらぶらさせながら今回の顛末を語り終えるハイイツは、どっと疲れが体にのしかかるのを感じた。思い返せば非常に濃い一日であったと振り返る。

「あとはまあ、そのリイタが無事討伐しましたので、ひとまずの脅威は去ったでしょう」

「それはありがたい。いつもは村の若い衆で狩ってたんだがの、今年は楽になりますな」「ギルドに依頼してないってこと、かな。どうりで地図にも載ってないわけ」

大陸地図は各地へ根を広げるギルドを介して、王立古生物書士隊が編纂したものだ。当然のように未開の地は地図に存在しない扱いとなるのだが、この村のように自活のみで、外界の協力を得なかった村や地域はまだ大陸に数多く存在する。

「アオアシラ程度なら大きな害獣と変わらんからの。ほれ、いま着てるわしの」ちゃんちゃんこ、これも五十年くらい前に皆で勝ち取ったものじゃ」

老人は自慢げに、自らが着飾る青い羽織を見せびらかす。だいぶ年季は入っているが、青い体毛はなおも艶を保ち続けており、持ち主がいかに大切に扱ってきたかが伺える。

「もし良ければ、お主らが斃したアオアシラも」ちゃんちゃんこ」にしてやろうかの？

「この村の密かな特産品なんじゃぞ?」

「いや、僕が斃したわけじゃないので遠慮しますよ。リイタさんは?」

相変わらず村長は楽しそうに言い放つ。夜なべで仕事をする時にあれば良いかもしれないと、一瞬ハインツの頭をよぎるが、今回アオアシラ討伐のMVPは紛れもなくリイタであり、彼の活躍はと言うと少々命の危機に直面した程度だ。素材をどうこう言える権利はないと彼は考えていた。

そのリイタの予想外な申し出に、ハインツは目を丸くする。

「じゃあ、ハインツさんの分だけお願いします」

「せっかくの素材を良いのかい? 素材はハンターにとつても貴重なものだろうに」

「私は前に一度討伐してるから。今回の分と合わせて装備を新調しても、余るくらい。ハインツさんを危険な目に遭わせた、せめてもの埋め合わせだと思つて」

「まだ気にしてたのか」

律儀なのか責任感が強いのか、リイタはアオアシラが彼を襲つたのは自分の力量不足だったと責めているのだ。ハインツから言わせてみれば、あの状況は一匹の空気が読めないアイルーが作り出してしまったものなのだから、彼女には何ら非はないと感じている。

当然、リイタはあの場にアイルーがいたことを知らなかった。その前にそそくさと逃げ

出していたからだ。しかし、そのことを説明しても関係ないと彼女は言い張るのだから、一度言い出したら引いてはくれないのだろう。あのアオアシラを追うと言い出したときと同じように、だ。

「仲がよろしいようで何よりね。ああそうです。特産品といえば、このあま〜いお茶はいかがですか？ 疲れた体に染み渡りますよ？」

穏やかな雰囲気をまとつて部屋の内から出てきたのは村長夫人。夫人が運んできたのは、透明感のある薄茶色かつ、沸き立つ湯気に燻つたような深い香りが特徴のナーバナ茶と呼ばれるもの。

「これは……ハチミツ？ 甘さが程良くて美味しい。ハインツさんも頂いたら？」

ひと啜りしたリイタからは思わず笑顔がこぼれ出る。美味しいものを食べた時の反応は、一様にみなその人間の本質を映し出すとも言おう。

一方のハインツはと言うと、何故か顔を強張らせている。

「おや、どうされたかの？ 口に合わないかの？」

「……あはは。いえ、ハチミツはしばらく良いかな、って思いました」

民家から笑い声が漏れ出ると、ハインツのナーバナ村での滞在期間は満了した。

後日、この調査報告をまとめることになるのだが、そのとき彼がハチミツで死にかけたことは伏せることにしている。

幕間～帰路にて～

「あああああああああああああ!!」

旅立ちの朝は、青年の絶叫から始まった。

「おや、どうしたのかなハインツ君。顔が真っ青じゃないか」

村のゲストハウスで呆然と立ち尽くすハインツの傍ら、声をかけてきたのはリイタと同じく、書士隊の護衛として就いているハンターのウインブルグだった。第一印象を問うと怪しいほど髭が似合う、と言われるこの中年男性だが、年齢に見合う熟練したハンターでもある。

そもそも書士隊と行動をともにするハンターは自分の身だけでなく、他人の身を守る必要もあるのだから、皆実力がある一定の水準に達しているのが周知の事実だ。

そんなウインブルグに気づいたハインツは、焦点の合わない瞳のまま唇を震わした。「ななな、ない……と言うよりも、森に忘れてきたみたいなんですよ。……僕のスケッチブック」

あまりの動揺からかハインツの声は裏返り、そのうちに秘める感情は音階に例えると二オクターブは下落している。

スケッチブックに残した情報は、書士隊員が見て得た情報を具現化する唯一と言っても良いコミュニケーションツールだ。いわば、書士隊の命とも言わなければならない。

どうやら彼は、アイルーを捕まえる際にスケッチブックを手放したことを、すっかり忘れていたようだ。

「い、急いで取りに行かないと!」

「今からであるか? ならば、よしたまえ」

「なんでですか?! 僕の命の次に大切な成果が詰まってるんですよ? いわば僕の半身

! それを諦めろと言われて諦めるなら書士隊失格で……」

「いやね」

ウインブルグがクイツと促すように視線を外へ向けると、ハインツの顔色はまたも

真っ青になる。

「雨だ。諦めるのだ」

「うわああああああああああああああああ!!!?」



「僕の……記録……はは……」

一行は、送迎用の竜車でナーバナ村を発つていた。雨の中現れた女御者は、三度笠の下から絶やさない笑顔で一行を受け入れていた。営業スマイルとは言え、火の消えたようなハインツの心には染み渡るものがある。

二頭の濃厚な草食竜アプトノスが引く車の行き先は、大陸中央に位置する最大の都市ドンドルマ。およそナーバナ村から十日を要する道程だ。そこでハインツ直属の上司と合流する予定となっており、調査報告をする手はずなのだ。

「ハインツさん。泣かない」

「泣いてなんかあないよ……悔しいのさ。言葉だけじゃ伝えきれないから、せめて形に残してって」

「気持ちはこちらからなくてもないがね。なんでもツガイのケルビを追っていたんだったかな？」

ナーバナ村を発つて以降、ハインツの瞳はずっとぶつけない感情を含みながら涙を溜め込んでいた。そんな彼の様子を不憫に感じたのか、揺れる車内で対面に座る二人の護衛ハンターは、なだめるように優しい眼差しを向けている。

「そうなんですよ！ リイタさんも見たから分かるだろう？」

「うん。あれは……とても素敵だった」

消沈した雰囲気から一転し、やたら興奮気味に語るハインツに対してリイタは小さく

頷いた。二人は森で見たケルビの求愛行動を思い起こす。

雌雄一対で行動する姿に、互いの首をすり寄せ合う仕草。確かめ合うように行われる愛情表現は、外敵を見つけるとすぐさま逃げてしまうケルビの習性から、中々目にすることができない珍しいものだ。

息をすることも忘れた二人は、ひたすら気配を隠し茂みから見届けていたことを想起する。特にハインツに至っては、その瞬間を忘れない一心で画紙に筆を走らせていた。

「そう……、そうなのさ……っ」

「あ」

「うーむ」

不意に今まで悲壮の様相を醸し出していたハインツの雰囲気が変わる。ハンター二人は、持ち前の危険察知力からすぐに変化に気がついた。それはまるでモンスターと相対したときに必ずや経験する、嵐の前の予兆とも言える。

「そうなのさっ!! 僕らは知識としてそれを知っている。でも実際に目にしたことは今までなかった。いいかい。これがどんなに歪んだ事実なのか。昨今の書士隊事情は実に由々しき事態なんだよ? ジョン・アーサー氏の失踪以降、ギュスターヴ・ロン氏を中心に机上での研究・討論で十分だという流れが広まっている。理由は簡単、ハンターたちが優秀すぎるんだ。これは決して悪いことではないさ。でもね、そのせいで貴重な

素材や情報が机に座ったままやってくる。この風潮が良くないよろしくない！
フィールドワークなんて時代遅れだと、突きつけられている気がしてならない！」

感情の咆哮であった。

(ハインツさんのメンドくさい性格、出た)

しかし、荒れ狂う青年と向かい合う二人は至って冷静に、ことの成り行きをそれぞれ
の胸三寸に納めていた。驚いたのは童車を操る女御者であつたらう。同時に車を引く
原動力も、つぶらな瞳をパチクリさせながら自らが引く荷車を一瞥していた。

「たしかに我輩たちからしてみれば、護衛先の書士隊に引き籠もられると、商売上がった
りなのは事実であるからなあ」

熱を帯びて弁を飛ばすハインツに、熟練のハンターはやや困り気味に言葉を返す。

「そうです！　すでに僕ら書士隊の中では当たり前前の知識でも、実際にそれを目にした
ことがあるのは何割なのかっ！　僕はね、あのケルビの求愛行動を実際目にもしてない
ような人達も当然のように議論できるのが不思議でならないんですよ！　同期も
籠つてばかりで外に出ようと、見聞を広めようとしなない！　なんてもつたないんだろ
うか！　知識は自分の目を見て、初めて自分のものになるといふのにつ！！

そして一通り言いたいことを言い切ったのか、冷めてきた熱が発した台詞は
「だからその……あのさ、やっぱり今から取りに戻るの……？」

出発する前の弱りきった青年のものに戻っていた。

「だめ」

と、バツサリ切り捨てるのはリイタ。

「割り切るのも人生の秘訣である」

ウインブルグも同様だ。

「だよね……ああ、今から憂鬱だよ……。同期のみんなに、ケルビのこと啖呵切つてきちゃったよ……。これで記録してないなんて言ったら何言われるか……。…」

「結局そこなのね」

荷車の窓辺で項垂れた青年を尻目に、呆れた様子のリイタは窓の外を覗く。

「命があっただけ良いではないか。実体験も貴重なもの。特にアオアシラの件は、中々に聞くことのできない武勇伝だろう。なにせ無傷であるからな！」

「……うん。咄嗟だったけど、ハインツさんが閃光玉を投げてなかったら間に合わなかった」

ウインブルグの言うとおり、アオアシラに組み伏せられて無傷で生還したと言う報告は、ほとんど上がったことがない。それだけモンスターとの接触が危険だということを暗に示しているとも言える。

ヒヤリハットの場面を思い返していたのか、安堵した様子で何気なく発したリイタの

言葉。そこに項垂れていたハインツの背筋がピクリと反応した。

「無傷じゃないですよ。今でも胸のあたりがじわじわと……ん？ 投げたのはリイタさんじゃ？」

「……え？ 私じゃないよ？」

荷車の外で振り続ける雨は、大地を進む草食竜の足元を捉え、ぬかるんだ道に大きな足跡を残させる。気の長い草食竜はそれでも確実に一步、一步と歩みを続け、背後から響く喧騒に二度も気に留めることなく仕事を果たす。

営業スマイルを崩していた女御者も、きっちり職務を果たす愛竜たちの手綱を握り、残り十日の道のりを思い浮かべていた。



ハインツ達が村を旅立って幾ばくか。出立前に散々に振りつけていた雨はからりと上がり、気持ちのよい日差しが大地に照りつける。書士隊一行が出発したと思われる痕跡は、ぬかるんだ土に残る足跡や轍わだちとして刻まれており、その手前を一つの小さな影が見つめていた。

ナーバナ村の農夫によると、未だ乾かない地面を蹴つて大地を駆け出すその背には、小さな体軀が持つには不釣り合いな長方形が括り付けられていたという。

轍の繋がる遙か先。いつしか竜車で不貞腐れる青年は、万事に備えて懐に忍ばせていた閃光玉が一つ、なくなっていることに気付くことはなかった。

つづく

▼レポート2：『砂漠に咲くは雪山草？』 フタコブに跨って

大陸中央のドンドルマから更に南下。山を一つ越えた先には、見渡す限り砂の更地が広がっている。デデ砂漠とセクメーア砂漠に分かれる二大砂漠を中心に、数々のハンターが狩場として行き来するこの地方では未だに新しい発見が尽きない。砂漠の拠点として機能しているレクサーラも、ここ数年でハンターたちの活動範囲の拡大から重要な役割を果たしている。

天と地の距離が縮まったかのように圧縮された熱量漂う空間。乾いた空気は鼻から喉を通して加湿するための貯蔵水分を次々と消費していき、同時に流れる出る汗は体力の蝕みを更に加速させる。

その場にいるだけで命を削っているかのような過酷な環境。その炎天下に身を投じてからおよそ四日目。若き書士隊は、見事に砂漠地帯での洗礼を受け、昼間から日陰の簡易寝具で死んだ魚のように横たわっていた。

「暑い……クーラードリンク後何本あります？」

「君が三本、吾輩で二本、合わせて五本であるな。少し休んだら次のポイントまで進むと

しよう」

ハインツの虚ろな瞳の先には、紅蓮の装いで身を固めた熟練ハンターのウインブルグが、表情の见えないヘルム越しで心配そうに彼を見下ろしている。

真昼の砂漠には必需品とされるクーラードリンクも、携行できる数には限りがある。特にウインブルグの纏う真紅に輝く炎戈竜の鎧は、ハインツが愛用するレザー製のものとは違い近接戦闘に特化した仕様で作成されている。

堅牢な防御力に加えて装着者の動きを極力阻害しないよう、ポーチ以外の収納できるスペースは限りなく排除されているため、携帯できる物資も必然的に限られる。備えあれば憂いなしと言うが、備えすぎて機動力を削ぐことはハンターとして活動する上でも重要な裁量なのだ。

「まるで地獄ですよ。その格好で暑くないんですか」

「うむ。吾輩の主戦場は火山であったからね。これも耐熱性に優れたものなのだよ」

「見た感じは金属製の鎧にしか見えないのに、蒸し焼きにならないのは鍛冶屋の技術が進んでるんですね……」

自慢げに鎧を見せびらかすウインブルグであるが、炎戈竜ことアグナコトルは大型モンスターの中でも厄介な火山を根城にしている。それを討伐した証が現在彼が身に着けている鎧であり、己の栄光そのもの。つまり、ウインブルグのハンターとしての技量

を分かりやすく視覚化させていた。

そして、そもそも何故ハインツが現在の状況に至っているかであるが、これにはそこまで深くはないが歴とした訳がある。



約十日の道程をかけてドンドルマへ辿り着いたハインツ達であるが、その滞在期間はずか一日。束の間の休息を期待していたハインツの思惑とは裏腹に、到着してすぐに合流したハインツの上司、「センセイ」ことラッセルは顔を合わせるなり一言。

「次、砂漠じゃ。出発は明日。用意しとくんじゃぞ」

と、なんとも軽く言つてのけたのだった。

「あの、お休みとかは……？ 報告とかもありますし」

「砂漠じゃ。面白い情報が入ったんじゃよ。すぐに動かんと逃すかもしれん。今度こそスケッチブック
記録を忘れるなよ？」

「えつと、は、はい……」

と、ハインツ。

「ははは、流石に長旅で吾輩の持病ようづうも限界である。せめてあと二日くらい休息を頂いても罰は当たらないのでは……」

「明日じゃ。ウィンブルグ君にはワシも愛用している、この腰痛ベルトを進呈しよう」

「ははは、そんな御無体な」

と、ウインブルグ。

「私の防具を整える時間は？」

「じゃあリイタだけ遅れて出発じゃ」

「うん」

と、リイタ。

「センセイ、リイタにだけ甘くないですか?!」

「れでい・ふぁーすと、じゃ」

と、ラツセル。



所謂、馬車馬のごとく働けと上司ラツセルから部下ハインツへ直接のお達しが下ったのであった。あえて現代語で言うならパワハラである。

しかし当然、対価に見合う報酬もある。約束された休日だ。それを励みに、ハインツはウインブルグとともに一足早く、砂漠地帯へと足を踏み入れたのであった。

再び立ち上がったハインツは、今回の護衛であるウインブルグと砂漠の道なき道を進

み始めることにした。なんとも男臭い旅路である。

ハインツは束の間の相棒となった、日陰で同じく休んでいるラマラダに目を向けた。砂漠を進むには必須と言われる奇蹄目・ラマラダ科に属するこの生物は、背中に二凸のコブを備えた四足動物だ。コブの中には豊富な水と栄養を蓄えているとされ、砂漠のような過酷な環境でも長期的に活動できる稀有な生物となっている。やや面長で間抜けそうな面構えをしているが、彼もこれはこれで愛嬌があるものだと感じていた。

人間の一回り大きい体躯に跨ると、ラマラダは無言で休めていた四足を立ち上げ、搭乗したハインツに緩やかな浮遊感を与える。

「躡が行き届いてますね。どこかの猫とは大違いだ」

「猫？ まあ、吾輩のホイットニーもすこぶる調子が良いみたいである」

「勝手に名前つけちゃったんですか？ 飼うなんて言い出さないでくださいよ？」

「はっはっはっ。そんな余裕、吾輩にはないのである。オトモアイルーでさえ養う余裕が無いのだからな！」

「それ笑ってて良いんですか……？」

呆れた表情でウインブルグを見やるハインツ。書士隊護衛の給料はあまり良くないのだからか。そもそもその護衛先が下つ端^{ハインツ}なのだから、と言ってしまうはお終いであろうか。

ウインブルグに勝手に名前をつけられたラマラダホイットニーも何のそのと、彼の自虐を気にも留めない様子で日陰から表へ歩き出した。照りつける日差しが再び書士隊一向に襲いかかるが、クーラードリンクにより最低限の熱中症予防はしている。残るは日差しと己の我慢比べである。

しばらく無言の道筋が続くが、およそ十分ごとに互いへの声掛けは忘れない。干物になつてないかどうか、生存確認と言ったところだ。

「……今度、吾輩とアグナコトルの死闘の話聞かせてあげようか。有料だが後学になるぞ?」

「いや、もう聞いたことあるんでいいですよ……」

「ならば同期の諸君を誘ってくれたまえ! アグナコトルの生態を生で感じた実体験だ! 若い女の子がいれば更にいいぞ?」

「欲望ダダ漏れじゃないですか……それに一度やつて集まりませんでしたよ。用意するならキリンくらの話ホタテじゃないと。熱烈な奴ならすぐに集まりますよ?」

再び熱に浮かされ始めるハインツの思考は、己の武勇伝を語りたがるのは男性ハンターによく見られる傾向だと、近年の報告会で上がっていたことをふと思いつ出した。

そんなものまで記録にまとめるというのだから、ときどき書士隊は税金泥棒と揶揄されることがある。忘れてはならないのが、書士隊の名は栄光ある。王立古生物書士

隊、つまり御役所仕事なのだ。ハンターがモンスターから注意を集めるように、ハインツたち書士隊は国民から妬みを集めやすい存在なのである。

「キリンは専門外であるなあ。グラビモス好きの若い子はどうかね？」

「僕の同期で小遣い稼ぎを考えないで下さい。……そもそも火山なんて危険地帯、同期でも入山許可取れてるの一握りですって」

「火山の良さがわからないとは勿体ない……む、そろそろ次のポイントが目視できるな」
一面砂の海から一転、水源の周りに文化は栄える。

砂漠のオアシス、名もなき集落への到着が、今回の調査の本当の出発地点。

「集落ですね。さあ、もうちよつとだ。頑張るんだよラマラダ」

ハインツは密かにつけた自慢の名前を披露してみせるが、隣のウインブルグがヘルム越しに渋い表情をしていたのには気付かない。

「ほう……負けるなラマラダよー」

手綱を引くと、操者の意思に応えるようにラマラダは奮起する。柔らかい足底は砂の大地を的確に掴むと、スピードを上げて真っ先に水辺へと走り出した。

熱砂の歓迎

これまで二人を運んだ二頭の相棒フマラダは、集落に到着してすぐオアシスに直行した。その表情は相も変わららず間の抜けた顔で感情が読み取れないが、水源を目の前にした二頭は、首を下げると破竹の勢いで水面を貪り始める。

「ご苦労様オトコマエフマラダ。今日はゆっくり休んでおくれ」

一度フマラダの水分補給が始まると、十分以上は水辺から離れることがない。熱地獄から開放された二人は、オアシスを中心に造られた集落をぐるりと見渡した。土やレンガを主素材として立ち並ぶ凹凸分かれる家々からは、紛れもなく人々の営みを感じさせる。

砂漠の過酷な環境から一転、程よい湿気を含んだ空気が全身に染み渡り、途端に体が軽くなるのを感じる。まさに天国と言えよう。

「クールアイランド現象さまさま、と言ったところですね」

「うむ。これならクーラードリンク要らずであるな」

砂漠のオアシスは地下水が湧き出たものが大半だという。その地下水が豊富な場所ほど、蒸発した水分が空気中の熱量を奪い、結果としてオアシス周辺の温度は下がる。

二人が水分補給を終えたラマラダから積んだ荷を下ろしていると、現地の村民が表へ出てくるのが目に入った。早速ウィンブルグが赤のヘルムを脱ぐと、異様にヒゲの似合う外面で第一村人へ挨拶を交わし

「ごきげんよう。宿の手配と補給をしたいのだが、良いであろうか？」
輝く純白の歯と黄金のヒゲを光らせた。



——三日前。

「——砂漠で雪山草を見た、ですか」

レクサーラ某所。

小さな驚嘆が漏れたのは、ゲストハウスと呼ばれる村付きのハンターや旅行者が身を休める仮住まい。その一人用の部屋でベッドに横たわる人物こそが、今回ギルドを介して書士隊ラツセルの耳にまで情報を送ったハンターその人であった。

集落へ発つ前に二人は、情報提供者への接触を図るためにレクサーラまで竜車を走らせていたのだ。

「砂漠に雪山草とは面妖な」

「それって本当に雪山草だったんですか？」

砂漠に雪山草という、字面からすでに眉唾な情報を鵜呑みにして良いか分からないハインツは、頭の中で知る限りの知識を雪山草というワードに総動員させる。隣のウインブルグは、自慢のヒゲを撫でながら話の続きに耳を傾けた。

そもそも雪山草というのが、その名の通り雪山草なのだ。よく知るわけではないが雪山草。雪山に生えるから雪山草。その自生地域というのがこれまた厄介で、フラヒヤ山脈の山頂付近にのみ生えているともつばらの話だ。

もちろんハインツは雪山に足を踏み入れたことはないし、雪山草を見たのは標本の中でのみ。砂漠に生えてるなんて話自体が異常なことなのだ。

「ああ。以前に行商人から売ってもらったものとそっくりそのままだった。何事かと思つて、念のため連絡することにした」

「ほほう、それで我輩たちに話が回ってきたのであるな。ちなみに現物あるのかな？」
ウインブルグの瞳は、ベッド上のハンターの右足に注目した。お世辞にも柔らかいとは言えないベッドの上では、包帯で巻かれたハンターが右足を吊り上げられている。

「ああ。ギルドに連絡を送った後に回収を試みたんだが……結果は見ての通りだ」

絶対安静を言い渡されたハンターは、天井から吊るされる自身の折れた右足を見やっ
た。

「なるほど。どうやら今回の調査、思っていた以上に骨が折れそうであるな。骨だけに」
「……」



日中熱帯・夜間寒冷という過酷な環境だけあり、旅行者はレクサーラに立ち寄るまでは良いのだが、モンスターが生息域に近いオアシスにまで足を運ぶ者は数少ない。

珍しい旅行者を発見した村民たちは、珍妙なものを見る視線を二人に向けていた。

「落ち着かないですね。なんか」

「無理もないであろう。あと少し南へ進めばガレオスの海だ。来るのはよっぽどの物好きである。道を間違えでもしたら笑えないからな」

オアシスを求めて集うのは、何も人だけじゃない。

この名もなき集落が今日まで栄え続けた理由の一つが、砂海を人々の生息圏と断絶する岩礁地帯にある。

砂海に埋もれる堅い岩と粘土の入り混じった地層が、ガレオスを中心とした砂の中を移動する生物を遮蔽する盾代わりになっているのだ。

ハンターから一通り話を聞き終えた二人の前には、珍客の来訪に我慢の尾をきらせた

現地の子供たちが寄つて来た。

「おじちゃんたちハンターさん？ その鎧なに？ かつくいいなー！」

「僕は違うよ。ハンターは隣のヒゲの人。僕は書士隊さ、知ってるかい？」

村の子供は、こぞつて物々しい装いをしたハンターに興味を惹かれてやつてくる。王都やドンドルマなどの都会では特段珍しくもない格好も、辺境の住人にとつてはすべて刺激的なものだ。

「シヨシタイ？ なにそれ知らないよ？ ハンターさんの荷物持ちかなんか？ ねえねえハンターさん！」

そしてこぞつて、ハンターは知ってるけどシヨシタイは知らない、という世知辛い答えが待ってるのである。

子供の輝く視線は、若き荷物持ちシヨシタイの隣りにいるヒゲハンターが一心に受け止めているのが良い証拠。

「に、荷物持ち……そ、そうかい。子供は率直のない意見を言うね。ぼ僕、先に行つてますね……」

「む。そうであるか。……んん如何にも！ 吾輩こそ溶岩の海をも制した男であり、ウインブルグ家の長男にして——」

そんなときはハンターがうまく立ち回るほうが、話がまとまりやすいとハインツの経

験は語りかけていた。

大仰な仕草と高らかな名乗りを上げたウインブルグは、その元来の性質から現地民と打ち解けるのが速い。あとはウインブルグの”ツレ”として、信用できる人間という立場をいだけ利用させてもらうのだ。

人知れずハインツは情けない気持ちに駆られるが、勤めを果たすためなら手段を選んではいられない。一刻も早く休日を手に入れるため、ここはグツと気持ちを飲み込む。毎度僅かな期待を込めて、現地民や子供たちに尋ねる度^{たび}傷心する彼も、懲りてないと言えるのか。

オトコマエ
ラマラダを納屋に預けたハインツは、改めて頭の中で情報をまとめ始めた。

まず最初のキーワードが『砂漠の雪山草』。

明らかに既存のデータベースとは合致しない異質な情報は、いくつかの可能性を彼の脳内で想起させる。

(話を聞く限り、あまり良い状況じゃないな)

一番望ましいのは、この村付きハンターが見かけたものが”雪山草ではなかった”という結末。砂漠まで来たことは無駄足になるが、何事もないというのは存外悪いものではない。

しかし件のハンターの話を聞く限り、雪山草を見間違えることも考えにくい。暑さで幻覚でも見たのではないかと頭をよぎるも、砂漠を拠点にするハンターがそんなハマをするとは到底思えなかった。

ホラを吹くようなメリツトもないし、簡易的な仮説をたてるとすれば、雪山草の突然変異体。モンスターで言う”亜種”のようなものか。

もしくは、砂漠の気候自体が何らかの要因で変化しているのか。

いずれにしても、砂漠の雪山草という言葉が持つ意味は、想像以上に厄介な事態へと繋がりに兼ねない。

二の足を踏んでいては、余計な面倒事がたちまち増えるだろう。

『よし、ならば現場検証だ』

と、上司が日ごとラッセルに呟く幻聴が聞こえる気がした。ときどき自分がワーキング中毒に陥っているのではないかと不安になるが、今回は砂漠の暑さのせいだと自分に言い聞かせる。

「……つて言いたいところだけど」

問題が一つ発生してしまった。

出立前にラッセルから聞いた情報は、砂漠に雪山草らしきものが発見されたらしいと、曖昧な情報だけであつたが、到着してみればそのハンター、雪山草よりも厄介な爆

弾を抱えていたのだ。

(これ、僕の手には負えるんだらうか……)

調査開始一日目

不安に駆られたハインツの予感果たして的中するのか。

気掛かりとは裏腹に身体は正直なもので、疲労困憊の彼が過ごしたオアシスの一夜はあれよあれよという間に過ぎ去っていた。気付けば硬いベッドの上で、目覚めを歓迎するのは熱砂の日差しだ。

簡易的に朝食を済ませた二人が目指すのは、集落から更に南下した先。つまりは岩礁地帯を超えて超危険地帯、ガレオスの海を渡ることになる。

そこへ足を踏み入れるためには、これまでの道中を支えたラマラダの足を置いて行く必要があった。理由は至極簡単。砂海の怪物たちにとって、ラマラダが蓄えるコブの栄養は御馳走同然。わざわざネギを背負って行くなど愚行も良いところだ。

一日休んだことで己の体力が全快しているのを確認すると、若き書士隊と熟練ハンターの二人は、調査開始の^{フィールドワーク}の一步を踏み出した。

例のハンターの情報では、雪山草はモンスターが徘徊する水辺で見かけたそうだ。ま
ずはそこまで徒歩での移動となる。

歩くのはガレオスが好む粒の細かい砂地ではなく、なるべく足場がしつかりとした現地民のみ知る隠れ道。陸から上がってこない限り、足場から急に襲われてポックリ、なんて自体はひとまず無いと言っても良い。

「……ウインブルグさん。今回の件、どう思いますか」

「うむっ。」

砂漠の道中、雪山草の件でずっと思考を巡らせていたハインツ。今も砂に足を取られながら、書士隊の癖が抜けないせいか、ついつい移動時も考え込んでしまう。なかなか彼の頭から離れてくれないのだ。

経験が浅いハインツにとつては、考えれば考えるほど仮説の数々は頭の中で立ち往生し始め、疑問の悪循環が生じ始める。こうなると思考の筋道は途端に定まらなくなる。

一度思考のリセットも兼ねて、先行する熟練^{ウインブルグ}ハンターの経験と勘を頼りに、ハインツは十分定期の声掛けで尋ねてみることにした。

「うーむ。行ってみれば分かるであろう？」

「……現場主義のハンターらしい答え、なんですかね」

現場慣れたウインブルグらしい答えでもあるのか。余計に考えるよりは、現物を確認する方がたしかに手っ取り早い。

「そうではないさ。ハインツ君は少し、考え過ぎるきらいがあるからね」

「うっ」

今まさに思考の雁字搦めに陥っていたハインツが、ウインブルグの言葉にぎくりとする。

「ここはだな、リイタ君が合流する頃には『もう終わったよ』って、言つてやるくらいの気概で良いのだよ。きつと不貞腐れる顔を見れるぞ?」

「それは……」

彼の脳内では、普段は淡々と仕事をこなす少女が、無表情ながらもムスリと不貞腐れた顔を想像して――。

「はは、それは少し見てみたいかも。リイタさんには悪いけど俄然やる気が出ましたよ。さくつと終わらせてやりましょうかつ」

「うむ。その意気だ」

ほんの少しだけ、頭の中にあつた引つ掛かりが取れた気のしたハインツの心は、先を歩く炎戈竜の鎧に頼もしさを改めて感じる。

そして少しか、その背中を羨ましくも感じていた。



時間は少し遡り、ちょうどハインツ達が砂漠を目指して出立した頃。

未だドンドルマの町に留まるリイタは、鼻屑にしている鍛冶屋へ立ち寄っていた。絶えず鳴り響く鉄を鍛える反響音。追従して空へと立ち昇る煙は、現在進行形で鍛冶場が稼働していることを示している。

「親方。私の鎧と剣、まだ？」

「まだ最後の仕上げが終わってねえな。たしか納期は五日後だったろう？」

ガタイの良い鍛冶屋の主の前に、リイタは心の中で酷く後悔していた。

何故よりもよって、帰還した翌日に新たな任務が入ってしまったのかと。何故、自らの武器の納期をあと五日後にしてしまったのかと。

ナーバナ村の滞在が長いことを見越して、納期を長めに設定してしまった自分を悔いていたのだ。

彼女は求めていた。

それはハインツが求めていた休日ではない。新たな任務をだ。

生憎とリイタは、火山や砂漠といった地帯の狩猟に関しては疎く、装備も整っていないわけではなかった。ナーバナ村へ寄る際に着込んだ金属製の鎧アロイシックスも砂漠の環境で活動するには不向きである。そんな時に備えて、密かに熱帯地方向けの装備を拵しらえてはいたのだ。

しかし、如何せんタイミングが悪い。悪すぎる。

置いて行かれた、などと心の何処かで感じていたのだろうか。移動を含めて、ナーバナ村に一ヶ月近く滞在していたのが原因か。付かず離れずハインツやウインブルグと行動していた身が、急に別行動となったのだ。彼女としても多少は思うところがある。

だからと言って感情を表に出すことはないのだが、表情に出ない分、内側から漏れ出るなんとも形容し難い雰囲気彼女には纏わり付いていた。

「嬢ちゃんが急いでるなんざあ、珍しいな」

「そんなことない——とは言わないけど。せめて納品を明日にできない？」

「明日あ!? 無理言うんじゃねえ!」

リイタが望んでいるのは無理難題な要求だ。それに対して親方も目を見開いて慌てふためく。

ドンドルマはハンターの街。必然的に鎧や武器の需要は高く、鍛冶屋は火の車のようにな忙しきだ。奥で話を聞いていた鍛冶師助手のアイルーたちも、目をぱちくりさせながら話を聞いている。

「……せめて三日後だ。三日後ならできねえこともねえ。だがな……」

「ならそれで。お金も割増で良い」

「お、おう……」

早く、一刻も早く二人の元へ向かいたい。今すぐにも砂漠へウマを走らせたい。そんな食い気味で迫るリイタの気迫に負けたのか、追加料金を請求しようとしてした鍛冶屋の主も、大人しく首を縦に振る。

すでに奥のアイルーたちは、忙しくなるぞと言った様子で、進めていた作業の手を更に速く動かし始めていた。

「ごめんね。じゃあ、お願い」

簡潔に一言そう言うと、リイタは鍛冶屋を後にする。そして次に向かうのはドンドルマの入り口たる街門の一面に構えた、王立古生物書士隊の支部である。目的は支部内で黙々と事務仕事をこなす、ハインツの上司ことラッセルとの接触だ。



「あー暇じゃ。この案件行きたいんじゃないのう……」

支部の事務所内では、書類で造られた塔が何本も、土台となつている机で積み重ねられていた。その山積みの書類を前に、げんなりとした様子で老人がひっそりとぼやく。

このラッセルという老人。かつてはジョン・アーサー同様に、片手に剣を携えて大陸中を廻った偉丈夫だったという。しかし幾重もの年月には抗えないようで、現在は支部

内での事務作業が主だった業務としてこなしている。

口々に興味深い情報が耳に入ると『よろしい、ならば現場検証じゃ』と、旅の支度を始めては周囲から猛烈な反対を受け、渋々事務作業に戻るのがお約束となっている。

「駄目ですよセンセイ。そつちはスタンレイさんに任せるんですから」

「じゃあこの案件はどうじゃ？ 幻の巨大特産キノコの件、食べたいのう……」

「そつちは……ヒューイ君でも十分でしょう」

近くで同様に書類をまとめていたラッセルの秘書と思しき女性は、眼鏡越しに光る鋭い視線を光らせながら、年甲斐もなく不貞腐れる老人を窘める。

「ならこつちはどうじゃ？」

「その案件を盗ったら、アンリちゃんから恨まれますよ？ いい加減諦めて下さい……」

ドンドルマに滞在する書士隊たちをまとめる立場にあるラッセルは、四方から飛び交う真偽のわからない情報群をかい繕い、検証のため書士隊を各地に派遣している。ハンターたちの活躍が顕著になった今、その傾向は更に加速していると言っても良い。

「じゃあこの砂漠の雪山草の件は？ ワシ的にはこれが本命なんじゃが」

「だから諦めて……って、この件、また新しい情報が入ってますね。これは……」



そして時間は現在の砂漠に至る。

砂漠の風は乾きひりつくような熱を纏い、焦がすような感覚を肌に擦り込んでいく。暑さから既にハインツは二本、ウインブルグは一本のクーラードリンクを飲み干し、絶えず押し寄せる熱風を耐え凌ぎながら進んでいた。

やがて目標のポイントまでたどり着いた二人は、早速件の雪山草を搜索し始めていたのだが――。

「ねえウインブルグさん。あれって……僕、幻を認めるわけじゃないですよね？」
「うむ。吾輩も今同じことを思ったぞ。誠に嘘偽りなき情報だったというわけだな」
彼らの目には、にわかには信じがたい光景が写し込まれていたのだ。

同時刻、砂漠の海を一頭のラマラダが駆け抜ける。

その背には、ハンターズギルドから緊急で発注された“砂漠の雪獅子”討伐の命を受けたリイタが、険しい雰囲気を感じながら騎乗していた。

遭遇と観察

鍛冶屋の提示した三日という数字が、リイタにとってこれほど長く感じたことはない。一日が一月のように感じ、ようやく二人の背中を追いかけることになる彼女。明らかにオーバーペースで歩みをすすめるラマラダに申し訳無さを感じつつも、リイタは砂漠に点在する小さな集落を次々と中継していた。

このペースならば、残り二日と待たずに合流出来るはずだ。新調した鎧と剣を纏い、彼女はひたすら前を進み続ける。

そんな出発スケジュールを早めていたリイタのことを、ハインツとウインブルグが知るはずもない。

現在二人がいるのは、ガレオスの海を超えた先。岩と砂の入り交じる山が立ち並ぶ岩山地帯、切り立った岩陰に身を潜めていた。

「ハインツ君。君を書士隊と見込んで一つ質問があるのだが。良いかな」

「奇遇ですね。ちょうど僕もハンターの貴方に聞きたいことがあつたんですよ」

少なくとも彼らは、情報元のハンターと接触した時点で“砂漠の雪獅子”の情報を入手していたし、その時点で過去数件ほど、砂漠に“砂獅子”と呼ばれるドドブランゴの

亜種が出現したことがあったという事実も、重々承知していた。

そんな二人であるが、今は自らが目にしている光景を半信半疑で理解しようと奮闘する真つ只中である。

地面に伏せて気配を押し殺しながら言葉を交わす。互いの顔を見やることはない。なぜなら双眼鏡越しの光景に視線が釘付けになり離せなかつたからだ。

そして、二人の疑問は重なる。

『あれは——何をしてるんだ？』

まずは視界に入るのは白き巨体。名は体軀を表すとは言ったものか。砂漠に確かに存在したのは、フラヒヤ山脈といった寒冷地帯・雪山を生息の分布とする“雪獅子”とドドブランゴだった。

その姿は資料に載るような個体よりも、一回り小さいくらいだろうかとハインツは考える。

一括りに小さいと言っても、双眼鏡越しでも分かる人間を遥かに超える体軀は、その巨体をのっそりと動かすと、付近の水辺へと向かい屈みこむ。二人の目線ではちようど後ろ姿が映り込む形だ。

「間違いない。情報通りドドブランゴだ。尖爪目・堅歯亜目・鋭牙上科・ブランゴ科……」
「それは呪文か何かかい？ 何にせよ、さつきからまた水を飲んでるな」

元々は摂氏マイナスを超える雪原での行動を想定されたドドブランゴの肉体は、体内の熱を逃さないための白い剛毛で覆われている。それが今や真逆の環境たる砂漠の暑気だ。この猛暑に耐えうるための身体構造を、果たしてドドブランゴは持っているのだろうか。

「——で、あるならば。熱を逃がすための水分を補給していると考えられるけど」

小声で呟くハイイツは、己の思考をフル回転させる。

彼の瞳に映すものの正体は“雪獅子ドドブランゴ”でおおよそ間違いないだろう。かつて砂漠に出現したとされる“砂獅子”は、茶色い体躯を特徴としていたとされる。

その雪獅子が砂漠で命永らえさせているとすれば、己の生理現象を有効に活用する他ないハイイツは考えていた。

「熱を外へ逃がすための手段は水分の蒸発。オアシス周辺のクールアイランドと同じだと考えれば理にかなうけど……」

「それだけでは、なさそうであるな」

一点して見ると水を飲んでいるだけのように見える雪獅子は、水面から顔を離すと再びのそりと動き出す。乾いた大地に浮かぶ真っ白なシルエツトは、異物この上なく非常に目立つ。

しばらくは水辺の周辺をゆっくりとした足取りで闊歩したかと思うと、不意に足を止

める。双眼鏡越しの二人には、ちようど白の巨体が壁となり、ドドブランゴが何に向かい合っているかは確認することができない。

「もう一回確認しますけど、あれは何をしてるんだろう。……ウインブルグさんからは何か見えますか？」

「むー如何せん距離があるから断言はできないが、霧吹き——であるかな？」

「霧吹き？」

返される単語にピンとこないハインツは、双眼鏡から視線を外さないまま尋ねる。

「ハインツ君はファンゴーマスクを知ってるかな？ 立ち絵芝居と言って、菓子を入場料代わり売って読み聞かせる——吾輩が子供の頃に流行った演目だよ」

「いえ生憎と……それが霧吹きと？」

何か関係あるのだと疑問に思う彼に対して、懐かしそうな口調でウインブルグは返した。

「うむ、その敵役で出る怪人イーオスマンなんだがな。口に含んだ水を吹き出して目潰しをする、”毒霧”なんて言う技を持っていたのだ。童心ながら卑怯者だと騒ぎ立てた記憶を、ついつい思い出してしまったのだよ。まあ、最後はファンゴーマスクが勝つんだがね」

「はあ……。つまり、含んだ水をブレス状に吐き出している？ 一体何に向かつて？」

確かにハインツの知識の中で、雪山に住むドドブランゴは雪を吹き出して攻撃する習性があると認知していた。しかし、現在雪獅子の周りにその存在を脅かすモンスターは姿は現状一匹たりとも存在していない。おそらくドドブランゴが存在する一帯は、暫定的にもあの雪獅子の支配する領域になっているのだろう。

「そこまでは近づいてみないと分からんな。ひよつとすると例の雪山草であるかもな」
「それを知るためにも——うん、なんとかして近づけないものかなあ……」

双眼鏡で視認するにしても距離には限界がある。しかし、近づきすぎれば気取られる危険がより一層増すのだ。

気付かれそうで気付かれない。この絶妙な距離感を保つというのは存外難しい。その裁量は今現在、ウインブルグにすべて一任している。

「やめた方が良いと進言するよ。ドドブランゴの縄張り意識を甘く見てはいけないな。迂闊に近づけば気付かれる。かといって、事を構えるのも早計というもの」

「それじゃあ僕らの取る戦略は」

「うむ——得意の我慢比べと行こうじゃないか」



一体どれほどの時間が経ったのか。天井に瞬く熱源に晒され続けて干物にならないのも、ひとえに人類の英知の結晶たるクーラードリンクのおかげなのだが、集落で補充した予備も残り少なくなっていた。

心もとなない道具袋ポーチの中身を確認しつつ、日陰に退避したハインツは一息つく。「やつぱり暑……あのドドブランゴ、よく見ると身体のところどころに傷跡がありましたね」

汗を拭う腕も重く感じ始めたハインツは、下ろした双眼鏡から離れた瞳でポツリと浮かぶ白い点を見やる。今も尚もぞもぞと動く白の毛塊は、再び水面へ頭を突っ込んでいるのだろうか。

「おそらくは雪山での縄張り争いに敗れたのだろうか。牙も失っているようだ」
「ええ。牙を失ったとなると」

「ブランゴを束ねる求心力も失っているだろうな」
もともとドドブランゴは、金魚の糞のように取り巻く子分こと、ブランゴという小型モンスターを束ねる親玉である。基本的にブランゴはリーダーに絶対服従の存在であるが、それには一つ条件があるとされている。

それがリーダーとしての威厳を象徴する、異常に発達した二対の牙の存在であった。「生存競争の敗者、ですか。それでも砂漠まで落ち延びたのなら、大した生命力だと感じ

するところですよ。少し不憫にも感じますけど」

「確かに不憫だろうが、あまり同情はしない方が良い。判断を鈍らせかねんよ?」

その一瞬、紅のヘルム越しから光る瞳が鋭いものに変容したことに、すぐさまハインツは気付く。口調は物腰の柔らかいものであるが、その内に含むものは真に迫るものがある。

この熟練ハンターは本気で忠告しているのだ、と。

「それはまあ……もちろん。同情どころか自分のことで手一杯ですよ」

つい昨日の出来事のように思い出したのは、ナーバナ森丘でハインツが間近で感じ取ったモンスターの鼓動・本能・執念。一匹のアイルーを助けようと思ったのは、彼の独りよがりな判断に過ぎなかった。結果、彼は危うく命を落としかけたのだから。

「余計なお節介だったかな。何にせよ、今すぐにあのドドブランゴをどうするかは決められまい。あの様子じゃあ夜まで粘られそうだ」

主にギルドがモンスターの討伐を依頼として斡旋する場合、いくつかの条件が存在する。例えば人の生存圏とモンスターの生息圏、つまり縄張りが極端に近づいたり重なったりした時。またはその環境の生態系に悪影響をもたらす存在であると認識された時、など。

無闇矢鱈に乱獲を行うと生態系に異常を来す恐れもある。とは言うものの、気軽に相対

できるものでないのも事実だが。

もしもギルドの規定を超えて狩猟を継続しようものなら、世の影から手痛い制裁を受けることになる——と噂されている。

「それはまずいですね。ホットドリリンクの備えは心もとない。それに夜行性のガレオスだって活発になります」

「うむ。一度出直すとしよう。こちらから干渉しなければ、向こうも襲ってくることはあるまい。今後の対応は集落の村付きと話し合うとしよう」

「まったく。……これだと雪山草どころじゃありませんね」

昼と夜で見せる表情を大きく変える砂漠では、考えなしに行動することほど愚かなこととはない。

何度も何度も、まるでルーチンワークのように繰り返されるドドブランゴの奇行の答えを出すには、ハインツにとってまだまだ情報が少なすぎるのも事実。

リイタの到着を待たずに解決を試みてはみたが、なかなか上手くことは運ばないものだとは彼は感じていた。

もと来た道筋へ踵を返すと、ハインツ達は一日目における現地調査を無事終える事となる。

調査開始二日目

調査二日目、朝日が昇る前の早朝。

ほぼ一年中を晴れのち晴れで通す砂漠の大地で、ハインツは予想よりも早く予期していた事態と遭遇することになる。

「やあ^{オトコマエ}ラマラダ。今日も留守番で悪いね」

早朝に宿る冷気の抜け切らない風の中、ナーバナ土産の青いちやんちやんこを羽織るハインツは、納屋へ預けていた相棒の機嫌を伺いに足を運んでいた。

相も変わらず間の抜けた表情のラマラダであるが、足を畳んで床に伏せながら彼のことを上目遣いで見てくる。まるで背中に乗れとでも言いたげにだ。

「もう少し辛抱しておくれ。代わりにはならないと思うけど、オアシスへ連れて行つてやるから」

狭い納屋に佇む従順な相棒に対して、外を気兼ねなく走らせてやりたい気持ちはあるものの、優先すべきことが彼にはあった。

フンと鼻を鳴らすと、畳んでいた足を立ち上げて水の匂いへ向かって顔を向けるラマ

ラダ。人語を理解しているかは判らないが、本当によく躰が行き届いているとハインツはすっかり感心していた。

そんなラマラダオトコマエのいる錠前を開ける手前、ハインツは納屋に知らない顔ぶれが三つほど増えていることに気付く。まるで自分も連れて行ってくれと言わんばかりに、ラマラダオトコマエの隣にある区画から長い首を突き出していたからだ。

ウインブルグホイットニーのラマラダは見当たらない。先にオアシスへ連れ出されているのだろう。

(ゲスト用の納屋に三頭か……思っていたよりも早かったな)

一転して厳しい面持ちを浮かべると、差し迫った事態に対する胸騒ぎが彼の中で生じる。そんな目の前で佇む仮初の主人を心配してか、ラマラダオトコマエが黙って鼻先でハインツの頭頂部を小突いた。

「痛っ……なんだ気遣ってくれるのか？ それよりも早く出させてかい？ 悪かった、今開けるから待ってくれよ」

ラマラダオトコマエの仮住まいとなつている区画の鍵を開けながら、冗談交じりで言ってみた言葉だが、相も変わらずラマラダは間の抜けた表情を崩さずにハインツと向かい合う。

「なんだかりイタさんみたいだな——おっと今のは怒られるな。内密にしてくれよ？」

それとなくこの場にはいない護衛ハンターとの共通点を見出したハインツだが、本人か

らしてみれば大層失礼なことこの上ないだろう。独り言を漏らしているのは彼自身であるが、クスリと笑いながら納屋の外へラマラダオトコマエを連れ出した。

すつかり冷え込んだ外気に肌を晒すと、引き手綱を持ちながら集落中央のオアシスへ向かう。近づけば近づくほど、夜明けの青と同調するように水の匂いが乾燥しがちな表皮へ染み渡ってくる。

集落の文字通り生命泉であるオアシスでは、ハインツの予想通りラマラダホイトニーが先に水を貪っていた。その傍ら、調査に備えて既に下半身をアグナフオールドとグリーヴ、上半身を茶色のインナーで固めたウインブルグは、ハインツに気付くと笑顔で手を振る。

「やあハインツ君。良い朝だね」

「おはようございます。先に来ていたんですね」

ハインツの引き手綱から解放されたラマラダオトコマエは、水辺に寄ると同時に顔を水面へ沈める。息継ぎなく豪快に貪る相棒の姿を満足気に見つめると、ハインツはウインブルグに向き直った。

「ああそうだ、昨日話したドドブランゴの件だがね。討伐日程は明日、レクサーラからも援軍が来るそうだ。もちろん吾輩も同行することになったよ」

「そうですか。リイタさんは間に合いそうにありませんね。しかしそうになると、なんとかして今日中に雪山草の件は片付けたいところ。思ったよりも早く嗅ぎつけてきたみ

たいですよ」

ハインツが示唆するのは納屋に増えていた納屋の面子。正確には少なからず三人はいる新たな来訪者ラマダの主のことだ。

ウインブルグも同様に事態を察していた様子で、笑顔を苦笑に変えながら口を開いた。

「中々に目ざとい連中である。ラッセル殿が見定めた情報と重なるとは、彼ら側にも鑑定眼の利く人物がいるのだろうね」

「おおよそ検討はつきます。彼らも生活のためにやっていることだ。早まった真似さえしなければ良いんですけど……」

「直接交渉してみるかね？ 少なくとも君のバッジ書士隊証を見せれば一日くらい大人しくするんじゃないか？」

ハインツの胸元で光る銀バッジは、入隊する際に王国から賜ったものである。直接的に王国の威光を示すことも出来なくはないが、書士隊の一隊員に過ぎないハインツの言葉がどれだけ響くだろうか。

事実、王立古生物書士隊はハンターと比べると圧倒的に知名度も低く、その活動内容も裏方そのもの。集落で最初に話しかけてきた子供もそうであったように、書士隊をハンターハンターの荷物持荷物持ちと認知する者もいる始末である。

この広大な大陸、王国の権力など、あつてないようなものなのも一つの事実だったのだ。

「やめときますよ。それに今は長旅の疲れで夢の中でしよう。到着したのはおそらく夜明け前。ラマラダを労わないままベッドに飛び込んだんでしようね。僕からしてみれば心象は最悪ですよ。リイタさんが居なくて良かったとさえ思います」

護衛ハンターリイタの武勇伝は数多い。腕は立つのに何故ハインツのような末端の護衛に甘んじているのも、過去に色々と事案があつたそう。口数も少ない彼女自身から語られることはないのだが、以前移動中の竜車で退屈を紛らわす際に聞いた話の一つは、至極物騒なものであつた。

「それに関しては吾輩も同意見だ。うむ、早いところ出発しよう。今日は吾輩の華麗な兜術を魅せる日でもあるからね……!」

ウインブルグが輝く黄金のヒゲを光らせると、二人は二日目の調査へ向けた支度を着々と進めていった。



時間は進む。陽はすっかり天上まで昇りきり、場所は昨日二人がドドブランゴを発見したポイント。そこから更にドドブランゴの徘徊する水辺に近づいていた。

「今日も同じ場所に居たか。相当なお気に入りにかな、これは。だからこそ調べ甲斐があるってものだけど」

ポツリと呟くハインツであるが、彼は現在単独行動中である。つまりは独り言をつぶやく彼が覗く双眼鏡越しの視界には、砂漠に迷い込んだ傷だらけの雪獅子ともう一つ、淡い真紅の鎧が悠然と歩みを進めていた。

近づけないのならば、そこから引き剥がしてやれば良い。

ラッセル流調査術の一つ。時と場合で多少強引な手も使うべし、であった。

「なるべく、なるべく遠くにですよ……！　僕は逃げ足には自身はあるけど、砂場じゃ話は別ですからね……！」

心の声はもはや心にとどまらず。ハインツの気も知らずに悠々と歩を進めるハンターのタイミング次第で、これから事態は大きく動く。その緊張感是非戦闘員にとって息を詰まらせる毒以外の何物でもなかった。

長引けば長引くほどに余計な疲弊感を増すことが解っていたのだろうか。

ハインツの零し続ける緊張感を紛らわす台詞の数々は、新しいものを吐き出すことはなかった。

動く。

ピクニックに来たかのような歩調は、つい数秒前までは二本の足を順々に砂の床を踏

み固めていた。しかし、ハインツが瞬く一瞬で、二本の足は両方とも砂上から離れていった。

（動いた！）

砂漠を走り出した真紅の鎧は、予め手に仕込んでおいたであろう何かをドドブランゴに投げつける。やり投げのように綺麗な放物線を描いて飛んでいく何かは、丁度水を貪っていたドドブランゴの頭頂部へ、吸い込まれるように落下する。

——ベチャリ。

双眼鏡越しからも、そんな擬音を想像するのは容易かった。

白の毛塊は即座に様相を変える。今まで気配もなく近づいてきた、異様な紅の鎧に気付くのに時間はかからない。

——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

今度は擬音でなく、大気を伝わるドドブランゴの慟哭がハインツの耳を刺激する。

昨日のルーチンワークのように見せていた緩慢な動きはナリを潜め、その姿は見間違えようもなくモンスター威厳のそれであった。

相對していた赤い鎧こと、ハンター・ウインブルグは、腰に携えていた一対の双剣を構えたかと思うと



「ぎゃ、おきゃらば!!」

◆ と、雪獅子へ背中を向けて真っ先に走り出す。

全力で命がけの遁走が始まり、ハインツもまた、時間制限付きの現地調査が発令されるのだ。

(時間はウインブルグさんのスタミナが限界を迎える前、調査区域は水辺周辺、特に昨日頻回にドドブランゴが廻った場所を重点的に……よし)

「行くかうか……っ!」

二日目の調査開始の合図は、激動の予感を示した。

赤と白の鬼渡し——前——

砂漠の雪獅子は赤い鎧を追走する。

乾燥しきつた大気の中、心肺機能を総動員させて疾走するという行為。体力が物を言うフィールドワークをそれなりにこなしてきたハインツであるが、現在置かれている環境は想像以上に苦しいものがある。

人間の呼吸というのは、酸素・二酸化炭素の出し入れだけでなく、一定量加湿したのちに肺へ空気を到達させる。通常の環境であれば何気ない行為である呼吸も、湿度という概念が縁遠い砂漠では繰り返す度、体中の水分が一息つくだけで浪費されていく。

それをハインツ自身ならまだしも、ウインブルグはあのドドブランゴと対峙しながら続けなければならないのだ。平常であれば疲れたら休む。至極当然の行為と言えよう。

しかしモンスターは果たして待つてくれるか。……否。

この囮作戦は、まさに短期決戦型の一撃離脱に他ならない。この砂漠という環境が長期戦を許してはくれない。

早朝のオアシスで平然と彼が言ったのけた「囮術」は、死に直結しかねない危険な作戦であったのだ。

砂埃は口へ入り不快な感触を与える。足場の緩い砂の床は走る度に体勢を崩され余計な体力を使わされる。しかしハインツは決して走る足を緩めない。

命をかけてモンスターと退治する、勇敢なハンターと無事に合流するため。彼のすべきことをより迅速に完了するために。

(到着……っ、周りにモンスター……いない!!)

つい数分前まで双眼鏡で目にした景色は、間近で見るとより砂漠という大地の広大さを思い知らされる。想像以上に搜索範囲が広がった。

(でも問題ない。ドドブランゴがいた水辺まで……)

砂漠での狩猟は事前準備・調査が成否を分けると言っても良い。森と比べて遮蔽物の少ない砂漠では、モンスターに見つかる可能性が極めて高い。

逆に利点も存在する。それこそ事前に周辺の環境を目視、把握しやすい点だろう。

だからこそハインツたちは貴重な一日を事前の調査で使い潰し、本命を後日に当てようと考えていた。遅れて到着するであろう、もう一人の護衛ハンターを待ちながら。

しかし状況は変わってしまった。あの新たな三頭のラマラダである。おそらくラマラダの主は、ハインツら書士隊の商売敵とも言える相手であった。

個人商会である。それもかなり規模が大きい、裏の商会。

はじめにハインツが「砂漠の雪山草」という言葉に対して抱いた感情。それは彼自

身下劣ながらも考えてしまっていた。

『もしも本当にあるなら、お金になりそうだな』

——と。希少な品は高値で取引されるのがツネ。

その考えの後にすぐさま頭に浮かんだのが、”裏商会”の存在。

彼らが噂を聞きつけければ、必ずや飛んでくるであろう。それが如何ような場所であつ

てもだ。それほどまでに彼らの情報網は広く足も速い。

通常は表立って動きはしないのだろうが、今回のフィールドは砂漠。砂漠の玄関レク

サーラまでならまだしも、名もなき集落まで好んで足を運ぶものなど滅多に居ない。

分かりやすく現れた新たな来客は、早朝のハインツを人知れず戦慄させていた。

(…………この辺りか?)

乱れた呼吸を整えながらハインツがようやくたどり着いたのは、ドドブランゴが水を

貪った後に徘徊していたポイントの一つ。

薬草、火薬草、トウガラシ……。別段、目新しくもない、砂漠に自生する植物の数々

がハインツの目に映る。

「こっちはサボテンに…………うげつ、マタタビも生えてるのか」

僅かな水と豊富過ぎる日差しの中でもたくましく育つ木々や草花は、まさに雑草魂と

叫ぶかのように日向日陰と、全方位から自己を主張している。

その中の一つのマタタビは、顔をしかめたハインツの脳裏に、未だに払拭し難いナーバナ森丘での出来事を思い起こさせた。

あの一件以来、反射的にハチミツとアイルーを見るとつつい一歩引いてしまう。

しかし余計なことを考えている暇はない。

調査を続けていると、ついにドドブランゴが徘徊する頻度が一番多かつたポイントへ到着。

そしてすぐさま、ハインツの双眸は鋭く光った。

「——これは」



砂漠では数少ない高低差ある起伏のある岩山地帯。

事前調査の賜物は、特に問題と言った問題もなくターゲットを誘導することに成功していた。

赤の鎧は距離を保てるように岩山を利用しながら、白の毛塊と命オニのやり取りゴッコを繰り返している。

ハンターは振り返らない。かのドドブランゴがいる位置は、風下となっているウィン

ブルグ側からは視覚に頼らずとも把握できる。ドドブランゴの頭頂部からは、ベツタリとポイントボールが放つ激臭の発生源となつていたからだ。

走る。隠れる。走る。走る。隠れる。走る――。

それを平然と要求される命がけの逃走劇は、準備も何もせずに行えばすぐに体中の水分という水分が空になり、終わつた頃には砂漠同様に干乾びてしまふ危険な行為。

「ハツ、ヒイツ、フウウ……」と、年はとりたくないものであるな……」

岩陰に隠れ、ドドブランゴが見せる隙を掻い潜り、呼吸のリズムを整える。

タイミングを見計らう彼――ウインブルグが扱う双剣は武器にして武器に非ず。単純に扱えるものではなかつた。

リイタが使う大剣の力業でもない、それは武術に通じるものがある――”犁”であつた。

(これだけ距離があれば十分だろう。あとは少しだけ、ここに留まつてもらうよ)

ウインブルグの腰に双剣が携えられているのは明白である。しかし、見えているのは赤味のある取手部分のみ。その刀身は湿らせた雑布で覆われていた。

彼のクーラードリンク摂取量は、火山を主戦場にする彼の匠の技から、ハイנטツと比べて非常に少ない量でこと足りてしまふ。しかし、瓶がカラになるのはほぼ同時。

その理由こそが、彼の持つ双剣そのものであつた。

岩陰からふらりと姿を現すと、ウインブルグは腰に番つがえた二振りの刃を静かに引き抜き、腰を落として低めに構える。両の刃は大気に晒されると、その刀身は静かに熱を帯び始めていた。

雑布を湿らせていたクーラードリンクの冷気から解放された双剣フレイムストームの刀身は、切っ先に付着していた液体の残りを蒸気へ変えていく。

（こつちも持つてきて良かったよ。管理する都合上、使うことはないと思つていたんだがね）

フレイムストーム
赤い双剣が放つ熱量は、雪山の元主であるドドブランゴの苦手とするもの。

砂漠の熱とは別の、更に灼熱を漂わせる二振りの存在に気付いたのか、ドドブランゴは不意に足を止める。

「いい子である。このままお見合いで済むなら吾輩としては万々歳なのだが……」

——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

「そうは問屋がおろさない、であるなっ!!!」

熟練ハンターの間近で存在するのは、霊長の上位に君臨する雪獅子ドドブランゴ。例え縄張り争いに敗れ落ち延びていたとしても、その存在は人間にとって大いなる脅威と

なる。

全身を覆う白い剛毛は、並の刃や銃弾を安々と通してはくれない天然の防護服。異常に発達した四肢は、その一撃を持ってして獲物を仕留めるのは容易いであろう。

全身がウインブルグにとつて凶器の塊たる霊長の長は、その体躯を持て余すことなく一点に向かつて走り出す。四足すべてを使って行われるギャロップ走行は、瞬く間に赤い鎧を捉えようと接近していた。

「むうんッ!!!」

しかし相対するウインブルグもまた、熟練の観察眼を駆使して間合いを計り続ける。腰を落としたまま迫りくる白の巨体をギリギリまで引きつけ、素早く重心を移動、接触寸前のところで避ける。

（あ、当たれば事故であるなつ。我輩には入院費すら払う余裕はないというのに。特別報酬くらいねだつてもバチは当たるまい……!）

間違いないこの場でのアドバンテージは、雪獅子がほぼ全てにおいて優位と言っても過言ではない。元から不安定な足場である雪原と比べて、砂上の悪環境も然程も影響していない様子の機動力には、経験豊富な彼とさえも舌を巻く他なかった。

対するウインブルグが持ち寄る闘いの駒とさえ言えば、調査一日目で調べ上げたマツピング情報と、雪獅子対策で選定してきた二振りフレイムストームの剣、そしてこれまでの経験。

(……)ここで仕留めようと考えるのは欲張り過ぎであろうな。なにより目的が違う。こ
こは手堅くだな)

すれ違いざまに見やった傷だらけの雪獅子は、息を荒げながらも赤い鎧に対する照準
を外すことはない。

振り返りざまに姿勢を崩しながらも、砂を巻き上げながら再度巨体がウインブルグへ
迫る。

再びウインブルグは構えると同じように避け……しかし、今度はすれ違いざまに双剣
の片割れを浅くドドブランゴの胸に引っ掛けた。

熱を帯びた赤い双剣の切っ先はスルリと体毛の間に割って入ると、普段は鋼も通さな
い防刃ジョッキのような剛毛を容易く焦がし落としてみせる。

ハラリと白い体毛が砂漠の風に吹かれて消えると、ドドブランゴは警戒を強めながら
も眼光に宿す光を強め、吠える。

力の限り時間稼ぎをする。これが現状でウインブルグの果たすべき役割であった。

そして、明日の本格的な狩猟に備えて砂漠に存在するという特異性を間近で確認して
おきたいという意味合いも含まれていた。

ヘルム越しでは一筋の汗が額を伝い始める。紙一重の攻防がもたらす精神的な摩耗
は、熟練ハンター言えども慣れる日が来ることはない。

「さあッ！ 吾輩はここだぞ！ 手を緩めずにかかってくるが良い!!!」

両の手に構えられた灼熱の脅威を存分にアピールしてみせると、ウインブルグも吠える。

赤と白の鬼渡し―後―

熟練したハンターになるほど、モンスターとの戦闘は短期決戦となりやすいものだ。

まずは奇襲から入り先行の一手。ここで対象の視界か機動力を削ぐ事ができれば、九割方は勝敗が決したも同然。

そこでアドバンテージを確保したのち、更にシビレ罠など対モンスター用の道具を駆使することで、狩猟の成功はより確実なものとなる。

だからこそ、真正面からの打ち合いを求められる今回の状況にウインブルグは、久方ぶりの緊張感を抱いていた。一時間違えば途端に不利になるワン・オン・ワンでの決闘場。後衛がない心もとなさは、普段はフォローに回ることが多いウインブルグにとつて独特の感覚であつた。

しかし、張り詰めた緊張感が手持ち無沙汰になることはない。幸い、相対するドドブラングは駆け引きと言った要素とは無縁らしい。考えるよりも先に身体が動く。巨体が迫る。

それをウインブルグは、少しばかり間合いに余裕を持たせて避けるだけでいい。确实

に熟練の勘を信じればそれで良いのだ。余計な手を出すのは、手足に精緻な動きを要求する余裕が生まれたときだけで構わない。

ウインブルグの間近を通り過ぎる巨大な質量は、何の感触を得られないままに空を切る。これまで数々の怪物共と相対し、その度に打ち砕いてきたであろう己の体躯、豪腕がカスリもしない。

振り向きざまのドドブランゴの瞳は赤みを帯びている。砂塵が目には染みるのではない。モンスターでもストレスは感じるらしい。

徐々に苛立ちを募らせるドドブランゴに対し、ウインブルグの手は自然と剣の取手を力強く握りしめる。

乾ききった大地を踏みしめるとともに、巨体は砂を巻き上げながら再び赤の鎧へ迫る。やや蛇行気味に地面を走るドドブランゴ。今度は直線的な動きと違って軌道を読む必要がある。

(大丈夫だ。軌道が変わっても到達地点が変わるわけではあるまい)

右に大きく逸れながら赤の鎧を捉えんとするドドブランゴに対し、動きに惑わされずカーブに対して左半身を前へ出し接近に備える。

接触まで三・二・一……。

ウインブルグの双剣は構えられた状態のまま。姿勢を崩すことなく後方へ跳んで躲

してみせる。そして今度は――

「フンッ!!!」

深めに赤の刃を側腹部に滑り込ませる。感覚的に伸ばされた剣の片割れは、滑り込むように体毛を掻い潜り焦がし断つ。そして刀身は体毛の根本、肉体を浅く焼き切る――
ことはなかった。

「むウ!!?」

リーチを測り間違えたか。刃は体毛を深めに抉り取ったのみで、本体へのダメージはゼロに等しい。

想像以上に砂漠の暑さが判断・身体感覚を鈍らせていたのだろうか。

(……鈍ったか。確かに届いたと思ったのだが)

過ぎ去る巨体は、振り向きざまの照準をすぐさま合わせてくる。避けるタイミングは問題ない。次はリーチの修正作業だ。

その時だった。

ドドブランゴの後方、ウィンブルグの逃走開始地点から爆発音が響いたのは。空高く打ち上げられた何かが、木クズとともに空を舞っているのが見えたのは。

(来たか! ヽヽヽ)まで賞味二十五分……上出来である!!)

ウィンブルグは自然とヘルム内で自身の口角が釣り上がったのを感じる。

それは調査完了の報せだった。目的は果たされたのだ。

打ち上げタル爆弾による合図を確認したその刹那、一目散に相對していた巨体に背中を向ける。本日最後となる全力疾走の布石だ。

ドドブランゴも見逃しはしない。ワントンポ遅れて、逃走を図る赤の鎧を追走する。しかし。

「ふははははッ！　きゃらばッ!!」

起伏ある岩山地帯を戦場を選んでもう一つの理由。

凹凸の激しい一箇所隠れる小さなくぼみ。丁度ニンゲンの大人一名がくぐれる程度の大きさの孔からは、明らかに砂漠の 대기とは異質の、湿気を含んだ気流が洩れ出ていた。

そのくぼみに向かって間髪入れずに飛び込んだウィンブルグは、岩に体を打ちつけながら小さな穴の中を転がり落ちていく。

(いたたたた!!　こ、腰が壊れるのである!!!)

事前調査の賜物だ。

安全(?)な逃走ルートの準備まで、つつがなく熟練ハンターはこなしてみせた。

ポイントボールの匂いが近づくことは……ない。

赤の鎧の防御力を頼りに、絶え間なく打ち付けられる壁面に受け身を取りながら、転が

アゲナシリーズ

り付いた先に広がる光景にウィンブルグは嘆息する。

「……ああ。こんな時じゃなければ素直に綺麗と言えるんだが」

どう見積もっても打撲している全身。節々が痛むのは歳のせいだけではない。

そんな彼の視界には一面を青で染める地底湖が広がっていた。地上の光を反射させて届く一筋の光は、幻想的に湖を照らす。

おそらくこの地底湖の水脈こそが、ここら一帯のオアシスの源泉となっているのであろう。

（体中が痛いのである。明日の狩猟、やはり外して貰えないか頼んでみようか……）

アイテムポーチ
道具袋の中では瓶の割れたクーラードリンクが中身を汚す。双剣の片割れは切っ先が一部欠けてしまっている。

調査二日目の大一番を演じた熟練ハンターは、再び静かに嘆息した。



「お疲れ様ですウィンブルグさん。歩けますか？」

「……問題ないよ。ただ、集落についたら替えの湿布を貼ってくれないか。腰が爆発し
そうである」

そう言つて腰を擦るウインブルグの鎧は、行きと比べて随所に凹凸が見られる。いかに堅牢な鎧と言えど、無理な扱いをすれば傷だらけにもなる。

割れて予備のなくなつたウインブルグのクーラードリンクは、ハインツが管理する残り二本の内一本を分けて口に流し込む。地底湖の水を飲むという手もあつたのだが、そのまま口にするには少々危ない。煮沸する余裕もないため、ボロボロの身体でハインツと合流を果たしたのだった。

染み渡るとろりと湿潤した固体とも液体とも言い難いとろみ付きの水分を、余すことなく瓶が空になるまで飲み干す。二十分間の過負荷で失われた水分は想像以上に多いのだ。

集落への帰路。

無事にドドブランゴの縄張りから離脱したハインツとウインブルグは、疲労の残る両足で大地を踏みしめていた。

同時に今回の目的を無事果たしたという安心感も含んで、だ。

「……帰つたら、早速君の考察を聞かせてくれたまえ。吾輩も気になることがあつてね」「もちろんですよ。リイタさんは……やっぱり機嫌悪くするかな」

「違うのだ。しかしどれ、やれば出来るものであろう?」

「ははは、間違ひなく今回の立役者はあなたですよ」

「であろう？　だから、追加ボーナスの口添え、ラッセル殿に君からも頼むよ？」
「それが狙いでしたか。ええもちろん。その後は念願の休日ですよ。積んでる『月刊狩りに生きる』、読まないと！」

調査終了は家に戻るまで。鉄則は鉄則だ。

しかし、疲労を紛らわすかのように、十分おきの声掛けとは異なる絶え間ない会話は集落まで続いた。

砂漠に咲くは……

予想外とは不意に起こるものだ。そんな当たり前のことをハインツが実感したのは、ちようど集落到に到着した時であった。

入念な計画が功を奏したのか、早朝の調査から帰還を果たした二人を迎えたのは真昼の太陽。カラツとした灼熱に晒される名も無き集落は、出立時に感じさせた肌寒さを微塵も残してはいなかった。ようやく一日の半分を迎える時刻の中、現地民は各々の生活の営みで活気づいている。

砂漠の一日はまだまだ終わりそうもない。過酷な環境でも折れることなく命息づく集落の光景は、疲労困憊の二人のこともどこか優しく包み込んでいるようだった。無事に五体満足で戻れた安心感とも言えるものだろう。

「あ、おかえり。ふたりとも」

そして二人を迎えたのは、予想外の人物であったと言えよう。

「……あの、失礼ですがどちら様でしようか？」

灼熱の環境に身を置き続けた弊害として、抜け切らない疲労が二人には蓄積し続けた。そんなハインツらが対面するのは、全身を包む淡紅色の鎧。ずんぐりとした特徴

的な鎧のラインは男女の判別がつきにくいものの、デザイン装飾や色合いから、装着者が女性であることはかろうじて判別できる。

フルフェイスから発せられるのは紛れもなく女性特有の声色であるが、兜越しにくぐもる声を聞いてもピンとこないハインツ。

そんな見るからに頭上でクエスチョンマークを浮かべる彼に業を煮やしたのか、鎧の主は腕と思われる三本のドリルが伸びた手でフルフェイスを器用に脱いで見せる。次いでフルフェイスから現れた素顔を見るや否や、二人は目を丸くする事になった。

「で、はじめましてだっけ？ ……ハインツさん？」

栗色のセミロングにまばゆい碧眼。現れたのは可憐とも言える少女の素顔。汗一つかくことなく凜とした佇まいを見せる彼女の姿は、工房技術による耐暑性能のおかげなのか、彼女の驚異的な環境適応能力ゆえなのか推し量ることはできない。

予定外にも早く合流することとなったもう一人の護衛ハンターの到着。そのリイタの新たな装いに驚きつつも、二人はまじまじと少女の姿を見つめているのだった。

「もしかしなくても……リイタさんかい？ あれ、到着まであと三日は空く予定じゃ……」

「予定は未定って言葉、ハインツさんもよく使うでしょ？ 私も護衛として、腰痛持ちのウインブルグさんにだけ仕事を任せていられるほど無神経じゃないよ」

「なんとついい娘であるか！ 感動のあまり悪化した腰痛が根治しかけたのである！ もちろん気のせいなのだが。うーむ……それにしてもリノプロシリーズとはまたいい趣味を」

「私の趣味じゃない。工房の人に薦められたから。砂漠に行くならこれ一択だつて」

リイタが愛用していたマカロイト製の鎧は狩猟における機能性に優れた代物だ。職人の手により身体のラインに合わせてフィットティングされたスリムな造形は、著名なハントーたちからも愛用されており、今もなお根強い人気を誇っている。

対してずんぐりむっくりとした分厚い装甲で覆われたリノプロシリーズは、砂漠地帯などの鉱脈や水源調査・採掘を目的として設計されている。腕部には掘削用のドリルが装備されており御世辞にも戦闘向けとは言い難い、ある種リイタの印象とはギャップを感じさせる装いであった。

そして何よりも工房の遊び心が如実に現れているのが、その全体像シルエットである。

「一択ではないと思うけど。親方の趣味だねそれは。でも合流できて良かったよ。これから情報を整理するところなんだ」

「うん」

まさにアオアシラ……ではなく、熊としか言いようがない。それもデフォルメされたぬいぐるみのような愛嬌ある姿だ。

「嗚呼、親方は良い趣味をしているのだ。あ、できればリイタ君、我輩的にはもう一度兜それを被ってみて欲しいのだが……」

「よくわからないけど嫌です」

「ふはは、砂漠の風は腰に染みるのだな……」



場所は集落ゲストハウス。

中心にほつりと佇む質素な来客用テーブルを囲んだハインツら三人は、神妙な面持ちで言葉を切り出そうとしていた。

「では情報をまとめましょうか。リイタさんも合流したことですし、おさらいから行きましょう」

「別に結果だけでいい気もするけど。私としては明日が本番だから手短かに」

「ははは……仮にも書士隊護衛なんだから、寝ないで聞いてくれよ。それじゃ始めよう」

コホンと咳払いをすると、ハインツは一人の書士隊として静かに語り始める。

「……まず僕らがここまで出向いた理由。この砂漠で雪山草が発見されたというウワサ話ですね。その情報を元に、僕らはこの砂漠までやって来たわけです。そして、調査の過程でドドブランゴが南方の砂漠に出現しているという情報も入手しました」

「うん。ドンドルマにもハインツさん達が出発した次の日に一報があったよ」

「ガレオスの海を挟んでいたのが幸いであったな。集落ともども被害は出ていないそうである」

この砂漠独特の地形が村からモンスター襲来を防いでいるのは周知の事実だ。ドブランゴというイレギュラーが現れたのは不測の事態であったが、人的被害に見舞われていない現状は幸運に恵まれていると言っても良いだろう。

「ところでウインブルグさんはドトブランゴと一戦交えたの？ その鎧……」

リイタが指をさして尋ねるのは、ウインブルグが脱ぎ捨てていた赤の鎧。出発時から細かい傷はあったものの、持ち主の気質から入念な手入れをされていた。それが今や見る影もなく凹凸にまみれている。

「む、え。いや、これは名誉の負傷というのか……」

思わず狼狽するウインブルグであるが、自分から飛び込んだ逃走経路の目測を誤った挙句、転がり落ちた先で持病の腰痛を悪化させたとは、熟練ハンター言えども言い出しにくい様子だ。

「ウインブルグさんも苦戦した相手。相手にとって不足なし、かな」

「そ、そうであるか」

「話が逸れてるけど、その件に関してはウインブルグさん、この村付きから一名、レク

サーラ増援一名の計三名のハンターで狩猟に当たる予定で——」

「私も。だよな?」

「はあ……仕事熱心だね。ギルドには後から四名つて報告し直しとくよ」

一瞬感じる鋭い視線にたじろぐハインツであるが、再び咳払いをしようと言葉を続ける。ハンター二人もそれに耳を傾ける。

「続き続き……で、そうだドドブランゴだ。ここからが僕の仮説だ。前もつて言うけど、これは真実ではないのが大前提。僕の考えだとドドブランゴの出現は今回の雪山草の件を繋ぐ重要なファクターだ。なぜなら——」

一つ間を置いて、ハインツは言葉の続きを待つ二人を一瞥した。

オアシス近郊言えど、乾燥した空気は喋り続ける度に口内を乾燥させる。一度唾を絞り出してゴクリと飲み込むと、正解かわからない答えを口にするため緊張を胸に言葉を繋げるのだ。

「——なぜなら。おそらく雪山草を砂漠に持ち込んだのはドドブランゴと考えられるからな」

ここで素直な疑問をぶつけるのはリイタだ。

「でも雪山草は砂漠の環境で自生できるような植物じゃない」

「その通りだリイタさん。君なら詳しいと思うけど、雪山草は滋養強壮に効く霊草であ

ることからとても需要が高いんだ。ある程度高値で取引もされているね。ただし自生するのはフラヒヤ山脈を始めとする霊峰の頂上近い場所。とてもじゃないけど、気軽に採取できるものじゃない。出発前に徹夜で資料を漁ったんだけど、過去に雪山草を様々な環境下で自生させる実験が行われている。結果は、いずれも失敗さ」

一つ言葉を終えると、再び口を潤すためハインツも一息つく。そして周囲の反応を確かめる。

静かに傾聴していたウインブルグは楽しげに、かつ不思議そうに口を開いた。

「ここまで聞くのであれば、そもそも砂漠に雪山草なんて眉唾以外にありえん話であるな。噂がデマだったと考えるのが普通である」

「それを調べるのが書士隊のお仕事じゃないですか。それに、百聞は一見にしかず、です。これを」

ハインツがお気に入りセリフを言うとともにアイテムポーチを弄ると、中から出てきたのは小型の採取キット。その中には少量の砂漠の土と、儂げに咲く一本の若芽が顔を出していた。

「あ、それって——」

微細ながらも驚きの表情に変えたりイタの姿を見て、ハインツは楽しげに口角を静かに釣り上げる。

「ああ。今回の件の主役……砂漠に咲いていた植物学上、紛れもなく雪山草に分類されるものだよ」

雪山草？

ハインツの手にはハンター向けの簡素な採取キットとは異なり、採取物を極力保護できるように覆われたガラス製の小型瓶が握られている。

初めは翌日の狩猟に思考の大部分を預けていたリイタだったが、いつの間にか彼女の興味は採取キットの中で芽吹く命に向き始めていた。食い入るように見つめる彼女の碧色の瞳は、ガラス内で儂く伸びる若芽を吟味している。

そんなリイタの反応に満足げなハインツは言葉を続けていく。

「まず植物つてのは繁殖方法として花粉だったり種を飛ばすよね。それを運ぶのは風であつたり、虫であつたり、動物であつたり。それはモンスターも例外じゃない」

書士隊として壇上に上がったハインツの言葉にはすでに饒舌さが乗り始めていた。一言一言を選び、慎重に紡ぎ始めた解答例は、次第に彼の中の知識を頼りに形となつて膨れ上がっていく。

現場での頼りなさとは裏腹に、今の彼の様子に多少の面倒臭さをリイタは感じていた。しかし、口を挟むことなく彼の言葉を待つ。

「まずドドブランゴだけど、僕らが遭遇した固体は牙の折れた手負いだったんだ。おそ

らく雪山での縄張り争いに敗れた結果だろう。そして経緯はわからないけど砂漠まで落ち延びた。おそらくこの時、奴の身体に雪山草の種子が付着していたんだろう。そして雪山から遙々砂漠まで運ばれてきたんだ……と、思う」

「種が運ばれた経緯はなんとなくわかったよ。でも問題はその後。なんで砂漠で育つことができたの？」

率直な疑問である。ハインツがはじめに語ったように、雪山草は本来標高の高いフラヒヤ山脈の山頂付近にのみ自生されると言われている。

「質問を返すようで悪いけど、人間はここみたいに砂漠でも生活できる。生きていけるんだ。火山の麓にだって、雪山の懐にだって人の住む村がある。別に雪山草が砂漠に生えてたって何も不思議じゃあない、そうは思わないかい？」

やや意地悪く、肩をすくめたハインツは笑って疑問を返してみせる。それに対してリイタはムスリとした様子で

「それは……極論だと思う。人と植物は根本的に違うよ」と、返す。

「その通りさ。でもさ、僕らもその地で根を張るのに一番重要なのは環境だろう？ 生きるためには水がなければ、食料がなければ、家がなければ生活はままならない。雪山草だって同じはずさ」

リイタは何も返さない。

直接何かを見たわけではない彼女としては、必要以上に口出しするには無粋というものの。そう感じるからこそ、彼女は調査に出遅れたことを後悔していた。心の何処かでこうなると分かっていたのだ。

そんなリイタの心境はいざ知らず。普段通りの表情の機微が乏しい少女との会話を楽しむようにハインツの言葉は続く。

「最初にも言ったけど、これはあくまで仮説なんだ。どんなに考えたところで事実は見つかったとしても、真実が分かることはない。だからこれは綱渡りみたいな奇跡が起こした賜物だって、僕は思うんだよ」

「奇跡?」

「そうさ。さつき過去に実験は失敗したと言ったよね。でも、それは語弊があるんだ。もう一度よく見てくれ。できれば直接。きつと君になら分かるはずだ」

「?」 よく分からないけど……とりあえず、見せて」

テーブルの真ん中に置かれるガラスのボトル。

その手を伸ばすリイタだが、リノプロ装備の胴回りが太いせいかテーブルの縁胴が引つかかり、腕を伸ばしてもギリギリ瓶に届かない。一瞬の間を置いて仕方なく机の上を身を乗り出したリイタがボトルに近づくと、掘削用ドリルの付いたアームを器用に操

作して蓋を開け、件の若芽くだんを取り出した。

息をするのも忘れて品定めするように若芽へ感覚を注いでいたリイタは、しばらくしてようやく視線をハインツに戻す。

その顔は理解とともに更なる疑問を深めた様子で

「……葉に艶がない。匂いも違う。——これが本当に”あの”雪山草なの?」

と、瞬く間に気付いた違和感を指摘する。ハインツも頷き返すと、若芽を丁寧ニにキツトの中へ保存し直しながら指摘に答える。

「そう、これは雪山草さ。標本通りの見た目ならね。鎧脱いだら?」

「あとでいい。で、見た目は確かに雪山草だけ……これ、絶対取引所じゃ引き取つても
らえない。だって——」

リイタは言葉を選ぶ様子で一息飲む。今度はハインツが彼女の言葉を待っていた。

「だって。言い方が少し悪いけど、今まで見たこともないような粗悪品だよ、これ」

未だに疑問符を浮かべるリイタであったが、その彼女が下した品評がハインツの求めていた答えに他ならなかった。

「……たしかに粗悪品、それも”滋養強壯に効く靈草”ブランドという薬効すら、この雪山草には
ないと思われるね」

「つまりこれは、限りなく”ただの草”に近い雪山草?」

「雪山に咲くから雪山草、滋養強壯に効かなければただの草、であるか。なんとも世知辛い」

皮肉なものだと、二人の間答を黙って見守っていたウインブルグがため息混じりに声を漏らす。つまるところ、彼らが今回見つけた成果は現状、ただの道端に生えている草同様なのである。

「なんだか期待して損した。面倒な言い回しはいいから、もったいぶらずにそろそろ結果だけ教えて」

「ごめんね、ちょっと自信がなかったんだ。けど君の言葉で確信を持てたよ。……では、この雪山草が育った環境その一、まずは水。これはオアシスが近郊にあったからね。砂漠の地下水脈、地底湖だね。底から湧いたオアシスが供給してくれていた。環境その二に太陽、ここは有り余るくらいだね。黙ってたら干物になりそうだよ。そして夜の環境は極寒だけど、雪山草の原生地を考えると、さほど問題ないんだろう」

「でも、それだけだと雪山草は育たない、そうなんですよ?」

早く答えを来れと言わんばかりの、リイタの鋭い視線がハインツを刺してくる。遠回しな物言いをした結果である。

「そう。これだけじゃまだ足りない。真昼の猛暑を耐える力は雪山草には備わっていない。コレを解決するのが、その三、地下水脈によるクールアイランド現象だ。それもと

びきり上等なやつさ」

「それに関しては吾輩から話すとしようか。聴いているだけなのも味気なくてね」

ウインブルグが顎ヒゲを撫でながら一手挟むと、洗濯済みにも関わらず異臭を放つ彼のアイテムポーチを取り出す。

「……酷い匂い。加齢臭?」

「ノオン、失礼なツ。清潔は紳士の嗜みというもの。見てもらいたいのはコレである」

リイタの指摘に苦笑しつつ、ウインブルグが取り出したのは“氷結晶”ひょうけつしょうと呼ばれる鉱石であった。

「この砂漠一帯のオアシスなのだがね、実は複数の地下水脈から流れているものだそう。ゆえあつて吾輩も実際に目にしたわけなのだが、嗚呼、なんとも幻想的であつたことだろう。しかし、そこで一番に注目したのが地下水脈を構成する鉱石なのだ。鉄鉱石を始めとして、とても純度の高い氷結晶らで構成されていたのだよ」

極めて氷に近い組成を持つ鉱石が氷結晶だ。

日中の砂漠にも関わらず、別称を“溶けない氷”とも呼ばれる透明度の高い鉱石の周りでは冷ややかな凍気が渦巻いていた。

「これが中々、腰に当てると冷たくて気持ちよくてなあ。少しばかり採掘させてもらったのである」

「冷やし過ぎも良くないですよ？ それでねリイタさん、この雪山草が生えていた岩陰近くにも地下水脈に続く小さな空洞があったんだ。本当に拳大くらいだね。そこだけ別の空間みたいに冷気が漏れていたんだよ。極寒、とまでは言わないけどね。で、次が最後だ」

ようやくかと言った様子でリイタの瞳はハインツを見やる。

「でも、やっぱりそれだけじゃ雪山草は育たなかつたろう。だから最後の一つがいかに足りない栄養素を賄うか、だよ。これを確認するには……うん」

「どうしたの？」

「これ以上は直接見たほうが早いってことさ。さあ、今日は早めに休むと良いよ。明日が本番なのは間違いないんだ。それに、僕も最後の仕事を片付けなきゃならないからね」

そう言い残したのち、ハインツはゲストハウスを後にするのだった。



書士隊一行が名もなき集落に到着し、既に調査開始から三日が経過していた。

現地の村付きハンターは野性的な雰囲気漂わせるボンシリーズを着込み、砂漠の

道程を先導する。レクサーラの助つ人も周囲に目を光らせながらライトボウガンを構えて進む。

その後を追うように赤の鎧は腰を気にしながら、淡紅色の熊は特に何を気にするでもなく、巨大な大剣を背負い足場の悪い道を進む。

天候は言うまでもなく快晴。砂漠独特のなだらかな凹凸は風の流れを変え、一刻また一刻と周辺状況を変化させる。

そんな計四名まで集った狩猟の精鋭たちは、皆それぞれに闘志をみなぎらせ、これから邂逅するであろう砂漠に迷い込んだ獣と相対する準備を進めていた。……一人を除いて。

途中、砂中より現れたガレオスが思わぬ来客となるが、狩猟のプロフェッショナルたる四名にとって砂竜が脅威となるはずもなく、瞬く間に撃退される。

この四名の前であれば、いかなる強大な獣と相対することがあろうと渡り合うことが出来るだろう。

だからこそとも言うべきか、予想外は不意に起こるものなのだ。

砂漠の雪獅子討伐に意気込むリイタたちが目にすることになったのは、荒れた大地で静かに鼓動を止めた、雪獅子と呼ばれたものの末路であった。

調査開始三日目〈満了〉

「こいつはどういうことだ？　もしかして先を越されたか？」

傷だらけの身体で鎮座する雪獅子であったものを見て、ボーン装備の男はピクリとも動かない白の巨体を槍先で突つく。慎重にかつ数回反復した動作を続けると、やがて間違ひなくソレが絶命していることを理解することになる。レクサーラからのハンターも目の前で沈むドドブランゴが物珍しいのか、周囲を徘徊しながら値踏みするように瞳をギラつかせていた。

「いいや、この傷は元々あったものである。それによく見るのだ……うむ南無三三」

巨体の前で手を添えるのはウインブルグ。つい昨日まで命がけの鬼ごっこを演じきつた彼も、ヘルム越しでひっそりと黙禱を捧げていた。

少なくとも死後一日と経っていない雪獅子の骸は、穏やかとなつた砂漠の風に傷んだ毛並みを揺らす。

雪獅子の剛毛の下は過酷な地での競争を勝ち抜くため、鍛え上げられた筋肉質な本体が垣間見えるはず、なのだが。

「……細すぎない？」

呟いたリイタの言葉通り、骨に皮が引つ付いたように痩せ細った身体は、とても雪原を治める元主であつた片鱗も感じさせないほどに弱々しいものであつた。

志半ばで地へ臥せる大きな身体。その獅子が最後に見ていた方角は必然か偶然か。見えないはずの遙か彼方、フラヒヤ山脈を見据えていたように、心なしかウインブルグは感じていた。

「うむ。先客の可能性はないのである。ハインツ君が上手く交渉してくれたからね。さてリイタ君、一つ我々も確かめに行くとするかね」

「……そうだね」

みるみると内からの闘志が萎えていた少女は、不完全燃焼ながら気持ちを切り替えようと、ハインツが話していた内容を思い出す。

雪山草が砂漠で成長し得た最後のピース。現場で直接見れば分かると言つた若き書士隊の言葉を思い浮かべながら、早速ドドブランゴを解体し始める他二人のハンターを尻目に、リイタは先を進むウインブルグを追いかけた。



「これがハインツさんの言つてたこと、かな」

「なんとも悲惨な……いや、壮絶と言うべきかね」

書士隊護衛の二人が目にしたもの。ウィンブルグは事前に調査初日で双眼鏡越しに見ていた岩陰。そこで二人を待っていたのは、ハイイツが語った通りに拳大の地下水脈へ続く空洞が一つ。そして、その周囲に散乱する刺激と腐臭漂う空間であった。

「排泄物……それに、吐瀉物も」

「うむ。おそらく砂漠と雪山では環境が違いすぎて身体が受け付けなかったのだろう。僅かに受け付けた栄養と水で命をつなぎ、やつとの思いで生活していたのだよ。それが、あのやせ細った身体の原因であろうな」

モンスターと言えど、天と地ほど異なる雪山と砂漠の環境差に身体が適応しなかった。これがハイイツの出した答えだった。ウィンブルグが接敵の際に間合いを測り間違えたのも、毛量の体積に対してあまりにも本体が貧弱であったからに他ならない。

ドドブランゴの徘徊していたエリアはサボテンの花から草の根まで縦横無尽に食られており、いかに生き残るために糧を求めていたのか、執念とも言える痕跡が今も残っている。

既に乾燥し干乾びたモンスターの代謝物の面々は、ひっそりと岩陰に伸びる若芽を囲むようにバラ撒かれていた。

「これが肥料代わりに、ね。でも殆どが枯れ始めてる」

「まあ当然であろう。少なくとも我輩達がドドブランゴを発見した時点で、”水ですら” まともを受け付けていなかったようだ。彼奴きやつが倒れた今、この雪山草を育んだ環境は失われた。あるがままに淘汰されるのだよ」

水を汲むように寂しげな声色は、冷静に現場を見極めるウインブルグの言葉だ。

水脈へ続く空洞の周囲で数本、かろうじて艶のない緑を保っている若芽たちであるが、すでに葉先は色を失い始めている。十分な水分が葉全体へ到達していないことだった。

「なんとも、残念であった。砂漠で育つ雪山草なら世紀の大発見であったのに」

「……戻ろう」

終わってみればなんてことのない結果。蓋を開けるまでの楽しみというものは、存外どこにでも通ずるものなのか。

一つの結末を見届けた二人のハンターは、それぞれの胸中に感情を秘めながら元きた道へ踵を返した。



時刻はちょうど太陽が地平へ沈み始める手前。

集落ではラマ^{オト}ラダ^コを従えつつ、すっかり現地民と打ち解けた様子のハインツが二人の帰還を待っていた。

「——で、これがランポス。こっちがゲネポス。色やトサカ、牙の生え方も少し違うんだよ」

「へーシヨシ^{荷物持}タイ^ちって色々知ってるんだな——」

一通りの役目を果たした彼は、空いた時間を手持ち無沙汰にしていた。そこで偶然居合わせた現地の子供相手に、スケッチブック片手で青空教室なるものを開き暇をつぶしていた。お世辞にも上手とはいえない絵画の数々であるが、子供相手に興味を引くには十分だったようだ。瞳を輝かせた子供たちが何人か、ハインツの周りに集まっている。

「だから僕は書士隊だ……って、言っても仕方ないか。これでも大陸の各所を渡り歩いてるからね。ほら、あとゲネポスはこのラマラダと同じように、足は砂を掴みやすい形になってるんだ。地面をしっかりと掴んで、そこから繰り出される跳躍で獲物を捉える。最後は牙から分泌される麻痺毒で対象を仕留めるのさ。ガオーってね」

「うわっこえー。こんなのと闘うハンターって、やっぱ凄いんだな——」

ハインツとしては一種の書士隊啓蒙活動のつもりだったのだろうが、結局のところ書士隊がどんな職業なのか、その半分も子供たちに理解はされていなかった。しかしそれはそれとして、これまで彼が見てきたものを伝える事ができるというのは、彼の中で一

つの充足感を満たす要素でもあった。

「そうだね。実は僕も——ん？」

子供たちの純真を羨みつつ言葉を交わしているハインツは、不意に後頭部を何かに小突かれた。振り返ると、そこにいるのはラマラダオトコマエのだが、視線は合わずにどこか一点を見据えた姿が目に見える。

ラマラダオトコマエに釣られるような形で、集落へ帰還した人の気配、護衛ハンター二人の存在にハインツは気付くことになる。

やがて彼の周りではしゃいでいた子供たちも、屈強な計四名の帰還に気付くや否や、程なく興味がシヨシタイからハンターへと移る。

そんな子供たちの変わり身の速さに多少の寂しさを覚えつつも、無事帰還した二人をハインツは笑顔で迎え入れた。

「早かったね。おかえり二人とも。現場は？」

「すでに事切れていたのだよ。昨日元気に追ってきた姿がウソのようである。雪山草の方も、今日のうちに枯れてしまうだろう」

「そうでしたか。あれ、リイタさん。どうかしたのかい？」

「……不完全燃焼もいいところ。剣も鎧も、せつかく準備したのに」

「ははは、君は相変わらずだね。まあまあ、モンスターと戦わないに越したことはないん

だからさ」

ある種、子供と同じくらいに嘘偽りのない意見を漏らすリイタの姿に苦笑しつつも、彼らは調査終了の旨を再確認するのだった。



日は落ちる。暮れた橙の世界の刻は短くもあり儂い。

集落三日目の夜は、砂漠の脅威が排除されたことに対する囁かな宴が催された。

迎えるは遠路はるばるやって来た書士隊とハンターの計三名。追加でハイインツの交渉した裏商会と思わしき三名。後者は特にバツが悪い顔をしていたのは、あえて指摘されなかった。

宴の主賓は図らずとも諸国吟遊の話の肴となる。特に今回の雪山草発見までの経緯、仮説、事実の三本立て。熱弁するハイインツであるが、その趣旨を理解するものはさほど多くはなく、聴き入っていたのはもっぱら落胆した様子の裏商会のメンツだったことは言うまでもない。

ハイインツの弁が終われば、今度はサンドボードなるものに夢見る実業家の話が始まる。

それを話半分に関きながら、珍味として振る舞われたガレオスの新鮮な魚竜のキモをはじめとして、砂漠特有の郷土料理に舌鼓を打ちながらも宴は続く。

本格的な砂漠の夜になる前に宴は終わり、あつという間に夜も更ける。

明けた頃には新たな一日、変わらぬ人々の営みは合図もなく始まる。

帰還への旅支度に時間はかからなかった。

書士隊一行が集落を後にしようとした時だ。見送りなのか、子供たちが無邪気な笑顔でハインツたちを追ってきたのは。

「色々教えてくれてありがとなシヨシタイの兄ちゃん！ シヨシタイってすげーんだな
！」

「まあ、それほどでもあるんだけどね」

「子供相手に調子に乗らない。大人げないよ」

「少なくとも」ハンターの荷物持ち「から」よくわからないけどシヨシタイ」という認識くらいには変わっていたのだろう。

その程度ではあるが、すっかり満足してしまったのか、子供たちに対するハインツの浮かれた顔に呆れた様子のリイタ。

「シヨシタイの兄ちゃん、オイラからも最後にいいこと教えてやるぜ！」

「ん？ 世紀の大発見か何かかな？」

意気揚々と声を上げるのは、一番ハインツの青空教室に熱を入れていた少年だった。少年は鼻をすすりながらハインツと彼の騎乗するラマラダを指差す。

それが特大の爆弾になることを予期していなかったのはハインツなのだが……。

「うん！ ショシタイの兄ちゃんのラマラダなつ、オトコマエって言ったけ？ こいつメスだよっ！」

「……………え？」

「メエ」

そんなやり取り。無知の知とは恐ろしいものだ。

すっかり赤面しながら集落を後にしたハインツなのだが、長いようで短かった砂漠調査も終わりを告げる。

ときに成果は出なくとも、事実という形が記録としてまた一つ、王立古生物書士隊の報告書データベースには確実に残るのだ。

ラマラダの鳴き声が「メエ」だったことも含めて。

▼レポート2. 5:『ドンドルマの休日』

書士隊はいつか夢を見ていた

栄光ある”ハイנטツ探検隊”が初めて結成されたのは、もう十年以上前の話になる。

ある日、町で噂された”赤いアオキノコ”なるものの噂を聞いてから、幼きハイנטツ少年は踊るような気持ちで図書館に籠り、記念すべき第一回のターゲットとして密かに準備を重ねていたのだ。

作戦班長のハイנטツは町郊外の地図を引っ張り出して、事前に調査で回るルートを書き込んでいく。

食料班長でもあるハイנטツは、厳しくも優しい母が管理していた台所の目を盗み、フルーツジャムを粒麦でふんわり焼きあげられたパンで挟んだサンドイッチをくすねてみせる。

戦闘班長も兼任するハイנטツは、虎の子であるコシヨー爆弾を、サンドイッチと重ならないよう、カバンに忍ばせもする。

さあ、準備は万端だ。

まるで本の中で生きる物語の主人公のように、ロマン溢れる冒険に自らを駆り立てるのは、誰しもが通る大人への階段なのかもしれない。

もしかすると、これから自分が見つけるアオキノコは何か特別なものであり、世紀の大発見になるやもしれない。

きつと大陸中から取材なんか来て、”月刊狩りに生きる”の表紙を飾ってしまうのかも知れない。

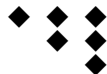
恐ろしく前向きでたくましい妄想を膨らませば膨らませるほど、ハインツ少年の胸は高鳴り、心は町郊外の森へ引き寄せられる。寝る前の枕の位置だって、ずっと森へ向けていた。

普段は立ち入ってはならないと釘を差されていた筈の言葉の楔すら、当時の彼を縛るには不十分で、いとも容易く好奇心を優先させるに至っていたのだ。

決して普段から素行の悪い子供ではなかったのだが、こと興味に駆られると自分を忘れてしまうのが悪い癖である。父からもよく窘められたものであった。

さあ行こう。進もう。見つけよう。

かくしてそれが、小さな探検隊の第一歩になるのだ。栄光ある発見の喜びへ向けて。



しかし、運が悪かったのだろう。

「……………あ……………」

小さな探検隊を前に立ちまはったのは、幼きハインツ少年ではどうしようもないほどに、決定的なほどに、あるがままに為す術もない。巨大な障害だったのだから。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

彼の一生で、最初に見ることになる”モンスター”と言うものが、かの空の王者・リオレウスだったのだから。

「~~~~っ!!?!」

声にならない悲鳴が漏れたのも、その時が初めてだったのだろう。

カバンに潜ませたはずのコシヨ―爆弾の存在は頭からすっかり飛んでしまい、少年の思考は逃げの一辺倒から軸がブレることはなかった。ひたすらに、息の続く限り走っていたのだ。

短い手足を懸命に振りながら、前へ、前へ。

足場の悪い森ではあったが、事前のルート設定が功を奏したのか、そびえ立つ樹木たちを盾としてリオレウスの視線を掻い潜り、町へと続く森の外を目指す。

もちろん、町への被害など考えてもいなかった。大人たちがなんとかしてくれるなどと言う、甘い考えがそこにはあった。

そしてもちろん、町につくまで全力で走りきる体力など、幼き少年にあるはずもなかった。

やがて短い手足を振り回すパンは更に遅くなり、体中へ巡らせる酸素も足りなくなる。

霧掛かり始める思考の中で、そう言えばと、ハインツ少年は準備を進める中でアオキノコのウワサ話の他に、森で凶暴な飛竜が出没したという話も、思い出したように浮か

び上がってきた。

何故今更になつてそんなことをと、後悔先に立たずとはこのことだろうか。

いつの間にやら彼が当初想定した逃走ルートからも外れ、森でも開けた平地へ迷い込んでいた。

中心に一本だけ立つた樹齡百年を超える巨木を背に、空の王者と対峙……ではなく、追い詰められた小さな探検隊隊長の姿がそこにはあつた。

年貢の納め時なんて言う言葉を彼は知らない。

祈りなど済ませてはいない。

何かもわからないままに疑問符を浮かべるだけだ。

後悔するほど彼の人生は長くもないし、今の彼の思考を支配するのは直感だけ。

——やられる、と。

「た、助けて——ッ!!!」

声を上げた。なるべく大声で。それしか出来ることがなかった。

今日はハインツ少年の初めて尽くしだ。そして、その出来事を生涯忘れないのだから。

幻想と現実を分かつ、空間を切り取るような閃光が走った。

光の中で何かを少年は見た気がした。一瞬だった。走馬灯を形成するにも、彼には経験が足りなすぎた。

彼が本の中で読んだ、リオレウスが放つとされる火球だろうか。答えは当然わからない。知らないのだから。

走馬灯の代わりに想像が膨らむ一方だが、一向に少年を襲うはずの膨大な熱量はやってこない。

むしろ彼を包んだのは熱くもなく、暖かくもなく、むしろ冷たい金属特有のヒンヤリとした感覚であったのだから。

むしろ温かみがあったのは、その声色だった。

「待たせたな、少年よ」

ハインツ少年の目は人工の光に焼かれたせいかわ、すぐにはまぶたを開くことができなかつた。しかし、その声色は間違いなく、優しく力強い持ち主のものであり、何よりも

恐れていなかった。

「アーティーツ！ 子供は任せた、俺はコイツを抑える！」

「頼んだぞつ、退避させたら俺も加勢する」

「バカヤロウ！ 文官は黙って後方に下がってろっ！」

「いまさら過ぎるなつ……任せたぞ！」

かろうじて見開いた目に映るのは、二つほどの後ろ姿。どちらも恐怖に慄くことなく、眼前の巨大な飛竜と相対している。

「たす、かった……？」

最後に彼は、赤いアオキノコと飛竜調査のため、王立古生物書士隊が派遣されたという話を思い出した。

そこでハインツの意識は途切れている。

再び目を覚ましたのは自宅のベッドの上。起きた瞬間、最初に目に入ったのは、今にも泣き出しそうな顔で我が子を愛おしげに見つめていた母の姿。それもすぐさま視界から消え、今度こそ暖かなぬくもりが少年の全身を包み込む。

遅れて理解したハインツの頭は、言葉よりも先に、感情が溢れてきた。

止まらない涙と嗚咽。泣き疲れた少年は、再び眠るようにベッドへ沈み込んだ。

今思い返せば、きっとその出来事が彼の始まりだったのだろうか。

末席ながらも王立古生物書士隊、ハインツとしての。

かつての少年は出会った。

そして、彼は憧れてしまった。

もう一度言う。

かつての少年は出会ってしまった。

そして、彼は憧れた。

その日から彼の人生をきつと、変わってしまったのだろう。

だって、どうしようもなく憧れてしまったのだから。

あの背中に。

奇しくも当時の少年が気づかなかつたのは、アーティと言う名が愛称であり、本名がアーサーだったという真実。

彼は出会っていた。
かの、ジョン・アーサーに。

目覚めの朝に

悠久の風が吹き抜ける街、ドンドルマ。

その中でも外れた区画に埋もれるように築造された古い木製のあばら屋。所々が傷み、修繕された痕跡が目立つ外観は見た目通りの借り賃であり、最低限の寝食ができれば良いと考える者からすれば、非常に都合の良い物件であった。

それが特に、頻繁に街から離れて調査をする立場であるならば、尚更に。そして、そのあばら家の主の朝は早くなかった。

長旅で蓄積した疲労は、一日二日の休養で抜けきるものではない。更に言うなら、寝返りをうつ度に軋むベッドでの睡眠は熟睡とはかけ離れたもの。こんなものであれば、砂漠の集落にあつたゲストハウスのベッドの方が、幾分まだマシな作りだろう。

王立古生物書士隊・ハインツが覚醒して真っ先に起こした感情は懐かしさだった。無性に懐かしく、かつ忘れてはならない出来事を思い返すように想い、耽ふけっていた。浅い眠りは夢を現うつへと誘うものだ。

かといつて二度寝するには日が高く昇りすぎていた。寝まなこぼけ眼で共用の井戸へ向かうと、彼の灰色の瞳に映るのは、水面上に映るボサボサで外へ跳ねたクセ毛の青年の姿。

寝起きには重たい水を組み上げ、クセ毛が絡まり寝癖になった頭髮を顔を洗うついでに溶かして掛かる。これがドンドルマ滞在中に行う彼の日課^{ルーチン}。時間は不定期ではあるのだが。

顔を洗い終われば、朝食は彼の変わらぬ好物、フルーツジャムのサンドイッチだ。粒麦のパンにスプーン大さじ二杯分のジャムを塗りたくると、合わせるようにもう一枚の分厚いパンで挟んで口に頬張る。一口噛みしめる度に、フルーツジャムの柔らかな甘さと酸味が舌に広がり、朝の空腹を優しく満たしていく。口内に残る食塊をカップ一杯のミルクで流し込むと、ハインツは散らかるデスクを前に腰掛けた。

デスクの上には、彼が遠征中に溜まりに溜まった未読の本の山が積み上げられている。机の上にとっさりと置かれた本の類はすべて、調査遠征の間に溜まっていた雑誌の数々。その一つに手を伸ばすと、適当にページを捲っていく。

こうしてのんびりと腰を据えて本と向き合うのが、ハインツが何よりも望んだ休日の日課であった。しかしリイタあたりから言わせてみれば、家に籠って身体を動かさないなど、不健康極まりないという意見も聞かれる。

彼がナーバナ森丘で痛感したはずの鍛錬不足は、いつの間にやらどこぞへ飛んでいつてしまったようだ。

「どれどれ……『書士隊分裂の危機?!』 自習組と遠足組の見えない亀裂とは! 故ジョ

ン・アーサーを追う!』、ねえ」

雑誌の見開きを読み上げたハインツは、うんざりしたような顔で本を開くのを止めた。

「まあたこの手の記事か。次の読も……」

”自習組”と”遠足組”とは、いわゆる書士隊内派閥の隠語のようなもの、むしろ蔑称に近いものであった。自習組は主に研究室に籠って議論を重ねる書士隊、ギユスターヴ・ロン氏に倣った者たちの総称。遠足組は大陸中を周り直接調査を進める書士隊、故ジョン・アーサー氏を信奉した者たちの総称と言った具合だ。もちろんこの限りではないのだが、現状の書士隊は今の二大派閥が大半を占めていとされる。

かく言うハインツの上司センセイことラツセルも、アーサー派閥の人間である。必然的に部下であるハインツも、いわゆる遠足組に属しているというわけだ。

(確かに事実には事実なんだけど、こんな書き方されたら読みたくもなくなるよ)

今度は違う真新しい本を手に取り、再び日課に勤しもうとハインツは、思わずソレを二度見する。本の事ではない。

「せっかく買ったのに読まないのかニヤー?」

「……」

「ニヤー」

彼のルーチンから著しく逸脱した要素は、さも当然のようにくつろぐ一匹の猫の姿であった。

猫こと正式名称・食雑目・アイルー科・アイルー。

アイルー自体がこのドンドルマの街にいることは珍しくもない。むしろ自然に人と共存さえしている。彼が啞然としたのには、他に理由があった。

「……なんでいるんだい？」

見覚えがあつたからだ。しかも、悪い意味での。

「ニヤー？　これニヤー」

と、鳴いてみせると今度は自慢げに猫ことアイルーは、オーソドックスなアイルー色の背中を晒しながら、部屋の隅から長方形の何かを引っ張り出して来る。それこそハイツツがナーバナ森丘で失くした、いつぞやのスケッチブックそのものであった。

「ちやーんと名前と住所が書いてあつたニヤー。おまえ、ママなやつだニヤー」

「……」

「それにしても見つけるのにだいぶ時間がかかったニヤー。こんな場所に住んでるなんて、おまえビンボーなんだニヤー」

「……」

「ビンボーならこんなでつかい紙束、買えるお金もきつとないのニヤー。おいらが届け

てよかったニヤ―」

「……」



『ひろつてください』

その一言が書かれたシンプルな立て札の下には、粗末な木箱に放り込まれた、先ほどのアイルー色が見事に収まっていた。

「ニヤ―」

「いい主人を見つけるんだよ。それじゃあね」

「ニヤ―」



「え、ま、待て待て待つニヤ―！ 遠くから来たニヤ―！ 忘れ物届けたニヤ―！ その仕打ちがこれかニヤ―!?!」

そのまま歩き去ろうとしたハインツを見て焦ったのか、アイルーは途端に箱から飛び

出て彼の進行方向を塞ぎにかかる。

「僕はしばらくアイルーとハチミツには関わりたくないんだ。それに貧乏でもない。運が悪かったね」

「ニヤー?! あの時のごとは悪かったと思ってるニヤー! だからこうして追っかけてきたのニヤー! 名前を頼りにこの街を探し回ったニヤー! そしてようやく見つけたニヤー!」

どうやらこのアイルー、ナーバナ森丘でのアオアシラの件を気にして、スケッチブックを森に忘れてきたハインツを追いかけてきたらしい。

「なんだ。ならもう用は済んでるじゃないか。役目が終われば森に帰る。遠征ってのはね、家に帰るまでが遠征なんだよ?」

「お、おまえはオニかニヤー!? あんな距離やすやすと移動できるかニヤー?! ……それに帰れなくなったニヤー、道、わからないニヤー」

雨上がりのぬかるんだ土に刻まれた轍わだちを辿りながら、時には迷いながら、西のナーバナ森丘から東のドンドルマまで。アプトノスが引く童車にて十日はかかる距離を、その四本足だけで渡り歩いてきたのだ。

そして当然、行きで頼りにした轍が帰りにも残っているとは限らない。雨上がり限定の片道切符なのだ。

「に、ニヤア……」

「うっ、そんな目で見ないでくれよ……」

上目遣いに、的確にハインツの視線を捉えるアイルールの潤んだ瞳。同情を誘うような一連の仕草を見せられたら、誰であろうと思わずたじろいでしまうだろう。

アイルールをはじめとして、野生生物が己の縄張りに戻れないというのは死活問題である。それは砂漠で出会ったドドブランゴの末路を知るハインツとて、聞き流せる内容ではないこともまた事実。

ここで天秤にかけるのは彼の人間性、良識だ。対する秤にかけるのは、彼のトラウマになりかけている、ナーバナ森丘で起きてしまった一連の事件である。

「……はあ。で、君はどうしたいのさ」

一応天秤は、ひとまず良識側に傾いたらしい。

「ひ、ひとまず雇ってくれニヤア。なんでもするのニヤア。ピンボーでも我慢するニヤア」

最後の一言は余計であったが、懇願するアイルールの姿を見下ろして流石に気まずくなったハインツは、仕方がないと言った様子で困り気味に頬を掻く。

「……なんだ、そんなことかい」

そして、間を一つ空けて応える。

「他を当たってくれ」

「……ニヤー」

こうしてハイソックスの望んでいたはずの休日は、いつのまにやらルーチンの枠組みから外れているのであった。

後悔は人を強くする

◆ ドンドルマに滞在するハンターの多くは、ゲストハウスと呼ばれる仮住まいに身を寄せている。それは王立古生物書士隊・護衛ハンターことリイタも例外ではない。

本来なら年相応の町娘であるはず彼女の部屋は、少女らしさとは無縁と言っても良かった。カラフルな家具もないし、可愛らしい装飾品も何もない。部屋内は寝具と狩猟道具の詰まったアイテムボックス、鎧や剣といったゴテゴテとした物騒なものに囲まれている。

つい最近増えたクマ型リノンプロシリーズの置き物は、特に役目を果たすことのなかった砂漠調査以降、唯一と言っても良いくらいに彼女の部屋を彩るマスコットとなつたくらいだ。おそろく再び身に纏うことは、しばらく無いのだろう。なぜなら特徴の一つであるドリル三本付きの腕部は、武器を持つのに適していない。どう考えても”邪魔”以外の言葉が見当たらないからだ。

そのゲストハウスの主の朝は早かった。

特に戦闘といった戦闘もなく帰還した彼女を待っていたのは、特に活躍もせずに与え

られた休日という名の反省期間。達成感もなにもない。

目覚めて一番、簡易的に食事を済ませてすぐドンドルマ街内を走り込み、日課のトレーニングに勤しんで行く。

一通りノルマをこなして部屋に戻れば、火照った身体に付着した汗を流しつつ、最低限の身だしなみを整える。

その後はもう二度と出遅れないようにと、不完全燃焼で終わった砂漠での出来事を思い返しながら、躍起になって武器や鎧のメンテナンスに精を出すのだ。

普段の低い位置でテンションを維持する彼女の印象とは裏腹に、意固地になって次に備える少女がそこにいる。部屋の外では絶対に見せないその姿は、彼女としてもハインツやウインブルグには正直見られたくないと自負していた。

何より、あのハインツは彼女を感情の起伏が乏しい人物と考えている節があるのだが、これは完全な誤解である。リイタ本人も甚だ遺憾というものであった。

表情にまで現れないだけであって、その鉄面皮の下にもしつかりと人の情が渦巻いている。それをハインツは分かっている。いや、ウインブルグやラッセルは分かっているながら、黙っている部分もあるのだろうか。

さらにリイタ自身の感情として、ハインツを基本善人だとは思ってはいるものの、文官として動く彼の言動に対しては多少の面倒くささを感じている始末である。

阿吽の呼吸、相棒などとは程遠い、互いに互いを理解できていないのだ。なぜ上は彼と彼女を組ませたのか、今思えば不思議にも程があるというもの。

様々な思いを逡巡させながら、後悔を胸に次回へ向けて爪を研ぐ。ハンターとして彼女が出来る最善がそこにはあった。

無言の思考を巡らせるうちに、時間はちょうど昼食の頃合い。リイタは武器のメンテナンスを切り上げると、インナー姿から簡単な屋外用の装いを着こなし、街の市場に出ようとしたときに、来訪者を知らせる鈴は鳴った。



「と、いうことでリイタさんさ。アイルー、雇わないかい？」

「ニャー」

彼女が邂逅一番で聞いた言葉だった。

経緯を述べるとすれば、失くしたはずのスケッチブックが帰ってきた手前。途方に暮

れたアイルー一匹を見捨てられるほど、ハインツの心がドライではなかった。その一点に尽きる。

仕方なしにと、彼の足は己が知り得るツテを渡るため、渋々とドンドルマの街へ繰り出していたのだ。そのツテ第一号として白羽の矢が立ったのが彼女、リイタである。

リイタが詰めるゲストハウスに立ち寄るや否や、首根っこを掴んだアイルーを彼女の眼前に突き出すのは、張り付いたような笑顔で入り口に立つクセ毛のハインツ。来訪者の呼び鈴に気付いた休日のリイタは、突如現れた不自然な笑顔を浮かべるハインツの姿に、表情を崩さないまま碧眼を一瞬だけ見開く。

「と、いうことって何。うちは新聞とらないよ?」

「いや新聞じゃないよ!? その……かくかくしかじかで、無下にもできなくて」

「ニヤー」

「かくかくしかじかって何。ハインツさんのところで雇えば済む話じゃ?」

ダメなものダメと、NOと言えるのもリイタである。その彼女の言い分は、しごく真つ当なものであった。

彼女の核心的な言葉に返す言葉もないハインツ。だがしかし、今の彼は理性よりも感情で動いている部分が大き。

「リイタさん。人の心つてのはね、そう簡単に嫌な思い出を払拭できるものじゃないん

だよ？ ほら見てくれ、服の裏に蕁麻疹じんましんがこんなに沢山できてる」

「ニヤー」

ハインツは人工的な笑顔のまま、アイルーを掴む反対の手で白い麻シャツの袖をまくると、その腕はブツブツと鳥肌とともに赤い発疹が広がっている。それを見たリイタは気取られぬように一歩ほど後ずさっていた。

「（それってアレルギー……）私のところは間に合ってるから。そもそも、基本的に私はハインツさんの護衛に就くから、私がこの子を雇ったら本末転倒じゃ？」

革新的な言葉ふたつ目。

これが書士隊と言うのならあまりにもお粗末な思考である。と、リイタは密かに考え、そして表情の下に隠す。感情を読ませないのは得意なのだ。

「ああそっか！ うっかりしてたよ……そうだ、そうだよね……じゃあ、次行こうと思つてたワインブルグさんも駄目じゃないか」

「あ、そもそもあの人は——」

「ああそっか！ そもそも雇えるほど金銭的に余裕がないかつ。当てにならない……駄目じゃないかワインブルグさん」

「あのねハインツさん、今すつごく失礼なこと言ってるのに気づいてる？」

「どうやらハインツは正常な判断能力を失っているらしい。モンスターで言う興奮状

態、ハンター側で使う言葉なら怒り状態と言ったところだろうか。そんな彼に首の皮を掴まれたまま重力に身を委ねるアイルーは、冷静さを失う彼の様子を黙って見ているだけだ。まな板の上の鯉ならぬ、まな板の上の猫である。

リイタの目の前では慌ただしく感情を浮き沈みさせる、彼女の護衛対象であるはずの若き書士隊の情けない姿。一度狂った歯車がもとに戻るには、それなりの時間がかかるだろう。

やむなしにリイタはため息混じりで、思いつく案を一つ挙げてみることにした。

「ネコバアのところは？」

ネコバアと言うのは、主にアイルーが人間社会で仕事をこなすのに窓口となっている人物のことだ。キツチンアイルーからオトモアイルーまで、ありとあらゆるアイルー業務を斡旋するスペシャリストである。

「先日来たばかりらしい。また来るのはしばらく先。その前に新しい任務が入るだろう
ヤ」

頼りにすべき相手も不定期業務では会える宛もない。むしろ大半をドンドルマ外の遠征に費やしている彼らにとって、ネコバアに会えるのは非常に稀である。

ハイイツは声のトーンを落とすと、二進も三進も行かない現状に悶えていた。

「ああくっそー、ドンドルマにあまり居ないから知り合いも少ないし、こうなったらギル

ドに直接出向いて頼み込むか……いやでも勝手にアイルーを斡旋するのも気が引けるし……」

目を泳がせながらブックサと独り言をつぶやくハインツは、次第に周囲の目線など気にする余裕もなくなっていた。

そして実はこのやりとりが玄関前で行われているものであり、様子を気にした隣人たちの目線が、まるで気の毒なものを見ているようだったのを、リイタのハンターの洞察力は見逃していなかった。

「……仕方ない、ですね。私も一緒に探すから、いったん落ち着いて下さい」
繰り返すようだが、リイタにも人並の情はある。

それは彼からすれば、女神の一声にも等しかった。

「り、リイタさん……!」

「に、ニヤ……!」

女神の一声を機に、ハインツたちは更にドンドルマの街へ繰り出した。



場所は変わる。のだが、そこは彼らにとって非常に親しみ慣れた場所でもあった。

ドンドルマ玄関口の一角、ハインツが胸にする銀色の書士隊証ハッと同じ模様エンフレムが刻まれた建物。書士隊ドンドルマ支部である。

「そういえば、私もドンドルマでの知り合いは少ないんです」

「り、リイタさん……」

「に、ニヤあ……」

もう少しだけ、お騒がせなアイルーの雇い主探しは続きそうだ。

再会の書士隊、猫を添えて

彼女の数少ないツテといえ、ひいき鼻^{ひいき}尻ひいきにしている鍛冶屋くらいだった。そこでもアイルーを雇っているのだが、如何せん仕事内容は職人のそれ。ろくな訓練や修行も受けていないであろう、現在リイタの目の前で呑気に宙を泳ぐアイルーには到底務まると思えなかつた。

その他で彼女が知り得るツテと言え、必然的に身近な存在である書士隊支部内の人脈くらい。護衛を専任とするリイタの役割上、一般のハンターと交流する機会が少ないのは致し方ないと言え、それまでなのだが、今後人脈の拡大は彼女の改善すべき課題となるだろう。

やがて支部前で沈んだ様子二人の存在に気付いたのか、入り口から一人の男が軽快な足取りで歩み寄ってきた。男の顔は両手に抱えられた大袋で隠れているが、すぐに袋脇から目鼻立ちがくつきりとした顔をひよっこり覗かせると

「お？ おつ？ おー?! ハあインツとリイタちゃんじゃーん！ 二人とも生きてたか嬉しいぜー！ 待機日に支部に寄るなんざあ珍しいなー」

と、なんとも人懐っこい笑顔で声をかけてくるのである。

「ヒューイ！ 君も戻つてたのか。無事みたいで何よりだよ」

軽快なステップで二人に近づいてきたのは、両手いっぱい袋を大事そうに抱えたヒューイと呼ばれる男。彼こそドンドルマ支部に所属する書士隊の一人であり、ハインツの同僚の一人でもあつた。

つい先程、遠征から戻つたと言うヒューイの腕には中身の詰まつた大袋が抱えられており、袋の口からは森特有の新緑の匂いが溢れ漂う。

「ほい、これ土産のキノコねー。リイタチャンにはハインツの倍あげちゃうよー！
もつと、大きくなれよ？」

「……それ、セクハラです。ちゃん付けもやめて下さい。でもキノコはありがたく頂きます」

ヒューイは袋の中から土の匂いの残る土産キノコを取り出すと、適当に二人へ投げつけてみせる。リイタはタイミングよく両手でキャッチ、ハインツは見事に取りこぼすが、代わりに墮ちたキノコをアイルーが掴んで見せる。

書士隊の現地調査にもある程度区分けがされており、ヒューイはとりわけ現地の食材、もとい環境調査を主だつて担当している。今回はラツセルの命を受け、東の森へ幻の巨大土産キノコなるものの調査に赴いていたのだ。

「かーッ!! そのクールな反応、リイタチャンだねえ。今度俺の護衛もしてくれよなー」

「ハインツさん以上に疲れそうなので嫌です」

「僕以上にねえ……ん、あれ?」

「ニヤー、なかなかいいキノコだニヤー」

ケタケタと笑うヒューイに対して淡白な反応を返すリイタ。その彼女の横では、密かに衝撃を受けた様子のハインツ。

ヒューイという男は、その場にいるだけで祭りの喧騒のような雰囲気を身に纏っている。そんな外の賑やかさに釣られたのか、また一人、新たな顔ぶれがやってくるのは必然とも言えるのかもしれない。

新たに現れるのは、見るからに育ちの良さそうな雰囲気をもとう女性だった。

「あら、ハインツも戻ってたのね。リイタも久々じゃない」

「疲れるのか……つと、アンリ。君も戻っていたんだね」

アンリと呼ばれる女性はもちろん書士隊の一人であり、胸には銀色の書士隊証バッジが輝いている。ハインツとリイタの二人を見た彼女は柔らかに微笑みかけると、ヒューイの横に位置を取る。

これをチャンスだと思ったのか、ハインツは再会を喜ぶのも束の間、現在の彼にとつて再優先の要件を早々に切り出すことにした。

「まずはお互い、いや三人の無事に感謝を。そしてなんだけどき、このアイルー、雇わな

「いかい？」

「雇ってくれニャー。報酬はハチミツで良いのニャー。」ねこたくのごとく”なんでもするニャー”

再会早々の言葉にしては、気の利く言葉でなかったのは確かだろう。早急な解決を焦るハインツはなりふり構わず要件を伝えるのだが、アンリは矢庭に放たれた彼の言葉に顔を一度しかめると

「あら、ネコタクとはまたブラックね。ずいぶん潔い良いとも思うけど、なによ藪から棒に。あたしにアイルーなんていると思う？」

と、見た目の上品さからは予想し得ない力強い口調で返答を述べてみせた。かくいう彼女も現地調査組であり、行動力ある女性なのだ。とある生物を追って大陸中を回る彼女は、上品なお嬢様だけで通っているはずもない。

続くヒューイも

「あーアイルーだつて？ キッチン？ オトモ？ ナンデモ？ で、ハチミツ？ ……」
わりーが俺にや必要ねーわ。ワケマエが減っちまう」

と、きつぱり言い捨てる。特にアンリは、ハインツの手元の猫には一切の興味が無いと言った様子で、砕けた口調のまま話を続けた。

「それよりアンタたちの成果はどうなのよ？ 私の方は……そうね、後で見せたげる。

フフフ……！

「アンリさんの顔、なにか見つけたときの顔してる」

「ああ、そういう顔なのか。じゃあこっちに来たのも——」

リイタの指摘どおり、初めから自分の持ち帰った成果を自慢することが目的だったであらうアンリは、怪しい笑みで彼女の瞳を覗き込む。

「さすがハンターよく観てるわ。リイタには特別に第一号としてこっそり見せてあげ——」

「え。……遠慮、したいんだけど。この間みたいなのは、ちよつと……」

「別に遠慮なんて良いのよ？ あたしとリイタの仲じゃない」

一瞬青ざめるリイタの脳裏には、とある生物の調査を専門にしているアンリとの、忘れがたい記憶が蘇っていた。グイグイとリイタに歩み寄るアンリだが、胸元の内ポケットに手をつ込み何かを弄り出そうとしている。淑女にあらぬ姿だ。ここですかさずフオローに入るのはヒューイ。

「お、そーだ。せつかく三人戻ってるんだし、後で調査の報告会と洒落込もうじゃないのー？」

ハインツもこの件には心当たりがある様子で、苦笑を浮かべながら彼女の制止に加担することにする。

「君のは絶賛バラマキ中じゃないか。いやでも、そう。報告会には賛成だ。僕も渾身の一枚を描いてきたんだ」

「……ふーん、ああそう。じゃあさつきと中に入りましょ。話はそれから」

特に疑う様子もない……と言うよりも気にしていない様子のアンリを見て、ホッと安堵するハインツとリイタ。

「あ、ああ。その前にちよつとセンセイと話して来てもいいかい？」

「じゃあさつきと済ませてきなさいな。フフフ……きつとこれを見たら、腰を抜かすわよ？」

「それは……楽しみだ、うん。すぐ終わるから待つてよ。……にしても前科持ちの言葉は説得力があるね」

「は？ 前科持ちつて何よ？」

「「なんでも」」

咄嗟に三人の声が重なる。

なにせ、前回が前回であったのだ。そのとある生物の物モノと思われる“排泄物”を嬉々として見せびらす見た目メだけ淑女の姿など、誰も思い出したくはなかつたのだ。

上手く話の流れを誘導したヒューイラッセルに胸中で感謝の念を唱えると、気を取り直して支部内——つまりは報告書提出以来の上司との面会になる。

「こうなったらラツセルの人脈頼り、だね」

「ああ。他の先輩たちも今は出払ってるからね。ここで駄目だったら、ギルドに頭下げに行くしかないね」

ひそひそ囁きながら、二人は書斎につながる簡素な扉の前に立つ。

扉を軽く叩く乾いた木の反響音が響き、やや間が一つ遅れて、入って良いぞとシワがれた中にも芯の通った声が壁越しから空気を伝って響く。

「入口で待つてるんだよ？ 良いと言ったら入ってくるんだ。絶対に粗相のないようにね」

「ニャー」

ナーバナ森丘での出来事から念を入れたハインツは、ゆっくり扉を開くと一礼して書斎へ足を一步踏み出す。リイタも真似して後ろに続く。

「外ではずいぶん楽しそうじゃったな」

「き、聴こえてましたか……改めて失礼します。ハインツです」

「リイタ、です」

「うむ。報告書は読ませてもらったぞ。なかなか興味深い体験をしてるみたいで何よりじゃ。そこにワシが居ないのが唯一の不満点じゃがの」

書斎に居座るかつての調査隊随一の偉丈夫は、少し曲がり始めた背筋を伸ばして二人

に向かい合うと、冗談交じりに顔中に刻まれたシワを微笑ませる。そして若き書士隊とハンターに対して、上司としてのねぎらいと個人として心から無事を喜んでいた。

隣で静かに佇む秘書の女性も、微笑みながら二人を歓迎する。

「年を考えてくださいよ。センセイが居なくなったら、ここは誰が回すんです？」

「王都の連中を呼べばいいじゃろうに。あの腑抜けどもめ、研究室に引きこもりおつて良いご身分じゃ」

けしからんと、ラッセルは思い出したように丸い背中を椅子でふんぞり返らせる。事実、現在の書士隊は二つの大きな派閥に別れてしまっている。すでに埋めようのない溝ができつつあり、ゴシップ関連の特集でもしばしば話題に取り上げられる始末だ。

「仕方ありませんわ。実際、王都の研究班は新しい文献を次々と発表していますもの」
秘書の女性は落ち着いた優しい声色で老人を宥める。

「早いだけでなんという！ 情報の確実性はワシらのが上じゃわい！ フンっ、奴らが代わりをやってくれるなら、ワシだって現地に……現地にいいいい!!」

「……それは、やめた方が良くと思う。引退前の頃でも、あのウインブルグさんが振り回されてたつて聞いている。今度こそ、あの人の”腰が”もたない」

「リイタまで何を言うか！ ワシはまだ引退しとらんわ！ それにあやつは鍛え方が足りのじゃー！」

「落ち着いて下さいセンセイ」

これはある種、このドンドルマ書士隊支部長ラツセルのルーチンとも言えるやり取りであつた。

一通り吠え終えたラツセルの興奮は冷きらない様子ではあるが、やがて咳払いを一つ唱えると、彼方王都へ向けていた感情を押しさえ込み、意識を目の前の二人へ向き直した。「んオツホン……と、ハインツよ。ワシになにか用があるんじゃないやなかつたかの？ まあとつくに聴こえてたんじゃが、せつかくだから言つてみい」

「はい、実はナーバナ村に調査へ行つた時の件で一つ——」

ハインツが語るはナーバナ森丘での一部始終。もちろん彼がハチミツで危うく命を落とした件は隠蔽済みだ。

その出来事を報告書で読み返しながら、ラツセルは若き書士隊の言葉に耳を傾ける。つまるところ、行き場を失つた猫の行き先をどうにかしてほしいと、いわゆる部下の尻拭いの嘆願であつた。

ここでハインツは入り口で待たせていた猫を呼ぶと、待つてましたかと言わんばかりに、猫は鼻をスンスン鳴らしながらラツセルの前に躍り出る。

「ニャー雇つてくれニャー。三食昼寝付きおやつにハチミツで構わないニャー」

「お、おい（こらっ！）」

「……おませさん」

入室早々に猫はハインツとの口約束を破ってしまふ。口約束なのだからペナルティはないが、彼としては果たしてこの猫が働ける口があるというのだろうか、改めて頭を悩ませることになりそうだ。

常識的に考えて無理だと思つたハインツだが、ラツセルの口から出た言葉は予想外なもの。

「ふむわかつた。なんとかしよう」

なんともあつさり快諾してみせたラツセル。対してハインツはぼかんとした顔である。

「え、良いんですか」

「当たり前じゃろう？　まずはこのアイルーくんじゃが、ひとまずこの書士隊ドンドルマ支部で預かるでしょう。処遇はおいおい考えるところかの」

どうやらラツセルはドンドルマ支部付きのアイルーとして、この猫を雇うつもりらしい。配属先はこれから決めると、そう言っているのだ。

「助かりました——本当に。危うくストレスで全身発疹だらけになるところでしたよ」

「私も（面倒事から解放されそうで）助かつた」

「なに、部下の尻拭いをするのも上としての務めじゃ。とりあえず猫も連れて下がつて

良いぞ。それに、お主らが戻るのを、扉越しで待つてる奴らもいるようじゃしの」

猫の雇い主探しはひとまず終わりそうだ。ハインツとリイタは猫を連れて一礼すると、書斎を後にした。

休日の終わり

ハインツの胸内は、ただただ安堵感に満たされていた。気が付けば、彼が我慢して猫を持ち支え続けていた右腕の発疹は引いており、彼に訪れた心の平穩を分かりやすく示してさえいる。

しかし、一難去つてまた一難。だが心に不安や焦りはない。今度は、彼としても望むところであつたからだ。

このドンドルマ書士隊支部内では、今まさに一触即発の彼らが向き合つていた。戦場リッングとなる木製の丸いスタンドテーブルを挟み合いながら、若き書士隊ハインツ、ヒューイ、アンリがそれぞれに抱えるのは今回の得物。書士隊における至高の武器でもあり命の次に大事な物、情報・成果である。

つまり、現地調査組の醍醐味とも言える自慢話自慢話が幕を切つて落とされようとしていたのだ。

「ということではリイタチャン、立会人頼むよー！」

何がということ、という顔をするリイタであるが、彼女もすでに観念した様子。不意打ちでアンリの言う”とっておき”とやらを拜まずに済むのだ。心の準備が出来る

だけマシというもの。ある意味、就職先としては勝ち組も良いところの彼女の隣でちょこんと座る猫も、興味津々という様子でスンスン鼻をひくつかせていた。

「結局面倒事に……。ううん、もういい。じゃあ、最初は誰から？」

リイタの口火にいち早く反応した男は、一番槍とばかりに意気揚々と声を上げる。

「もちろん俺！ 実はずっと見せてやりたい気もあつたんだが、森での武勇伝を語りた
い気持ちも抑えられず……」

「……もつたいぶらずに、早く」

「焦つちや駄目だぜリイタチャン！ しかし、ふつつつ。今こそ見せてやろうじゃない。この、俺の、成果をつ！」

リイタとヒューイの温度差は明白である。

しかし、お祭り男ヒューイは何のそのと、後生大事そうに抱えていた大袋をテーブルに叩きつける。その中身は、度重なるお裾分けパトラマキにより配り終え、空っぽになっていたかに思えた。しかし、袋の底からはハイソツらが今まで感じたこともないような、異様な雰囲気なを放つ“何か”が、見えながらかも存在感を漂わせていたのだ。ニタリと笑うヒューイは袋の底に手を伸ばし乱暴に掴みかかると、天を仰ぎつつ机にソレを召喚した。

「見よ、この現実とは乖離した造形、大自然の神秘とも言える！ これこそ俺が出会った

幻の特大特産キノコっ！ 通常の三倍大きい赤い特産キノコ（毒入り）をツツ！」

彼の大仰な口上とともに現れるのは、まるで絵本の中に登場するような禍々しい色をしたキノコ（？）らしきものであった。現れた物に対して書士隊二人の眼光はすぐさま光る。

「おお……！ 僕には赤じゃなく紫に見えるけど、これは特産キノコの突然変異体かい？」

「トゲ付いてるし、見るからにまずそうねえ。毒ありますつて色してるじゃない」

まじまじとテーブルの上に置かれるキノコらしきものを見つめるハインツとアンリの二人は、見たままに感想を述べる。

簡潔に造形を語るとすれば、禍々しい紫と赤の癩痕模様に、キノコ傘には先端の鋭い棘が付いた、まさにキノコと呼べるかも怪しい代物であった。

そして、何よりハインツが驚いたのはそこではない。

「おうっ！ 縦に裂けるから大丈夫かと思っただが、案の定もちろん毒入りだったぞ！ 食ったら三日発熱して帰還が遅れた」

食べかけだったのだ。

「こいつバカな奴だニヤー」

「これは大当たりだろー！ なんせ”絶対に食べてはいけませんリスト”に載る予定だ

からよー！」

嬉々として語るヒューイは、これまで幾度となく現地の食材を採集してはドンドルマまで持ち帰っていた。自称グルメを語る彼の舌は、気になったものは必ず一口は食べて確認するという、危険極まりなさすぎる主義を持つ男だったのだ。

しかし彼のおかげか、特にここ数年のキノコ図鑑は目覚ましい更新頻度を誇っている。項目が「毒キノコの副作用」でさえなければ、もつと素直に褒められるところなのだ。

「当たったのは君のほうじゃないかっ」

「はっはっは！ 上手いこと言うじゃねーか！」

「どうして喜ぶのよ！」

ドンドルマ書士隊内では、密かにヒューイがいつか出先で食中毒により命を落とすのではないかと、笑えない冗談が広がりつつあった。同僚としての二人も、毎度釘を刺してはいるものの、懲りずに奇行とも呼ぶべき行動を続ける彼に半ば呆れた様子だった。そんな二人の気も知らないで、ヒューイはたいそう上機嫌な様子で、幻と謳われた巨大な特産キノコを丁寧に袋に直すと、お次は誰とばかりに鼻を鳴らした。視線は——例の問題児だ。

「あら、あたしはトリでも良かったのだけれど？」

「心の準備はできてるからな！」

「なによそれ」

決してアンリと言う女性が悪いわけではない。厄介なのは、向けた対象に対する感情があまりにも大きすぎる点だった。時に膨れ上がりすぎた感情——つまり彼女で言う憧れは、周りを見えなくさせていたのだ。

「じゃあ遠慮なくいくけど、う、うふふふ……っ！　これがっ、密林で見つけたっ、愛しのっ、キ・リ・ン・サ・マ、のタテガミ（一本）よっつ!!!」

不気味に笑うアンリの追うとある生物こそ、未だ書士隊の中ですら謎多き存在、幻獣キリンそのものであった。

アンリは手袋越しに、風も吹かない屋内で銀色になびく美しい一本を掲げて見せる。警戒気味にテーブルから距離を離していた書士隊二人とハンター一人は、やや拍子抜けした様子だ。

「おお……思ったよりまともな物が出てきたぞ」

「つか毛の一本程度、普通じゃね」

「普通とは失礼ねっ！　この貴重なサンプルっ！　これは新たな発見の一步なのっ！　そして今度こそ見つけてみせるわっ！　幻のその生態系、隅々まで暴いてみせるんだからっ！　うっ、うふ、うふふふ……っ！」

「アンリさんは相変わらずそう、だね。でも所構わずモンスターのフンを採取するのはやめたほうが良い。女の子として」

「ニャー」

アンリのとある生物こと“幻獣キリン”のものと思われるタテガミの一本に向ける視線は、恋する乙女のソレであった。

「よく判別できるよね……というよりも、それってホンモ——しびツ!!」

「おわかりいただけただけかしら? タテガミ一本にも僅かな電流が残っているの。これをキリンサマのものと言わずに何というのよ?」

ハインツの疑う間もなく、アンリは銀色に光る一本のタテガミを一瞬、彼の手に掠めさせる。それだけで毛に蓄積されていたと思われる電流が、ハインツの手を弾けさせたのだ。静電気のような生易しいものでない。タテガミ一本とは言え、かのキリンの一部は取扱い注意の危険物なのである。

「正気か?! 一声くらいかけてくれよ!」

「でも信じたでしょ? これだけの帯電性と蓄電性の両方を兼ね備えてるのは、キリンサマを置いて他にいないわ!」

「わかった信じる! 信じるから目の前でそれを振り回さないでくれ!!」

ハインツの目の前で銀に光る毛を振り回し、弁を振るうアンリは研究者としての熱意

は本物なのだが、いかんせん周囲との温度差が生じやすい。

なまじ見た目が清楚なお嬢様風なのも相まってか、書士隊内でも裏で危険人物の一人として数えられてしまっている。

「酷い目にあつた……そしたら、僕が最後だね」

「ハインツは森丘と砂漠に行つてたんだつたか？」

「ああ。砂漠の件は……置いておくとして、僕のはケルビの求愛行動を描いたスケッチだ。ちょうど手元に戻ってきたし、ぜひとも見て欲しいな」

ちらりとリイタの横でくつろぐ猫を一瞥したハインツは、猫と一緒に今まで抱えていた、やや表紙の厚紙が歪んだスケッチブックを取り出した。森に忘れ雨ざらしになっていたものの、猫の気遣いからか、気にしなければまだ使用できる状態で保存されていたスケッチブック。

思い返せば猫がわざわざ届けるなどと、奇妙な話もあつたものだ。猫に対する苦手意識いやなきわくが先行する一方で、頭の冷えた彼はついで思い返してみる。これこそ、副次的なものであるが面白い情報ではないかと。

「ほーあの警戒心の強いケルビをか。人前にゃあ滅多に見せないつてのに、よく描けたもんだなー」

「ハインツつて変なところで我慢強いのよね。で、早く見せてよ」

「もちろん……よし、開くよ——それ！」

これでハイנטツの猫に対する苦手意識も少しは減るかもしれない。結果良ければ全て良しとも言うのだ。

そして彼は、スケッチブックをまくる。
のだが。

「……？」

いくらしばらくハイנטツの手元を離れていたとは言え、肌身離さず持ち歩いてきた必須道具なのだ。慣れ親しんだ手の感触が、まくるページを間違えるはずがない、とハイנטツは直感で悟っていた。

しかし現実問題、まくったページは彼の見覚えのないものであった。

いや、見覚えはあるのだ。彼が描いたクロツキ、デッサンの類の痕跡は確かに存在した。だがしかし、それは大きく形を変えていたのだ。

同じく当時、現場に居合わせたリイタもまくられたページを覗き込む。

「これ、獣人族の文字？ でもこのページ、確かハイנטツさんがケルビを描いてた——」

「……」

「……ニヤァ」

「ハ——!!」



行きつけの揉み屋帰りのウインブルグは、普段から着込む赤の鎧を脱いだ軽装で書士隊支部に訪れていた。

「ラッセル殿、失れ——扉の前で何をしていますのですかな？」

「ほう、ウインブルグか。なに、面白そうな催しがやっているから、少々のおぞき見をな」
 「何やら白熱していましたな。のおぞき見なんてせずに、素直に表へ出れば良いでしょうに」

「ワシが出たら皆改まってしまおうじやろうが」

ラッセルの詰める書齋から離れたラウンジでは、猫と若き書士隊ハイインツの迫走劇おにじつしが繰り広げられていた。その賑やかさに目を惹かれたウインブルグであったが、若者の輪に入るには少々気が引ける年齢を少しばかり悔やむところ。時代の風を感じつつ、ウインブルグはまっすぐに、ドンドルマ書士隊を束ねる長に向かい足を運んでいたのだ。

「思い出しますな。アーサー殿が健在の頃は、こういった光景も珍しくはなかった」

「そうじゃな。今では王都勤務も増え、外へ出る者もずいぶん減ってしもうた。別にギユスターヴの奴が悪いとは言わんが、時間は進むものじゃ」

書士隊も時代とともに新しい風が取り入れられ、そして吹き、通り過ぎていく。かつてのジョン・アーサーが行方を消して七年と経った現在。当初はアーサー派とロン派の二大派閥が火花を散らしていたが、すでに大局は決しつあつた。かつての栄光は年月とともに、”ただの過去”へと変遷を遂げつあつたのだ。

「して、なにか用かのう?」

「ええ。例の砂漠にいたドドブランゴの件で、追加で報告に参りました」

「追加? ほほう、なにかのう?」

ウインブルグの言葉を聞くと、好々爺の瞳は鋭く光った。

「単刀直入に言いますぞ。例のドドブランゴ、G級クラス、もといそれに比肩するものだった……と、思われるのである」

静かに落とされた言葉に、ラッセルは少し考え込む様子を見せる。

「……ほう? この件、ハインツやリイタには?」

「書士隊特有あなたがたの確証を持った話ではない。あくまで、我輩の経験上の話なのだ。幸い彼らが直接交戦することはなかったから、知らせていないのである」

瞳を細めるラッセルは、眼前にいたつて真顔なウインブルグを見据える。ラッセルが第一線を退く束の間、最後の護衛ハンターとして傍にいた男の進言だ。疑うはずもなかった。

「お主の経験を信じようではないか。で、なにからそう感じた？」

「動いてる彼奴を間近で見た——では、納得してくれないのであるうな。出会ったときこそ、すっかり痩せ縮んでおりましたが、万全の状態であればかなりの脅威であつたでしょう。それにレクサーラの情報提供元、失敗こそすれ、あれも中々の手練でありました」

「ふむなるほど。で、お主がワシに言いたいことは——」

「ええ。雪山に、ドド^ブブランゴ^レを支配者から追い落とすほどの”ナニカ”がいる、もしくははいた事に。北へ出向いている者たちは？」

ウインブルグの進言に、ラッセルは各地に点在する書士隊の行方を思い出そうと頭を掻く。

「えーと、誰じゃつたかのう？」

「ジヨナサン氏、スタンレイさんの二名ですね。すぐに知らせを出しましょうか？」

すぐさま答えるのは秘書の女性。ドンドルマ書士隊の居場所を網羅するのは概ねこの女性でもある。

「そうじゃったな。異変があれば向こうから文が来るじやろうが、念を入れるとしようかの。……それと情報が確定するまで、しばらく北への探索は省くとするか。あとは——」

念入りの一言は静かに零され、ウインブルグの普段から滲み出ていた笑みも釣られて消える。

「——リイタにはくれぐれも、悟られぬように、な？」

その瞬間から好々爺の雰囲気は、いつの間にか鳴りを潜めていた。

「……承知したのである」

たとえ引退したとしても、第一線を調査し、そして生き抜いてきた生ける伝説。それがラッセルという名の男だ。その傍らを一瞬でも経験したことのあるウインブルグは、その言葉の意味を十分に理解していた。

しばしの間、書斎には沈黙の時間が流れる。扉越しから響くのは、未だに続く猫とハインツの追走劇。若干ハインツが疲れているのか、先ほどよりも激しさはない。

「……にしても、ハインツは色々」と持つてる。もんじやのう」

静まり返った場の流れを変えようとしたラッセルの雰囲気は、普段の背中が丸い好々爺のものに戻っていた。ウインブルグもいつの間にか強張っていた自身の表情を和らげると、適当に言葉を投げ返す。

「吾輩もそう思いますよ。彼はきつと、この先苦労しますな」

「羨ましい限りじゃ。しかしワシもまだまだ捨てたものではないのう。己の目の良さを褒めてやりたいわい」

獣人族の文字の解読は近年進みつつあるが、それでも解読書が片手にないとその場で読み解くのは難しい。それこそ、今の書士隊支部内で唯一ひと目見ただけで意味を理解してしまう傑物は、ラッセルの他存在しなかった。

その場でラッセルにしか識りえない情報は、彼に猫のハインツへの感謝の気持ちと、その義理堅さを評価するのに最高の一言でもあつたと言える。

「さて。あの猫の処遇、どうするでしょうかのう」

あとは描くページを間違えさえしなければとラッセルは思いつつ、柔らかい笑みを浮かべていた。彼と猫が顔を合わせたのは一瞬であったが、その絶妙な間の悪さは、あの猫特有のものなのかもしれない。しかし、ハインツの”持つ”縁というものは、きつと

彼にとって悪いものではないのだろう。

スケッチブックに乱雑ながらも丁寧に、その想いが綴られた言葉は一言。

『ありがとう』

つづく

▼レポート3・『ドウーヴ溪流マツピング、いびつな愛を 測量せよ』 流れる時に

「ミエールや！ ミエールやー！」

断崖の山々に抱かれたその街には、今日も今日とて日が昇る。

唯一南側に広がる地平線は絶えることのない風の捌け口となり、その合間を縫うようにいくつも築造された風車が一身にその恩恵を受け止める。

絶えず風止まぬドンドルマの地では、早朝から人気の少ない書士隊支部内を歩き回る足音が一つ。足音の主は丸まった背中に鞭を打つようにして、何かを呼び探し回っていた。

決して徘徊老人などではない。自称現役を謳う痴呆予備軍でもない。少々頑固で好々爺が売りの書士隊支部が長、ラッセルである。

ラッセルの朝は早い。老人だからではない。誇りでありルーチンなのだ。誰よりも早く支部に足を運び、すぐに溜まった情報をまとめ始める。

現役引退から散々嫌がっていたはずの業務だが、彼は書士隊支部を束ねるものとしての責務に準じていたのだ。その彼のルーチンだが、今日はいつもと少し違っていた。

それこそが“ミエール”の存在である。つい先日顔を合わせたばかりであるが、ラッセルはひと目見てミエールを気に入っていた。その後もう少しばかり談話する時間を設け、話をするうちに彼の好感度はウナギ登りに上がっていたのだ。

「ミエールやー!」

ラッセルはその名を再度呼びかける。閑散とした支部内では老人の声が小さく反響するだけで、特に返答といった返答は来ない。怪訝な顔をするラッセルは、ミエールに伝達しようとした仕事内容を思い返す。

掃除や本の整理などの雑務といったことから、書士隊としての矜持を問いてやろうと、まるで孫と接するような感情で心待ちにしていたのだ。

「まったく、どこへ行ったんじやか。まだまだ伝えるべき事が沢山あるというのに」
帰ってこない返事にヤキモキするのは効率が悪い。今すぐにできないのであれば、他のことを優先しよう、そう考えたラッセルは仕方なしにと、己の書齋に向かうことにする。

ラッセルの頭の中では、旅立っていった己の孫同然の書士隊メンバーの行方を案じる。心配の種は尽きないが、彼らも由緒正しき書士隊の誇りを背負う者たちだ。

雪山へ向かったジョナサンやスタンレイ、沼地に足を運ぶヒューイ、懲りずに密林へ潜るアンリ。そして溪流へ出発したハインツ一行。その他は……数えきれない思い出しきれない。覚えられないのは老化なのか、はたまた性格なのかは明言しない。代わりに居場所を知るのは、傍らにいる秘書なる女性であるが、彼女がやつてくるにはまだ少しばかりドンドルマの風は冷たい。

そうそう溪流と言えど、ラッセルはかつて足を踏み入れた溪流の地を想起する。

湧き水から始まる河川は、長い年月をかけて流れを形作り、周囲に恵みをもたらした。澄んだ空気に清らかな水。溪流の名の通り、下る流れは命を運ぶ。流れが早い分、上辺に生物の影は少ないが、それでも悠々と川をのぼるクレアジやらサシミウオを見ると、ついつい心揺さぶられてしまう。それに川底の石を捲つてやれば、驚くほどの生物が顔を出したことだろう。

森丘とはまたひと味もふた味も違う、書士隊冥利に尽きる幻想の地であると言えよう。

きつと彼らも、これからラッセルが見たものと同じ光景を目にすることになるのだ。そう願ひ、彼らにこの依頼を託した節もあるのだが、ああ、可能な事ならもう一度あの光景を見てみたい。そう願う老人は、やはり無理の聞かない己の身体を恨んでも恨みき

れない。

仕方ないのだ。いくら狩猟技術が発達しようが、モンスターの研究が進もうが、不変たるものは存在する。寄る年波に勝てないのは、背中が曲がり始めた時点で察していた。

「仕方ないから、今回はお前たちに譲ってやるぞい。じゃから」

だから、恨み節ついでに老人は、いつも通り別のことを願う。

「じゃから、無事に帰ってくるんじゃぞ」

夢想到に浸る老人は、書士隊の入り口に誰かがやってくるのを察した。おそらく、いつも二番目に出所する秘書なる女性だ。

いつの間にやら温かみの増した風が窓から溢れていることに気付くと、ラッセルは背中を伸ばして喉を鳴らし、書斎の扉が開くのを静かに待ち構えた。



親の心、子知らず。そんなすれ違いもあり、ハインツの心情は穏やかなものではなかった。なにせ、彼は今現在絶句しているのだから。

「ニヤー。ご主人、オイラを置いていくなんて薄情だニヤー」

いつかの森で受けた恩義と感じている猫は、わざわざ竜車で十日はかかる道をその四本足で訪ねてきた。そのなんとも義理堅い点を入ったラッセルが、書士隊預かりのアイルーとして仕事を斡旋することになったのだ。

それだけならばまだ良かった。支部に置いていけるのならば、ハインツは安心してドンドルマの借家で眠ることが出来るし、任務も心置きなくこなすことが出来る。とりあえず書士隊のくくりではあるが、彼と直接関わる機会がなければ構わなかったのだ。

しかしどうだ現実には。

「これドンドルマのハチミツだってニヤー。おいらの森のとは違ってちよつとジャリジャリしてるけど、こいつも中々美味だニヤー」

目の前でいけしやあしやあと寛いでいるのだ。

そう。猫ことミエールは、こつそりとハインツ達が乗る竜車に忍び込んでいたのだ。

確かに失せ物を探し出してくれた点については感謝しよう。しかしながら人間の記憶や経験は難儀なものであり、その出来事を後悔としか捉えていないハインツには甚だ

迷惑極まりなかった。すでに無意識下で刻み込まれてしまったのだ。

猫とハチミツに関わると良いことはない、と。

なんとも阿呆らしいと感じるだろうが、これらの思い込みは単なる妄言で済まされはしない、彼らと深い結び付きがある。自然を敬い、同時に畏れをいだき続け、この弱肉強食の世界とともに在り続けてきた。

例えば、かの有名なココットの英雄は鋼よりも固い絆で結ばれた仲間と計五人でドラゴン討伐に向かったところ、仲間のうち一人が命を落としてしまった。命を落とした一人は後に英雄と呼ばれる彼の婚約者であった。その悲劇性から、いつしかハンターが徒党を組む際に四人までと、凶事を避ける意味合いでの習わしが生まれたのだ。

今でもハンター達は頑なに暗黙の約定を護り続け、現在に至る。

「見事に懐かれるとは羨ましい限りであるなっ」

「……かわいい」

「なんで」

猫ことミエールは、どこから取り出したのか小さなツボを片手に抱え、中から黄金に輝く甘ったるい匂い漂わせるハチのミツを、チロチロと細っこい舌で舐め続けていた。

その胸にはキラキラと光る銀色のバッジが輝き、他称ご主人とお揃いであるそのバッジは、紛れもなく書士隊の一員であることを示していた。

それを見て愉快そうに笑うウインブルグが向かい。ハインツと隣り合わせに座るリイタは、間近で無防備を晒すミエールをじつと見つめる。

「いやまだ遅くないっ、今すぐドンドルマに帰るんだ。これから行く溪流は、お前のいた森とも方向が違う。なによりじやま……じやなくて、センセイだつて心配する」

「本音が漏れているのだ。それにドンドルマからも大分離れてしまったであろう。旅は道連れとも言うし、ここは開き直つて楽しむのも一興であるぞ？」

「私もそう思う。今回の任務くらいなら、アイルーがいても支障はきたさない、でしょ？」

「な……僕に味方はいないのか」

ハインツの個人的な感情に与する者は、竜車内には一人も居なかった。

「オイラがいるニヤー」

一匹ならいた。

「……」



結果から伝えれば、今回の調査、空気の読めない猫ことミエールが参加したのが正解か否かは、誰にも答えを出すことが出来なかった。

なぜなら未来を見通す力など、この場で誰も持ち合わせては居ないのだろうし、予想外とはいつも前触れなくやってくるからだ。

今回の任務。

以前にも書士隊の業務は簡単に紹介されているであろうが、今回の彼らが請け負った任務。それはこの大陸を描く”地図の更新”であった。

もつとも大陸全土ではなく、情報の古くなつた区域——溪流周辺の環境調査アップデートという名目だ。

「そろそろ近くに集落が見えてくるはずだね。今日はそこで羽を休ませてもらいましょうか」

「うむ。さて、そろそろ笑顔の練習でもしておくかね。あ、リイタ君。吾輩の輝く歯にゴミとかついてないかね？ 口内の清潔は紳士の嗜みなのだ」

「鏡、見て下さい」

一度電車から降り、その目と足で歩き、直接記録することで地図の更新は成される。

ラッセルから預かった過去の地図と照らし合わせ、相違はないか確かめる。新たに変化があれば記録し、過去の地図に反映させる。

その地道とも言える作業であるが、ゼロからのスタートではないためか、順調と言っても良いくらいに進んでいた。

最後に溪流周辺の地図が更新されたのは十数年前。その更新者は、何を隠そうラッセルその人である。その頃はウインブルグの前任の護衛ハンターが付いていたことで、ウインブルグ自身も溪流に訪れるのは初めてだという。

「ハチミツで歯を磨くと良いニャー。えべるす、ぱびるすニャー」

「え、えべ……？　ともかく、それは興味深いのである。もう少しハチミツが安ければ愛用も考えてしまおうね」

「ハチミツは万能のクスリだって、おさ長も言ってたのニャー」

いまだ溪流そのものに足を踏み入れたわけではないが、その清らかな環境がそうさせるのだろうか、ハインツ一行には和やかな時が訪れていた。ミエールに関しては納得しきれないハインツであるが、リイタに宥められつつ目的地に近づく。

日は落ち始め、寒々とした風が変わりつつあるとき。

風は不意に様相を変え、異様な雰囲気に含まれる。

「着いた、けどこれは……っ!？」

「……なんで」

そして彼らを迎えたのは、地図にあつたはずの、小さな集落。

おそらく、地図から消えることになる村であつた。

望まない探索

「こ——いや。なんでもない。まずは状況を確認すべきだ」

「……」

「リイタさんも——」

それは別段、珍しい出来事ではなかった。

この世は良くも悪くも弱肉強食。眼前にあるがままの現実がすべてを物語っていた。その事実を受け止めようとするハインツは、かつての記録で数々の村が自然の猛威に為す術なく、地図から消えていったという報告が昨日の話のように脳裏をかすめる。

決して珍しくはないのだ。しかし若き書士隊の胸の内では、どうしようもなくやりきれない気持ちで一杯になっていた。

「……リイタさん？」

「む？　どうかしたのかな二人共」

不意にハインツは、いつも話しかければ淡々とした態度ではありつつも、最低限の返答だけはするリイタの様子がおかしいことに気付く。例えば返答が淡白であっても、無言を貫くことはしない娘なのだ。二人の様子を気にした感じたウインブルグも、すぐさま

駆け寄る。

「……なんでも、ないです」

間もなく普段どおりの表情、声色で返答する少女の姿。しかしやはり、ハインツは彼の知りうるリイタの様子と比べて違和感を感じざるを得なかった。

「すこし顔色が悪いんじゃないかい？」

「うむ。長旅で疲れたのであろう。少し休んではどうかね？」

「ハチミツ舐めるかニャー？」

それはハインツだけが持った印象ではなく、ウインブルグをはじめとして、出会って日の浅いミエールですら何か思うところがある様子だった。

心なしか顔色は青白く、息も荒い。そうハインツは思えた——というよりも、いつもの癖でそう観察していた。

「じゃあ少しだけ、休ませて……もらいます」

一息つくには異様過ぎる雰囲気^{こしじ}が辺りを漂う。その入口前で静かに屈むリイタ。今回の調査のために拵^{こしら}えた青の防護服^{アシラシリーズ}に背負われた大剣は、この時に限って言えば彼女に似つかわしくない。普段は軽々と扱う大剣の重みにさえ押しつぶされてしまいそうなほど、彼女の姿は弱々しかった。

「ミエール。とても不本意だけど、君にひとつ仕事をお願いするよ。リイタさんを見て

てくれるかい？」

「あいあいニャー！」

沈んだ雰囲気を他所に、ミエールは妙に興奮した様子でハインツの依頼を二つ返事で受ける。合流して日が浅いとは言え、この猫は壊滅したであろう村を前にしても、なにかが変わる様子はなかった。

豪胆と呼ぶには些か頼りない。あえて言葉を当てはめるとすれば、能天気。

ハインツは目を凝らす。

目線は人気がなくなつた寂れきつた集落の跡。時間が止まつてしまつた廃村の姿だ。

土で盛り固められた道の合間から顔を出すのは、何年もかけて膝上まで伸び切つた雑草。道の先に繋がる木と藁でできた簡素な家々は、帰ってくるはずの主をひたすら待ち続けて今という時に至る。

その場で新たな時を刻むのは来訪者であるハインツ一行と、水源豊かな環境を最大限利用するために作られたであろう、苔の生えた水車がゆつくりと回転し続けているだけ。その回転は秒針を刻む速さよりも遅く、異音を立てながらからかうじて回っている状態。長らく整備もされていない様子だ。

探索の基本は第一印象から始まる。人間観察と同じだ。最初の印象から徐々に掘り下げることで、その人物、あるいは物、現場の状況を追求していく。

しかして、彼の五感すべてを使つて探索したとしても、人の気配は感じられそうもないほどに村は荒れ果てていた。

溪流という豊かな水源溢れる環境の周りに立てられた、ドウヴの村。かつてはそう地図に記された痕跡は、すでに過去の事実である。

「どうやら荒事が起きたわけではなさそうである。村人も何処かへ避難したのであろう」

先んじて村に入っていたウインブルグが、雑草を切つ先が欠けた剣で切り開きながら戻ってくる。アグナシリーズ 鎧 越しで表情はわからないものの、芯ある低いトーンの声色が響く。

「放棄した、ということですか？ であればギルド辺りに情報が回ると思いますが……」

「よくよく今回の任務を思い出してみたまえ。十年近く地図の更新がされなかったのだ。ギルドの助けを必要とせずに生き続けた地。つまり、そういうことなのであろう」
「確かに能動的に動かなければ、この地域の情報は停滞したまま……双方からの行き来があれば地図や情報も自然と入りますからね。だけどこれは」

「しがらみと言うものであろう。最初は誇りだったのかもしれないがね」

アグナシリーズ 足 甲に纏わり付いた草をほろいながら、ウインブルグは酷く落ち着いた様子で言葉を漏らした。経験と言うものなのだろうか、まるで同じような光景を目にしたことがあ

るような物言いだ。

「あまり長居をすべきではない。リイタ君も本調子ではなさそうだし、一度竜車と合流しようではないか」

「そうですね。少し離れていますけど、他の村へ厄介になりましたでしょうか。きっとこの村についても何か知っているでしょうし」

「うむ」

行動方針を再確認したところで、ハインツとウインブルグは切り開いた道を辿ろうと踵を返す。その二人の視界に飛び込んだのは小さな影。

「ハチミツ舐め過ぎたらのだと渴いたニャー。水飲みたいのニャー」

ミエールだ。

「つて、リイタさんのこと頼んだはずだろ?!」

ミエールがスンスン鼻を鳴らしながら集落に足を運んでいた。

その小さな影の後ろにもう一つ、膝下まである革製のブーツアシラブリーツに、大胆にもさらけ出された肉付きの良い大腿が目に入る。すぐさま目線のやり場に困ったハインツが顔を上げると、彼の目の前には顔に血色がすこし戻り始めたリイタの姿が映る。

「私ならここに。少し休んだから、もう大丈夫」

「あ……いや、まだ休んでも良かったんだよ?」

こんな時までと、慣れない舌打ちをしたハインツは声の方向を探る。伸び切った雑草が視界を遮るが、先ほど耳に入ったミエールの一言を思い出す。

「何事であるか!？」

「ミエール君の、声……!」

「ハチミツ、のど、水……川か!　　つたく、何してるんだあの猫は」

草をかき分けて進んだ先には、見覚えのあるアイルー色。しかし、その様子は明らかにおかしい。

ハインツたちが見たのは泡を吹いて悶えるミエールの姿だった。

「ミエール君?!」

「つ何してるんだ!?!　　しかもこれ、中毒症状じゃないか!」

すぐさまミエール駆け寄り症状を診断してみせると、ハインツは胴に回したアイテムポーチの開き口を弄り、紫色の液体が入った小瓶を取り出した。

瓶の口を締めるコルク製の蓋をすばやく引っこ抜くと、ハインツは人差し指を立ててミエールの小さな口めがけて迷いなく突っ込む。ぐにやりと生暖かい感触とともに泡をかき分けると、その指は一瞬のうちにポツポツと蕁麻疹が広がる。

それでもお構いなしにと、ハインツは小瓶の中身を指に伝わせるように流し込ませた。

そして数秒後、嗚咽とともに泡と液体を吐き出したミエールは、大きくその息を吹き返す。

「にや……川だニヤああああ!!!」

「戻ってきたか。迂闊すぎるぞ……君って本当に野生だったのかい？」

やれやれと一息つくハインツは、人差し指についた液体を入念に拭き取りながら言葉を漏らした。

「解毒薬？ 市販のものとは違うみたいだけど？」

「ビューイ特製のさ。毒に閑して言えば、彼ほど造詣が深い人間は中々いないからね。効能も（初めて使ったけど）バツチリさ」

リイタの問いに対し、特製解毒薬の蓋を締め直しながら答えるハインツ。

「にや、にやああ……二度も命を助けられるとは、にやんたる感激の極み、一生ついていくニヤー」

すっかり涙目になったミエールが擦り寄ろうとハインツに近づくが、いち早く蕁麻疹として反応した彼の身体は一步退く。

「鳥肌が立つから冗談でもやめてくれ。それで、なにがあつた？」

「水、水飲んだら、川、見えたニヤー……」

涙を拭いながらたどたどしく漏らすミエール。対して険しい表情を見せたのはハイ

ンツ——の、隣に立つリイタだった。

マーブル・エフェクト

「……紫」

落とされた言葉はリィタのもの。彼女のハンターとしての直感、いち早く足元で弱々しく項垂れるミエールからその先、今もなお穏やかにせせらぐ浅い河川へ向かつていた。

「ううむ……まさに。紫と言えば高貴な色とされてはいるが——これは少々物々しいね」

一手遅れてウインブルグも視線を上げると、眼前の風景を見やる。最後に遅れて顔を上げるのはハインツ。

彼らの視線の先で流れ続ける村の水源と思わしき川の様相は、一目見ても分かるほどに溪流本来の澄んだ青と異なる有様。

「これをよく口にしようと思つたな、君は……」

「で、照れるのにやー……」

「褒めてないぞ。じつとしてろ。応急処置なんだから」

下手ながらもスケッチを嗜むハインツは、バケツに入ったきれいな水へ最初に浸した

絵の具のような、青と紫のまだら模様を呈する川の様子をじっと見つめていた。

マールエフエクト

そして、日は沈む。



集落から一時退避したハインツら溪流調査隊一日目の夜は、合流した竜車の荷台の中。言ってしまうば野宿だ。

理由はミエールの容態からくるもの。荒療治で解毒したは良いが、完全に毒が抜けていない点から安静をとる必要があった。そしてもう一つは、竜車と落ち合う頃に辺りが完全な闇に飲まれている現状であった。

日の沈んだ大自然を照らすのは、金に輝く月明かりと携帯していたランプの心もとない光のみ。

(水、採取してみたは良いものの、暗くてよく見えないな)

草むらのクツションと眠りふけるアプトノスに背中を預けながら、ハインツは天上に光る三日月に向けて小さなガラス瓶をかざすも、その中身を鮮明に映し出すことは敵わない。川の水が収められたガラス瓶は、ひらひらと小さく波を立てる水面がかろうじて

視認できる程度。採取した時点で日が落ち始めていたこともあり、紫の入り混じった中は背景に溶けこみ全体像を覗くことが出来ずにいた。

草食竜の寝息とともに小さく動く体躯に揺られながら、若き書士隊は物思いに耽るのだ。

(昨日今日の出来事じゃないだろうし、朝まで待つしかないかな……でも気になるなあ)
「……今回は、舐めたりしないの?」

抑揚の小さい声の主はリイタである。

足音を立てずに竜車の扉からひよっこり現れた彼女の顔色は、暗くてはつきりしないものの集落を訪れた時より幾分か良い。休息とは言え自然の真つ只中。万事のためアシラ装備を着込んで竜車内で待機していた彼女もまた、ハインツの手にするガラス瓶が気になる様子だ。

「それもちろん冗談だよね?! ……というより、君こそ寝ないのかい?」
「……ウインブルグさんのいびき、うるさくて」

考え事に集中していたせいも、改めてハインツは荷車の中から豪快に空気を震わす音に気付く。ついでもう一つミエールの分も。およそ近くには、ともに寝付けないうであろう大音量。睡眠時無呼吸症候群なのだと、以前ウインブルグが話していたのをハインツはふと思いつく。

「ああ、そりゃ災難だね。でも明日に向けて体調を整えてもらわないと、いざというとき僕が困るんだけど」

ハンター業は肉体を酷使する。休息でさえ仕事と言っても差し支えはないほどにだ。「もう十分休ませてもらったから。大丈夫。護衛もきっちりこなす。それよりも、だよ。村に人がいなかった原因は、やっぱり川の水？」

「どうだろう。十中八九そうだとしても、そこまで調べるかどうか。今回はあくまで地図の更新が目的なんだ。ギルドあたりに報告して処理してもらうのも一つの手だったりする」

切り出された話題に対して、ガラス瓶を覗き込みながら自虐的に笑ってみせるハインツだが、リイタはさも当然のように言葉を続ける。

「でも。ハインツさんなら調べる」

「……ん、正解。応援を頼むのも良いけど、原因くらいは探っておかないとね」

荒れ果てた集落に原因不明の水質汚染。言葉に並べただけで異様と言えるこの状況を放置できるほど、ハインツの神経も凶太いものではない。仮に応援を呼ぶとしても、ある程度の下調べは必要だ。なによりも謎の解明は書士隊としての本分。のこのこ帰ったりでもすれば、おそらく彼を待ち構えるのは暇を持て余すラッセルからの長くてうんざりするほど熱い説教だろう。それこそ休日返上ものだ。

「書士隊の人達って、変なところで意固地」

「意固地じゃなくて矜持と言って欲しいな」

「言葉を変えただけでしょ？ プライドって」

「そこが僕らにとつては重要なの」

「変なの……メンドクさい」

思想から異なるハンターと書士隊という人種。そんな彼らだからこそ、多角的な物の見方が生まれもするのか。考え込めば込むほど思考を一点に集中しやすくなるハインツにとつて、誰かとの対話は良い刺激になる。

「……まあ、わからないことだらけの現状。それでもヒューイの解毒薬が効いたことは収穫さ。新手の毒やウイルスじゃないってことが分かったからね。こればかりはミエールのお手柄か」

「それ、直接言っただげたら？」

「嫌だよ。アレはきつとすぐ調子に乗る手合だ」

「素直じゃないね」

「懲りごりなんだって。この前も話したよね、君が今着てるアオアシラの時の。——もう一度聞ukai？」

「長そうだから、遠慮しとく」

「つれないな」

夜闇の中で他愛のない会話。

その最中、切り出すべきか迷っていたのはハインツだ。視線をガラス瓶から離すと、ハインツは月明かりに照らされるリイタを見据えた。

「……あの時さ。なにか、嫌なことでも思い出したのかい？　なんとなくそんな顔をしてた、気がするんだ」

ハインツの観察結果だ。しかし感情という移ろいやすいものを観測するには、酷く主観的過ぎる指標にはかならない。もやもやとする感情は、しどろもどろで自信はこれっぽっちもないのだ。ただの興味本位に近いものがある。

「……」

その問いにリイタは束の間の沈黙を守る。彼女の表情は、ハインツからしてみれば相変わらず読むことが出来ない。

「話したくないなら答えなくてもいいよ」

「——少し。ほんの少しだけ、驚いた。それだけ」

「……そっか。ならいいけど」

しばしの沈黙が続く。

聞こえるのは荷車から種類の違う二つの豪快ないびき。

一方、ハインツ後方に座するアプトノスは、己が引く荷車からの騒音も気にせず大人しい寝息を立てている。

「……そろそろウインブルグさんを起こしてくるよ。見張りを替わってもらわないと」
沈黙に耐えきれなくなつたわけではないが、ハインツはアプトノスから背中を離すと、ゆつくりと轟音響く竜車へと足を運ぼうとする。

「私が替わるよ？ もう少しだけ、起きてるから」

「ほんとに君にも休んでほしいんだけど……じゃあ、お願いしようかな」

「うん。おやすみ」

夜闇は変わらず、三日月の美しさも変わらず。ハインツとリイタのやり取りはここままで。

「ああそうだ。ちなみにだけど。……さっきの、ほんとに冗談だよな？ 君って分かりづらいから」

竜車の扉をくぐる間際、最後に尋ねたハインツは振り返り際にリイタの表情を垣間見る。

「……ノーコメント」

その彼の目には、珍しく微笑む彼女の姿と相對して、ただ、なんとなく憂いを帯びているようにも見えた。



朝日は昇り、太陽が大地の目覚めを誘う。調査二日目の早朝からドウーヴの村を訪れたハインツ一行は早々^{はやばや}と川の様子を確かめに出ていた。

「……あれ？ 色が普通に戻ってる」

そんな彼らの目に映るのは、遠目から見て何の変哲もない溪流の流れ。昨夕に流れ続けていた紫のまだら模様は、すっかり消え失せていたのだ。どこにも痕跡が見当たらない。

「しかしである。やはりと言うべきか、川に生き物の気配は感じ取れんな」

川に近づくウインブルグは、目を凝らして澄んだ青を呈する一本の流れを目で追いかける。覗き込んだ先、流水の中に命の気配はなく、無機質な流れがひたすら音を立てて下り続けるのみ。

「でもこれが本来の姿だとすれば——匂いはしないな。飲め……そうか？ いやでも」

続いて現状を確認するように、ハインツも川の手前で手を小さく仰ぐ。続いて脇の

ポーチから空きのガラス瓶を取り出し水流にあてがうと、みるみると澄んで美しく透過した液体が溜まっていく。

「それ、飲むの？」

「飲まない」

「じゃあ、舐める？」

「舐めもしない——つて、流石にミエールのアレを見て口にできるほど豪胆じゃないよ?!」

（見てなかったら舐めたんだ……）

見比べるのは昨日のうちに採取した紫を保管するガラス瓶。

ハインツの隣からリイタも覗き込むように、彼の両手で持ち比べられた二つに意識を向けていた。

「昨日とは違うね」

「ああ。興味深いよ。でも安心はできない。見た目が違うからって、中身まで違うとは限らな——」

「飲めるのニヤーツ！ 美味しいのにヤーツツ!!」

「……おい」

、学習という言葉を知らないのだろうか。

彼らの目の前で口いっばいに水を頬張るアイルーの姿はイレギュラーすぎる光景でもあり、同時に調査の進捗を示す事実でもあった。

ある種、感嘆の念を送らざる得ないハインツだったが、その事実に対して彼は再度思考を深めにかかる。

彼の灰色の視線は、真つ直ぐ流れに抗うように上流へと向く。

辿って上ってシンキング

迂闊過ぎるミエールの行動を目の前に言葉を失うのはハインツ。

しかし、呆れてものが言えなくなったわけではなかった。叱咤叱責の感情と同時に、彼の脳内では記憶と情報の交錯が始まり、ゆっくりと思考の回転が始まっていたのだ。

「……水質が変わった？ ……時間で？」

ひとつずつ増えていく情報を振り返り、吟味しながら内容を整理。自然に独り言となって現れてくる。頭の隅で何かが引っかかるのだ。それは過去、書士隊が積み上げてきた記録の成果に他ならない。

ハインツの発疹が引いた人差し指は、彼のコメカミに軽く当てられると、小気味よく柔らかいタツチで揺さぶりをかける様に突ついていく。

「ウインブルグさん、予定を変えてもいいですか」

「あくまで我らは護衛である。思い当たるフシがあるのならば、それはハインツ君に任せようじゃないか」

多少のワガママは彼の^{ラッセル}上司を護衛していた時代から慣れていると言った様子で、柔ら

かい物腰で応対するのはウインブルグ。

「ありがとうございます。もつと情報が必要です。なので班を二つに分けようかと。近隣の村……古い地図ですけど、これを見る限り水源は一つ。そこから複数に枝分かれしてみたいのです。これからウインブルグさんには地図にある他の村を回って頂きます」「任された。もとより他の村の様子は気になっていたからね」

地図に示されたドウーヴ村の近郊、近すぎず遠すぎずと言った箇所にはいくつかの目印マーカーが当てられている。その村々マーカーを通り過ぎる線を繋ぐ先には、ライフラインたる水源の位置が示される。

——探しものは点と線を繋いで。

必ず村を通過する河川は、一本の青い線となって一つの地点に向かっていた。枝分かれした青が収束する先は地図の中心。雄大なる青の恵み・溪流へ。

「汚染の範囲を見極めます。移動には竜車を使って下さい」

「無事……とまで言わずとも、村を放棄するような事態になっていないと我輩は祈っているよ」

「僕もです」

純粹な願いである。

ギルドに情報が届かなかった。そして、村に荒らされた痕跡も見当たらなかった。つ

まりは、どこか別の場所に村の拠点を移している可能性も考えられるのだ。

「ハインツさん。私は?」

「リイタさんは僕とこの村で待機……するには不本意だろう。だからちよつとだけ上流の様子を探ってみようと思う。逐一、川の様子を確認しながらね。ミエール、お前もだ」

「あいあいにやー!」

昨日今日の出来事ではないであろうドウヴ村の異変。その真実へ辿るための道筋を作り上げ、その足で情報の断片を拾い上げていく。

一夜明けた溪流マップピングの指針は、当初の予定とは裏腹に着々と組み立てられつつあった。

「では早速、吾輩は出発するとしよう。一日で回り切るには骨が折れそうだ。落ち合うのはこの村で間違いないね?」

「はい。日が落ちる前には合流できれば。お気をつけて」

「ふはは、日暮れ前に事を済ますなど造作も無いのだよ! むしろ吾輩が気になるのは——」

揚々とした声量で返すウィンブルグであるが、しきりにハインツの耳元へ兜越しに近付くと

「リイタ君である。よく見ていてあげなさい。分別はあるし大丈夫だとは思いますが、あれ

でも年齢を考えれば少女なのだ」
と、ひっそり囁く。

その言葉の意味に対して、ハインツは横目でちらりと川の上流に向かって天を仰ぐ
リイタを覗くと、無言で首を縦に振った。

アシラヘルムド越しの後ろ姿。表情を読み取することは出来ないが、今の彼女が何かに対
して感情を揺さぶられ、そして思いを馳せているのかもしれない。

普段なら気付くことすらままならないハインツですら、そう感じてしまうほどに。

「では、しばしの別れだ。いざさらばー。また逢うときは薄明の祝福があらんことをー」
村入り口の前に鎮座するアプトノスと、背後に停まる木製の荷車。ウインブルグが軽
快な足取りで颯爽と乗り込むと、荷車内で詰めていた女御者が表に現れ、鞭打つように
手綱を引いた。合図ルーチンに気付いたアプトノスが重い腰を上げると、瞬く間に荷車を支える
滑車が地面を捉えて前進し始める。荷物が二名と一匹分軽くなったこともあつてか、景
気よく進む竜車の姿はものの数分としないうちに彼らの視界から外れていった。
「……相変わらず、暑苦しい。ハインツさん。私たちも行こう」

「そうだね」

視線は変わらず上流へ。落ちる流れに相対し続けるリイタは、ハインツに調査の催促
を要求する。

「でも、その前に一つ約束をしてくれない？」

「約束？」

「そう。当たり前だけど、今日は様子見だけ。これは絶対だ」

「……うん」

「あとミエールは調査終わるまでハチミツ禁止」

「そ、そんなにやー!？」

変わらぬ様子のリイタとハチミツ壺を没収され落ち込むミエールを率いて、ハインツ一行は一本の道筋を辿り始めた。



足取りは軽く、空気は澄んでいる。豊富な湿潤した空気が鼻孔から全身に取り入れられ、雲ひとつない空からは日差しが照りつけられる。

緩やかな坂を登りながら、青の恵みを辿りながら溪流という自然を一身に浴び続けるのはハインツ一行。進めば進むほど、青の気配はより強くなっていき、自然の雄大さがより一層間近に近づく。

「まだ青いな。やつぱり時間か？」

「飲めるのニャー！ 美味しいのニャー!!」

「毒味ご苦労さま。頼んでないのによくやるな……」

「にゃー？」

ミエールはちよこちよこハインツの前を歩いては脇で流れる川へ向かっていき、混じりつけない透き通った水をチロチロと舐めている。

これがどれだけ危険な行為であるかは、昨日の惨状を実体験したはずのミエールであれば想像に難くない筈だろう。

それでいてこの様子なのだ。もはやハインツから制止の言葉も無くなっていた。代わりに解毒瓶をポーチの入り口手前に配備させている。

「アイルーって、そんなに水は飲まない種族だろう？」

「にゃー？ なんだか無性に喉が渇くのニャー」

「……糖尿の病、かな？」

「にゃー？ によー・やみゃいー？ 甘いオシッコかニャー？」

ミエールに自覚はない。

近年、多様な狩猟技術や交易路の発展から大陸各地の希少で貴重な食材が巡り巡って、珍しく物ではなくなりつつある。そんな中、密かに問題になっているのが食生活。

生活習慣を原因とする病だ。物資が豊かになれば生活も豊かになるとは言ったものの、同時に多種多様な危険性を孕んでいる。

中でも食生活の乱れから生じる”糖尿の病”は深刻な問題となっている。

「君には馴染み深い言葉になるかもしれないね」

「にやー？ よくわからないけど照れるのにやー」

「褒めてないぞ」

しかもそれは人間だけに留まらない。人間社会にコミュニティを持つ猫——アイルーもまた、近年生活習慣病の増加の一途を辿っているのだ。肥満のオトモアイルーが”月間狩りに生きる”で話題にも上がっていた。”どんぐりメール”を着れなくなつたそうだ。

この病の一番恐ろしいところは本人に自覚があまりない——というよりも、自覚以前に自己管理できない者ほど好発する点だ。

「ようするにハチミツ制限しろって話さ。電車内に甘つたるい匂いが籠もると胸焼けしそうなんだ」

「そんニャー?!」

そんな何気なく毒を込めつつ言葉を放ったハイイツに、ミーエルは分かりやすく伸びた尾をダラリと下げた。

”アイルーnoシツポで分かる感情論”を熟読したハイイツにとつて、これが落ち込んだ時のものであると言うことは既に分かりきった事実であった。先人の知恵は偉大だと本の著者に敬意を払いつつ、この分かりやす過ぎる眼前で項垂れる猫に対して、多少の罪悪感が湧くものだろうか。

——特に湧かないかもしれない。密かにハイイツは、そんな判断を下していたりもする。

「だけどガーグアの一頭も見かけないなんて。楽しみだつたんだけどな」

「あの子たちはとても臆病だから」

「へえ。リイタさんは何度か見たことあるんだね」

「卵がすごく人気。だから何度か依頼を受けたことがある」

「ふーん、そういえばセンセイも言つてたっけ。ガーグアは一頭丸ごと生活必需品が揃い踏みだつて」

「卵くらいなら、ハイイツさんでも採れる……かも？」

”僕でも”つて、なにげにバカにされてるよね……”

そして何気ない談笑は調査につきものだ。緩めるときは緩め、締めるときは締める。

だから、だいたい変化が訪れるのはそんなときなのだ。

「……ハインツさん」

「来たみたいだね」

どのくらいだろうか。今まで様相を変えなかった川を上り続けたのは。

異変にいち早く気付くリイタは、やはりハンターなのだろう。目を凝らしたハインツがようやく気付けた現象を誰よりも素早く察知していた。

「にやー。また喉かわい——」

「飲むな」

「にやー?」

がっちりとミエールの細い首根っこをひつつかむと、ハインツの右手は赤い斑模様を彩りながら痒みを覚える。しかしそれでも、掴んだ手の力は緩めない。

なぜならば、遥か上流から抗うことなく下り続ける流れは早く、たちどころにすべてを塗り替えたからだ。

青から紫へ。

「二人とも止まるよ」

「ハインツさん。もう少し上に」

「だめだ。まずはこっちの観測が先だよ。最初に確認したじゃないか」

「でも」

「君の言いたいことはわかってる。上に行けば間違いなくなにかいる。わかっているんだ。でもそこに行くのは今じゃない。焦つちや駄目だ」

「……手早く」

「それは川の様子次第さ。よし、引き返しながら水質が変化し続ける時間を測るよ」
「あいにゃー」

そこから我慢比べの始まりだ。

時間で水質が変わる謎。まずはその時間経過を調べるのが第一の鍵とハインツは考えていた。

モンスター一匹も見当たらない溪流と呼ぶべきその場所は、一人の書士隊と一人のハンター、一匹のアイルールの三つの影が塊となって澱んだ川とにらめっこ。

勝敗が決することのないにらめっこは、おおよそ二時間程度続いたのだろう。

「——願わくば、発信源が流れの根本から伸びていないことを祈るだけだね」

淡々と調査は続き、一時中断する。

そしてその日の夕方。

薄明の瞬きの間、祝福が叶うことはなく。

護衛ハンター・ウインブルグが集落まで戻ることにはなかった。

視線の先に見据えるものは

陰りを見せた薄紅と群青の空、ミエールはただ見上げるのみ。自称ご主人に向けてだ。

「にやーご主人？」

「つま味いマズイぞマズいったらまずいぞ……っ！」

既に沈む一歩手前の夕日はハインツに向けて焦りを煽り、その結果が冷や汗という明確な形となり噴出させる。

ウインブルグが合流し得なかったという事実。この意味が示すもの、ひいては調査に多大なる支障をきたすことは考えずとも頭に浮かぶ。事態の深刻さを示すようにハインツの顔色もすっかり青ざめる。

「にやーご主じ——」

「ああどうしよう。今から後を追うか？　だめだ暗すぎるし距離もある。もしも入れ違ひになろうものなら笑えもしない。だったらどうすれば——」

押し寄せる波のような独り言の数々は、彼の不安の表れとも言える。焦りにより加速し続ける思考は、内部からの情報の整理に固執していき、やがて外部からの情報を意図

せず遮シャットアウト断カットしてしまう。

「に——」

「じゃあどうする？　ここで待つか？　いや物資はほとんど童車の中。今ある携帯食料でもつのか？　足りないなら現地調達？　水だつて？　こんな訳のわからない環境のものをも？　口にする？　できるのか？」

すでに冷静とはかけ離れた頭の中で、知りうる限りの現状を繋ぎ合わせようと必死でもがく。それは本能的な行動以外の何ものでもなく、彼の思考は今まさに直情的な判断に向けて直進する。サバイバルの絶対的禁忌に土足で踏み込んでいるようなものであった。

「こんな時どうする？　どう教わった？　何を、どう——どうすればいい!？」

その波を振り払うかの如く、凜とした一声が放たれる。

「ハインツさん——ツ!!」

「は——はいっ!?!　あ……どうか、したのかい。まだ具合が？」

声の主はリイタ。

彼女らしからぬ一声に目を点にさせながら、ハインツは口を半開きにしたまま数回ま

ばたきをする。そしてこれまで回転し続けていた彼の思考は一度小休止する。

「どうかしたもなにも。落ち着いて。今のアナタじゃ人のこと、言えない」

「いや僕は、その……そう。冷静じゃなかった」

リイタの言葉は事実だ。何かを言いかけるハインツの言葉。それが放たれる前に先の思考の波を振り返ると、彼は発せようとした言葉を失っていた。俯きながら開きかけた口が閉じられる。

「にやー、イライラには甘い物、ハチミツはいかがニヤ？」

「それは……いらぬいな」

頼れたはずの熟練ハンターを待つうちに、徐々に不穏な気配を感じ取り始めたハインツは、しびれを切らして手慰みの考えに耽っていた。しかし過ぎる時間とともに考えれば考えるほど不安が募り始め、ある一点を境にして焦りが一気に彼の心を支配したのだ。

焦りを引き立てたのは周囲を覆い始めた闇の気配。暗くなれば活動範囲も狭まり、心理的にも閉塞感を感じさせる。自分を見失いかけていた。

「考えるのは、別に良い。でもまずは目の前のことから、だよ」

「君の言うとおりだ。不甲斐なさを感じるよ。こんなことで取り乱すなんて」

「そうだね」

「はあ、フオローもなしか。情けない」

「ハインツさんだし仕方ない」

「酷い言われようだ……でもそうだね。目が醒めたよ」

実際問題、今の状況は好ましくない。

無理やり笑顔を取り繕うと、ハインツは俯きかけた顔を上げる。視線に乗せた感情は、もうひとりの頼りになる護衛ハンターに向けて。安心と感謝、そして羨望と少しの嫉妬。褪せた紅と深い青の入り交じる空間でも、彼女の碧眼は映える。

「これで貸し借りナシ、だね」

「……はは。そんなふうに思ってたのか」

「おいらはご主人が頑張って考えてるって知ってるニャー」

「はいはいありがとう。お前も少しは考えてくれたら——いや、無い物ねだりはやめよう。今あること、分かることで考えよう」

「うん」

「ニャー！」

すっかり帯びていた熱が引いたのを確認すると、ハインツはゆつくりと思考を再開した。

「ひとまず。ハインツさんもミエール君も、そして私もちよつとだけ疲れてる。幸いこ

こなら雨風は凌げる。休むのも仕事、そう言ったのはハインツさんだよ？」

「明日になつたらヒゲの旦那だんにやもいるかも知れないニヤー」

「そうだね。希望的観測だけど、そうなると良いと僕も思つてるよ」

リイタの提案を否定する理由は何処にもない。

村でも比較的大きい家を仮拠点に据えると、本日の宿とする。荒れ果てた村とは言え、外敵に襲われた形跡はなく、ひとまず羽を休ませる場所としては一定の評価を下せると言えよう。一人減つたことによる夜間の見張り人員の問題。無警戒という訳にはいかないが、この負担を軽減できるならば、元は他人の家で気が引けたとは言え活用しない手はない。

「うん。明日に備えて、ね」

そしてまた、一夜が過ぎる。



幾年もの年月の中で育まれてきた雄大な自然に身体は溶けていき、感覚は肉体を飛び

出した先の全体像を捉えて離さない。

現場主義が物を言うハンター家業。順調であろうとも予想外であろうとも、常に刻一刻と進み続ける秒針の中で適切な判断を仰ぎ続ける。迷うのは自由だ。しかし、考えるのを止めれば——たちまち大自然の掟、摂理に飲み込まれてしまうだろう。弱肉強食の絶対的な現実が立ちはだかるのだ。

だから彼女は常に考え続けていた。

ただし、彼女の傍らに立つ青年とは全く異なるスタンスで。

彼女はハンター。

そして、彼は書士隊。

そんな二人が相対するのは、荒れ果てた村の一角。猫はまだ呑気にイビキを立てている。

「先の上って、根本の解決を図るべきだと思う。もう大体の見当はついてる、そうでしょう？」

真つ直ぐな眼差しで、困惑の表情を浮かべるハインツを見据えるのはリイタ。見えないう圧力を背負いながら躍り寄るようにハインツとの距離を詰めていき、彼女の輝く碧眼は彼の灰色の瞳ただ一点に向けて見開かれている。

「そりゃあ……候補くらいはね。でも君一人で事に当たるのは早計すぎやしないかい。

ウインブルグさんを待つべきじゃ？」

対するハインツは、強い気組みで迫るリイタを諫めるべく言葉を選びながら頭を回す。今日も今日とて青の装いで身を固める彼女の、アオアシラ顔負けの威圧感彼の肝を冷やさせる。

ここで押し負ける訳にはいかない。情報の収集こそが安全を確立するための最短ルートだと考えているからだ。

「そんなことない。ハインツさんは少し慎重すぎる。ウインブルグさんは時間通りに戻らなかった。なら、ここからは現場の判断」

しかし、すでにリイタの背には大剣が軽々と背負われており、調査続行の意を全身で指し表している。この流れをハインツは知っている。

「たしかにそうかも知れないけど、僕には慎重すぎるくらいが丁度良い。焦る必要はないだろう？ これは昨日今日の出来事じゃない。そりや物資は心もとないけど、少し待つからいなら……」

「でも、この村の人達は故郷を失っている。それをずっと昔の話かもしれないから、見て見ぬふりをする。そう言うの？」

「そ、そこまでは言っていない。リイタさんをみすみす危険な場フィールドに黙って送り出せるほど、僕も落ちぶれちゃいない。書士隊として、もう少しだけ確実な情報がほしいところ

なんだ。こらえてくれ」

いつだって彼女が動くのは、自分のためではなかった。あのナーバナ村のときも、村人を案じての勇み足だったのだ。そして今回もおそらく同様。

「書士隊として根拠が必要？　なら、大丈夫。ハインツさんのことは信頼してる。私が証明する」

「……身に余る光栄だね。こつ恥ずかしくなるくらいだ」

「もう少し、自分に自信を持つたら？」

「それができれば苦労してないよ」

ナーバナ森丘と同じ、彼女の勢いに押し負けてしまった形だ。しかしそれも、彼女の実力を考えればありえない選択肢ではない。信頼されていると言われて悪い気もしなかった。

仕方なしにと、ハインツは今回の考えを簡潔にまとめることにした。

「待つてましたニャー！」

そしていつの間にかやらミエールは目を覚ましていた。制限させたはずの蜂蜜舐めに洒落込みながら。

「お前も……はあ、もういい。候補ね」

「うん。できたら簡潔に」

「う。じゃあ単刀直入に」

いつものこれは仮説だから——の下りを省くのは、彼のポリシーに反するものの、聞き手のリイタは砂漠のような長話は御免だという雰囲気溢れ出ていた。話し出せば内容など饒舌に飛び出る。そこをぐつとこらえて、ハインツは今出せる答えを口にし始める。

「おそらく上流にいるナニカは、自然現象ではなく生物によるものだ。強い毒性を持つね。で、毒の途切れる間は、そいつが移動していることの証明と考えても良い。そして、そいつらは水辺を好む。通常種のモンスターなら水辺なんて水分補給や少しの水浴び程度だ。だけど、僕らの見た川の変化は約二時間以上も続いた。総じて今の情報から当てはめるとすれば、そいつは外敵がいるから毒を浴びせかけるような種族ではなく、ただいるだけで毒を垂れ流しにする傍迷惑はためいわくなやつつてこと。そこまで考えると、候補はかなり絞れてくる。つまり——」



ハンターと書士隊。持ちつ持たれずの関係は必ずしも平等ではない。

数刻前。

ついに彼女は飛び出していった。

後方で身を隠す青年を一瞥して。彼女の中にある答えを以って、縦貫する青の方向に抗いながらひたすらに。

聞こえるはずのない怨嗟の聲が少女の中で残響していた。

その叫びを胸に、ただひたすらに前を見据えるリイタ。

身体は軽くもなく重くもない。拍動する心拍は体内から直接耳へ叩きつけられるように響く。

彼女はバスターブレイドとは異なり、特徴的な刀身の根本が大きく横に広がった愛剣、守りに重点を置いた鉄大剣・センチネルの柄をそつと撫でた。

紫水獣・ロアルドロスを見据えながら。

青と紫の衝突——前——

溪流という地形の特性上、水源の根幹から複数に分岐して各所に青の恩恵が与えられる。

彼らの見据える先で悠々と水を浴びる紫——ロアルド罗斯は、ドウーヴの村から溪流の頂上に至るまでおよそ中腹に存在していた。

「間違いない。海竜目・海竜亜目・綿毛竜科目・ロアル科・ロアルドロスだ」

「魔法の呪文かニャー?」

「書士隊必須の暗記科目なの。徹夜で覚え——うえ思い出したくない……」

「ニャー?」

対して先行するリイタの遙か後方にハインツとミエールは身を隠す。

一人と一匹が双眼鏡越しに覗くロアルド罗斯は長く伸びた肢体を大きくしならせると、跳ねるように震えて付着していた水を周囲に飛び散らかす姿が目に入る。行為だけ見れば一般的な動物のソレと変わらないが、ことはそう単純ではない。

飛び散る飛沫が紫色を呈しているのだ。

「うげ、あれが原因か。ここからだど丁度、ウインブルグさんが向かった場所も含まれて

いるな」

肌身離さず持ち歩いてきたスケッチブックを下敷きにして、ハインツは古びた地図に広がる青のラインを追視した。辿る先には彼らの出発したドゥーヴの村は当然のこと、数箇所に村が点在している。地図の情報が間違っていないければ、だが。

この十数年で大規模な地殻変動でもなければ、かの紫水竜を起点として発する紫の毒は、一方通行の流れに抗うことなく下流まで運ばれるだろう。行き着く先の影響を考えると、ハインツの頭にはあの廃村の姿がよぎってしまう。

「にゃー。何かあったのかニャー」

「そう考えるのが道理だろう。無事だとは思うけど心配だね」

未だ連絡の取れないウインブルグ。おそらく何かのトラブルに巻き込まれたことには間違いないだろう。しかし、それよりもハインツの心配は目の前にある。

「大丈夫ニャー。ご主人よりよっほど腕が立つのニャー」

「正解だけど余計なお世話だ。そんなことよりも今は……」

「アネゴの応援だニャー！」

「残念。不正解」

「ニャー？」

「今度こそ……余計なちよっかいを出さないように見張るんだよ」

「何をニヤー？」

「君を」

ハインツを見上げるミエールの瞳は数回パチクリさせると、再び前へ向かって突き進むリイタを遠くから目を凝らして覗き込む。

「アネゴ、勝てるかニヤー」

「聞かなかつたフリするな」

一方で先行するリイタは、確実に獲物との距離を詰めていた。

彼女の碧眼は見開かれたまま対象から目を離すことがない。そんなロアルドロス……もとい、ロアルドロス亜種に関しての情報を彼女は思い起こしていた。この場に立つしばらく前にハインツから得た情報を。

（狙うのは……たてがみ鬣かな）

ロアルドロスの特徴として、縦長の肢体を包み込むように顎周りから背中にかけてスポンジ状の鬣たてがみが生え広がっている。これは水を保持するために変質したとされる鱗の一種であり、毛髪のような繊維が死んだ細胞で形成されている。この鬣こそが水分を蓄

える役割をしており、ロアルドrossの生理機能を調整していると言われているのだ。

「……行こう」

一言呟くと、躊躇うことなくリイタは走り出した。その背に負う巨大な質量に振り回されることなく、ただ一直線に湿り気のある大地を蹴り進む。足場の悪さは溪流独特の地形。しかし彼女の革製のブーツもまた、溪流を好んで生息地とするアオアシラ由来のもの。職人仕事で靴底に挟まれたクツシヨンは、踏み込む力が分散しないよう不安定な足場に合わせて適宜形を変え、一歩また一歩と加速を促す。

重^{ヘビィボウガン}弩から放たれた弾丸のごとく、彼女の身体はまっすぐに標的との距離を縮めていく。

——グルオ!?

己の周囲を取り巻く風が急速に形を変える。不審に感じたであろうロアルドrossは、その野生から警戒心を露わにする、が。

「——シッ!!!」

弾着。

接敵の第一撃はリイタの重撃から始まっていた。

既に振り下ろされていた巨大な刀身センチネルはロアルドロスの頬を掠めており、象徴とも言えるタテガミの一部を抉り取る。

!!??

見事に欠けたタテガミを凝視する間もなく、ロアルドロスの瞳は鋭く血走らせる。瞬く間に頭部に存在する五本の角クレストを展開させると、不均衡になったタテガミの体積が急激に膨れ上がった。

(距離を……)

追撃の中止を予感させた行動は、彼女をいち早く標的の正面に立たないよう位置取らせる。彼女の視線は血走った瞳と巨軀から外れることはない。たとえば、ロアルドロスの欠けた右タテガミから滴る、おびただしい量の紫を目にしても、だ。

おそらく後方で見守っているハインツは、「うげ」とでも声を漏らしているのだろうか。

クレスト

角を展開したロアルドロスの全長は、先ほどよりもより大きく存在感を露わにする。野生動物で言う、己の身体を大きく見せて主張する。文字通りの威嚇姿勢だ。

続いて縦長の肢体を大きくうねらせると、紫水獣は眼前の少女に向かって突き進む。

(初速から早い……けど、避けられる)

冷静に間合いを見極めるリイタも、距離を測りながら正面から半身外した位置へと位置取り続ける。巨大な質量は彼女よりも間合い三つほどの余裕を持って通り過ぎていく。すれ違いざまに跳ねる紫の雫は守護大剣センチネルの腹で受け止め、彼女までには至ることはない。

(毒で仕留めるタイプ、戦いづらい……。でも、問題ない)

センチネルから顔を覗かせたリイタの思考は回転し続ける。盤上の一手を決め、結果は行動で表す。付着した紫の毒を拭うことなく、柄を握る力はより一層強まっていた。

(……ハインツさんの話だと、この手のモンスターは大体動けなくなつたところを仕留める傾向、だったかな。なら——)

相対再び。

位置取りは間違えず、やり直しリスタートの利かない真つ向勝負が少女を迎え入れる。

(動けなく、する)

決断した彼女の右腕は素早く腰アシラフールド帯に巻かれたアイテムポーチに向かつて真つ直ぐ伸びると、感覚のみで丁度手頃な大きさの球体を選び取る。

そして間髪入れずに大きく振りかぶると、球体を力任せにロアルドロスの眼前に向けて投げ付けようとみせた。

「ツ！ だめだリイタき——」

ハインツが発した後方からの声が届くはずもなく。

炸裂。閃光が広がる。

「…………あれ？」

炸裂した光が閃光玉だということは、遠くから見守り一人と一匹はすぐに理解できた。しかし

「外したニャー?!?!」

ミエールの漏らした言葉通り、閃光玉と思しき球体は明後日の方向に消えていった。球体内で命の灯火を散らした光蟲の何たる不憫なことであろうか、広がる閃光は真昼の太陽に飲み込まれる。

当然、ロアルドロスの動きが止まることはなかった。激しい光に目を焼かれた様子もなく、再びリイタめがけて巨体をうねらせたのだ。

「変なところに飛んでったニヤー……」

「ああ。リイタさんの投擲成功率は13パーセントなんだ」

「それ、ハンターとして致命的じゃないかニヤー？」

そんな後方でのやり取りがリイタに聴こえることはやはりない。うねる巨体に対して身を翻すと、紫の巨軀に秘める猛毒再び大剣の腹で受け止める。続いて背を向けたロアルドロスを追走する。構えは既に変えられており、守りの方から攻めの型へと行動は移され、巨大な質量を振りかぶりながら紫に今迫らんとする。

「——シッ!!!」

剛剣なる一閃が縦に空間を薙ぎ払う。

深く背中を抉り裂いた一撃に堪えるものがあつたのか、ロアルドロスの動きも鈍り始めていた。

遠くで見守る一人と一匹も双眼鏡を持つ手にも汗が握られる。

(もう、一撃……ッ!)

振り下ろされたセンチネルは再び振り上げられ、その軌道上にある巨軀が質量を受け止めることなく、紫と赤の入り交じる液体が溪流の大地を汚染する。

青と紫の衝突―後―

ロアルドロスの象徴とも言えたタテガミ。身体を一回り大きく見せていたソレは、今ではすっかり縮み萎えている。強大な存在として印象付けていたタテガミの喪失は、遠くで見守るハインツにもはつきりと予感させていた。

このまま押せば討伐も時間の問題だと。

青アシラシリースの装いを纏ったハンターの猛追に怯んだのか、ロアルドロスは文字通り尻尾を巻いて逃走を測ろうとしていた。

「よし、このまま行けば……」

勝負も見えてくる。毒をその身に宿すロアルドロス亜種とは言え、事前に相手の詳細さえわかかっていれば対策も難しくない。ハインツが伝えていた情報が、どこまでリイタの役に立っているかは分からない。しかし、目の前の戦況が有利なのは火を見るよりも明らかだ。

彼らの視界には足を引きずるロアルドロスを追う少女の姿。背負う大剣の重みを感じさせないほどに軽々と突き進むリイタは、息つく暇もなく次の戦場に身体を運ぼうと動いていた。

「アネゴ、スイッチ入ってるのニヤー」

「ああ。ただ、このまま移動すると視界から外れるな。僕らも追うぞ」

「あいにやー」

屈めていた身体を持ち上げると、茂みの中から一人と一匹は飛び出していく。

一定の距離を置きながら事態を静観する。いつぞやのアオアシラの出来事から、ハインツの警戒心はより一層研ぎ澄まされたものになっていた。隣にいるミエールが、余計にそうさせているのかもしれない。

そんな彼らの追うロアルドロスの行動は至極単純なもの。傷つき、失われたタテガミを形成するのは大多数が豊富に吸収していた水分だ。今や見る影もなくなってしまう。タテガミの水分を補給すべく、水を求めて川へ向かおうとしていた。

（タテガミの水分に含まれる主成分は——狂走エキス、だったかな。なら、茹でた野菜みたいな^{しな}萋びた今がチャンス）

追走するリイタは、逃げる足に対して剣を振るうしか有効打を与え手段がない。投擲は苦手なのだ。しかしスタミナには自信がある。日々の鍛錬は自身を裏切りはしないからだ。

対するロアルドロスの巨体。あの巨大な体躯を動かすには膨大なエネルギーを要する。圧倒的な肉体的アドバンテージを持つ代わりに、ヒトほど持久性に富んではないの

である。

だからリイタは焦ることなく、あの巨体が疲れて足を止めるまで追い続ければいい。そう考えていた。

その考えに行き着いたのはハインツも同じだった。

「でも、よく怖がらずに後ろを追えるのニャー。行つた先に他のやつらがいるかも知れないのニャー」

「ああ、普通ならそう考えるだろう——けど！ ロアルドロス亜種の特性として、その身に宿す毒性はもちろんのこと、もう一つ大きな特徴があるんだ」

「特徴ニャー？」

走りながら器用に首を傾げるミエールに、ハインツは前を向いたまま言葉を返す。

「そうさ。通常のロアルドロスは周囲にルドロスを侍らせた群れでの行動が多いんだ。けど亜種の場合、毒を持つせいかな常に一体で行動している。ルドロス自体も毒に対する抗体は持っていないからね。つまり」

「ぼっちなのニャー！」

「……まあ、意味は間違つてないな」

使う言葉は粗雑であれど、ミエールの理解は正しい。

満身創痍のロアルドロス亜種が先を行く。それをハインツは、やや不憫そうな感情も

含んだ視線で追い続ける。

「それなら楽勝なのニヤァー！」

ハインツの歩幅に合わせるように、ミエールは燥はしやぎながら四本脚を総動員させる。並走する一人と一匹は、溪流の緩い地盤に足を取られながらも進んでいく。

「……ああ。これで、川の汚染も止まるだろう。自然の浄化作用で、時間はかかるけど再び生き物たちの楽園は戻ってくる」

「ニヤァー！……あんまり嬉しそうじゃないニヤァー？」

今こそが討伐の好機。

ただその場で生きていただけのロアルドロスには申し訳ないが、存在するだけで災害となりかねない紫水獣は、彼ら人間にとってあまりにも大きすぎる脅威となる。

——あまり同情はしない方がいい。判断を鈍らせかねんよ？

砂漠でウインブルグに言われた言葉を思い出しながら、ハインツは二律背反の気持ちに分別を付けるべく、走る足により一層の力を込めた。



ハインツらが登る渓流とはまた異なる場で、ひとり赤の装いで身を固めたウインブルグがヘルムの下に険しい表情を隠していた。

「ジャンニス」の容態はどうかね」

「勝手に名前をつけるな。あらかた抜けてはきているよ」

ウインブルグの隣には竜車の女御者が、同様に硬い表情で眼前に沈み込む一頭のアプトノスの頭を撫でている。

「しかし参ったのである。まさか目を離した隙にジャンニスが川の水を飲んでしまおうとは」

「だから名前をつけるなど……ああ、アタシのミスだよ。すっかり油断していた」

女御者は悔しげな顔でアプトノスの頭を撫で続ける。そんな彼女の震える手から後悔と申し訳なさといった感情が漏れているのは、ウインブルグにもひと目で分かった。

どうやら汚染された水を口に含んでしまったアプトノスは、その場でうずくまりながら弱々しく大地に鎮座していた。

「うむ。この村もどうやら避難済みのようだ。ひとまずもう一度合流したいところではあるが……」

「まだ無理強いはさせたくない。行くなら一人で行きな」

「そんな御無体な。腰痛持ちに長距離の徒歩での移動は毒なのだよ。歩いてるうちに痺れと痛みがねえ」

腰をポンポンと叩きながら、大仰な仕草で女御者に向き直るウインブルグ。

「あんだ、そんなに酷いなら引退も考えればいいじゃないか？」

「ふっはっは、まだまだ吾輩は現役である。それに今はリイタ君もいるから、だいぶ楽させてもらっているのだよ」

陽気に笑い飛ばすウインブルグを見て、女御者も呆れた様子でもう一度アプトノスの顎を撫でる。

「……ふう。壊滅した村、であるか。彼女には嫌な思い出だろうに……むう？」

女御者に聴こえない程の声で小さく呟くと、ふとウインブルグは川辺で光る何かに気付く。特段気になったわけではないが、なぜだか妙な予感を感じ足を運んでいく。

「おい、アンタまで腹を下しに行くつもりかい？」

「冗談きついのである。いや、しかしてこれは……」

女御者のきつめのジョークを受け流すと、ウインブルグの胸にざわついた感覚が生じ始める。

ウインブルグが特段目を引いたのは、川底に光る物体。川の様子は既に落ち着いた青を取り戻しており、警戒しつつも水中へ手を伸ばし、拾い上げる。

そして

「黄色い、鱗……」



「り、リイタさん!？」

「ぐうう……っ!」

歪む表情はリイタのもの。

宙を舞う身体。身にまとうは青の装いは、重力に為す術なく引き寄せられる。かろうじて湿り気のある柔らかい大地が彼女を受け止めるが、受けた衝撃まで逃がすわけではない。

衝撃に揺れる視界の中で、リイタは今までの自分の考えを恥じていた。この程度の相手なら、問題なく狩れると思っていた。

ロアルドロス、一頭だったなら。

ロアルドロスは一頭じゃない。

もう一つ、黄色い巨体が怒りに身をうねらせ、少女を飲み込まんとは迫る。

激闘の溪流

転機が訪れたのは一瞬の出来事であった。

動き疲れて足を止めたロアルドロス亜種に向かって、追いついたリイタの一太刀が浴びせられようとしていた時。

ハインツとミエールも勝利を確信した時。

その中でもミエールが水辺で揺れる違和感を感じ取ったときには、黄色の巨体が飛沫を上げなら、巨大な質量を振りかぶって無防備になっていた少女に向かい飛び出していたのだ。

「リイタさんっ!!!」

ハインツが叫んだときには既に巨体はリイタの間近まで迫っており、最後に気付いた彼女は、眼前の光景が凍りつき硬直した……ように感じていた。

「あ……っ!!?」

再び彼女の中で動き出した秒針は目まぐるしく回転し、衝撃とともに意識ごと刈り取られそうになる。次の瞬間、リイタは手放してしまったセンチネルが先に地面へ落下したことに気付くと、かろうじて湿り気ある大地へ受け身の体勢をとっていた。

ゴスン、と鈍い落下音が地面を通して己の身体に響くと、揺れ続ける視界の中で黄色の猛追が迫っていることを認識し、身体を起ここそうとする。

(重……っ)

が、身体は己の指示通りに動いてくれない。

泡状の水弾を放ちながら、もう一つの巨体。水獣ロアルドロスが獲物を仕留めにかかっていた。

(あ。だめ、かも)

「ミエール!! 本^{……}当に出来るんだなッ!？」

咄嗟の行動。懐に手を伸ばしたハインツは忍ばせていた球体を放る。すると飛び跳ねたミエールがその小さな体躯をひねりながら、渾身の力を尻尾に込めて撃ち出した。

「あいんやー飛んでつくニヤア!!」

——キイイイイインツツ!!

鞭のようにしなつた尻尾が撃ち出したソレは、放物線も描かずに真っ直ぐに、今まさにリイタに鋭い牙を突き立てようとしていたロアルドロスの側頭部にヒットしたかと思ふと、瞬く間に擦り切れそうになるほど甲高い破裂音を響かせる。

ハイイツの手から離れて放たれた音爆弾による強烈な高周波は、勢いづいていたロードロスの突進ををひるませるに至った。

僅かな隙だ。しかしリイタは、その間に自分の置かれた状況を再度確認する。

（ハ、インツさんが？ もう一頭いた、なんて。でも片方は手負い。問題は目の前にいる方。身体は……動く。ダメージは、抜けきつてないけど問題ない。剣は……）

少し遠いだろうか。ロードロスを挟んだ向かいに鉄大剣センチネルは落ちている。

（拾わないと。ここで私が倒れたら、ハイイツさん達まで……）

リイタは二体一となった現状に臆することなく、立ち向かうことを選択した。

今度こそ素早く立ち上がると、怯みながらも進み続けるロードロスの脇を抜けて、愛剣センチネルまで真っ先に駆け抜けていく。

「ミエールッもう一発だ!!」

「あらほらさつきニヤアッ!!」

弾丸となった第二射が再びロードロスの側頭部を直撃する。絶妙なコントロールドである。

今度は先ほどよりもたじろぐ隙は短いが、リイタはセンチネルを片手で拾い上げ、構え直す。感覚は全方位に。水辺で傷を癒やすべく再度歩み始めた亜種の背中と、それを遮るかのよう_にに現れた通常種。

にわかに信じがたい話であるが、連携したかのような動きに彼女の中でも小さな驚きが生まれる。

「でも……っ！ やることは、変わらない……！」

構え直した刃は通常種に向けられる。仕切り直した。

「僕らも行くぞ！」

後方から音爆弾を放っていたハイנטツも、焦りの表情でミエールに発破をかける。

「書士隊は戦わないんじゃないニャー？」

それに対して疑問符を浮かべたミエールが尋ね返す。

「ああもちろんっ！ ただの援護！ でリイタさんを連れ戻すためだ！」

未だ置かれるハイנטツとリイタの距離。今日という日まで、ハイנטツは己の小心者ぶりに嫌気がしていた。今すぐにも向かいたい。奥で戦い続ける少女の姿に、何も出来ない己が無力で仕方がなかった。

「悔しいけど僕の肩じゃ投げても届かない！ だから頼むぞっ」

「ハチミツ舐め放題」

「現金な奴めっ、ああくそ分かった。認めるから外してくれるなよ！」

「ご主人愛してるニャー!!!」

そして第三射は放たれる。

三つ目の音爆弾もズれることなく、動き続けるロアルドロスの側頭部を撃ち抜く。その神業とも言える芸当に、リイタも久方ぶりに舌を巻く他なかつた。

こんな芸当をハイイツができたかと、甚だ疑問はなはに思うところではあるが、今の彼女にその結論を出すまでの余裕はない。素直に現実を受け止めるだけだ。

ハイイツの思惑とは裏腹に、リイタの闘志も再び沸々と湧き上がる。

三つ目の隙は攻撃の合図だ。振りかざした大剣を動き回る頭部を捉えようとタイミングを見計らい、振り下ろされる。さすがに的アジャスト中とまでは行かないが、亜種同様にタテガミの左半分を掠め抉る。

続く第四射。アジャスト。

今度は追撃の合図だ。敵に対して背を向けるのは御法度のハンティング。しかし、今の瞬間だけは構わず使うことが出来る。先ほどのミエールと同様に、全身を軸にした回転撃。遠心力すべてを載せた、大剣の中でも強力な一撃。すべてを薙ぎ倒す質量の暴力——回転斬り。

切り裂いた感触とともに、代償とも言える反作用が彼女の全身にも響き渡るが構わない。強大な体躯を持つモンスターに対して、それに比例するかのようにより出された大剣の特アイデンティティ性。

「はあああああああつっつ!!」

地面に落下した時から続く鈍痛に耐えながら、リイタの闘志が雄叫びと形を変えて溪流の大地に響かせる。

右の側腹部に深く抉りこまれたセンチネルの刃は、ロアルドロスの四足を一瞬だけ地面から離れたと錯覚できるほど強烈なもの。

——グオオオツエツエツエ!!

ロアルドロスから漏れた苦痛の唸り声とともに、溢れた水弾のなり損ないがリイタの周囲を濡らす。

そして、第五射。

「頼むから……止まるか逃げ帰ってくれよ……!」

「栄光のハチミツシュートニヤア!!」

祈るようなハイソングの言葉を乗せながら破裂する金切り音。しかし音爆弾としての効力は、少し前からロアルドロスに対しては失われていた。

怒りに燃えるロアルドロスの瞳は、殺気立って彼女を見据える。怯むことは、もうない。

だから音爆弾の作用する方向は、今や一つだけ。

五つ目はトドメの合図。

(頭……潰す……っ!!)

怒りの視線ごと断ち切った鉄大剣の一撃は、文字通り水獣を溪流の地へと沈めるものだった。

大剣の空気を薙ぐ摩擦音は、ほんの少しだけ遅れて響く。先に響いたのは、肉と骨を砕く、命を断つ一撃。

力業。その一言に尽きると言っても良い。

音は止まない。リイタの剣はもう一度、振り上げられていた。

無我夢中という言葉が正しく、すっかりハインツが己の距離感を忘れてリイタの横顔を捉えた頃には、原型が分からなくなるほど滅多斬りにされた、水獣の変わり果てた姿。アシラヘルム^{アップ}越しの横顔でリイタの表情は見えないが、彼女が振り返った時、ハインツとその隣にいたミエールは得体の知れない感情に襲われる。背筋からは意図せず凍るように嫌な汗が噴出する。

「……ああ、ハインツ………さん」

「リイタ……」

返り血を大量に浴びた青と赤の装い。彼女の見えない表情の上からは、張り付いたように冷たい笑みが浮かび上がっていた。

「何してるんだ!!!」

「……?」

ハインツの叫び声。得体の知れない感情はリイタに対してで間違いはなかった。だがしかし、滝のように噴出する汗の出処は、更に彼女の後方にあつたのだ。

「早く、そこから離れるんだ!!!」

そしてその後ろには、怒りに燃える紫水獣の猛る姿。激闘の第三幕が上がる。

覚悟を決めて、混じり合う大地へ

奮起する巨体は、再び角を展開して脅威の度合いを誇示^{アピール}してみせる。手負いの体軀とは言え、ハインツからしてみれば接触するだけでひとたまりもない体格差だ。比べるもなくニンゲンとモンスター。その大きさの違いは、ただそれだけで理不尽なほどに有利不利に差を生んでしまう。

ハインツの意識はロアルドロスから離さずに、彼の視線の一步手前で遅れて背後を確認したりイタにピントが移る。

(反応が、いつもより鈍い……っ)

「ゴ主人っ」

どれだけリイタにハンターとしての力量があるうが、不意の出来事に対応できる者はそう多くはいない。

迫る危機に野生の勘が反応したのか、ミエールも不安げにハインツを見上げる。そんな後方に付くミエールを差し置いて、彼の足は再び湿り気のある大地を蹴り、彼の全身を加速させる。振り向いてから回避に移るには、今の彼女はあまりにも無防備過ぎた。一度通常種に跳ね飛ばされてから、おそらく彼女の脳内では痛みを紛らわすため

アドレナリン
興奮物質が大量に分泌されている。脳内麻薬は身体機能の底上げに関与されると言われているが、万能とも言えない。

ニンゲンである以上、生物である以上、何かを得るには何かを代償に失う。消耗品だからだ。

一度摩耗してしまえば、残るは疲労感の残る身体だけ。急激に心と身体のバランスが崩れてしまう。頭では分かっているのに、身体が言うことを聞かない。

——今のリイタと同じだ。

巨体の向かう先は間違いなく——リイタ目がけてだった。

「リ——くっそおおお!!」

ぬかるんだ大地はレザーブーツとの相性が良くない。それでも踏みしめる力により一層の力が込められたのは、すでにハインツ自身が答えを導き出していたからだ。残りが自分次第な事を知っていたからだ。

リイタの姿を間近で見て、ハインツはひと目で彼女の状態を把握していた。

（脳内麻薬ドバドバだった状態が切れかけている。集中力を著しく欠いているんだ……！）

賽は投げられ、腹も括った。あとは結果。不安定な足場ながら、ハインツは全力で溪流の地を駆け抜けた。

一歩退いた俯瞰で見るよりも、より躍動的に。客観は主観へと変わり、向かってくる紫の巨体に対してハイイツもまた向かっていく。体感での迫力は全く別物と言っても良い。

「ごめんツ！ 剣は、離せっ！」

「え——」

ロアルドロス亜種に意識を向けていたリイタは、背後から迫る別のモノに対して反応をとれない。彼女の対モンスターセンサーに引つかからなかったからだ。その直後、背中から彼女を浮遊感が包み込む——正確に言えば、抱きかかえられる。同時に張り付いたように握っていたはずの大剣は、小さな影に器用に剥がされていた。

「ちよ、ちよつと——？」

「ニャー！ 助太刀ニャー！」

調子の良い声が下方から響いたその直後。リイタの眼前には、がっしりと彼女を抱きかかえたハイイツの横顔が映り込む。余裕なんてものは微塵も感じさせない、鬼気迫る表情だ。

「あ……」

刹那。ハイイツの横顔奥から肥大化した質量が猛スピードで通り過ぎていく。加速した巨体からは紫の液体が飛び跳ね、なおも彼は咄嗟に飛沫からリイタをかばうように

覆った。

「くっくっ!!……ま、間近で見るとなんて迫力なんだよっ。他にもう一頭、ロアルドロスがいたなんて。……情報データベースに囚われすぎたかっ」

声にならない悲鳴が漏れたまま、ハインツは頬に付着していた液体を拭うと、すぐさまリイタを再び溪流の大地へと降ろす。

「何で、こんな前まで来てるの……」

リイタの張り付いたような冷たい笑みは、いつの間にか消えていていた。本当に、何も考えずに出た彼女の一声がソレだった。

対するハインツは、今の自分の行動でさえ信じられないと言った様子で、ワナワナとリイタを見返し、

「は、はははははっ!!! 誰が来たくて来るもんかっ。間違いなく今ので寿命が縮まったっ!」

と、ありのままに自身の心境を吐露する。決して格好をつけるために彼女の元へ馳せ参じたのではない。それが彼の考えた最善だったのだ。

多くを語る時間はない。標的を見失った紫の巨体の進行は緩やかとなり、獲物を補足し直すため首をキョロキョロと動かし見回す。

だから、ハインツがこの場で提案すべき事項は一つだけ。

「お………囚役」

声に出したくなかったのが伝わるのは、一瞬でも彼に躊躇いがあったからだ。それでも恐怖を振り切つて、ハインツは言葉にするしかなかった。

「……だめ。危険、過ぎる」

リイタも至極まつとうな意見だ。それでもハインツは言葉を続ける。

「だめとかじゃない。必要なんだ。僕と君らは一蓮托生。君一人で事に当たる段階は、もう一頭のロアルドロスが現れた時点で選択肢から消えていたんだよ」

リイタとハインツの視線は交わらない。すでに彼は紫の巨体と相対する覚悟を胸に、この場まで走り駆けつけていた。視線はロアルドロス亜種に。

「でも」

「本当はさ、嫌がる君を引きずつてでも逃げようと思つてた。でも君、助けようと思つて着いた頃には一頭仕留めちゃうんだもん。ほんと、トンデモな腕前だよ」

「ハチミツ泥棒をやつつけた時から、只者じゃないと思つてたのニャー！」

いつの間にかミエールもハインツの隣にちよこんと立っている。よく見れば、二人が普段から肌身離さず持ち歩いてるスケッチブックも、ハチミツ用の小瓶も見当たらない。

「ならもう、逃げる選択肢はなしだ。というよりも、見てみなよ」

「……………」

ロアルドロス亜種の視線は、どこか一点へ向けられている。それはリイタやハインツでも、ましてやミエールでもない。

崩れ落ちた黄色と赤が混じり合う、ロアルドロスの亡骸。すり寄るように佇む巨体は、先ほどの猛々しさを潜め、その姿はナーバナ森でハインツとリイタが見たケルビの求愛行動そのものだった。慈しみ、寄る辺を確かめ、互いが互いを認識する。その片鱗が垣間見える行動。以前と違うのは、その行動に意味を持たせ完成させるべき返しの行動を取るはず相手が、もうその場で立つことがなかった点だろうか。

「ツガイ……………だったの?」

先ほどまで感情むき出しで迫っていた巨体。その瞬間だけ、時間が止まっていた。全てが止まってしまった黄色に何かを惜しむように、でも愛おしげに、それでも最後は離れていく。目を見張るような光景に、リイタはただ見ていることしか出来なかった。

「……………さあね。でも敵意^{ヘイト}を買^ヘいすぎた。今なら地の果てまで追ってくるぞ、アレは」

必死に冷静であろうとするハインツは、やがて紫から視線を外すと小さく振り返る。

「今の君、モテモテだぞ。返^{フエロモン}り血たつぷり。僕らなんて目もないくらい」

「じゃあつ、囿の意味なんて」

「だから——」

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオツオオオオ
!!!!!!!

言葉を遮るように放たれた咆哮。紫の怒りは頂点にまで達していた。

そしてハインツは恐怖で押し潰されそうになりながらも、覚悟を決めて自虐的な笑みを浮かべながら

「だから、目と、鼻を潰すんだ」

と、一言告げて前へと向き直り、傍らの小さな影とともに大きく振りかぶった。

——パアアアアアアアアアアアアアアアアン!!!

「くっさいいい!! でも走れミエール! 石ころでも何でもぶつけて気をそらすんだっ」

「ギニヤア……あ、あいじゃー!」

容赦なく視界を抉り取る強烈な光。そして遅れてやってくるのは、否応なく嗅覚に侵食してくる強烈な臭気。投擲されたのは閃光玉とこやし玉。投げ終えたハインツとミ

エールは、それぞれ走り出す。

「ま——」

(……だめ。せつかく目と鼻を潰したのに、ここで声を出したら、音で気取られる。もう、始まっているんだ)

リイタのクールダウンは終わりつつある。そして現場はハインツの意図を汲み取るしかない状況にあった。彼女が守るべき対象であった彼が、前線に出てまで決断した作戦なのだ。

(……切り替えて。今度こそ、仕留める)

視覚と嗅覚を一時的にでも奪われたロアルドロス亜種は、やがてなりふり構わずに巨体を震わせる。向かう方向は派手に足音を立てながら駆け抜けるレザー装備、ハインツへ。

「ひいひい！　せめてミエールあっに行ってくれよ！」

「ご主人の魅力に本能が惹かれた結果なのニヤ！　ヤキモチで石投げるニヤー！」

「う、嬉しくないっ」

俊敏に動き回るハインツは、ハンターの機動性にも負けていなかった。むしろ上回っている。それもそのはずだ。ハンターと違い、攻勢に移る、反撃という概念がないのだ。ひたすらに逃げ回るだけ。

巨大な質量を紙一重の位置で躲しながら、ハインツは必要以上に絶叫を上げてわざと自分の位置を漏らす。

(思ったよりも、ちゃんと逃げてる……速いかも)

決して直線的に逃げることはせず、適度に蛇行しながら間合いを取り続ける一人と一匹は、上手く巨体をいなし続ける。およそ文官とは思えない動きの良さだ。

攻勢という言葉はすべてハンターに預けられ、リイタは静かに愛剣センチネルまで近付くと、音を立てずにそつと持ち上げた。そのすぐ前で沈む黄色を見下ろしながら、彼女の瞳に再び闘志が宿る。

ここでもう一度閃光が走る。続いて臭気のかさが増したことも感じ取る。

(時間はあんまりない、かな。仕留めるなら、一撃で)

十分に時間はもらった。霞がかっていた頭も、ガス欠していた身体も、今は十全に事を備えられる。両手でセンチネルの柄を握りしめると、歩隔を開き、腰を落として重心を低めに構える。大剣は背負うように振り上げられ、徐々に全身のバネが最大限の力を発揮しようと引き絞られていく。

まるで弓をつがえるように、溜めを作っていた。

(まだ、足りない)

少女の身体に不釣り合いなほど巨大な剣の組み合わせ。しかし、ソレでも足りない。

だから力を求めるために、彼女は全身を武器にする。

(まだ、もう少し)

更にバネが軋みを上げる。ニンゲンの関節可動域を最大限に活かし、己の筋が最高のタイミングで収縮できるように張力を整える。

ここまで実に数秒。しかし、狩猟の中でこの数秒は致命的な隙となりうる。だからハインツは提案し、リイタもそれを飲んだ。

「——きて!! ハイんツさんツ!!」

「もう向かってるっ! 頼んだリイタさんっ!」

ハインツとリイタの視線が交錯する。

紫の巨体は音を頼りに獲物を追い続ける。その先に死神の鎌が待っていることも知らずに。

「——シイイイイツツツ!!」

溜め斬り。

単純な技術は、シンプルゆえに強力無比。強力だからこそ、使うべきタイミングが限られる。



「……」

「……」

「……」

すべてを解放した一撃が大地を割つたと錯覚させる頃には、溪流での激闘は終幕を迎えていた。果たして再び時計の秒針は動き出すのだろうか。かくしてドウーヴの村を壊滅させた元凶は討たれたのだ。それでも暫くの間、時間は止まり続けていた。紫の亡骸から漏れ出るように滲み出た液体が、溪流の地に鮮血とともに混じり合い続ける。

「大ッ勝利ニヤー!! やつたのニヤー!」

最初に静寂を破つたミエールはぴよんぴよんと飛び跳ねながら、全霊で喜びを表現してみせる。ひたすら走り続けてなお、跳ね回る体力が残っているのは大したものだ。そうハインツも感心していると、

「……お疲れ様」

青白くなった顔で、もう一度リイタに視線を向ける。

「……うん」

剣を振り下ろしてから、ずっとその場で佇んでいたリイタもゆつくりと、全身の筋肉が再び緩み始めるのを感じる。それに伴い、鉄面皮のような表情も幾分か崩れていた。

「……見直しました。あんなに動けるなんて、思ってたなかった」

「ははは、知らなかったのかい？」

そして続ける。

「書士隊は鬼ほくらごつことかくれんぼが、大の、得、い……」

緊張の糸が途切れるにしては様子が妙であった。その正体にリイタが気付いた頃には、ハインツの身体からは力が抜けていき、彼の視界は大地に向けられたまま閉じることになる。

ドシヤリと小さな音を立てて、混じり合う大地へ。

マールブル・エフエクト・メモリーズ



『今回の件の全貌——と言っても、ロアルドロス亜種が溪流に住み着いただけ、というのが実にらしい話ですよ。本当に、ただそれだけなんですから』



鈍く、重く、暗い場所。

一切の光から遮断された空間に、ハインツの意識は落ちてきた。なぜそうなったのかは、彼自身が一番良く理解している。ロアルドロス亜種の猛攻からリイタをかばったとき、あのとき跳ねた紫の飛沫が原因だ。すぐに拭ってはみたものの、あくまで応急的な

処置。褒められた対応ではない。始めは身体に異常をきたすことはなかったが、囃役として走り回っているうちに、気化した猛毒が徐々に彼自身の体を蝕んでいった。

それでも無我夢中に走り続けて全てが終わった時、緊張の糸が切れた瞬間に訪れた、冷たくて苦しい感覚。体の奥底からの不快感が全身に波及していくのを感じ取る。本当はすぐにも解毒薬を服薬すべきだったのだろうが、そんな余裕はカケラもなかった。

荒れる呼吸のリズムを整えて服薬するため嘔下えんげに移行するには、時間が足りなすぎる。焦って飲みこもうとしても、むせて終わりだ。それでもハンターは出来てしまう、全くもつてどういう身体構造をしているか、彼としても興味を尽きない。

おそらく今、彼は自身が死の淵を彷徨っているであろうことを自覚していた。そして彼がいかに自分に力がないことを痛感していた。

立ちほだかることはしても正面へは向かわずに、逃げることを主として選択したのだ。

それが結果的に紫の巨軀を沈める一因になったとしても、功労者の一人となったとしても。彼の心は終始恐怖との戦いだった。

ああ、身体が言うことを聞かない。動きの反応は鈍く、重い。まるで他人の身体だ。この暗く冷たい空間に、自分はいつまでいれば良いのだろう。

書士隊らしからぬ選択をした、そうは思っている。自分は守られる側であり、決して守る側にはいないのだ。有り体に言えば、欲張りすぎてしまった。

なんでこうも無謀な選択をしてしまったのか。おそらく普段の彼なら彼女を連れ戻し、逃げることを選択したのだ。それでも今回は違った。

違った。違ったのだ。そして改めてハイイツは自分を認識し直す。

自分がなんて感情的に動くニンゲンなのだろうかと。

何故ならば。時間を止めた村を見たときに。荒れ果てた風体を目の当たりにしたときに。隣の彼女を覗き込んでしまったその時に。

彼は見てしまった。

彼女のとても、とても苦く、苦しそうな表情を。

見なかったフリを出来なかった。知らぬ存ぜぬで通せるほど、彼はできたニンゲンではないし、それどころか不謹慎にも安心してしまった。彼女も同じニンゲンなんだ。年相応の少女なんだ、と。それと同時に、いつかの願いも垣間見てしまった。

自分は間違っていたのだろうか。答えなんかあるはずもないのに、体に染み付いた癖から解答を欲しがってしまう。

「……………ヤン」

声が聴こえる。とても心に染み渡る温かい声色。

酷く懐かしく感じるその声と、彼は再び邂逅することを望んだ。

二手に分かれる前に言っていたウインブルグの一言を反芻する。

リイタという少女に刻まれた記録。記録でしか知らない、彼女が背負うもの。パーティを結成する時に、ラッセルから聴いていた彼女の経緯。

かつての彼女も庇護されるべき立場にあった。庇護する場所が存在した。地図上に。そして今はない。いつのまにか消えていた。更新はない。記録はただ、それだけ。

「……——ンツさん」

また声が聞こえる。凜と、芯を持った強く吹き抜ける声色。

そのあと暗闇から引き上げられるように温かな感触が彼に伸びると、一筋の光が降りてくる。

邂逅一番、何から話そうかと彼の心は思い悩む。彼女の人となりを考えれば、責任を感じていても不思議ではない。心配かけたね、なんて言葉選びは少々安直すぎるだろうか。

なるべく重く受け止めないように書士隊らしい言葉を。その瞬間、ハインツが思いつ

いた一言はとても気が利いていないくて、すぐに渋い顔をした彼女の姿が思い浮かんでいた。

温かく熱を帯び、軽くなつた意識は浮上を開始する。

たとえそれが蜘蛛の糸だろうと、ハインツは意識へ手を伸ばす選択肢以外考えなかつた。



今にも泣き出しそうな顔をする——猫の姿。

生きる実感は猛烈な痒みから始まる。半泣きの猫の後ろに広がった、晴れやかな溪流を青空を、今のハインツはゆっくりと堪能していたかつた。

「(い)主じーん!!」

それでも穏やかに息つく暇はない。顔面にベシヤリと抱きついてきたミエールを引き剥がすために、反射的に本能が身体に動くように司令を下す。

「は、離れる!! か、かゆいっ痒いんだけどっ!!」

思っていたよりも彼は自身の身体が軽いことに気付く。毒の後遺症なんてものはな

く、すぐにでも全力疾走できる気分だった。こればかりは、解毒薬の作成者であるヒューイに感謝と言ったところだろう。

ドンドルマへの帰還後、ヒューイに何と礼を言おうか考えながら、ハインツは無理やり顔面のミエールを引っ掴むと、問答無用に振り払う。それでもハインツの手に掴まれたまま、半泣きで前足をバタバタさせながら迫ろうとするミエールの姿。

本人に意思があつたか定かではないが、今回の影の功労者は間違いなくミエールだ。ミエールのせいで調査が進んでしまった、と言つても良い。

感謝すべきなのか、忌避すべきなのかハインツの気分はえらく複雑だ。リイタの元へ向かう際に、妙に息があつてしまった点も含めてだ。素直に認めたくない側面もあるというもの。

痒みの残る顔全体を触らないように意識すると、やがてハインツはゆっくりと上半身を空間に晒す。そのまま視線を猫から外し、解毒薬の入った小瓶を片手に持ったまま佇むリイタに向けて、開口した。

「……で豆知識。実はロアルドロスの毒って、無臭なんだ。経験談だから胸を張って言えるよ」

「……知識バカ」



ロアルドロスとの交戦から数日後。書士隊一行を乗せた竜車はドンドルマへの帰路に向かっていた。竜車内ではウインブルグがアグナヘルムを脱いだ軽装で、普段通り異様に似合うヒゲを光らせる。

「うむ。ハインツ君の睨んだ通り、中流から中規模に汚染は広がっていたのである。そしてどの村も避難済み。更に外れた場所に新しく集落を築き上げていた、と」

「ニンゲンもタフだニャー」

汚染水を飲んでダウンしていたアプトノスもすっかり元に戻り、荷を牽く足取りも軽い。その様子を安心した様子で、御者の女主人が見守りながら手綱を引いていた。

ハプニングに見舞われたものの、溪流マツピングは予定よりも早く終わりを迎えていた。その理由が、ハインツにとっても予想外に嬉しいものであった。

「それにしても、この古い地図を村の人達も持っていたなんて驚きですよ」

「昔、ラツセル殿が調査に来た際に置いていったらしいのだ。これを元に川の流れを読んで、より安全な場所に拠点を移せたそうである。村の人々も感謝していたのだよ」

古びた地図を撫でながらハインツは穏やかに微笑む。使い込まれた地図の隣には、ま

た一つ真新しい紙が広げられている。

「流石にいい仕事しますね、センセイは」

「あとも。おかげで更新の手間も省けたのである。村の者たちがラッセル殿の測量ノウハウを生かして、新しいものまで作成していたのだからね」

ロアルドロス討伐以降、再び溪流に猛毒の流れが再来することはなかった。それどころか、一日としないうちに再度、新たな縄張りが形成されていたのだ。姿を見せなかつたガーグアは更に上流に生息圏を移しており、自然と下流へと移動を始めている。

川自体に命舞い戻るのは今しばらく先とは言え、溪流の恵みは順当に大地を潤しつつあった。

心配の種が一つなくなつたところで、ハインツは最後まで残る一つの種に頭を悩ませる。その大元、つまりは彼の斜め向かいに視線を向けると

「……とこころでリイタさん。そろそろ機嫌、直してくれない？」

と、恐る恐ると言つた口調で尋ねる。

「……」

「いや、あのときは君を心配させまいと考えたジョークだつたんだ。冗談さ冗談」

無言のリイタ。ハインツも思わず苦笑しながら視線をそらしてしまう。

あの一件依頼、リイタは己を責め続けていたのだ。それはハインツの予想通りであ

り、結局回避することは叶わなかった。

「でも、あそこであの言葉はない、かなと思います。不謹慎です。ドン引きです」

「笑えない冗談なのニヤァ。センスの欠片もなかったニヤァ」

と、一人と一匹からの糾弾。結果的に討伐まで繋がったものの、あの時点でハインツ自身も冷静でなかったという証拠だろうか。

そして続く少女の唇はわずかに震えながら、

「……心配、させないでください」

と、感情を漏らした。

「あ……ごめん」

まっすぐに投げられたリイタの感情^{コトバ}。

竜車内ではちよつとした気まずい空気が流れる。誰かが間違っていたわけではないが、個人の思惑はそれぞれ別のところにあるもの。

「まーまー二人共！　そこは一つ置いておこうではないか。それに勝手に調査を進めたことに対しては、我輩もすごく怒ってはいるのだが、選択した理由というのかな。誰かのために動く、そういうのは中々できないものである。結果良ければ全てよし、命あつての物種なのだよ」

と、ウインブルグが颯爽とフォロー。しかし、それでも少しだけ口を尖らせながら二人を諫める。

揺れる竜車で心静かに語る口。ハインツが向かい合って座るリイタとミエール、隣にはウインブルグが座っている。

「ヒゲのだんにやは前向きなのニヤァ」

「ふっはっは、でないところの年までハンターなんぞやっていないのである。ではハインツ君に弁解の機会を与えよう」としよう」

「べ、弁解ですか？」

「そうである。今度こそ気の利いたジョークをダネ、紳士的に」

キラリと光るヒゲと白い歯でハインツに要求してくるウインブルグ。

「紳士的にって……うーん」

無茶な要求である。それでもハインツは思考を総動員させて、向かいの少女への言葉を考える。やはり気の利いた文句など浮かびはしなかった。

なぜなら彼の胸の内は、リイタに対する申し訳無さ。自分への不甲斐なさ。そしてもう一つ、思考を邪魔するに至る要素が占めていたからだ。

「じゃあ、気になったことをひとつだけ」

そして選ばれた言葉は、

「リイタさん、この前気になることを言っていたよね」

「……気になること？」

「そう。ロアルド・ロス、ツガイってね」

「？ それが？」

「いやさ、実はロアルド・ロスって、生物学上オスしか存在しないんだ。メスは取り巻きでいるはずのルドロスだけなんだけど——」

「……」

「ここで問題。あの二頭は、群れから外れてなんで二頭だけでいたんだろうね。そして、あの行動」

「……え」

「あの二頭は、ツガイだったのかな？」

「そんなこと……ん」

長い沈黙。それもそのはず。答えなど知る由もないのだ。やがて最初に口を開いたのは

「ハインツ君。紳士ポイントゼロ点」

ウインブルグの憐憫を帯びた微笑だった。

かくして溪流調査は終了する。十年以上更新されなかった地図は、多少村の配置が移動したが、それでも力強く命が芽吹き続けている。

心の何処かで引っかかるハインツだったが、結果的に村の人々に感謝された事実は変わらない。

あれがもし、毒性のない気性の穏やかなモンスターだったらなんて考えない。

あれがもし、オス同士であろうと禁断の恋を巡ってたどり着いた二頭だったなんて妄想は、真実と呼べる代物ですらない。

考えても尽きることのない未完の真実は泡沫に消えていく。モンスター側のバックボーンを配慮する余裕なんてない。そんなものだど割り切ると、ハインツは次の任務に思いを馳せた。

つづく

▼パーソナルレポート：『閑話休題』

登場人物紹介：1～3章

◎主要な人物

○ハイイツ・フランクフルト

登場した章：レポート1～3

職業：王立古生物書士隊

性別：♂

年齢：二十代前半

趣味：スケッチ、読書

特技：遠い目をしながら呪詛のように”生物樹形図”を暗唱できる

苦手なもの：アイルー、ハチミツ

備考：ファイルドワークをこよなく愛する本作の主人公。好物はフルーツジャムを挟んだサンドイッチ。

机上での知識は豊富だが実地経験の不足は否めない。趣味のスケッチは下手ではないが上手くもない（書士隊としてはヘタな部類）。

今日も今日とて護衛ハンターの二人に支えられながら、愛用のレーザー装備を着込んで現場を走り回っている。逃げ足は特に速い。

そんな相棒（ハンター）を見る彼の目は少なからず複雑な感情を抱いている。
好きな言葉は『百聞は一見にしかず』

○リイタ・シユネー

登場した章：レポート1～3

職業：ハンター（書士隊付）

性別：♀

年齢：十代後半

趣味：トレニング、瞑想

特技：片手で大剣を持ち上げたまま軽々スクワットできる（周囲はドン引きする）

苦手なもの：理屈っぽい人。話が長い人。

備考：書士隊護衛の若手有望株ハンター。実力は折り紙付きだが集団での狩猟は不得手。若輩ながらも輝かしい戦績を挙げており、リオレイアを単身で討伐したという噂も。

得物に大剣を選んだのは、短期でモンスターを仕留めるために攻撃力が欲しかったか

ら。

言葉数は少なく表情に出ないことも多いが、決して人間的な感情がないわけではない。
い。

とある過去から、護ることに対して執着している。また、モンスターに対して並々ならぬ感情を向けることもある。

○アレックス・バルバ・オ・ウインブルグ

登場した章：レポート1〜3

職業：ハンター（書士隊付）

性別：♂

年齢：三十代後半

趣味：自慢の髭の手入れ

特技：初対面の相手でも心を開いてしまう大仰な演技、（勝手に家畜へ）名前をつける、他多数

苦手なもの：目がくらむような大金

備考：腰痛と貧困に喘ぐ熟練ハンター。全盛期はとうに過ぎているが、限界と戦いながら若き書士隊と後輩ハンターを温かく見守る。チャームポイントと自負しているヒ

ゲの整備には細心の気を払っている。

ハンターとしての実力は確かで、火山に出現したアグナコトルを沈めた様は、一部の層で語り草（自称）になっているらしい。

もともとはランス使いだったが、腰への負担が重いため軽い双剣に乗り換えた。ラツセルに付いた最後の護衛ハンター。

○ミエール

登場した章：レポート1、2、5、3

職業：野生↓書士隊預かりアイルー

性別：♂

年齢：？

趣味：毛繕い

特技：利きハチミツ

苦手なもの：特にない

備考：ナーバナ森丘にいた元・野生のアイルー。空気は読んだり読めなかったり。

アオアシラに縄張りを荒らされて好物のハチミツを採れなくなったところ、ついぞ現れたハインツとリイタの存在はミエールにとって僥倖だった。

アオアシラから身を挺して救ってくれた（と思い込んで）ハインツに感謝し、彼の置き忘れていったスケッチブックを背に、単身ドンドルマへ乗り込む。

精密な投擲が可能であつたりと、その能力は以外にも高い。最近ハチミツを食べすぎてお腹が出始めている。

◎書士隊の面々

○ラツセル

登場した章：レポート2、2・5、3

備考：ドンドルマ書士隊支部長。古典的な書士隊現場主義の持ち主。現在は衰えたため一線を退き、他の書士隊の面々を気にかける好々爺。

長年養われた人と情報を見る目は確か。

○ヒューイ

登場した章：レポート2、5

備考：ハインツの同僚。環境調査を主とする青年。その実、現地独特の食材を食べ歩いている。害も無害も関係なく食してしまうので、彼の手元には特製の解毒薬がいつも携えられている。

そんな書士隊標準装備にはヒューイの解毒薬が入っていたりする。

○アンリ

登場した章：レポート2、5

備考：ハインツの同僚。見た目は清楚なお嬢様だが、蓋を開ければ残念極まりない才女。キリンの生態を置いておき、調べるためにはいかなる手段も問わない。

最近は食性を調べるべく、モンスターのフンを片っ端から採取している。

◎その他の人物

○竜車の女主人

登場した章：レポート1、3

備考：書士隊と契約を結んだ運び屋。ハインツ一行の専属ではないが、よく乗り合わせる事が多い。相棒であるアプトノスの世話は欠かさない。ぶつきらぼうだが人情家。

○ナーバナ村の村長

登場した章：レポート1

備考：村長。モンスターの皮を加工して“ちゃんちゃんこ”を作るのが得意。物忘れが増えてきた。

○裏商会の三人組

登場した章：レポート2

備考：裏商会の派遣者。お金の匂いがすれば砂漠までも飛んでくる。早いもの勝ちの精神なのか、手を引く時はあっさり引く。今日も各地を飛び回っている。

○オトコマエとホイットニー

登場した章：レポート2

備考：ラマラダ。ハインツとウインブルグに（勝手に）名付けられた二頭。砂漠を歩き来するには必須の生物。とても利口。

▼レポート4：『ミリオンキャベツとブルフアング』 美味しい話

ドンドルマのまたまた一角。モダンな雰囲気とクラシカルな味わいを融合させたような店構え・火竜の尻尾亭。木目の細かい開き戸の隙間からはモクモクと多種多様な風味入り交じる、香ばしい匂いが漏れだし、道行く人々に空腹の鐘を鳴らして誘惑する。一度香りに釣られて足を運んだが最後。その豊富なお品書きメニューを見て決めるに決めかね、注文までに多大な時間を弄すことは間違いない名店だ。

それでも最高級店とは違い、民草に配慮された絶妙な価格は、毎日毎週とは言わずとも月に一度は必ず、財布の中身を奮発する気にさせてしまう。

そんな魅力に囚われた人間は今日もやはりというべきか存在している。その二人は木製のカウンター席で隣り合って掛けていた。

「う、美味しい！」

「はっはっはー。そおだろそうだろー」

カウンター席で口いっぱいに料理を口に溜め込んだハイイツと、その隣で自慢げに笑いながら、また馳走を頬張る彼の同僚ヒューイの姿。

未だ熱を帯びた皿プレートの上には、じわりと肉汁滴るブロック状に断たれた半生焼きミディアムレアの肉の切り身が転がっている。付け合せの色とりどりの野菜とともに作品となつた火竜の尻尾亭の定番料理の一つ。味付けは塩コショウを軽く振られたシンプルなものだが、食指をそそる鮮やかな香りは例外なく目の前に座る二人の鼻孔を刺激し、抵抗する間もなく魅了する。それは二人の手に持つナイフとフォークを動かす手の勢いが、全く衰えないことが証明している。

「このサイコロミートの締まった肉質と程よい脂身。噛めば噛むほど広がる豪快な味わい。コイツにドライバターをちょこつと乗せて、半分溶けたところでまた頬張る！ これだけでココットライス三杯はいけるよっ」

感動とともに分析を乗せて、ハインツは考える間もなく直感的な感想を述べる。普段は頭を経由して言葉を放つというのに、この瞬間だけは食べた瞬間に舌が喋りだしていると錯覚するような、脊髄反射で言葉が漏れ出ている感覚であつた。

「いい目線だぜハインツよ。だがよう。コイツを本当のメインディッシュへ引き立てるための、影バイプレーヤーの主役食材が分かっちゃいねえっ」

それを満足気に見て話すはヒューイだが、まだまだ甘いなど言うかのように、鋭い視線を更に向ける。

「影の主役だつて？」

「おうよ！ そいつがこいつ、ミリオンキャベツさつ」

「ただのキャベツだろ？」

ヒューイの向けた視線の先を追うハインツだが、見えるのは至って普通の、付け合わせにある葉野菜の千切りだった。

「バーカ言っちゃいけねえつ。コイツは奇跡みてえな葉の重なりが織りなす、これまた奇跡みてえな食感が最大の武器つ、そいつを熟達した料理人は層を崩さないよう千切りにしてみせる。この付け合わせを、形が崩れないように口へ運ぶんよつ。シャッキシャッキ、フワツフワ。この最高のクツションに塩気と肉の脂身のみでソテーされたサイコロミートを合わせてやれば——うおおおおおうつめえええええええええよ!!」

思わず叫びだすヒューイに、周囲の客もどよめき始める。騒ぎを聞きつけたウエイターが近くまで寄ると、静かに、それでも力強く咳払いしてくる。

「ああ、美味すぎてつい心の声が漏れちゃった」

「コホンつ、またですか。いくら常連とはいえまして、他のお客様の迷惑になりますのでご自重下さい」

「すまねえ」

給仕が流し目で警戒しながらその場から離れるのを確認すると、ヒューイは一息ついた。

「あのウエイトレスさん良いこと言うね。君にぴつたり必要な言葉だ。まあ、たしかにこの食べ合わせはG級だけど。ミリオンキャベツ恐るべしと言ったところかな」

続いて真似するように口へ運んだハインツも、その味を堪能する。さすがは環境調査にかこつけて、現地食材を食べに食べまわる男ヒューイである。食の楽しみ方をハインツの数倍、いや数十倍は分かっている。

「あの塩対応も癖になるってもんよ。でも美味しいんだから仕方ない。うっし、もう一口」
「知りたくなかった君の性癖の一端を垣間見ちゃったよ。とりあえず僕も」

もう一度、形を崩さないように付け合せを口の中へかき込むと、肉汁滴るサイコロミートを放り込んで、

「う、美味しいiiiiiiiiいっ！」

と、嘯みしめた思考が直接言葉に変わる。そしてギラリと瞳を光らせた一言も同時に、

「お客様。お静かに」

「すみません」



ウエイトレスにきつめの灸コトバを据えられたところで、二人は一通り料理を胃に落とし終えていた。またしばらくカウンターの談笑が続いている。少しばかり周囲の視線が刺さるのは愛嬌だと思いい込みながら。

「あー食べた。ほんとに良いのかい、奢りだなんて」

「気にすんなって。最近お前、元気ねーしな。リイタちゃんとも気まずそうだしよ。なんかあった？」

と、人懐っこい笑みを浮かべながら核心を突くようにヒューイが返す。思わずハインツはギョツとするが、

「べつに何かあったわけじゃないけど、変に気を遣われちゃってるみたいでさ。調査続行を判断したのは最終的に僕で、前線に飛び出したのも僕の判断なのに。気にしてるみたいなんだ」

と、また返す。事実だけで述べれば、森丘に続いて溪流調査でも、リイタは護衛対象である書士隊ハイנטツを危険にさらしてしまった。もちろん文面だけの結果的にといい話なのだが。

しかし、護衛ハンターの肩書きを持つ彼女からすれば、その事実が許せない側面もあるのだろう。

「そーかい。でもその空気を次の調査まで持ち込むのはマズイと思うぜえ？ 早めにケ

り付けたほうが良いと思うけどよお」

「……はあああ。そりや僕だつてそう思つてるけど。じゃあ何かいいアイデアとかあるのかい？」

ヒューイの指摘に対してドコに溜め込んでいたのか、ハインツは大きなため息をつくと冗談半分で彼に向けて尋ねてみる。

そしてすぐさまヒューイは

「飯！ 飯に誘えば一発解決よ！」

と、意気揚々に自身の答えを返してみせる。

「ヒューイらしい解決方法だよ。悪くない。けど、あー……中々ハードルが高いね」

「照れて尻込みしてんじゃねえよ。仲直りしたいんだろ？」

「子供の喧嘩みたいに言つてくれるなよ。あの子も仕事仲間として気をかけてくれるのであつて……」

「あーへいへい。んじゃ、その話は一旦置いておこうぜ」

「一旦つておい、解決は速いほうが良いつて言つたのは君だろ？」

「俺から言わせてみれば、なんとかなる問題つてことだよ。そ・れ・よ・り・も、だ。と言つても、本題はここからなんだがよ。さっきの付け合わせ、覚えてるよな？」

やや強引に話の流れを断ち切ると、ヒューイは新たに問いを呈示する。付け合わせと

言えば、サイコロステーキの隣においてあったアレ。

「ったく。ああ、ミリオンキャベツのことだろう？ アレは美味しかった、ほのかに甘いのある水分が噛む度に口全体に広がって——」

「おうよ。でな、最近その生産地の方で、ちよいと気になる情報が入ってきてるんよ」
「気になる情報？」

疑問符を浮かべるハインツに対して意味深な笑みを浮かべると、ヒューイは言葉を続ける。

「そそ。こいつの特産地になってる町の一つが最近賑わってるらしくてな」

「いいことじゃないか。相乗効果でそりゃ街も賑わうだろうさ」

「ああいい話だとも。でもな、それと同時期に町周囲のモンスター退治の依頼がな、急激にギルドまで来るようになったんだよ」

「へえ、そりゃ大変だ。ハンターズギルドも火の車ってわけだね」

モンスターが出ればハンターが出る。言わずもがなの道理だ。ギルドからの斡旋も増えてWin-Winじゃないかと誰でも思う話ではあるが。

「……問題は、その原因って話か」

ハインツが頬を親指で撫でると、念を押すようにヒューイが畳み掛けてくる。

「そそ。気になるだろ？」

「……いや全然」

「無理すんなって。顔に出てるぜ？ 直接行って確かめたいって。実際気になるだろ？」

ヒューイが攻めるのは、ハインツ——もとい、書士隊最大の武器でもあり弱点。

——好奇心だ。

「いやでも」

「でも。リイタちゃんの方がまだ解決してない。って、そう言うんだろ？ さつきも言ったら、俺から見れば些細な問題よ。上手く行けばこれで解決も夢じゃねえ」

見透かしたようにニヤリと口角を釣り上げたヒューイは、ハインツのそう固くもない牙城に対して亀裂が入る手応えを感じていた。

「気分転換。そう気分転換だハインツ！ お前さんのお硬い頭を、少しでもこねこねして妙案が浮かぶように手助けしたい、優しい同僚の配慮がわからないお前じゃねーだろ？」

「……もう一度、さつきのウエイトレスさん呼びたい気分だよ。確かに気になることは気になる。当然だ。でもさヒューイ。君、最大の懸念を忘れてるよ」

困りつつも呆れたように言葉を漏らすハインツは続ける。

「なんで君と行かなきゃならないんだ？」

その一言を耳にした瞬間。ヒューイの瞳は力強く煌めく。

ならば——と。まるで不思議なことを聞かれたようにヒューイが目を丸めると、ハイ
ンツはその意味に戦慄することになる。

「だって、食つたる？」

結論の一言。

「悪魔かよ」

こうしてハインツの新たな任務は唐突に決まる。料理は仕込みが命というように、
ヒューイの入念な準備がなされた成果とも言えるのだろうか。

▼レポート4：『ミリオンキャベツとブルファンゴ』

山の感情



いつも通りに竜車は手配され、到着まで数日ばかりの時間をかけて道を走る。その間に行われる荷車内での他愛ない談笑は、アプトノスを操縦する女御者の耳にまで届いていた。ただ、今日はいつもと会話の内容が異なる。乗り合わせるメンツがこと珍しかったのだ。そう、竜車の女御者は内心思っていた。

「キャベツと言えばアブラナ科の野菜なんだが、ちようど今時期が収穫の季節なんよ。旬はこれから……つと、涎が出てきた。でだ、俺の読みが正しければ、ちつとばかりマズイことになるかもしれねえ」

「……まあ、確かに調査する動機としては十分だけど。でもさ、流石に護衛無しで出るのは不用心すぎやしないか？」

普段は聞こうと思ってなくても聴こえてくる、己の自慢話を披露する熟練中年ハンターもいなければ、それを表情を変えることなく聞き流す少女ハンターもいない。乗っているのは、その少女の隣で興味深く、かつ羨望の眼差しで話に聴き入る書士隊の青年

と、その同僚だという中年ハンター顔負けに騒がしい男。そして、もう一匹。

「ご主人にはオイラが付いているのニャー。この猫パンチで獰猛なやつらを、けちよんけちよんにノックアウトするのニャー」

「囿としてなら程々に期待しておくよ」

「風当たりが強いのにニャー」

標準的なアイルー色のミエールが、今日も右手に甘ったるい匂いを残しながら、スン鼻を鳴らしていた。そんな猫から少し離れて座るハインツは、漂う匂いに顔をしかめながら窓際で外の空気との換気を促している。

「飛竜やら何やらとは無縁の土地だからな。ちよっと様子を見て報告書まとめるだけの、そんなに危険な調査じゃねえ」

「楽観的すぎる気はするけど。まあ最悪、現地のハンターと連携したらいい話だけどき」
ハインツの懸念を他所に、鼻腔を広げながら自慢げにヒューイが笑う。これから彼らが向かう町は山間に面した中規模の町。町と言っても、元は村から発展してきた成り上りの集落であり、そこに至る要因として一番大きいのが、飛竜の生息圏から絶妙に外れた立地にあつた。外敵なく比較的平穏な環境下で続けられてきた農産業が、かの町の大黒柱となっている。

「そーそー。別にハンターはウインブルグの旦那やリイタちゃんだけじゃねーんだ。お

れはいつつも現地調達だぜ？ んーこの、すっこし癖の強い花の香り。東、か……テロス密林特有のもの——正解か？」

「おおお正解だニヤー。匂いだけでオイラのハチミツの産地を当てるなんて、中々やるのニヤー！」

「ふふん、まあな。ハチミツと言わず、キノコでもなんでもどんと来いってもんだ」

どうやらミエールと馬が合うようなのか、竜車内では文字通りのハニートークが繰り広げられ始めていた。当然ハインツは、いかんとも言いがたい、硬い表情で一人と一匹を見ている。

「ご主人と肩を並べるだけのことはあるのニヤー」

「そうだろー？ もつと褒めろ褒めろー」

ガタリ、と。

一人と一匹の談笑が続く中、唐突に今まで彼らを揺らし続けてきた振動が止む。竜車を引き続けていたアプトノスの足が止まったのだ。

「おい、一度^{アプトノス}竜を休ませる。アンタらも疲れたろ。外の空気でも吸ってきな——特に^{おまえ}ハインツ、顔色が最低」

「さすがプロ。よく見て……うえ」

◆◆
竜車が止まったのは、今回の目的地であるスターレ町の手前。残り数十キロと言った位置だった。

閉じられていた荷車の扉が開くと、いの一番にハインツが外に飛び出していった。ハインター顔負けの俊敏さで外に飛び出ると、まるで水を得た魚のように

「美味しい……— 空気がっ!!」

と、全霊で大気を受け止める。

「ご主人は大げさなのニャー」

「原因は君のせいなんだけど」

ジト目で彼の忠実な下僕を自称する猫を見流すと、ハインツはもはや言葉を続けることはなかった。再出発までの間、彼らは時間を持って余すことになる。そんな手慰みに、ハインツはもはや職業病とも言える観察眼を、目の前のミエールから外へ向けることにした。その方が実りもよいだろうと考えた結果だ。

するとだ、早速彼の観察眼は何かを捉える。

「良い眼をしているって、自分を褒めてやりたいね……ん、あれは——モス、野生のモスがいるぞ! こんな人里近くに珍しい。早速クロツキーを……」

「んニャー?」

山の入口すぐ近くを向くハインツの瞳には、偶蹄目・モスがはつきりと映り込んでいた。

モスは手出しをしない限りは積極的に人を襲う生物ではない。特徴的な全身に生えた苔とモスコ特有の大きなブタツ鼻。見た目どおりの鋭い嗅覚で、好物のアオキノコを探し当てる、キノコ捜しの名手である。

それを興奮した様子で、ハインツはおなじみのスケッチブックを開くと、筆を取ろうとレザー装備のバックルに備え付けられた収納スペースから、一本の鉛筆を取り出す。

「お、ちよつとは絵の腕前は上がったかよ？」

「もちろん。今からサー・ベイヌ爵も顔負けのを披露するさ」

茶化しながら、続いてヒューイもやってくる。

「我が親友ながら懲りないやつだねえ。まあ期待しとくぜ。うっし。じゃ俺は、この地域のモスがどんな特徴なのか、近くで見してみるか。ポイントは背中^{クワッキ}の苔だな」

「迂闊に近づくのは危険だぞ」

「落描きの邪魔するつもりはねーって。大丈夫だつての。モスはそうやすやすと人を襲ったりしねーからよ」

ハインツの忠告を聞き流すと、ヒューイは地面に鼻をピツタリつけるモスに近づいていく。程なくしてモスは近づくニンゲンの気配に気づく。

「ほーれ、いい子だ。俺のキノコ探しの友よ」

——ぶひんっ

が、妙に興奮した様子だ。後ろ足で地面を数回蹴り、鼻を垂れて重心を下げている。この体勢にハインツは見覚えがあった。

「お、おいヒューイ！ そいつ突進姿勢に入ってるぞ！ 離れろ！」

「あ？ モスは俺の心の相棒だぜ？ そんなわけ——」

——ぶっひんっ!!

蹴り出された土埃が盛大に舞い踊り、小さくも確実に重い質量が、明確に狙いを定めて飛び出してきたのだ。

狙いは当然、不用意に近づいたヒューイへ。一步反応が遅れるが、ヒューイも素早く旋回——崩れながらも回れ右の体勢を取ると、乱れたフォームで突進から逃れようと走り出す。

「う、うおおおおお!? 何故だああああ!?」

全力で腕を振り回して逃げるヒューイ。追いかけるモスも小さな弾丸のように間合いを詰め続ける。

「はっ、っは、はっ……!! うわちゃっ!!」

そんな一人と一匹の逃走と追走を捉え続けていたハインツの視界だが、唐突に画面外

へヒューイの存在が消える。厳密には消えたわけではない。フェードアウト。盛大に地面へと転がっていたのだ。

「ばつ、地面にキスなんてしてる場合じゃないぞ！ アレでもぶつかつたらタダじゃ済まないからな?!」

「わ、わかっているっつーに！ あ、でもこれ何か足に絡まってやがる！ ツタの葉かよ、ちぎれねえええええ」

「ツタの葉はちぎるんじゃないやなくて解くんだ！ 何より逃げる時はしつかり地形を確認してからだなあ——」

「言つてねーで助けてくれええええー！」

情けない声を上げるヒューイに、舌打ちするハインツ。素早く思考を回すと、同時に懐に忍ばせていたナニカを取り出し、半身でステップを踏み始める。一步、二歩と、詰めるようにモスに対して身体の軸を合わせる。そして、

「ああくつそ、ごめんよモス！」

投擲。放物線ではなく直線で軌跡を描いたそれは、突進するモスの頭に丁度当たると、その瞬間に破裂した。

——ぶ、ぶひい!?

音爆弾。溪流でも存分にその役目を果たし、活躍した人類の英知の結晶は、眼前の小

型モンスターに対してでも遺憾なくその効力を発揮していた。

強烈な爆発音に全身を震わせたモスは、ヒューイ目掛けて突き進んでいた豚足を止めると、焦ったように山へ逃げ帰っていく。

「……ふう。今のは刺激した君が悪いぞ。おかげでモスに酷いことをした」

「わ、わりい助かった。でもよ、手を出したわけでもないのに、あんなにモスが気が立つてるのも珍しくねーか？」

ため息を付きながら指摘するハインツ。対するヒューイも服の袖で冷や汗を拭いながら、山へと消えていくモスの後ろ姿を見届ける。

「ああ。君の読み通り、早く動いたほうが良いのかもしれない」

同様にハインツも、せこせこと山へ姿を消すモスを見やると、灰色の瞳を一人と一匹に向け直す。

「なんとなくだけどニャー、山全体の様子もピリピリしてる感じがするニャー」

「へえ。ずいぶん抽象的だな」

「なんとなくだニャー。オイラの森でも変わったことが起きると、だいたいあんな感じの雰囲気になるニャー」

「野生ならではの感性ってことか。なるほどね」

ミエールを見据えながら、珍しくまともな意見を言ったものだ。ハインツは感心する

と、更に後方から声が響く。

「待たせたな。出発するぞ」

女御者が三度笠から顔をのぞかせながら、二人と一匹に向けて腕を振っている。

ハインツは描きそこねたクロツキーのページを閉じると、再びハチミツ臭漂う車内へ乗り込んだ。

テリトリー

アプトノスのどっしりとした足取りに並走して、カラカラと回転音を立てながら竜車は進む。やがてハイイツ一行を迎えるのは、一面の淡い黄緑色の波々。豊穡の大地より顔を出した葉野菜の結球。辺り一面に広がるミリオンキャベツ畑だ。

「うっひゃあー！ 見てるだけで涎が出てくるなこりやあー！ アレにふんばりポテトと七味ソーセージを合わせたポトフ……いや、マグマトンのロールキャベツもいいなあ。あーもう腹減ってきた。着いたらまず飯にしようぜ」

流れる景色の中で、連なり続ける黄緑の景色は二人の心を驚掴みにしていた。決して作物を育てるのに適しているとは言えないドンドルマでは、お目にかかることのできない光景だ。途切れない人工と自然の結晶を視覚でおさめながら、ヒューイは口元で溢れ続ける涎を拭いつつ窓から身を乗り出すように顔を出している。

「却下で頼む。でもキャベツが最も生育しやすい冷涼な気候もあつて初めて実現する光景、か。うんいい。これはぜひともスケッチブックに収めるべきだよ」

再びハチミツ酔いしていたハイイツも、ヒューイの溢れ出る熱気に当てられたのか、思わずスケッチブックを開き返そうとする。

「そんなに良いものかニヤァ？」

「モチのロンよつ。モンスターが闊歩するこの大陸で、ここまで大規模な農業^{アグリカルチャー}を推し進められる地域なんて限られるぜ？ そーきな。毛色は変わつちまうが、あのキャベツを全部ハチミツだと思つてみる。どうだ？」

「にやんと！ たしかに最高のニヤァ！」

見渡す限りのキャベツ畑を流し見てもピンとこない様子のミエールだったが、ヒューイの言葉によろやく合点がいったのか、改めて眼前の景色を食い入る様に見つめる。その猫目にはおそらく、キャベツがハチミツに置き換わつて映つているのだろう。

「想像するだけで甘つたるい匂いが……うげ、またちよつと胸焼けしてきた」

「おい、もうすぐで町に入るぞ」

再び青白い顔をするハインツの体たらくを見て、呆れたように振り返つた女御者の一声が響くと、程なくして竜車はスターレの町に到着する。

彼らの前情報通りに町は盛況しており、丁寧な四角いブロックで舗装された道路が竜車を出迎える。長旅の凸凹した悪路から一転、荷車を揺らしていた上下の振動も緩やかなものとなる。

「さーて、まずはどう動くとすつかない」

「考えてなかったのか」

来客用の竜車小屋から書士隊一行が出ると、ヒューイが街の様子を楽しげに吟味する。今回の滞在期間は二日と短期のものだ。しかし、無計画な同僚を見るハインツの視線は冷ややかなものではなかった。

「現場主義が性に合ってるからな。とりあえず俺はキャベツ畑を近くで見てーと思ってるんだけど」

「僕もそれが良いと思う。実際にモンスターの被害にあつた、もしくは被害を受けかけた農家に当たって、直接話を聞いてみようと思う」

行動方針はすぐに決まる。

彼らの最大の武器は好奇心。根つこの部分が同じなのだ。そして、いわゆる”遠足組”と呼ばれる彼らのもう一つの武器。それが”行動力”。

「なら二手に分かれた方が早いなつ。そんじゃ日が暮れる前に、あのレストランに集合なつ」

ヒューイの提案に頷くと、瞬く間にハインツは背を向けて己の興味へ走る。食事どころまでの簡単な仕事だ。少年時代の図書館に通う感覚で、彼の心と足はすでにミリオンキャベツ畑へと向いていた。



街の中心から外れて、目の前にあるのは畑。遠目で見るのとはまた格別の、土と水の匂いがハインツの鼻孔をくすぐる。

「ほーでなあ。最近は何物を荒らしにブルファンゴが増えてのう。困っちゃうんけ」

そんな景観を前に、麦わら帽子を被った人の良さそうな老人と立ち話に洒落込んでいたのは、ハインツが件《くだん》の被害に遭った——厳密には被害に遭いかけた農家を訪れていたからだ。

「ブルファンゴの食性は雑食ですからね。キャベツを狙って来ても不思議じゃない。それでもハンターが退治されたんですよ？」

「んだ。おかげさまで作物を食い荒らされることなく、本当に助かってるんでのう」

穏やかな笑みを浮かべながら、すすすすくと育ち整列したミリオンキャベツを見やる老人は、本当に感謝の念を込めた様子で言い放つ。

「ここ何年か前に農地も拡大して、収穫も順当だったんだがのう」

「未遂だったとは言え、ブルファンゴの被害は笑えた話ではありませんからね。それに農地拡大、ですか」

一般的には小型モンスターに分類されるブルファンゴだが、その分類は以外にも偶蹄目——ケルビヤモスと同じものに分けられる。しかし、その嚙猛さは他の偶蹄目の中でも群を抜いており、今回のような農作物の被害も増えている。小型だとしてもモンス

ターはモンスター。一般人からすれば十分な脅威である。近年では牙獣種に認定し直すべく、声を上げる書士隊員も増えているほどだ。

「町長の意向ですじや。ミリオンキャベツ栽培はスターレの村……ではないのう。町の一大産業になるつとおっしゃられてのう」

「そうですか。あとはブルファンゴが増えた時期に変わったことはあつたりしませんでしたか？」

「変わったこと……どうだったかのう……」

考え悩むように麦わら帽の翁は目を細めるが、天を仰ぐばかりで言葉は出てこない。困ったようにハインツも頬を撫でるが、そのうちに畑の中からもぞもぞとアイルー色が一つ、現れる。

「ぞ主じーんー！」

「どうした？」

「走り回ってたらクモの巣が引つかかったニヤア。取つてくれニヤア……」

短い前足でワシワシと頭を丸めるようにひっかくミエール。それを呆れながらハインツは見下ろすと、仕方なしに

「つたく、申し訳ありませんけど、手袋をお借りしても？」

と、直接ミエールに触れないようにクモの巣を手際よく外してみせる。

「バイキンみたいな扱いニヤア」

「仕方ないだろ。お前に直接触れたら痒くなるんだし」

「ニヤア」

一件目の農家の話はここまでだった。

やって来たブルファンゴの数。その足跡。退治した際の戦鬪の痕跡。そして、遙々やって来た書士隊シヨシタイという不思議な職業の人間に対して、ねぎらいの意を込めてのお土産キャベツ。

「もって行つてくれい。シヨシタイさんや」

「いえ、でも」

これから市場に出されるものは悪いと一度ハインツは断るが、人の良さそうな老人は客人に対して、土産の一つも持たせなくては男が廃ると言つてのける。仕方なくハインツは、年々豊作が過ぎてそのままでは破棄されてしまうという、少し前に収穫された型落ちのキャベツを受け取ることとなった。

「スターレのミリオンキャベツを、これからもよろしくのう」

「こちらにも貴重なお話、ありがとうございます」

常温保存で二週間が賞味期限とされるキャベツ三玉が入った袋を抱えながら、ハインツは次の農家へ向かおうと足を運ぶ。

「三つもなんて太っ腹だニヤー」

「ああ。それだけ、ここの農作が上手くいって話なんだろう。この調子だと、ヒューイは僕の何倍もらって来るのやら……」

食に関しては自分を抑えることをしない同僚を思い浮かべながら、帰りの荷がキャベツだらけになりそうな雰囲気、この時点でハイイツは感じ取っていた。

(だけど……でも書士隊のこと、あんまり知らないのかあ……)

そして、そんな事も考えながら心の隅で肩を落とし、次の目的地へ。



一日目の調査も夜が来れば打ち止めとなる。ちょうど人で賑わい始めるレストラン内の雰囲気は、足での調査を終えて戻ってきた二人には十分すぎるほど、空腹に働きかける魔性の香りだった。

なによりも彼らが惹かれるのが、特産品のミリオンキャベツを中心としたメニューの数々。

熱々の湯気が漂う七味ソーセージとふんばりポテト入りのアツアツポトフに舌鼓を打ちながら、これまたスターレ産のパンブキンパイを頬張る二人。

「あーもうこの町に住みてえくらいだっ。で、農家だけに収穫はあつたかよハイイツ」
「ウケないぞそれ。まあ、ひとまず情報は集めてみたけど足りないよね」

「そりやな。だけど——」

「ああ」

料理に夢中になりながらも思考は回り続ける。書士隊はときに限られた情報でも導いていくしかない。

「ズバリ——」

仮説という形で。

「テリトリー縄張り」

重なるように同じ言葉を吐いた二人は、再び料理を口に運ぶ作業へと戻る。

「ハインツも真つ先に思いついたか」

「まあね。と、言うより君だつて出発前からこれは疑つていただろ？」

「よくある話だからな。開拓に伴つてテリトリーに侵入。モンスターと衝突した村の一つや二つ、聞いた話でも珍しくねえ。しかし——」

一本丸ごと入った七味ソーセージを木製のフォークで刺すと、そのまま豪快にかぶり付くヒューイ。弾力のある皮の歯ごたえとともに現れるのは、香辛料のきいた肉汁たっぷりの肉の層。程良く振られた塩気は仕事疲れの身体に染み入り、食欲を減退させることなく次から次へと口に運んでしまう。

「おそらく原因は農地拡大ではない」

そしてまた二人の口調が重なる。

今度はハインツが口にするのは、少し大きめに切られたふんばりポテト。コンソメ色に染められながらも、型崩れを起こすことなく一品の中に溶け合うそれは、彼の胃袋を掴んで離さない。

「この町長は良く分かつてるぜえ。モンスターの縄張り《テリトリー》をよ」

「僕もそう思う。見る限り、ちゃんと棲み分けがなされてる印象だ。しかも農地拡大の時期は数年前で、ブルファンゴ出現が多発し始めたのはここ数ヶ月。時期が微妙に噛み合っていないのも、この考えに至った要因の一つだ」

「まー証明はできねーんだけどなっ」

「そりゃ好き勝手に言ってるだけさ。なにせただの仮説だ」

そして再びほんのり甘みのあるパンプキンパイに食らいつく。

「困ったことになっちまったなー。アテが外れたぜ」

「でも事実としてブルファンゴは出現し、被害は拡大しつつある。人里側に問題がないとしたら、山の方で異変が起きたと考えるべきか？ それこそミエールが言った、”ピリピリ” しているって」

「んだな……って、そーいやそのミエールはどこ行った？」

「ん？ ああ、あれを見てくれ」

ハインツの指差す方向には一言。
『ペット禁止』

「……お腹、空いたのニャー」

鼻孔に響け

満腹の夜に鳴る鐘。

町の中央に設置された鐘は文字通りの警鐘だった。とうのハインツも認識こそしていたが、気付いた頃には、それは昨日あつたという出来事として。恥ずかしながらも、彼が思い返す頃には既に朝日は顔を出していたからだ。移動時の抗いようなない疲れの塊は、いついかなる時も彼と共に在る。爆睡である。

束の間の至福から醒めれば、すでに日時は二日目の朝。

ハインツが目覚めた場所は、これと見どころのある宿屋の一室ではなく、いわゆる簡易宿泊所ピジネスホテルの中。それでも寝具がある分、野宿より数段マシというもの。豊かな自然に囲まれる冷涼で過ごしやすい環境の町スターレ。朝方はいくぶんか肌寒さも感じるが、ドンドルマとはまた違う優しい風が吹くこの町に対し、どこかハインツは己のいた故郷を想い浮かべていた。

そんな懐かしさに包まれながら、彼の意識は柔らかな目覚めを迎えていた——はずだった。

「なんか……クサイ」

ガバリと簡易寝具から身を跳ね上げると、彼の右手は休息間もなく己の鼻をつまむという行為に対して、驚くほど瞬時に対応してみせる。

思わず口にしてしまうほど異臭が、部屋の中に充満していたのだ。見開いた目で部屋を見渡せば、いつの間にか隅っこで寝かしていたはずのミエールが姿を消している。彼よりもいち早くこの異変に気づいて遁走したのだろう。

確かに心地よい眠りについていたので。それこそ、移動時の疲れも吹き飛ぶような充実した休息時間だった。しかしこの瞬間、ハインツの眉間には深い深いシワが刻まれていた。

「うっ……この、なんとも言えない匂い。まるで——」

振り返るように、部屋に備え付けられた古い木目の刻まれたテーブルを見やると、そこには人の良さそうな老人から貰ったミリオンキャベツが三玉ほど。ハインツが近づくと、彼の鼻孔を逆撫でするような匂いがより一層強まる。何を隠そう、現在進行形で漂う異臭の発生源だったのである。

「……………じょうしよう」

鼻をつまむ手を緩めずにキャベツを覗き込むと、特に外見が傷んだ様子は見られない。明確に変わっていたのは、ハインツの嗅覚へ押し寄せるように突き進む強烈な匂いの群像のみ。それこそ、鼻を摘んでしまう強烈なものだ。

冷涼とはいいつつも、さすがにテーブルの上に放つて置いたのが不味かったのだろうか。そう思いつつすぐに窓を開けるハインツは、昨日一日で回った農家たちの努力に對して、つい申し訳ない気分になってしまう。

寝起きからこれでは意気消沈もいところ。早々にやらかした自らの失態に人知れず情けなさを感じていると、やがてノックもなしに扉は開く。施錠をしないで眠るほど、ハインツも不用心ではなかった。おそらくミエールが表へ出る時に外していったのだろう、と考えていると、開かれた扉から顔を出した青年の正体は、案の定ヒューイだった。あの短くもプニプニした肉球ある五本指で開けるとは、器用な猫である。

「オーツス、おはあ——くっさっ！ おいハインツ臭えぞ！ ちゃんと頭洗ってるのか!?」

威勢のいい挨拶を飛ばす、ホリの深い造形をした青年の顔はすぐさま異臭に気付き、しかめることになった。

「おいやめろ。僕じゃないしノックぐらいいしてくれよ。これがもしリイタさんの部屋だったりしたら、君は鉄騎かギルドナイトあたりの世話になつていゝんだぞ」

当然ハインツも弁解してみせる。起こしたての頭で考えついた軽口も添えてだ。

「さすがの俺だって、拘置所の飯を食いに行くほどの探究心は持ち合わせていねえよ」

「どうだかな。探求のためなら毒キノコだって進んで食う人間の言葉だぞ。もう頭がキ

ノコに寄生されて、おかしくなつていても不思議じゃあない」

「お前も中々言うじやねーか。……つか、匂いの原因なんだけだよ」

軽口と軽口がぶつかり合いながらも、言葉の最後にヒューイの瞳が鋭く光つたのをハインツは見逃さなかつた。もちろん、視線の先は淡い黄緑と白の球体へ。

「これ。キャベツ、野晒しにしといたな？」

「……やつぱりこれが原因か」

強い口調ではなかつたが、糾弾するように向けられた人差し指に対して、思わずハインツも言い淀んでしまう。こと食べ物に関して言えば、彼に妙な勘の冴えや迫力があるのも事実なのだ。

「お前のことだし。どーせタダでもらうのは申し訳ないいゝとか言つて、型落ちの古いキャベツ貰つてきた……つてとこだろ？」

「うぎツ、そんな言い方はしないけど正解だ……」

妙に勘の鋭い、というよりも正解を言い当てるヒューイ。

そう言えばと、以前ヒューイと食事に出た書士隊の一人が、少しだけサシミウオの皮を残した際に大激怒したという話をハインツは思い出す。その瞬間妙に気まずい雰囲気を感じ取る。

が。

「あーあアもつたいね。キャベツの保存はなるべく空気に触れさせないつてのは常識中の常識だぞ。せめて袋詰め、可能な限り密封してやらないと」

特に変わった様子は見られない。手慣れた様子でキャベツを一つ持ち上げ、じつくりと観察している。

「なんだ、怒つてないのか？」

「なんでだよ？ 勘違いされやすいけどよ、臭うだけで腐つてるわけじゃねえ。まだ食えるんだぞコレ」

相変わらずホリの深い人懐っこい笑みを浮かべると、ヒューイはどこから取り出したか分からない、簡素な布を引っ張り出した。

「キャベツつてのはな。イツチオシアネート^かつて成分が含まれてるんよ。だが時間が経つと少しずつ分解されて、ジメチルスルフィド^えつて成分に変わっちゃうんだ」

「へえ、詳しいな。君のこと、ただの見境のない偏食家だと思っていたのに」

「見境あるぜ。あるけど食ってるだけ。まアとにかくこいつは初期段階つてとこだな。匂いが気になるなら、加熱して食べばいい」

そんな食材^{うんちく}蒔蓄を披露しながら、ヒューイはキャベツ一個一個を簡素な布で丁寧包み、袋の中にまとめていく。それを感心した様子でハイソックスは見ている。

「良いことを聞けたな。童車で（間を持たすために）リイタさんに披露する話が一つ増え

たよ」

「ちやーんと情報元は俺だつて伝えてくれよなっ！　これで好感度ダダ上がりつてもんだろっ！　……っーか、リイタちゃん自炊してるのか？」

「その疑問は彼女に失礼だと思うけど」

ハインツが思い出すのは、初めて調査に向かった時の野宿、淡々とした手付きで程良くきつね色に焼かれた肉を量産するリイタの姿。

「こんがり肉の作成スキルなら一級品だったかな。あれは相当手慣れてる」

「はアーツ！　羨まし過ぎるっ。俺もリイタちゃんと一緒に調査行きてえなあ。んで、旅先であの子の焼いたこんがり肉を食いてえ。失敗した生焼けでも一向に構わねえ」

「動機が不純過ぎるな」

「不純で結構っ。食欲こそ人間の三大欲求の一つなのだからなッ」

「はいはい。君に料理上手な護衛ハンターが見つかることを祈ってるよ」

呆れ顔のハインツは、我が道突き進まんと高らかに宣言した同僚の姿を見据えながら、同時にもうひとりの同僚トランプルメカの姿を思い起こす。そして、妙に胃がキリキリするのも感じ取る。その時点で彼は思い出すのをやめた。

「はいじゃあこの話は終わりだ。残りの帰還も短いし、まずは朝飯食いに行こうぜ」

キャベツの梱包し終えたヒューイは、含みを持たせてニンマリと人当たりの良い笑顔

を浮かべると、踵を返して受付に向かって階段を下りていく。その後ろ姿を追いながら、ハインツも跳ねていた寝癖を直しながら続いて下りる。

ヒューイなりの叱咤激励なのだろうか。真意を組むことはできないが、ハインツは隣に居ないドンドルマの護衛ハンターの姿を思い浮かべながら、中断していた再会時の台詞を今一度考え始めていた。

「それにしても強烈な匂いなニャー」

「おい」

そしてひよっこりと足元から、いつもどおり鼻をヒクつかせながら現れたミエールに、ハインツの表情は怪訝なものに変わる。

「オイラ、匂いには敏感なんだニャー。この町に来た時から大変だったのニャ。勘弁してほしいのニャー」

くしくしとヒゲと鼻を撫でると、脳天気な声でミエールは主人に向けて懇願する。

ここで注釈だがミエールは野生にいた獣人族として、生きるための五感が磨かれているのだ。一見、言い訳じみた言葉にも聴こえるが、ニンゲンとしての尺度でモノを考えるのはいかなものだろう。朝のやり取りですっかり目と頭が醒めていたハインツは、キツと睨むのを抑えて代わりにため息をつく。

「ああそうかい。まあ、構いやしないよ。調査の邪魔さえしてくれなければ——」
そして何気なく聞いていた言葉が、彼には引つかかった。

(……この町に来たとき、から)

階段を降りていたハインツの足は止まっている。

(にお——)

いつしか、階段を降り進んでいたはずのヒューイもいつの間にか振り返っており、

「それだっ！」

と、顔を見合わせた。



足が軽くて速いのは、いわゆる遠足組の特権でもあった。引きこもりの自習組とは行

動力が違うのだ。今日を入れてあと二日もある？ いや、もう二日しかないのだと。彼らに指し示されたのはあまりにも短い調査の刻限。これを超えてしまえば、追加連絡しない限りは音信不通、行方不明扱いだ。

ちよつとした興味と思惑から始まった少しだけ長い遠足だったが、彼らの瞳は子供のよように無垢で輝いている。

そんなものだから、時間の流れも感覚的に早く感じてしまうのだろう。いつの間にか時間は昼を越えようとしていた。

「うっしハインツよ。俺らのやることは分かっているなー!？」

真昼の太陽の下、冷涼な風を浴びながらヒューイは両手を腰に当て、高らかと眼前にそびえる山に向かって吠えていた。

「もちろんだ。……でも。久しぶりに作ったから強度とかあんまり自信ないぞ」

対するハインツは、手元でゴソゴソと何かをまくりあげ、しきりにそれを引っ張ったり縮めたり of 作業に身を扮している。

「お前さんの仕事なら信頼に足るぜ。やっぱり連れてきて良かったってなあ」「褒めるなよ。まだ結果も出てないのに。僕は純真だから真に受けるんだぞ」

ヒューイと芝居がかったやりとりをしつつも、手元の作業を怠らないのはハインツ。それを隣で、手が痒くなるからという理由で、体ひとつ分はなれた位置で座らされてい

たミエールも見守る。

「すごい手際だったのニヤー！　まるでハンターみたいにササツと作ったのニヤー！」

「……手先がちよつと器用なだけじゃハンターにはなれないよ。でも、褒められてるのなら不思議と嫌な気分はしないな」

これから彼らが行うのは、仮説に伴う検証作業の一部。その第一歩。

そして、何事も形から入りたがる男だったヒューイは、語気を強めて彼と、彼らを鼓舞した。

「……さア、ブルファンゴ・ハント仮説検証と行こーじゃねえか！」

ブルファンゴ最前線

(……この人達、一体何やってるんだろ)

そんな心の声を呟いた少女は、ますます熱を上げる書士隊二人を差し置いて、少し離れた位置から戸惑いの念と明らかな温度差を放っていた。

先ほどまでのシヨシタイという人種二人のやり取りをボーッと見つめながら、少女の華奢な腕はライトボウガンを抱えている。

「撒き餌の準備はできたかミエール」

「アイニヤー！ でも鼻がひん曲がりそうだなヤあ……」

少女の不思議なものを見るような目線も何のその。テキパキと指示を送るハインツという青年に、文字通り鼻を曲げながら布のような何かにくるまれた球体を運ぶミエールというアイルーの姿。

撒き餌と言うからには、獲物をおびき寄せるための道具なのは確かだろう。それが痺れ生肉であったり毒生肉であったりと、ハンターが用いる共通規格ではないのも確かだ。

「あの……ウチが代わりにやろうか——？」

「だつ、ダイジョブなのニヤー！　ご主人がくれたこの大役、果たさずして何がアイルーの端くれニヤあ」

「そ、そう……」

仕事を取られると警戒したのか、ミエールは球体を運ぶ足並みを早める。この主人と謳うハインツの指示に対して、嫌な顔せず……というのはいすぎであるが、ミエールは強烈な匂いに耐え忍びながら健気にも仕事をこなしていた。そんな姿に感心しつつ、少女は己の役割に準ずることにする。

この少女こそ、今回の彼ら二人の護衛に抜擢されたハンターであり、同時に今回の聞き手役に抜擢されてしまった人物でもあった。

まずこれから二人（と厳密にはもう一匹）がなそうとしているのは、大捕物の如く刺激的かつ命がけの行為だという点は、否定しようのない事実である。

作戦名はヒューイという書士隊員が声高らかに挙げていた、仮説検証——ブルファンゴ・ハント。

あまりにも直球なネーミング。その名の通り、これから彼らはブルファンゴを捕獲してしまおうというのだ。

「捕まえるだけなら、ウチの麻酔弾を使ったほうが早くない？」

少女の口から思わず零れてしまった言葉。いくらブルファンゴが獰猛な牙獣種の一

角に数えられるとしても、相手は小型のモンスターに過ぎない。スターレの町所属のハントーとして日々を過ごす少女の感覚では、大仰な準備を要する相手とも到底思えなかった。それは常日頃から、町のブルファンゴ退治に身をやつしていた少女ならではの感覚でもある。

「ごもつともな意見だね。当然麻酔弾の出番はあるんだけど、今回は捕獲そのものが目的じゃないんだ」

「え？ 捕獲が目的じゃないって。じゃあなんでウチを雇ったの？」

なおも不思議そうな目線で書士隊一行を見る少女は首をかしげる。その様子にハイソツもなにか察した様子で

「……もしかしてヒューイ。契約する時の説明、ちゃんとしてないだろ」

と、不満そうに声を漏らす。そして少し遠くに位置したヒューイからは

「説明したした。ちゃんんと、”ブルファンゴから俺達を守ってくれ” ってたなア」

と、悪びれた様子もなく答えが返ってくる。

「簡潔過ぎるだろつ。その理由が大事だったのに」

「えつと……よくわからないけど、ゴメンナサイ」

そんな少女が何が悪いでもなく謝ってしまったのは、ブルファンゴ捕獲という任務に見合わないような報酬の良さに心を惹かれ、二つ返事で快諾してしまったのも一つの要

因である。

「いや君のせいじゃないから大丈夫。アイツが大雑把すぎるのが問題なんだ」

呆れた様子で口を尖らせるハインツだったが、その手は止まることなく仕掛けの大詰めに入っていた。少女目線で見ても、やけに小馴れた手付きでだ。

「……じゃあ、改めて説明させて欲しい。つまるところなんだけど、今回は捕獲という結果じゃなくて、捕獲に至るまでの過程を重視してるのさ」

切り替えるように声色を柔らかく変えたハインツは、頭上にクエスチョンマークと混乱の空気を浮かべる少女ハンターへ優しく言葉を紡ぐ。

「か……家庭？」

「ん？　そう過程」

そして一瞬の間が落ちる。妙な噛み合わなさを感じたハインツだったが、深く追求せず言葉が続けようとする。少女も新たに疑問を口にするのではない。話が長くなりそうだと本能的に感じたからだ。

「まずはじめに。なぜ最近になって、ブルファンゴの被害が急速に増えたのか。最初は農地拡大からくる縄張り問題かと思っただけで、どうやら事情が違うみたいなんだ」

「え、そうなの？　ウチらの間だと、町長が考えなしにキャベツ事業拡大したせいだーって、もつばらの話だったよ？」

「ニュアンスは間違つてないけど、町長の名誉のためにも話しておくよ。この町に限った話ではないけれど、他の村や町では、いわゆる“里山”がモンスターに対する緩衝材になっているんだ。正確に言えばキャベツ畑も“里山”に含まれるんだけど、この町ではぎつくり二層の里山体制を敷いていた。素直に徹底してるんだ。で、ここで例を挙げると、

①スターレの町↑↓②キャベツ畑（里山）↑↓③人の手が入った雑木林（里山）↑↓
④ブルファンゴ達の生息する山や森

ってな具合に、人とモンスターの合間に里山が、ある種の境界線を引いてくれている」言葉だけでは足りないと思ったのか、ここでハインツは久方ぶりに出番のなかつた愛用のスケッチブックを用いて、少女に対して説明しようと試みる。

「そ、そうだったんだ……。じゃあ、なんでブルファンゴは畑まで降りてくるようになったの？」

お世辞にも上手い絵とは言えないが、それでも形がある分、少女の頭にはすんなり入ったようだ。そして、新たな疑問符を浮かべる少女の“これは聞いても問題ないだろう”と思つた問いに対して、良いところを突いたとばかりにハインツの口角はニヤリと釣り上がる。

「そこなんだよ。本来、里山みたいに”人手の入つた場所へは野生動物やモンスターは

踏み入りたがらない”。そんな物理的な境界線が敷かれている中で、ブルファンゴが畑まで進出するようになった原因。この一帯は特に飛竜や中型以上のモンスターとは無縁の土地だ。新たにモンスター同士の縄張り争いが勃発するとは考えにくいし、なによりそういった話なら君らハンターにすぐ流れるはずだ」

モンスター事情に関しては現地のハンターほど情報に富む者は早々居ないだろうと、ハインツの視線はそのまま少女に向けられる。少女側も納得したように頷くと、

「……たしかにドスファンゴが現れたなんて話、ウチも他の子も聞いてない。じゃあ、ウチらのキャベツ畑に問題はなくて、でも山側のモンスターたちにも問題はなくて……あれ？ つまり、どういうこと？」

と、納得したかに思えたがやはり途中で混乱し始めてしまう。その様子を見て苦笑するハインツだが、見かねた外野からは野次が飛ぶ。

「長つたらしい説明に定評のあるハインツ君よ。いったんぐて、そろそろ始めよーぜー」
しびれを切らし始めているヒューイだった。

「おいそこ。今の説明は君の仕事だったろ。……つまり、これからやることは——」

それは明確な推理ではない。ただの仮説であり、証明するためにブルファンゴ一匹をとつ捕まえてしまおうという、これが推理小説ならば邪道甚だしい強引なやり口だった。調査手法としては美しくない。がしかし、そんなことを言っていられないほどに、

残された時間はあまりにも短かった。

「……つていうかね、もう来てるんだなあこれがっ！」

ヒューイのダメ押し的一声。

彼の視線の延長線上で姿を現していた。焦げ茶色の硬そうな表皮に、顎骨から突き出るように伸びた白い牙。スターレにやって来た二人を出迎えたモスよりも一回り大きい、森のお騒がせ者。ただいま町のハンター総出で撃退にかかっていた——牙獣の一角、ブルファンゴ。

「……それを早く言ってくれよっ！ 準備はっ」

「完了ニャー！」

「ウチもおっけーですっ！」

焦りはあるが素早く反応、思考を切り替える一行。元野生のミエールも、ハンターである少女もその辺りの心構えは実践慣れしている。冷や汗をレザー装備の下で噴き出させていたハインツも、自身の体が普段どおりに動かせることを確認した。

相対するは、興奮した様子で前足を地面にこすりつけるように蹴るブルファンゴ。作戦開始の合図などはない。それはただ、結果を求めるための検証作業なのだから。自然相手に能動的にコトを進められるなどは、初めから考えてもいなかった。

——ブツヒイヒイヒイヒイヒイヒイ!!!

蹴られた前足が構えから推進力に変わったときから、作戦は始まっている。モスとは比べ物にならない猛猛さ。そして種族的な骨格からコンパクトにまとまった筋肉質な全体像^{フォルム}。その血走った眼は、ただ一点に向けられ、迫っている。

「行つたぞハインツ！」

「広げろおおおおおおおおお！」

「ニャアアアアアアアアアア！」

散開していたヒューイが声を張り上げる。

ハインツとミエールも、ブルフアングの進行方向に対して直角に、それぞれ逆方向へと走り出す。その手には、先ほどまで丁寧に伸び縮みを確認していたとある道具^{アイテム}。一人と一匹を挟んでバサリと真横に広がっていくソレは、竜車は急に止まれないばりの速度で突き進むブルフアングの前に立ちはだかった。

そして程なく接触。

「も、持つてかれる——！」

「ニャニャニャあー！」

接触。接触。そして、接触し続ける。突進の威力を殺すように接触し続け、ブルフアングの進行を妨げるモノ。伸縮し、絡め取るは狩猟用に用いるアイテムが一つ。

”ネット”。

モスと遭遇した際にヒューイが足を取られたツタの葉を回収し、ミエールの絡まっていたクモの巣で補強した、ハインツお手製の物。

ハインツとミエールの一人と一匹がかりで、ネット越しのブルファンゴを抑え込もうと踏ん張るも、馬力の違いから足がずるずる地面を削りながら、少しずつ撒き餌側に引つ張られていく。

「良い強度じゃねえか！ ハンターちゃん出番よろしくっ」

「まかしといて！」

そんな異種間の綱渡りに結末を告げるのが、ズガン、と一回だけ小さく響く銃声。軽弩の先端に取り付けられたサイレンサーが、森へ残響音が伝播するのを防いでいる。

少女が引き金を引いて放たれた捕獲用麻酔弾がブルファンゴの脇腹に命中すると、突進し続けていた焦げ茶の動きが止まる。やがてブルファンゴは豪快な寝息を立てて沈黙。狩猟用の麻酔弾だ。ちよつとやそつとの刺激では目覚めない。

「……まずは一頭」

握りしめていたネットを持つ手を緩めると、額の汗を拭いながらハインツがポツリと呟く。

「ヒューイ。これを後、何回やるって？」

「あと半日、日が暮れるまでずっとだ！」

「正気かよ」

「あの。ウチこれ、効率悪い気がするんだけど……」

そんな少女の問いに対して、片や引きつった笑みで、片やニヤリと不敵に笑い、

「大正解」

と、とてもニュアンスの異なる同じ一声を返した。

少女はげんなりした顔を……依頼人である二人に対して見せることはなかったが、代わりにもう一つ尋ねることにする。

「このブルファンゴ、撒き餌に向かつて真っ直ぐ進んでは。この撒き餌って何なの？」

初めにミエールが鼻を摘みたい気持ちに駆られながら仕掛けていたもの。ブルファンゴがそれに向かつて突き進んでいたのは、その場に居た少女を含めて全員が明確に感じ取っていた。

だからこそ、今度こそ二人は手応えを掴んだように堂々と、

「キャベツ」

と、答えるのであった。

黄緑の風に誘われて



視覚的に縄張りテリトリーが重なっていないのならば、別の何か境界を飛び越えているとい
う。もしもの話をしていた。

およそ半日で”撒き餌”に引き寄せられたブルファンゴの数は、彼らの両手で数える
には足りないほどに達していた。撒き餌から罠（手動）の陣を組んでいたとはいえ、予
想を超える数に対して、ハインツはもちろんヒューイですら疲労の色がにじみ始めてい
た。しかし、気を抜けば命にも関わるモンスターへの対処。一匹一匹への対応は至極丁
寧に行われ、腹を空に向けて眠りこけるブルファンゴの山が続々と出来上がっていく。
稀にその山の中にはモスが紛れ込むこともあるが、それも誤差のうち。

順当にブルファンゴを捕獲され、眠りこけているうちに最終的には森へと還す。二度
ほど二匹同時にブルファンゴが現れた際は流石に彼らの肝を底冷えさせたが、そこは少
女ハンターの腕の見せ所。麻酔弾と手投げ式の麻酔玉を器用に使いこなすと、たちまち
小型の牙獣を深い眠りへといざなつてみせた。想像以上に少女ハンターの手際が良

かったのだ。

そんな根気のいる作業を終えた書士隊一行。何度もブルファンゴの突進を受け止めた続けた秘密兵器も、何年も使い古した道具の如くボロボロになっている。それでも勿体ないからと、ネットは丁寧にとめられ、ミエールの小さな背中に背負わされていた。

「また機会があれば、ご鼻屑にー」

そんな別れ際の挨拶を最後に、期待以上の活躍を見せてくれた少女ハンターへ多少の礼金と報酬をギルド越して支払う二人。報酬に目を輝かせて去っていた少女を見送ると、彼らはゆつくりと総括に入った。

「さて。撒き餌は十分すぎるほど効いていたみたいだね」

ハインツが述べると、ヒューイも同意するように首を縦に振る。

断片的な答えは、はじめからある程度示されていた。

ただそれを鵜呑みにして相手へ突きつけるには、書士隊という人種はあまりにも回りくどいやり方を選択せねば気が済まなかったともいえるのか。

「明らかに採れすぎって話だなア」

急激な生産量の増加。

表向きの聞こえは良いものの、この大陸の交易路は限りなく陸に依存しているというのが共通認識だった。それもモンスターがどこどころで闊歩する世界である。大抵の町や村は周辺に険しい山がそびえていたり、丘があったりと難攻不落の立地も良いところ。人とモンスターの境界線がどこかに必ず存在するのだ。

ならば。生産——供給に対する消費はどこに存在するのか。

一つはスターレ全体で。もともとの目的が自給自足なので当然とも言える。そんな村から町へと成長を遂げたスターレは、更にそこから糸状に広がる繋がりを、交易という形で他の村や町へと伸ばしていた。

だがしかし、ハンターの活躍で安全な陸路が開拓されつつあるとは言え、各拠点を繋ぐ線はあまりにも細長い。おまけにキャベツは常温保存に向かないし、鮮度が命の生鮮食品ときている。いくら交易の糸が伸びたとしても限界があるのだ。

膨張する生産量に対して、消費の限界は遠からず訪れていた。供給が消費に対してオーバーフローを起こせば、残った余りは切り捨てられるのが常。つまるところ、ハイנטツが農家の老人から受け取った、型落ちのキャベツが答えの一部でもあった。

「旬を過ぎたべどきちまったアブラナ科の旬フルベいは強烈だ。廃棄するつたつて、方法を選ばないとなあ」

「町長の苦肉の策で、余ったキャベツは肥料に回していたらしいね。でも、土壌で分解さ

れるうちに強烈な匂いになって、余計にモンスターたちの神経を逆なでしていた、つてところかな。しかも肥料キャベツのおかげで、更に生産量が増えたときている。うん、なんとまあ……」

「有能なのか無能なのかわからないのニャー」

「まるで君みたいだ」

「ニャー？」

五感に響くのが視覚でなければ、聴覚や嗅覚。

ニンゲンの何十、何百倍と敏感な嗅覚には、余計にそれが響いてしまったのだろう。初めに相対したモスをはじめとして、やけにモンスターが興奮していたのも、ニンゲンの嗅覚ではわからないほどのアブラナ科の刺激臭が山や森にまで及んでいたから——と、言うのが彼ら二人が考え出した答えだった。

「でもさ、証明したところで解決策なんてあるのかい？ さすがに生産量を減らせなんて言えないだろ」

「贅沢な悩みつてとこだよな。でもそーさなア。不用意に生産量をコントロールしようとするのはナンセンスだしよ」

「恵みは受け入れてこそだニャー」

過剰生産がもたらすのは、なにもブルファンゴだけじゃない。供給過多における市場

市場の変動。卸売価格の下落が引き起こる。豊穰の恵みのはずが、恵まれすぎても良い結果に転がらないとはこれいかに。

「要はどう対応するか、だね。手っ取り早いのは、キャベツの消費先が増えることなんだけど……」

「こいつは俺でも食いきれんしなあ。採れ過ぎちまったもんはしょうがねえよ」

彼らの座る椅子の目の前には、今回の件の発端となったキャベツがころりと、黄緑色の艶を輝かせながら転がっている。

「それでも破棄するにしたってさ、処理を間違えればまたブルファンゴを呼ぶことになるんだぞ。今はまだ畑までだから良いけど、これが町にまで来るとなったら……笑えないな」

畑の被害だけであればまだ良いほうだ。これが人里まで降りてきて、人的被害にでも繋がってしまったら、それこそ取り返しつかない事態になってしまう。

そうなると、もはやハンターのみでの対処が追いつかなくなるのは時間の問題。

町の安全のために建てられた警鐘が、畑から自らへ降りかかる恐怖により鳴らされる日が来るなんてのは、冗談で笑い飛ばせる事実でもないのだ。

「ふふん、心配すんな。そこで名案があるっ」

そこで妙に自信ありげなヒューイの発言に、ハインツはあまり良い予感をしないで耳

を傾けた。

「名案？」

とりあえずハイソックスのレスポンス。言うだけ自由なのは何処の世界でも同じだ。聞くだけ聞いておくのも良いものだ。

名案。もしもそれが本当ならば、今後のスターレの明暗が分かれる。下手な意見だったら脇腹を小突いてやろうと頭の隅で考えていると、ヒューイはしたり顔で、

「それはな……」

と、意味ありげに呟いて――



今でこそまん丸の黄緑色にまとまった球体。そんな姿を彷彿させるが、そこに至るまでいくつもの困難があつたことか。

キャベツ。アブラナ科・アブラナ属の多年草。

「参加大歓迎、スターレのキャベツ祭り……」

お世辞にも上手いとは言えない、キャベツらしき絵が書かれた紙切れヒの一枚を偶然拾い上げていたリイタは、書士隊支部の木製イスに腰掛けながら目線のみ動かして内容を静かに読み上げた。

キャベツといえば、あのキャベツ。それも良質なキャベツ生産で有名なスターレのキャベツ。きつと美味しいに違いない。そんな風に想像が膨らむくらいには、スターレも名の知れた名産地だった。

口の中でヨダレが滴るのを、その見えない表情の中で必死に隠していると、見慣れたクセ毛の青年が近寄ってきたことに気が付く。

その気配に対して人知れず彼女は気まずい雰囲気、さらに表情の奥へと隠そうと密かに努力した。

「や。こんな昼間から呼び出してごめん」

首元のよれきつた麻のシャツに、下半身は工房謹製のグリーンジャージと、やけに中途半端な格好をした姿のハインツが声を掛けると、リイタは何事もなかったかのように会釈する。

「あ、それ拾ったんだね」

「うん。ドンドルマ中でアイルーが配り回ってて。……ミエール君もいた気がする」

リイタの持つ紙切れの存在に気付いたハインツは、少しだけ自信ありげな顔を見せた。

「この絵、ハインツさんが描いたもの？」

「正解だよっ！ よく分かったね。やっぱり僕の絵だつて分かるほどには、味わいというものが滲み出てきたのかな？」

「……え？ ……はい、まあ（あまり上手じゃないからつて言うのは、言わないでおう。メンドクサそうだから）」

リイタの言葉がお世辞だと気付かないハインツは、彼女の持つピラを見て酷く満足げに笑つてみせるのだが、その表情も徐々に暗くなつていく。

それがヒューイの語る名案の結果だというのだから、ハインツとしても気が気でなかったからだ。

「この前スターレまで少し足を伸ばしてね。その結果がこれなんだ」

「……知ってる。私はその間、謹慎してたから」

「う……。そ、そうだったよね」

リイタの発言に、ハインツは少しだけ場の雰囲気为重たくなるのを感じる。が、それは彼女側も同じだった。もちろん表には出さない。こんな事を言いたかつたはずではないのだと、彼女も常々感じているのだ。

暗い話題に持つていくのは避けたかったハイנטツは、なんとか明るい話題へ持つていこうと話を続ける。出会い頭にマイナス方面へ気持ちを持つていかれては、たまつたものではない。

「それ、その紙切ヒれラさ。今ならスターレに行くだけで、キャベツが食べ放題らしい——山ほど」

「じゆる……あ」

「じゆる？……つまり、消費を外に持つていくんでなくて、外から来てもらうことにしたのさ」

「……消費？」

いつもの癖で話をしたハイנטツだったが、そこで事情を知らないリイタの頭上からクエスチョンマークが浮かび上がるのは当然だった。

慌てて訂正しようと、彼は喋りたがりな己の口を片手で塞ぎにかかる。

「ああごめんっ。こつちの話だ。今日はそんな話しようと思つて来たわけじゃないんだつた」

「……ん。そこで切られると、逆に気になります」

中途半端に話し始めたハイנטツも悪いのだ。すでに、リイタの謹慎明けの好奇心には、僅かばかりだが火がついてしまった。退屈しのぎの話題供給を、表情を崩さないま

ま物欲しそうな目で彼に訴えかけている。

ここで話してしまおうか悩むハインツだったが、無言で突き刺さる少女の碧眼は、思わず彼に話をさせたくなくなってしまふ輝きを持っていたのも事実だった。やがて観念したようにハインツは口を開くと、

「……これがまた困った話でね。いや、僕らは消費の手段を考えていただけのにさ——」



「祭りだッ！」

「……今、なんて？」

ヒューイの発言に対して思わず空いた口が塞がらなかつたのは、およそ一週間前のハインツ。

「祭りだよ。フェスト、フェスタ、マハラガンツ！ 楽しい楽しいお祭りだ」

「いや意味は知ってるよ。だけど何が祭りなんだ？ もしかしてブルファンゴ祭り？ だったら笑えないぞ」

冷静に考えてもヒューイの言っていることに理解が追いつかなかつたハインツは、いよいよ脇腹をランスのごとく小突いてやろうと指先の力加減を始めていた。

しかし、ヒューイはやはりニンマリと人懐っこい笑顔を浮かべると、勢いよく言葉を舌上に乗せ始める。

「消費の限界なんて贅沢だつて話だよ。むしろこの町はまだ伸びしろがある。これからもっともつと大きくなってもらおう。そのための祭りだ」

と、断言。何かしらのレスポンスを返そうとハインツも言葉を挟もうとするが、構うことなくヒューイが続ける。

「まずは宣伝が必要だ。この供給過多なキャベツの消費先、交易の細かい繋がりだけじゃ勿体ねえ。むしろ、消費しに来いよつてなア」

「君が何を言いたいのか、まだ理解できないんだけど」

「まあ話は最後まで聞けつて。現状ではたしかに限界があるだろうに。だがな、そりや対価が必要だからだ。要するに金、ゼニー」

「そりやそうだろう。苦労して育てた作物だ。そこに対価はあつてしかるべきさ」
「そう。だから、祭りの日はタダにするっ」

「……んん？ 今、なん」

「タダ。NOゼニー。無料でキャベツを提供しちまうわけよ」

「……」
「ここでようやく、ハインツはヒューイの意図する場所が見えた気がした。それでも素直に飲み込むことはできなかつたし、これから何を言い出すのか心中穏やかではなかつ

た。

「……つまり、集客を図るってことなのか？」

「正解だツ！ ……でもな、今は無理だ。この町な、強みがキャベツ以外全く無いからなツ！」

「うげ!!」 声が大ききぞつ。町の人から袋叩きにされたいのか？」

ハインツの予想通りに過激な発言が飛び出したが、ヒューイは気にせず言葉が続ける。

「だから俺の知識をフル活用させてもらおう。……伊達に食べ歩きしてきた訳じゃねえつてとこ、お前にも教えてやんよ」

「拾い食いの間違いじゃ？」

「くつくつく。細かいことは気にするな。キャベツまんじゅうにキャベツクッキー。キャベツケーキもありだなア……。とにかく、あらゆるアイデアから作り出すキャベツの加工品で、無料^{タダ}って言葉に吸い寄せられた観光客や商人たちを迎え撃つんだよオ……！」

人懐っこい笑みは、いつからか怪しい悪人面のソレになっていた。むしろ、そのアイデアの品こそ食してみたいという、彼の願望の表れとも言えるだろう。

この方法で消費をオーバーフローから引き戻し、正常化させる。健全ながらも賭けに

近いキャベツ事業のさらなる拡大を、このヒューイという男は提案してみせたのだ。

こんな突拍子な話を、これから報われているようで報われていない不憫な町長に話に行くと思うと、ハインツも気が気でないというものだ。

そして結果として、この案が採用されてしまうなどとは、彼としても予想外の出来事だったのが余計に。



事の顛末を、かくかくしかじかと話し終えたハインツは、未だ拭いきれない引つかかりがある様子を残したままブツブツと呟いていた。

「くそ本当に。まさか採用されるなんて。あの時のドヤ顔、少し腹が立ったなあ」

「ハインツさん?」

「あごめん。これもこつちの話」

なんとか気持ちを切り替えたハインツは、一週間前の自らの思考から、目の前で話を黙って聴いていたリイタに向けて現実の焦点を合わせる。

「なんとなく、わかった。じゃあヒューイさんはまだスターレに?」

「ありがたくないことにね。町中の人たちを総動員して、あいつの願望を形に変える作

業に移っているよ。まったく言い出しつぺはあいつなのにさ、こつちに戻らないもんだから代わりに事後処理——書士隊のツテを渡つてビラを作つてもらつたり、配る手配までしたりと、骨を折る羽目になつたんだつ。はあ、これお土産ね」

遠い目をしながら短いようで濃い日々を振り返るハインツ。そんな彼が手渡すのは小さな白い紙袋。

書士隊の青年がやけに不機嫌な理由の一端を知つたりイタは、ポンと手渡された袋の中身を覗くと、

「……これ、クツキー?」

と、中身を確認した。クツキーはクツキーでも仄かな黄緑色が目を引き、かつ優しい匂い彼女の鼻孔を掠める。

「キャベツクツキーつて言うらしい。悔しいけど、これがまた美味しいんだ」
「……いい匂い。あとで、いただきます」

クシャリとハインツの手が自らのクセ毛を掴むと、彼の言いようのない気持ちの捌け口となる。今回の案は、少なくともハインツには出せなかつた対応策とも言える。別に競争しているつもりはないが、それでも一本取られたという気持ちがあつたのだ。

「ヒューイさんらしい答えだね」

「まったくだよ。まあ、町一つ巻き込もうなんて豪胆すぎるとは思うけど」

キャベツクツキーの仄かな甘い香りのおかげなのか、いくぶんか鉄面皮の薄らいだリイタの淡い碧眼は、ハインツの灰色の眼へと向き直る。

「私も、一緒に行ければ……」

「謹慎が解ければ行けるさ。センセイもそこまでオニじゃない。むしろ君には甘いところあるし」

「……」

少しだけのリイタの表情は暗くなる。また場の雰囲気为重くなりかけるのを感じ取ったハインツは、ここで切り出すしかないと思った。それが今日、彼が彼女をこの場に呼出した最大の理由でもあったからだ。

「つまり何がいいたいのかって言うと、僕らには足りてなかったものがある」

「足りてないもの……実力？」

「そんなもの一朝一夕で身につくわけないだろ？ もっと現実的に。作戦会議だよ。ご飯でも食べながら、次の調査に向けて作戦を練るのさ」

その内容は、常日頃からリイタがハインツに対してボヤいていたように、簡潔に締めくくられていた。

「作戦……」

「僕が囿になるのはナシの方向ね。まあその、まずはね。反省会をしたいんだ。この前

の溪流の話」

まさかヒューイの提案した食事に誘う、を實踐するだなんて。ドンドルマ不在の彼に對してハインツがやけに不機嫌だったのは、これも一つの要因。

「お互いにスツキリしないと思つてさ。あのとき、こうすればよかつたなんて話は女々しいのかも知れないけど、僕は必要かなつて。だからご飯を食べながらでも話をしよう。……ついでに愚痴も聞いてくれたりすると嬉しいんだけど」

一通り言いたい言葉を並べ終えると、期待と不安の入り交じる顔色で、ハインツの正直な気持ちを伝えた。そして、

「……ハインツさんが言いたいことは、なんとなく分かりました。でも愚痴は、長くなりそうなら聞きたくない、かも」

素直なのは、リイタも同じようだった。

「長くならないように善処するよ」

考え悩むようにリイタは視線を空に向け逸らすと、一拍おいてもう一度ハインツに向き直る。

「でも。私も必要だと、思います。次は絶対、守るために」

「……毎度仕事熱心で関心だよ。でも、そうと決まれば今日は僕の奢りだ。パーツと話して、次の調査に備えよう。次こそ僕が無傷で帰れるように、しっかり護ってもらわな

きや。もちろん君にね」

「——っ、……うん」

その瞬間だけ、妙にあつたよそよそしさという壁が薄らいだ気がしていた。久々に明確な感情を乗せたリイタの一言は、ハインツにとつて酷く心地の良いものだったからだ。



人はそれをキャベツと呼んだ。

今でこそまん丸の黄緑色にまとまった球体。そんな姿を彷彿させる言葉だが、そこに至るまでいくつもの困難があつたことか。

キャベツ。アブラナ科・アブラナ属の多年草。

成長に伴い葉が丸くまとまり、結球して成長していく。

その中でも選ばれた品種が名乗ることを許される、いわゆるブランド名というもの。

その織りなす葉の層は、数々の農家の夢や挫折、理想や苦悩の歴史が積み重なり、ようやく完成にまで至つた軌跡の一品^{ひとしな}。

歴史に染み込んだ血と汗と涙。文字通り努力の結晶。

多少、収穫時期にブルファンゴが顔を見せるようになるのは、その恵みがいかに豊富であるかを裏付ける証拠ともいえる。

最高のみずみずしさと食感、菌触りは、食べた者をいつときの至福へと誘う。

「一応僕のおすすめはサイコロミートと付け合せの——」

スターレでのブルファンゴ被害件数が減ったのは、また少し先の話。

つづく

▼レポート5：『オーバーボードにご用心』 嵐の会談

「例の件だツ、本当に考え直す気はないのだな?！」

既に会談の行く末は噴火寸前であつたし、その声色に戸惑いと困惑の念が多分に含まれていることは火を見るより明らかだつた。見開いた瞳のまま改めて意思を確認するように発した声は、来客用の机を挟んで椅子ソファ背中を丸めて座っていた一人の老人へと向けられている。

そんな鼻息を立たせ声を荒げる困惑の主とは対照的に、向けられた威圧に対して老人は、どつしりと腰を据えながら対面を凝望ぎやうぼうする。

「前にも言った筈ですがのう。その件なら、正式にお断りさせて頂いたと」

老人が毅然とした態度で返事をよこすと、困惑の主は気に触つたのか、隠す様子もなく表情に遺憾と苛立ちの色が滲み出る。

「それこそ前の話というものだつ。すでにドンドルマ中で噂になっているのを、書士ともあろう者が聞いていないとは言わせんぞ? 単独でロアルドロス二頭同時狩猟などという快挙、無視できるわけもあるまい!」

えらく興奮した様子で話を続ける困惑の主は、新しい宝の地図を発見したかのように瞳を輝かせ、同時に過分な期待を惜しげもなく言葉に詰め込んでいた。

このドンドルマで個人商會を開き、事業を広げ続け議會の一員にまで上り詰めた人物である困惑の主は、純粹無垢な子供のよう^にに夢中で彼女が成し遂げたと言われる快挙を、それはそれは都合の良い形で想起していたのだ。

「単独で、は語弊がありますぞ。こちらも書士の一人と一匹が付いておりましたゆえ。その話、随分と立派な尾ヒレがついているご様子では」

断られるはずがないと、困惑の主も心の何処かで決めつけていた部分があったのだろう。そんな企みを腹に抱えてドンドルマ書士隊支部へ立ち寄っていたのは、老人側だって百も承知していた。こじれてきた話し合いの中で呆れた様子は見せずに、いかにもな皮肉を老人は込めると、なおも毅然とした態度を崩さずに言葉を返す。当然、困惑の主も黙つてはいない。

「尾ヒレも何も事実なのだろう？ 書士の一人や一匹が付いたところで大した戦力にはなるまい。むしろそんなお荷物を背負つて——おっと失礼。しかし実際に水獣を討ち果たした当人は彼女なのだ。記録は嘘をつかん。彼女には、その資格があるっ！」

聞き捨てならない単語が発せられただけに、少しだけ老人の目尻が釣り上がる。が、痛いところを持ち出してきたのは大きな間違いでない。ジョン・アーサーの失踪以

降、彼のようにハンター兼業の猛者は数えるほどしか居ないのもまた事実だった。

護衛ハンターの実態を知る由も無い、この場にいる困惑の主からすれば、書士の護衛なんてものは面倒な王国製の荷物を抱えた状態と同義なのだ。だからこそ、その間違つた認識を正したいという気持ちに駆られる老人なのだが、今の論点はそこじゃない。釣り上がりかけた目尻をシワのたるみで押し戻すと、朗々と老人は言葉を返す。

「……そうは言いますが、根本的に経験が足りんのですよ。あやつは最近砂漠の地を識つたばかり。まだ火山にすら出入りしておらぬ、文字通りの新鋭^{ルイキ}。まだまだ識るべきコトが、モノがある。早熟ですらない時期尚早。今しばらくあやつには時間が必要、というのがワシの——ワシらの答えですぞ」

老人は言い終えてから、振り向きざまに後方で待機していた彼の秘書的存在の女性を一瞥する。視線に気づいた秘書の女性もまた、言い合わせるように無言で頷いた。

困惑の主はグヌヌと下唇を鼻の頭に付きそうな勢いで持ち上げると、ここで更に戸惑いの声を震わせるに至る。

「け、経験が足りないのであれば尚の事！ 一護衛に甘んじさせておいては、ダイヤの原石もくすんでしまうだろうつ。第一にだッ、彼女が付いているというその書士とは何者だ？ ただの末端だと聞いてるぞ？ そんなお荷物を抱えていては、彼女の才能が活かしきれぬとは思わんのか?!」

さきほど困惑の主が言いかけた言葉は、結局飲み下されることなく飛び出てきた。今度こそ明確な悪意を持って言い放たれてしまったと言える、その言葉の意味。

老人は黙って困惑の主を見やると、視線を再び左後方へと移す。すると後方に控えていた秘書である女性の視線が、刺さるように老人の丸い背中を射抜いていた。無言の圧力である。

「耳の痛い話ですな。しかしこれも、あやつらの成長を願ってのこと。その話、何年か後であれば喜んで受けましようぞ。そちらの手を煩わせるまでもない。今度はこちらから推薦させていただきましょう」

「それでは遅……いやなんでもないつ。ああ！ 何と勿体ないことかつ。優秀なハンターは貴重な資源と同義！ 可能性の芽を潰すとはまさにこのことだつ！ 勿体なくて敵わんつ」

困惑の主のわざとらしい言い回しは、ここ極まってきたと言えた。自分であればもつと上手く「ハンターという資源」を扱えるだろうという、商人としての皮算用が彼の自尊心の根底にあったからだ。

議会では一部より過激派と囁かれる困惑の主への対処に、面倒な素振りは見せないが手を焼いていたであろう老人。だったのだが、実のところ老人側も穏健派というわけではない。

「ウオホンッ!!」

と、咳払いを一つすると、ヒステリックに思考を垂れ流していた困惑の主もハツとして現実へ目を向ける。老人は続けた。

「……確かに。アーサーが行方をくらました今、かつてのようにハンター兼業など出来る命知らずは、もう書士隊には数えるほどしかおるまいて。しかしな——」

次に語気を強めたのは老人側。そして困惑の主は、その瞳を更に困惑の色で濁らせることになる。……心なしか、老人の丸まっていたはずの背中が真つ直ぐに伸び上がり、シワで垂れていた目尻が、いつの間にか釣り上がった三白眼へと成り代わっていた——ような気がしたからだ。

「——仮にも王より賜った誇りある使命ゆえ。我らの本分は、学び、識ること。そして後世へと語り継ぎ繋げることだ。その使命を恥じたことは一度もないし、今も誇りに思っている」

朗々とした声が応接間に響き渡る。困惑の主もまた、悔しそうな顔を隠しきれないまま老人の言葉を静聴する他なかった。

その言葉がまた、困惑の主にとっては敗走の一言となるのだ。

「これは持論ですがな。書士隊はなにも書士だけの組織ではない。書士も、護衛ハンターも等しく“書士隊”。これが枷かせや柵しがらみと思われても仕方ないと存じております。し

かしッ!……今しばらくあやつらの行く末、ワシらに任せては頂けませんでしょうか。
ビーブズ議員」

まるで往年の現場主義者が、その瞬間だけ応接間にもどつてきていた。と、錯覚させるほどには、老人の言葉には重みが含まれていた。

ほかんと口を半開きにしていた困惑の主もまた、夢から現実にいる目の前の老人をはつきりと視界に収めると、来客用の椅子から黙つて腰を上げた。

「……失礼した。だが私は諦めないぞ。必ず——」

ビーブズの面の皮からは、悔しき以外の何も滲んでいなかった。小太りな体軀を器用に操ると、くるりと扉の前で姿勢を正し、爪の手入れが行き届いた人差し指を立てて、「必ず彼女——リイタ・シュネーを、G級へ招聘しょうへいしてみせようともつ!!」

と、捨て台詞を一言吐き捨てる。そのままビーブズは入ってきたときよりも数段、足音をズカズカ響かせながら扉の奥へと消えていく。その豪快不遜な足音は、支部の玄関口を越えてようやく聴こえなくなった。

「……やれやれ。いい性格をした御仁である。直接本人に交渉へ行かないだけまだまし

でしような」

豪快な足音が聞こえなくなつてすぐに、黄金のヒゲがビーブズの消えた扉から現れる。例の彼女ではない護衛ハンター・ウィンブルグが柔らかなながらも苦笑した様子で応接間に堂々と足を踏み入れる。

「ノックぐらいせぬか。盗み聞きとは、自称紳士が呆れるのう」

「ラッセル殿が耄碌してないか心配でして。まあ、無用でしたが」

「心配されるまでもないわつ。まだまだ現役じゃし。ワシよりもオヌシがハンターを引退するほうが先じゃろうて？」

「フハハハッ、冗談に聞こえないのがまた怖い。せいぜいボケる前に、面倒な引き継ぎくらい済ませて欲しいものである」

茶化すようにウィンブルグが言葉を並べると、老人・ラッセルもまた肩の荷が下りたように、面倒な対談主へ言葉を選んでいた口を抑えることなく聞く。そんなやりとりを秘書の女性がまた優しい眼差しで見守っていた。

「しかし、なかなか目の付け所が悪くないのは確かでしょうな。さすがにビーブズ商会を背負うだけのことはある。……まあ、所作こそアレであつたが」

「ええ。あの子ならきつと人気が出ますからね。それをご自身が推薦したという事実が欲しい……と言つたところでしょう」

「ふんっ。パワーゲームの材料というわけじゃな。気に食わんっ」

ふんぞり返ったラッセルは、ソファアの上で豪快に足を崩す。

議論^{テリ}の交差点^{ブル}に置かれていた茶の入ったカップを片付けながら、秘書の女性も目の前であれだけ自らの家族同然である書士を貶されて、よく手が出なかったと密かに安堵していた。

ようやく、応接間の張り詰めた空気が換気されようとしていたのだ。話題を変えるようにウインブルグが質問する。

「ところで、そのリイタ君の謹慎は解かれたのですかな？ 会う度に鬱憤が溜まっていくようでして。そろそろ発散の矛先がハインツ君あたりに向きはしないかと、内心ヒヤヒヤしているのであるが」

これまた耳の痛い問題でもあった。

溪流の件から既に一週間以上経過した今、ラッセルとしても悩んでいる部分はあった。ハインツの報告でオブラートに包まれてはいたが、独断専行でのロアルドロス討伐。護衛としての範疇を越えていたのは、紛れもない事実であった。

止められなかったハインツにも非があると云えるのだが、それでも起きてしまった今回の事態。結果として人的被害がなかったから良かったものの、今後“護衛”という括りでのリイタの処遇は、決めに決めかねる部分となっていたのだ。

「それは大変ね。支部長。あの子も反省しているでしょうし、そろそろ自由にしてあげては？」

「うーむ。しかしここで解いてしまつて良いものかのう。周りの者にも示しが付かんし——」

それこそビーズの言葉を借りれば、リイタのハンターとしての才能に制限をかけてしまつているのかも知れない。自由なハンター業が、彼女にとつての今後の良いかもしれないと考えることが、ゼロであつた訳でもなかつた。

「失敗は成功のもと、と言う言葉もありますからな。なあに、今度こそ我輩が就いてるのである。万が一もありませんぞ。フハハハっ！」

「それが一番心配なんじゃが。言いたくはないが、そもそもオヌシが二人から離れなければ、今回の事態は起こらなかつた筈じゃぞ」

「そこを言われると反論のしようがありませんな。髭を剃つて詫びる以外に方法が思い浮かびませぬ」

「剃らんでも良い。ただの小言じゃ。現役引退を前に無理を言つているのも承知の上じゃしの」

カラカラと笑うウィンブルグを前にして、ラッセルは呆れた表情を隠さずに秘書と黄金の髭を交互に見やる。老人の過保護が過ぎるのだろうか、あの少女——リイタに

とつての最善を探す。そんな歴戦の書士として長年培ってきた眼を持つてしても、答えを導くのは至難の業だった。

流す汗にも限度がある

そんなラッセルの悩みがウソのように、ドンドルマの空は本日も快晴である。

悠久の風は見えずとも形を変えることなく、吹き抜けるように造られた街を素通りしていく。市場は人で賑わい、鍛冶屋の煙突も黙々と鉄と炎の匂いを打ち上げる。竜車小屋ではギルドから出てきた命知らず共がこぞつて運賃を削るべく安値交渉をしているし、そこには絶え間ない人の喧騒が息づいていた。

しかし、これが件のリイタ・シユネー本人にとっては敬遠したい場所であったのも、書士隊内の人間であれば周知の事実でもあった。ドンドルマ中心部の人口密度は、集団行動に不得手なリイタにとって息苦しくて叶わなかったのだ。だから彼女の日課であるランニングコースは人気の少ない街郊外に設定されていたし、今日も今日とて黙々と鍛錬を積み、謹慎が解かれたときに備えていた。

「……………」

そして普段どおりの彼女であれば、本日の日課も既に終わっている頃合い。しかし今日に限っては違った。むしろペースダウンすらしている。

……その理由の一端こそが、これ。

「ハッ、待つ、て、く——は、ハイ、ペース、過ぎ……!」

少女よりも体格の大きい青年書士ハイイツが、息をぜーぜー切らしながら郊外の少しきつめな勾配の坂を登り続けていた。

滝のように全身から噴き出る汗。腕を振る余力も足を前に出す気力も尽きかけた様子で、先頭を走るリイタに向かつて泣きつくように言葉になりそこねた声を上げると、おそらく彼に合わせていたであろうリイタも一瞬だけ後方を一瞥する。

「……ん」

特に慈悲はなく、少女はすぐにまた前を向くだけ。少女と青年の間にまた一つ、距離が開く。そんな彼女に対して一声も上げずに絶句するハイイツは、気合と根性を通り越してなにか彼の大事なモノを擦り減らしながら、己の身体かもよく分からなくなった足を動かし続けていた。

そんな彼をやはり一瞥するだけのリイタ。彼女は息を切らす様子もなく華奢な四肢を乱すことなく交互に動かすと、慣れた様子で坂のてっぺんまで登り切る。まだまだ動かし足りない身体に対して止まれ^{ストップ}の意^キをかけると、少女の目はひたすらに足掻く青年へ向けられた。

数分待つてようやくハイイツが登り切ると、リイタは待つていたと言わんばかりに

「……遅いです。いつもならもう二周しても、お釣りがくるくらい」

と、真顔で述べるのだ。

ここで再び絶句しかけるハインツだったが、酸欠でフワフワする頭を必死で回転させながら言葉を並べようとする。

「ハツ、はあ、はあ……リイタさんの、冗談、わりと、キツイね」

心臓が飛び出るのではと錯覚するくらい拍動し、呼吸も絶え絶え。それでも少女は次に進もうとするのだからタチが悪い。このままでは本当に擦り切れる。

このままではまずいと思い、リイタに対して決死の足止めを図ろうとハインツも軽口を炸裂させようとするのだが、如何せん相手が悪かった。

「冗談じゃないので。次、行こ？」

あつさりとしり捨て御免。青年の顔が青ざめるのは、なにも酸欠チアノーゼだけの影響じゃないだろう。

「も、もう無理だつてっ」

「そう言えるうちはまだ大丈夫、つてラッセルも言ってた」

「くっつ!!」

久々にハインツからは、まったくもって声にならない悲鳴が漏れ出ていた。

そもそも論から入ると、文官である書士隊のハインツが何故無謀にもハンターのリイタと同じトレーニングメニューをこなそうとしているのか。現地調査が多い遠足組の

ハインツとはいえ、その量は常軌を逸していた。

結果から語るならば彼はリイタの日課にあっさりと撃沈し、今もこうして再び走り出さんとする彼女を引き留めようと、必死に無謀な努力を続けているに至る。

「前にも言ったけど、ハインツさんは少し身体を鍛えたほうが良い」

「言つてたし聞いてたよ?! まったくもつてその通りだとも思つたよ?! でもさ、君オバーユーズって言葉知ってる?! 今すぐ君が覚えるべき言葉だからっ」

オバーユーズ
酷使。人間の体は消耗品で構成されているのだ。無理が祟れば身体も壊れるのは自明の理。

先日の食事という名の反省会。ハインツはそれはそれは語つたのだ。単独先行の危険性を。狩猟における安全マージンの大切さを。そしてリイタも、しっかりと反省したのだ。その上での結論だった。

極論。護られる前に、まず強くなれと。

かねてからリイタの希望でもあった。基礎体力の向上が必要だと、寡黙な少女が珍しく声を大にして（実際は大にしていけないが）意見を述べたのだ。

これに対してはハインツも思うところがあつたし、事実、ナーバナ村のように不測の事態でアオアシラと対峙したこともあつた。対抗の手段や選択肢が少ないのは彼の致命的な欠点とも言える。

「若いうちは、多少の無理もしていいってラッセルが——」

「それは精神論ツ！ こっちは物理的に擦り切れちゃいそうだからっ！ 具体的に膝がっ！」

現場主義者で多少古臭い価値観を持つラッセルらしい考えだった。そんな考えを継承してしまったのが規格外^{ライダ}なのだから更に笑えない。ハインツは今まさに絶体絶命という言葉を身をもつて学び直していた。

「……」

リイタは押し黙る。ここでハインツの知る彼女であれば、それでもスパルタを押し通してきたかもしれない。

しかしリイタは、彼が予想していた反応とは異なる様子を見せていた。少し考え悩むようにハインツを見つめ、生まれたてのケルビのように震える彼の膝まで視線を落とす。

やがてゆっくりと口を開くと、

「ん。仕方ないから……少し休憩で」

と、やはり真顔で告げるのだ。そんな反応に一番の驚きを見せたのもまた、彼。

「……え、本当にっ？ 良いのかい!？」

ハインツだった。その反応に、リイタはまたも珍しく表情に不服そうな感情を垣間見

せる。

「今の反応。凄く失礼、かと」

「ああごめん。でも実際、このまま天国まで完走することになるかもって少し覚悟してたから」

溪流の一件直後、ハインツとリイタの間にあつた妙によそよそしい距離感。言いようのない気まずさが見えない壁となつて二人を隔てていたのだが、食事という名の反省会を開いて以降少しずつではあるが、わだかまりも解消されつつあつた。

「ここでハインツさんの膝が壊れたら、調査どころじゃなくなる。そしたら私も護衛に就けなくなる。それだけです」

「実に合理的な考えだね。うん。まあ僕は膝が壊れたつてフィールドワークに出るんだけど」

まずは話し合いの場を。二人を見かねたのか真偽のほどは分からないが、ヒューイの提案した食事という名の反省会。その成果かはハインツも判断のしようがないが、少なくとも息苦しさを感じることはなくなつていた。

「じゃあもう二周」

「冗談です勘弁してください」

からから青空教室

この瞬間に限っては彼女が授け、彼が授かる側。普段なら考えられない何とも奇妙な関係が成り立っていた。

早朝の走り込みから始まり、筋力トレーニング等あらゆる基礎鍛錬が実践される。リイタがその一切を余すことなくハイイツに向けて叩き込んだという事実は、彼の生気が風前の灯だという結末に直結していた。

言われるまでもなくハイイツの足は生まれたてのケルビそのものだったし、記念すべき第一回地獄のトレーニング巡りは、彼にとって忘れることのできない思い出を植え付けたことには違いない。

力尽きるように倒れ込んだ若き書士を、硬い石造りの床が優しく抱きとめるほど気が利く訳もなく、ハイイツの背中と頭はゴテゴテとした異物感で歓迎される。それでも体を起こしているよりかは、この全身に優しくない人工の石ベッドの上で横たわっていたほうが彼にとって楽だった。見事なまでに水けを失った土気色へと早変わりしていたハイイツの面持ちは、これ以上のトレーニング続行が不可能だということを示す。矛盾もちろん、ゆっくりと歩み寄ってきたリイタに向けて。

「ぎ、ギブ……うぷっ」

きょうび訓練所でもやらないようなハードメニューの数々。現地調査でなまじ体力には自信のあるハインツだったが、そんな彼の精神はガラスのように脆くも打ち砕かれていた。

リイタが今にも生気をすべて吐き出しそうなハインツの顔を覗き込むと、少しだけ気まずそうに瞳を曇らせる。彼女も彼女でやけに気合が入っていたのだ。普段とは異なる立場にリイタ自身も新鮮だったのか、はたまた謹慎期間の鬱憤晴らしだったのか。その真意が明かされることはないのだが、とても生き生きとした表情かおで青年をしごきあげていた……ような気がする、ハインツは密かに思っていた。

「……休憩、必要そうだね」

「い、良い判断で。君、教官の才能あるよ……」

酸素の摩耗した頭で精一杯の皮肉を飛ばすと、ハインツはいよいよもって大地に溶け出すんじゃないかという錯覚を感じる。身体が重すぎて起こす気にすらならない。

「市場で飲み物、買ってくる。何がいい？」

「ほ、ホットじゃなければ何でも良いよ。それよりもさ、休憩つてことはまだ続きが？」

「うん。素振りが残ってる。だからまだ意識は飛ばさないでね」

「……君の頭に立派な角が生えてるのは気のせいかな。もしかしてコレが白昼夢つてや

っ？」

「冗談。ちよつと強めの気付け薬も貰ってくる、ね」

「ははは……ほんとに冗談だよね？」

「行ってくる」

「答えはっ!？」

笑えない冗談である。

なによりリイタがジョークを飛ばすなんて、ハインツにとつてはどんなモンスターを観察するよりも貴重な場面に立ち会っていることと同義だ。彼が疲労と酸欠で倒れてさえいなければ、即座にスケッチブックに今のやり取りをメモしていたかも知れない。干乾びても尚、ハインツからは乾いた笑いが絞り出される。

先程まで彼と同じ距離を走っていたというのに、リイタは何事もなかったかのように軽快な足取りで市場へと走り去っていく。その後姿を信じられないと言った様子で見送る仰向けのハインツは、ハンターの身体能力に対して関心を越えて畏怖の念を抱かずにはいられなかった。

「……ハンター、か」

小さなため息のあとに誰にも聞こえないくらいの声で呟くと、ハインツはリイタの華

奢な背中を見届ける。

とても小さな背中だった。もう遠くの位置まで走っているからだろうかと頭をよぎるも、それはただの遠近法。現場ではずっしりと重みのある大剣を背負う彼の護衛ハントーは、その姿からは不相応なほど頼りになり、華麗に戦場を駆け巡る。

おそらく彼女の謹慎が解かれるのは時間の問題だ。再び戦場に出れば八面六臂の活躍を見せてくれるだろう。

脅威が迫れば愚直に立ち向かい、背負っているであろう大剣を引き抜いて構えるのだ。きつと彼女は躊躇わない。戦い、進み、進み、進み続ける。そして、いつか訪れるのは――。

ハツとしてハインツは思考を一時中断する。

もう一度寝転んだまま小さな背中を探すと、追った視線の先に少女の姿は既になかった。

少しだけ安堵すると、ハインツは未だ酸欠気味でフワフワする頭に自制をかける。今考えても仕方ないことだと、彼自身に言い聞かせる。

それよりも今考えるべきなのは、

「明日もトレーニング付き合おうって言っちゃったよ……どうしよう」

自らの身の安全だったのだから。

「ぷっはあ〜！ い、生き返ったああ……」

手のひらサイズに収まる瓶の縁から口を離すと、枯れ始めていたハインツの精気はみるみる水けを取り戻していく。底に残った水滴も残さないよう瓶を逆さにすると、こぼれ落ちる雫をカメレオン科のように舌を伸ばして受け止める。

そんなハインツの様子を横からじっと眺めるリイタ。観察するのは得意なハインツだが、観察されるのは慣れていない彼にとつて、それはなんとも言えない気恥ずかしさを内包していた。なにかと今日は立場が逆転している。

「水分補給は大事。身体から水分が減ると、途端に動きが悪くなるって話。ハインツさんは知ってる？」

リイタが寡黙な口を開いたのは、ちょうどハインツが瓶の中身を飲み干したタイミングだった。

少しだけ得意げに鼻を鳴らす少女は、この豆知識を語りたが為なのか、栄養ドリンクを飲み干そうとするハインツのことを、脇からずつと待っていた様子だった。語るリイタに対してハインツが首を横に振ると、またしてもほんの少しだけ、彼女は勝ち

誇った顔をしてみせる。だがそれもすぐ、向かいの青年が気づく前に彼女の鉄面皮へと飲み込まれてしまうのだが。

「その手の分野は詳しくないよ。なにせ干乾びた雑巾の気持ちを知ったのは今日が初めてなんだ。あ、ご馳走様。ちなみにコレって中身は？」

彼にとつて命の水とも言えた栄養ドリンク。夢中で中身を確認せずに飲み干すほど全身が水分を求め、カラカラに渴いていたハインツの肉体と探究心。潤いと共に快復したそんな彼の行動原理は、この口当たりもよくスイスイ飲めてしまう液体の正体に向いていた。

「みんな大好き、元氣ドリンク」

「大好きかは知らないけど、本当に？ 僕が知ってるのはトウガラシと眠魚を混ぜただけで、今どきはこんなものもあるんだね」

リイタの答えにハインツは改めて感心したように瓶を覗き込む。

元氣ドリンクはハンター向けに開発されたスタミナ増強剤だ。調合法が地域によって多少異なるが、広く流通したある意味伝統の飲料でもある。巷で三万人の愛用者がいると評判で、飲みやすく簡単に摂取できるのが売りの一つとなっている、極めて健全な飲み物だ。

と、ここまでなら普通なのだが。

「……と、回復薬と活力剤とアルビノエキスと狂走エキスと漢方薬と鬼人薬と——」
「ん？」

なぜだか聞き覚えのあるようで馴染みのない文字の羅列が後続から続いてきたのが、余計にハインツの困惑を加速させた。

「と、フルフルベビーとキラビートルの幼虫とドンドルマグロとにが虫と雪山草と情熱ルビーとザザミソに——」

「待って待って待って待って待って?! え、いや、大丈夫なのコレっ?！」

息継ぎもせずに淡々と呪文のように続く単語の数々。明らかに途中から食用でないような物の名前までチラホラ混じっている。

胃の奥が急に重たく感じたのは、気のせいなのか何なのか。

そしてトドメの一言。

「と、ハチミツも入ってた」

「ぶふっつっ!!」

吹き出しかけたハインツからひらりと距離を置くと、いたずらっぽく——は笑わないリイタが付け加える。

「……ハチミツは、うそ」

「——よ、良かった……じゃなくって! ……コレ、飲ンデモ大丈夫ダツタノ?」

ハチミツが入っていないところで、ハインツの受けた衝撃が軽減するわけもない。既に渴いた五臓六腑にまで染み込んだであろう元氣ドリンク（仮）を吐き出す手段はゼロに等しかった。するりと胃にまで落ちたはずの液体が、心なしか逆流している気もするが気のせいじゃないのだろう。

「ああ……聞かなきゃ良かった。次からは持参しないと」

「大丈夫。自信作だつて、売り子の三人が言つてた。ダメだつたら返品してもいいつて」
「ダメつて何が!? もう返品できないんだけど……いや、市場に回収つてるのなら大丈夫だと思うけど少しは疑つて欲しいな。違法な薬物でも混ざつてたら、僕は晴れてお繩にかかつて病院漬けになるんだから」

得体は知れたが果たしてニンゲンの飲んで良いものであつたのかどうか。その答えがわかることがないのがまた厄介なところ。

「……でも中身はさつき言つた通り。危ないものなんて、入つてないよ?」

帰つたら胃薬を探そうと決心するハインツに対して、リイタはあまり理解していない様子で首を傾げる。

「君にとつてのキラビートルや情熱ルビーつて一体……いや、なんにせよだ。それは正しい認識じゃない。ねえリイタさん。オーバードーズつて言葉、知つてるかい?」

「……知らないけど。その話つて、長くなる?」

「えーと、善処します」

「ん。ハインツさんがトレーニングサボろうとしてる」

「バレげふんげふんっ……違いますよ？ 大事な話だから」

あつさり見透かされたハインツの魂胆だが、ここで彼も引き下がる訳にはいかない。誤った知識は正さねばならないという、ささやかな彼の書士隊としての意地である。

「じゃあ、いいけど。さつきの^{オーバーユーズ}とは違うの？」

面倒くさそうにするリイタだったが、彼女も書士隊就きのハンターだ。このように面倒くさい人種が多いということは、予め分かっているつもりだった。だから、仕方なしにと青年の話に耳を傾ける。

「字面は似てるけど違うね。訓練所あたりで習わなかった？」

「私は訓練所、あんまり行つてないから」

「あ……そうか。じゃあ尚の事話すべきだね。今でこそ便利になったアイテムだけど、例えるなら……そう。鬼人薬だ。鬼人薬の携行数がギルドで定められているのは、リイタさんも知ってるよね？」

「うん、確か五本？ 使ったことはないけど」

鬼人薬。怪力の種の成分を増強剤やマカ漬けの壺によって強化した赤色の薬。飲んだ者は一時的に鬼の如き力を得ることが出来る。典型的なドーピングアイテムだ。

「はい正解。でだりイタさん。なんで五本、だと思おう？」

「……え？ ん……なんでかな」

「これからするのは、そういう話さ」

過剰摂取のウワサ

「ハインツにとって」疑問符」とは一つの指標パロメーターだった。なにせ彼にとっては数少ない、リイタの感情を窺い知ることのできる反応なのだから。

書士として鍛え上げられた彼の観察眼は、道端に転がっている手頃な大きさの石ころを捉える。そのまま素早く拾い上げると、手慣れた手つきで石造りの地面に擦りつけ、線を描き始める。摩擦で生じる薄い白が形を作ると、みるみるうちに、彼のお世辞にも上手いとは言えない線描イラストが姿を現した。おそらく半日としないうちに落描きと勘違いされ、水をかけられて消えてしまうであろう。そんな人間らしき絵に鬼人薬と思わしき長方形が五つ。

「ハンターが現役を引退する時の理由だけど。——その多くが年齢や怪我、心身の限界からだ」

「その前置き、必要？」

ああ始まってしまったかと。そんな心持ちを表情の奥に秘めたリイタは、思わず彼の意気揚々とした台辞だいじに対して口を挟まざる得なかった。明らかに長くなりそうだと、彼女の”対メンドクサイものセンサー”が勢い良く反応を示したからだ。

「もちろんだともつ」

——ダウト。リイタの内心で素早いレスポンスが生じるが、喉から飛び出る手前で飲み込まれる。言葉として飛び出ていくことはない。

時すでに遅し、賽が投げられていた事を彼女も承知していたし、正確に言えば諦めていた。干乾びていた青年書士の表情が一転、やけに潤いを持っていたのがその証拠だ。

「だからハンターとして活動を続けていけばどこかで必ず、壁にぶつかる。限界が訪れる。リイタさんのように軽々と大剣を振り回せなくなるし、派手に動けばすぐに体力もなくなる。呼吸だつて乱れる。長年の古傷も痛むだろう」

「……ウインブルグさんみたい」

諦めたリイタが真っ先に思い浮かべたのは、彼女ともに目の前で言葉を弾ませる青年を護衛する中年ハンター・ウインブルグの姿。やたらに腰をさする中年の行動は、彼女の中でも印象に残っている。

「そうだね。ニンゲンは換えの利かない消耗品の塊だから。年月を重ねれば重ねるほど、やがて感覚に対して身体がついていかなくなるものだ」

良くも悪くもハンターは身体が資本。書士隊だつて基本は同じだが、ハンターにとつてその比重が一般の職種と比べて極めて重いのは周知の事実。

自分の体が思ったように動かなくなる感覚が、彼らにとつてどれほど恐ろしいことな

のだろうか。

「残念ながら僕や君にはまだ無縁の感覚だ。けれど僕らは大自然を相手に真つ向に挑んでいくんだ。ついていけなければ、それは自らに降りかかる。怪我で済めば僥倖——最悪、死にだつてつながる」

しごく当たり前のことでもある。生涯現役という言葉は美しいが、それを継続するための労力は如何ほどのものだろう。己の肉体のパフォーマンスを維持し続けるというのは、ことごとく危険に身を晒すハンターにとつてどれだけ難しいことか。

「……引き際。その見極めは難しいつて、ラッセルも言つてた」

「ああ。本当に難しい話さ。狩猟方法が体系化されつつある今、ハンターの数が増加傾向にある。その影響からモンスターの情報や素材も数多く流通するようになって、ある意味書士隊ほくらにとつても本当にありがたい時代になった。

けど、いい話ばかりじゃない。流通が増えればそのぶん情報や素材の価値は薄まり、単価は下がる。よほどの大物でも狩らない限り、ハンター時代の蓄えセカンドライフで第二の人生を送ることも難しくなっているのが現状だ」

だから、騙し騙しやっていくものなんだと。己の持ちうるパフォーマンスの中で、一種の線引きをする。自らの手に負える任務クエストを吟味していき、日銭を稼ぎ続ける。

そして重要なのが、その手段。これからハインツが伝えたい部分でもあった。

「例えばそう……足りないものを外から補うように。それがモンスターをより効率的に仕留める強力な武器であったり。大自然の猛威から身を守り生存率を高める堅牢な防具であったり。閃光玉であったりタル爆弾であったり落とし穴であったり」

能力の拡張。道具の使用こそがニンゲンに、ハンターに許された最大の武器であり手段なのだ。

「そして——」鬼人薬のような薬物であったり、つて。そう、言いたいんだね」

「あ。先に言うのは酷い……」

「もったいぶるのが悪い」

言いたかった台詞を先に言われたハインツが口を尖らせると、リイタは密かにしてやったりと顔を綻ほころばせる。そんな少女の些細な変化にも気付くことのできなかった彼の洞察力もまだまだなのだだろう。気付けないのなら関係ないとばかりに話は進む。

「僕の楽しみが……いやでもそう。強力な武器や防具を揃えるよりも、よほど手っ取り早い。そんなだから、つい手が届いてしまうのさ。越えてはいけない一線にまで」

「……」

「初めは足りないものを補うために。ニンゲンとしての能力をほんの少し、拡張させる目的で。特に肉體強化系のアイテムはハンターの需要も多い。モンスターとの圧倒的な肉体的アドバンテージを少しでも埋めるためにね。」

だからギルドも禁止薬物指定していないし、危険なモンスターと対峙するのに、わざわざ制限をかけるようなこともしていない。結果としてハンターはモンスターと渡り合うことができた」

真つ当に挑めば、ニンゲンはモンスターに遠く及ばないほど、有利不利に差が生じている。だからこそ武器を持ち、鎧を着込み、道具を用いる。

「けど、それは……」

「根本的な解決ではなくて、そのぼしのぎ対症療法みたいなものだ。個人としての力量が上がるわけでもないし、肉体の衰えが止まるわけでもない。でもモンスターと、大自然とは対峙し続けていく」

「……なら、もっと強い武器や防具を作る。薬は使う量が、増える？」

再びニンゲンの模式図に対して、ハインツは何かを書き足していく。さらに鬼人薬を模す四角形が増える。そして、

「単純な話ならそうだけど、そうはならない。強力な装備を用意するにも、さらに貴重な素材を集めなきゃならないからね。だから普通はその前に引退って話になるんだよ。

でも手を伸ばせば届いてしまうモノも少なからず存在する。さつきも話したけど、ニンゲンは換えの効かない消耗品の塊だ。そんなニンゲンという器が受け入れるのにも限界がある。すなわち「オーバーハド過剰摂取」」

人型の模式図からは、四角形が溢れ出していた。

「鬼人薬の五本という所持制限つてのは、ギルドが示す境界線セーフティライン、経験則からくるものだ。年齢や怪我以外に……割合は少ないけど確実に存在する引退の理由。それが薬物による『廃人化』だ」



安いのか、高いのかなんて。誰にも解るはずがない。

分不相応な絶対的な差を埋めるために支払う、代償。

鬼人薬。その名の通り、人にヒトならざる力を与える秘薬。

身体的な能力差を埋めようとした、一つの成果。

ヒト瓶飲めば、鬼の如き力を得られると噂され。

その成果は申し分なく効力を発揮し、ヒトはモンスターへと迫った。

一人は言った。重かった大剣が軽々振り回せるようになったと。

もう一人が言った。突貫するランスの一閃が鋭くなったと。

また一人が言った。重ヘイボウガン弩が。ハンマーが。太刀が。e t c……エトセトラ。

身体的な基礎能力の向上は、狩猟効率にも如実な結果を残すことになる。

当然、書士隊にも報告が上がり、一躍鬼人薬は画期的な発明として世に知れ渡る。

そして往々として、黎明期ならではの話。

その名声は同時に、一つの事実を覆い隠すほどに。

「ヒトへ戻れなくなる」

美味しい話には裏がある。そんなこと世の常なのだ。鬼人薬はモンスターとの能力差を埋める画期的な発明ではあるが、世紀の大発見ではなかった。

「どういふこと？」

「代償だよ。鬼人薬はいわば、強制的にヒトとしての生理機能を活性化させる薬、劇薬さ。そんなものを制限することなく服用し続ければどうなるか」

「どうなるの?」

「鬼になる」

「うそつき」

「……」

一瞬の間が空く。何を言っているんだこの書士はとばかりに、リイタが冷ややかな視線を向ける。が、けっしてハインツの表情も嘘八百をのたまう人間の顔ではなかった。

「誇張した表現でもないんだよ。なにせ、”ヒトとしての普通”に戻れなくなるんだか

ら」

そう述べたハインツは、もう一度地面に向けて視線を落とす。行く先は彼の残した
イラスト落描きへ。

溢れんばかりの四角形が、ヒトの模式図を埋め尽くし、元の形もわからないほどに上
 書きしている。

「ヒトとしての機能が狂ってしまうんだ。より過剰に摂取すれば——結果、肉体と精神
 に著しく乖離が生じて廃人ルート。文字通り鬼に近づく薬。鬼人薬ってね」

「ここでハインツの言葉は止まる。話したかった内容を言い終えたのか、満足しつ
 つも、内容が内容だけに複雑な面持ちで眼前の少女を見やる。

「……つまり、飲み過ぎは良くないって話？」

「その一言で片付けられるなら、そうかもしれない」

「長かったね。話」

「頑張つてまとめたけど、そうかもしれない」

「じゃあ、もう一周走ろっか」

「あ、さつき飲んだ元氣ドリニコのせいとお腹が痛く……」

「大丈夫。これは普通のトレーニングで、鬼じゃなくて人として強くなれるから」

「普通って、なんだろうね……」

過去があるからこそ現在がある。生きた情報が大陸を駆け巡るようになった今、
過剰^{オーバー}摂取^{ドーズ}による廃人化の例はほんの一握りの話。知っていれば避けられる話なのだから。

しかし、それでも手を伸ばしてしまう者が少なからずいるのも事実。理由は千差万別。衰えに恐怖したか。依存したか。もしくはどうしても狩りたいモンスターがいたか。

価値観は個人に準ずる。

その想いが、過程がどれほど単純であろうと、複雑であろうと、卑しいものであろうと、尊いものであろうと、現実には結果でしか残らないのは多々ある話。

だからハンターズギルドが示すのはあくまで警告であつて、禁止ではない。



「「用量・用法を守って正しく飲んで！ ビーヴズ商会の新型元氣ドリンク、ご高評につき大特価販売中だよお！」」

歓声賑わう市場の一つで、負けじと轟く商いの声。

賑わいが右肩上がりなつたのは、つい数十分前に立ち寄つた少女ハンターを皮切りにしてからだつた。上位ハンターでもある、街では密かに有名な彼女が怖いもの知らずで購入していったその後。怖いもの見たさからか、飛ぶように売れ始めたおそらく合法であらう元気ドリニコを、ビーヴズ商会の売り子が三人組は懸命に捌き続けていた。

つづく

▼レポート6：『火山の泪を掘り当てろ』

エア探掘（I）

エリックは足早に帰路へ着いた。

柄を短く切つた一回り小さなピツケルを背中に担ぎ、小脇に抱える袋の中身はじやらしやらしと音を立てる。その感触に満足した少年は来た道を引き返し始めた。

遙か北に位置するフラヒヤ山脈とは対をなす、エルデ地方の大地。

少年エリックの踏みしめる場所はまさに大陸屈指の活火山地帯だ——とはいっても、エリックが踏み込むことを許された領域はその中枢にも至らない。せいぜい村から少し歩けばたどり着く岩場程度。そこでならと、麓の村に住む大人たちから子供の遊び場として大目に見られていたのだ。

火山の奥地には危険なモンスターが徘徊している。村に生まれた人間ならば、小さな頃から耳にタコができるほど聞かされる話。

しかし人一倍好奇心が強いと自負していたエリックは、どうにか大人と一緒に坑道を出入りできないか常々考えていた。すると自分の心を抑えきれずこつそり忍び込もうとしたは良いが、結局見つかってゲンコツを落とされることの繰り返し。あいにくエ

リックには化かし合いの才能がなかったらしい。

坑道に入るためには”入山許可証”が必要だというのだ。エリックは年齢の基準を満たしていなかった。

ふと硬いゲンコツの持ち主である炭鉱夫の父から、暗くなる前に帰るようにと口酸っぱく言われていたことを思い出すと、エリックは太陽の橋が黄から夕日色に染まり始めたのを見て動かす足を更に早めた。



何の変哲もない故郷に戻ると、エリックは日がまだ沈みきっていないことを確認した。岩場あそびばに出向くための条件なのだから、これを少年は頑なに守る。

今日は行商人の定期巡回もない日だから、道草をする必要もない。次来た時に——と、小脇の袋を見やる。思わず笑いがこみ上げてくるのをぐつと堪えると、疲れ知らずの少年はその場でふと立ち止まった。

異変に気がついたからだ。村の様子がなにやらおかしい。

ごく稀に、火山の生息域から外れたモンスターが村の近くに現れることもあるという。しかし最後にそれがあつたのは、エリックの物覚えがつく頃よりも前の話だった。幸いハンターズギルドのハンターによつて狩猟されると、大きな被害もなく今この瞬間にまで至っているという。

モンスターが出たのならもつと大きな騒ぎになつてゐるはずだという勘繰りから、それはないだろうという決めつけにかかるも、エリックの好奇心はそれを許さなかつた。野次馬根性よろしく、異変の中心に向かつて真つ先に突き進んで行く。

「よおエリック。今日もあつちか？」

そんな少年に対して気さくに話しかけてくる村人の一人は、誰にでも声をかけることから村の中でも知つてか知らずか随一の情報通だつた。ちよつど良いと思つたエリックはすかさず尋ね返す。

「そうだよ。なにかあつたの？」

「客だつてよ。こんな辺鄙なトコまで」苦勞なこつた」

客と聞いて少年の胸はどきりとした。その答えを求めようとまた尋ねる。

「客つて、もしかしてハンター？」

「ああ、ハンターもいたな。それにオトモ？つてやつ。三人と一匹」

どきりとした胸は確実に高鳴つてゐた。ハンターは村の子供なら誰でも憧れの存在だ。表向きは気恥ずかしさから隠してゐたが、エリックも例外ではない。

「……ハンターも？」

「ハンターは二人らしい。あとの一人は……よくわからん」

「竜車の御者さんとかじゃなくて？」

「それとは別勘定でだ。ハンターの荷物は多いからな。たぶん荷物持ちかなんかだろう」

ハンターはやはりすごいのだ。召使にものもちいを雇うこともできてしまうのだから。エリツクのおかげればこの瞬間、更に増していた。当然興味の心も膨れ上がり、彼を自然と話題の中心地へ引き寄せていく。

「ふーん。ちよつと見てくる」

「客人に粗相のないようにな」

「わかつてるよ」

走る途中、村の竜舎で身を休めるアプトノスの姿が目に入った。さぞ長旅だったのだろう。膝を折ってゴロリと干し草の上で寝転がっている。近くにいた見慣れない三度笠の女性はおそらく御者だ。アプトノスを優しい眼差しで見つめていたから、多分そう。

この村で客人が身を寄せる場所といえ、あまり使われることのないゲストハウスか村長の家くらいだ。エリツクは直感を頼りにゲストハウスへ向かった。

ゲストハウスに着くと、いつもはならない人の気配が明確に存在するのを感じ取る。閉め切られていた窓を全開にしていたからだ。活火山から少し離れているとは言え、ずっと密封されていたのだから中は相当暑かっただろう。

一体全体どういった人物がハンターになるのだろう。そんな興味からひと目見て帰ろうと思っていたエリックは、開いた窓から話し声が漏れているのに気がつく。聞き耳をたてようか迷ったが、流石に後ろめたさから遠くで覗くだけに思いとどまった。

中にいるのは情報通の村人の言う通り、三人と一匹。ハンターの象徴とも言える武器や防具は脱いでいたので、誰がハンターかは正直わからない。

まず目に入ったのが、火山ではあつ苦しいことこの上ないであろう立派なヒゲをこさえた中年の男。

もうひとりが、そんな中年男とは対照的に清涼感の漂う栗色の髪に幼さの残る顔立ちをした少女。

その二人と比べて身なりに気を遣っていないのか、ボサボサになった灰色髪（たぐい）の青年。最後の一匹が、一心不乱に小瓶をひっくり返してチロチロと舌で舐めているアイルーの姿。

それぞれがテーブルを挟んで何やら話し込んでいる。少なくとも荒くれの類（たぐい）ではないことは確かだった。どうせなら鎧を着込んだ姿を見たかったが文句は言えない。

遠くからまじまじと見てみると、今度は会話の内容が気になってきてしまう。しかし行儀が悪いのではと思いとどまる——のも一瞬。吸い込まれるように窓の近くに吸い

寄せられた。一見、外で遊ぶ子供を演じながら、背中に抱えていたピツケルを空振りさせる。家で暇な時によくやっていた”エア採掘”。

エリックは少しだけ虚しい気持ちを感じたが、それを上塗りするように興味が溢れてくる。空気を採掘しながら、エリックは窓から漏れる僅かな音に耳を澄ませた。

「——アタリ、だといいですね」

凜とした芯のある声。少女のものだ。

「そうだね、これなら”月間狩りに生きる”に載るのも夢じゃないよ」

見た目のだらしなさに反して、青年の声は長旅の疲れを感じさせないように弾む。

「なかなか心躍る話であったからな。まあ、明日からは吾輩に任せるといい。火山は吾輩にとって庭のようなものだからね」

年長者である中年の男は柔らかな物腰で話すが、異様に似合う黄金のヒゲと口調が胡散臭さを助長する。

アイルーは相変わらずチロチロ小瓶を舐めていた。中身はなんだろう。

「もちろん頼りにしてますよ。ようやく入山許可が降りましたけど、僕らは初心者ですから」

青年が少女を見やりながら朗らかに笑う。

……間違いない。この一行は入山するつもりなのだ。

エリックの中で胸の高まりが収まることはなかった。

「噂が本当なら——」

”エア採掘”にもいい加減飽きていたので、エリックは最後にもう一度窓の中を覗き見ようとした。その時、

「……あつ!?!」

目線を伸ばそうとしたら、エリックに何かが突き刺さった。物理的なものではない、感覚的なもの。

見返されていた。

表情の見えない少女の碧眼が、少年の姿をはつきりと捉えていた。

まさかの出来事にエリックは慌てると、踵を返してその場から走り去ろうと体勢を整える。背中にまだ視線が残っているのを感じたが、聞き耳を立てた後ろ暗さと気恥ずかしさからそれ以上何も考えずに全力疾走してその場を後にした。

驚いた。いや、”エア採掘”なんておかしな挙動をしていたのだから見られても不思議ではない。それでも、視線と視線ではつきりと捉えられるとはエリックも思っていなかった。それこそ話で聞くハンターのような鋭い——少女がハンターなのだろうか。

まだ胸の鼓動が響き続けている。

火山の麓の村でもここはかなり外れた地に位置する。わざわざそんな場所を選んでハンターたちがやってくる。素直に嬉しかったのだ、エリックは。その気持ちが溢れすぎてしまっただけ。

覗き見、聞き耳の言い逃れはできないだろうが、明日は謝りに行かねばと少年の心は反省に向かつていた。いい趣味でないのは自覚していたのだ。”エア採掘”にしろ、村の同年代の子供がエリックの遊び場いっわばに近付くことは少ない。他の子供やたまに顔を出すネコバアのアイルーたちと村の中で遊び回っていることが多いのだ。

『噂が本当なら——で——そうだよ。”火山の泪』』

エリックが逃げ去る直前に聞いた言葉は、彼にとつて馴染みのない言葉。

暗くなる前に家へ戻れなかったエリックは、結局大きなたんこぶを頭に生やして一日を終えた。

▼レポート6：『火山の泪を掘り当てろ』

エア採掘（Ⅱ）

火山の泪つてなんだろう——？

エリックの心を支配したのは純粹な疑問だった。

ゲンコツの主は朝早くから採掘に出ていたようで、エリックはじんじん痛む頭頂部をさすりながら朝食にかぶりつく。多少乾燥したパンであっても、熱帯イチゴのジャムをパンに塗りつけてしまえばたちまち彼の好物に変貌する。

出かける準備をしようと愛用のピッケルを引つ張り出しに物置に向かおうとするが、門限を守らなかつたせいで今日は遊び場わに行くことを禁止されていたことを思いだしたエリックは、どうやって一日を過ごそうか頭を悩ませることになる。

少しだけ気を晴らしてから昨日の非礼を謝ろうと考えていた少年が思いついたのが、昨日のハンターたちが話していた意味深な単語だったのだ。

少なくともエリックにとって火山の泪は聞いたことのない単語だったし、知らないということは知りたいという彼の欲求をいとも簡単に刺激してみせた。ナミダと聞いて彼が思いつくのは、炭鉱夫の間でも見つかればかなり上等な品だという“岩竜の涙”なる代物。岩竜バサルモスからのみ採れると言うが、もちろんエリックはバサルモスを直

接見たことがない。たまにやって来る行商人が扱っていた「月刊狩りに生きる」に描かれた絵画を覗き見たのだ。

わからなければ誰かに聞くとよい。これまた稀にやってくるネコバアの言葉により、算術を彼女のアイルーから教わったエリックは一つの決意をする。

その決心を胸に、早速少年は昨日の非礼を謝ろうとゲストハウスへ足を運んだ。が、ゲストハウスの窓は再び締め切られていた。

「なんだエリック。今日は岩場あつちじゃないのか」

エリックの趣味を知っていた村人の一人は尋ねる。

「今日行っちゃだめだって。ここにきてた人は？」

「客人なら早くから出かけたぞ。山に入るんだとさ」

どうやら彼らは早朝から入山してしまったようで、いつ戻ってくるかは分からないと言う。

これは困った。これではエリックの胸にはモヤモヤが残り続けるし、たんこぶだってまだ痛んで気になる。門限を守らなかつたのは彼の自業自得なのだが、エリックは少しだけ理不尽な気持ちを感じずにはいられなかつた。

エルデ地方を代表する大きな村ンガンカが持つハンターの拠点として機能するような特色を、

エリックの住む故郷シ・ミカは備えていなかったのもあつて、この村の景観はいくらか寂しいものがある。

それでいて火山の中枢からかなり外れた土地にあるので、村には炭鋤夫を嗜む物好き程度しか根を張らない。腕利きベテランも若手ホープも大体はシ・ガンカに流れてしまうのだ。規模の小さいこの村にとってハンターは希少な存在なのである。

仕事を手伝おうにも、この地は農業にも向かなく、もっぱら探掘した品々の取引で生計を立てる者が大半を占める。鍛冶工芸と言つた花形はシ・ガンカのお家芸だ。それに、あいにくそれらに全く興味を持たなかつたエリックは、代わりにほつきり空いた穴をあの遊び場いびわばで埋めるように小さなピッケルを振るつていた。大人の坑道に一緒に入れるなら、いくらでも手伝つてやれると考えながら。

仕方なしに村をぐるぐると回つていたエリックは、ネコバアの教えに従い穴あきの情報を埋めることにした。すると一つの事実にとどり着くではないか。

三人のうちの一人、荷物持ちだと思われていた人物が、実は「書士シヨシ」なる職業だといふのだ。

そう、シヨシだ。それと同時に、誰も書士シヨシを詳しく知らなかつた。と、いう事実をエリックは知つた。

これは困つた。本格的にエリックの興味が彼らハンターとシヨシに移ろいでいくの

が分かったからだ。どうにかして彼らを追えないものか。子供ながらに大人を出し抜こうと少年は悪知恵を働かせる。しかし、出てきた答えは何もなかった。すでに失敗済みだったからだ。

彼らがわざわざ辺境ン・ミカにやって来た理由はなんだ？

エリックは自分に質問を投げかける。近くにモンスターが出たなんて話は聞かないし、こんな辺境が目にとまることなんてないはずだ。何故ン・ガン力ではなくて、ン・ミ力である必要があったのだろうか。

……待てよ。もしかしたら。

エリックの感じていた頭頂部の痛みは、知らず知らずのうちに引いていた。

あるのかもしれない。自分たちが知らないだけで、実は火山の中に何かが。

そもそも、ン・ミカという村がこの地にあること自体がエリックにとって疑問だったのだ。この地でなければならなかった理由があるのかもしれない。

火山には夢とロマンがある。そう、母に愛想を尽かされた父が常々語っていた。

火山の泪カザンナミダってなんだろう——？

朝の疑問が反響してエリックに問いかけてきた。今度は雲のようにぼんやりと浮かぶ疑問ではなく、おぼろげながらも形を伴って、だ。

少年の頬は紅潮し、村の誰から見ても熱に浮かされていると捉えられても仕方がなかった。



小腹が空いてきたエリックが気付いたのは、ちょうど太陽が山頂にまで昇った頃。

「おいこら上げすぎ、傾いてるぞつ、急いで、慎重に！」

「そつちがもうちよい持ち上げればいいだろ」

「馬鹿が！ そしたらお前がもっと高く持ち上げるだろ！ なんであいつらお前に任せただよー！」

「一番力持ちだから」

「なら相方がなんで俺なんだ！」

「一番足が早いから」

「加減できなきや意味ねえだろうが！ とにかく逃げ、逃げ！」

山のような大男と、不釣り合いな小男が向かい合って何か赤い物体を運んでいた。身の丈以上はある二本の木棒の間に張られたリネンは、エリックに担架だと気づかせるのに時間はかからない。何よりもエリックが驚いたのは、担架に運ばれる人物にあったのだ。

「……むうう、厚かましいのは百も承知であるが、もう少し繊細に扱ってはくれまいか。吾輩はガラス工芸ではないが、人並みの扱いは受けさせて欲しいのである」

少年はハツとして思い出す。この特徴的な口調を知っていたからだ。すぐに気が付かなかったのは、少年が見たいと心待ちにしていた防具を身にまもっていたから。

赤の鎧を着た客人は、不自然に傾く担架に居心地悪そうに呻いていた。

「おういたずら小僧、ちよいと避けな。客人様がお通りだ」

明らかに客人への配慮が足りていない担架運びの大男はエリックに呼び掛けた。エリックに注意がそれたために、担架がさらに上に傾いたことには気づいていない。

「馬鹿野郎！ それ以上持ち上げたら落ちちまうぞ！」

「ああすまん。客人よ、大丈夫か」

「……紳士たるもの、この程度どうってことないのである」

赤の鎧がやせ我慢を言ったのはエリックにも分かった。向かう先にも予想がつく。

理由はわからないが、ハンターの一人であるこの男は火山から搬送されてきていた。村で唯一の医者である翁のところへ運ばれるのだろう。

「なにがあつたの？」

「知らん。ただ、とりあえず翁に診てもらわなきゃならんから運んでるんだよ」

大男の回答はすいぶんと適当であつた。と、いうよりも大して興味がないように見え

た。さらに担架が傾く。

「ペちやくちや喋つてないで足を動かせ足を！ お前も見てるくらいなら手伝いな！」
「う、うん」

小男のせわしない口が喚き散らす。

やたら高く担架を持つていたためか、エリックは張られたリネンの真下に潜り込むことにした。これで手伝っているかはわからないが、ちょうど真ん中あたりを頭と両手で下から支える。その時、赤の兜の中から聴こえる唸り声が強まった気がしたが、エリックは忠告通りに考えるよりも先に足を動かすことにした。

人一人を運ぶのも大変だとは知っていたが、鎧込みになるとさらに大変なものである。なんで鎧を脱いでから運ばなかったのか考えもしたが、それはきつと緊急を要するからだろうとエリックは勝手に決めつけた。

「すまぬな少年。吾輩が至らないばかりに、君のような者にも手を煩わせてしまうとは。情けない限りである」

真上からかけられた声は、粗野な担架運び二人とは比べ物にならないほど丁寧だった。やや気取った胡散臭いしゃべり口であるが、発せられる声からは明確な意思を感じ取れる。申し訳なさと感謝、そして言葉通りの情けなさを感じる心といったところか。想定していたものとはだいぶ違ったが、いよいよハンターの一人と言葉を交わすこと

になったエリックの内心は高揚していた。それに伴い持ち上げている両手にも力が入るのだが、その時に聞こえた唸り声もまた強まった気がする。

「気にしなくていいよ。暇だったから」

照れ隠ししながら返すが、答えは紛れもない事実。しかし、そのあとに謝罪と疑問を続ける気にはなれなかった。

まずはこの手負いの客人を、一刻も早く診療所に送り届けなければならないのだ。

火山の泪（I）



——火山の泪を掘り当てる。

この通達を出したときのラッセルの表情は、やけに苦々しげだった。

特に相対するハインツの瞳が輝きを増していたのが、余計ラッセルを腹立たせた。想定外だったのだ。

あと数年は、彼らに火山へ立ち入る資格は届かないはずであった。

しかし、届いてしまった。この事実は変わらない。

ギルドから送付された入山許可証の封を見たとき、ラッセルはしてやられたと思つた。二枚の許可証のうち、リイタの分だけやたら丁寧な包装をされていたからだ。ハインツの分が、まるでオマケといったようにぞんざいに包まれていたのを見て、何者かの思惑があつたことは想像に難くなかつた。

（余計なことをしてくれる）

つい先日会談を済ませた成金の顔がはつきりと思ひ浮かぶ。おそらく奴の仕業だ。

ギルドに裏から手をまわして、彼が執心するハンターの許可証を発行させたのだ。ハイ
ンツは文字通り、そのオマケである。

その事実を知らない若き書士の喜ぶ姿が、ラッセルを余計やるせない気持ちにさせ
る。

(まだ、早い。急ぐ必要はないのだ)

おそらく許可証を得た二人が何を言い出すかは分かっている。

だから、先手を打つことにした。

成金商人の思惑通りに運ばせたくない気持ちもあつたが、何よりこの二人をいきなり
火山の前線へ放り出すわけにはいかない。

丸まった背中を正して、ぐっと結んでいた口を小さく開く。そして、

「お前さんら、”火山の泪”を知つとるか？」

彼らに向けて、火山探索の始まりが告げられた。



たとえ火山ウインッブルグの先達が不慮の”ぎっくり腰”で下山しようとも、リイタの護衛ハンター
としての任務は終わらない。

南エルデの火山地帯と言えばハンターの間で良くも悪くも話題に尽きることがないのでから、これくらい暑い暑さも当然覚悟をしていた。はずだった。

ツンと鼻の頭に響く硫黄臭さと熱気が、革を介して身体中に絡みついてくる。ここはまだ火山の入り口に過ぎないのに、その先にある灼熱の気配を肌身で確実に感じ取れた。

普段から愛用しているマカ^マライ^ロイト^イト^シ製^リ鎧^ズを着こんでいなくて良かったと、リイタは心の底から思う。なぜならウインブルグ直々の忠告がなければ、今ごろ自分は熱した金属鎧に身も心も焼かれていただろうから。慣れないながらも急遽見繕ったレザーは、彼女に炎熱での行動を助けてくれる。狩猟行動時とは違った動きやすさがある。

「平気かい？ 手、止まってるよ」

珍しいものを見るかのように投げかけられた問いは、傍らに佇む彼女の護衛対象から。頷いて、滲んでいた額の汗をぬぐうと、もう何本目になるかわからない、穂先の碎けたピツケルに目線を落とした。普段から大きな得物を扱うせいかな、つい力加減を間違えてしまうようだった。

リイタがあまりにもピツケルをダメにするからと、手本を見せようとして岩盤ではなく己の腰を砕いたウインブルグの姿を思い起こすと、彼が置いて逝った残りのピツケルに遠慮なく手を伸ばす。

「……平気。ハインツさんは？」

「いい暑さだよ。この先を考えると足が重たくなるね。砂漠のラマラダがどんなにありがたい生き物だったか、よくわかる」

「湿らせた布マスケット越しに苦笑を浮かべたハインツは、はるか先にそそり立つエルデいただきの頂たてから昇る灰煙に視線を向ける。

リイタもハインツも、火山のことを知識で知ってはいても、現場に関しては素人同然だ。入山するのに必要な許可証が、かなり真新しいものであるのがその証拠。

「ラマラダ。連れては行けない？」

「身体構造的に適応しないだろうね。死なせてしまうよ」

額に張り付いた前髪を鬱陶しそうに掻き上げると、ハインツはきつぱりと答える。

答えの根拠は、リイタに砂漠で沈んだ白い巨体のことを思い出させた。どこから流れて着いたのか、氷結の世界から熱砂の大地に渡った雪獅子の末路は、彼女もこの目で見て
いる。

「……そう」

砂漠と違ってラマラダの足に期待できない火山の探索は、思っていた以上に骨が折れそうだった。

目的がはつきりしているだけに、ウインブルグ不在の状況を齒がゆく感じる。この先

を進むことは、引率者のいない遠足に行くことと同じなのだ。

——スウ……。

喉が焼けないように、クーラードリンクで湿らせた布を介して細く息を吸う。絞りだした酸素で定期的に感覚を尖らせるが、周囲にモンスターの気配はなかった。

基本的に奥地へ進めば進むほど、危険の度合いは高まる。純度の高い鉱石が多く、それを好む鉱石食いの岩竜たちが徘徊しているせいもあるだろう。

リイタ達がいる地点は、未だエルデの中心から離れた場所に位置していた。

「落ち着かない?」

「……少しだけ」

インナー越しとはいえ、革の肌に直接張り付くような感覚にはまだ慣れない。

ましてやウインブルグの着ていたアグナシリーズとは対照的に、二人が着込むレザーシリーズは探索向きの装備であり、言ってしまうえば激しい狩猟行動には向かない。彼女は今、護衛としての正装ではないのだ。

「なら、今日はもう少しこの辺りで探索を進めようか。せっかく時間もできたし、環境に体を慣らさないとね。特にリイタさんはピツケルの扱いを」

「……これ、ボロピツケルだから」

「ウインブルグさんが持ってきた分は、でしょ? 君が持ってきたのは全部グレート

だつて知つてるけど」

ハインツの指摘にぎくりと肩を震わせると、黙つてキラキラと鉄の粒が入り混じる岩盤へと身体を向ける。視線の先にある岩盤には、深々と鉄のツルが突き刺さっている。

いつの間にかリイタの右手にあつたピツケルの姿はなく、代わりに先端がささくれ立つた木の棒が一本のこつていた。返す言葉もなく、木の棒を適当に近くへ投げ捨てるど、おそらく出費をケチつたであろうウインブルグの持参したポロピツケルを新たに手に取る。

「てつきり君なら、こつそり先に進もうつて言うかと思つてたよ」

びつしよりと汗をにじませた顔でおどけて見せるハインツに対して、リイタは心の中で苦笑する。確かに少し前なら、そういう考えもあつたかもしれない。だがそれで溪流調査のとき、手痛い目を見たのだ。仮にも王立古生物書士隊を護衛する一角を担っているのだから、同じ過ちを繰り返すわけにはいかない。

「あなたが先に進みたいだけ、でしょ？」

「あれ、バレた？」

突き刺さつたツルを素手で抜こうとしながら指摘した。ツルに使われた鉄に、じんわりと熱が伝わっている。リイタは一度手を離すと、火傷しないように雑布を介して一気に引き抜いた。

ハインツに視線を向けてはいなかったが、リイタの心の中では、砂漠を超える灼熱の中にいても、彼の灰色の瞳に強い光が宿っているであろうことが、容易に想像できた。これまで体験したことのない、火山という未知の環境。書士として、これ以上はないほど好奇心を刺激されているのだろう。スケッチブックに殴り書きをする摩擦音が、さつきから止まっていなない。

これによく似た瞳を、リイタはつい先日も見かけた気がした。村のゲストハウスで、窓の外からこちらを見つめる好奇の光。興奮していたのか、ピッケルを持ちながら奇妙な踊りをしていたのが余計に、その印象を濃くさせた。

（……まっすぐな目）

まるで子供みたいに、火山という大自然へ向ける光は、リイタにとってまぶしく感じた。自分はいくまでも、ハンターとしてこの先に眠るであろう輝竜石ドラクライトや霊鶴石カブレライトを気にするくらいで、ハインツという書士が、いま何を感じ、その瞳の奥で考えているかなんて、まるで分らなかつた。

クーラードリンクよりも先に、ピッケルの残りが尽きそうだ。そんな視線をハインツから感じるが、構わず天高く腕を振り上げると、

「あ……」

艶のないマカライトの原石が、いつの間にか粉々に砕けていた。

火山の泪（Ⅱ）

喉を焼かないため身に着けていたマスクを裏返してみると、半日も経たないうちに黒く煤けていた。

「ハインツさん」

と、一言。リイタが少し離れて筆を取り続けるハインツに探索初日の終了を告げる。火山の先達の言いつけを守る時が来ていたのだ。ハインツは少しだけ残念そうな顔をする。夢中になって動かしていた筆を止めて小さく頷き返した。

モソモソと撤収の準備を始めるハインツから視線を外すと、リイタは照らしつけてくる西陽に向けて小さく目を細める。村に着くまでには陽が落ちきることはないだろう。予定通り戻ればウインブルグと合流する必要がある。

（……腰、良くなつてるといいけど）

打撲や裂傷ならともかく、腰のような内的な損傷は直接手を加えられない。荒唐治で”いにしえの秘薬”なる物もあるそうだが、簡単に手に入るような代物でもない。おとなしく経過を見るのが無難と言うものだ。

「明日の予定は改めて考える必要があるね」

それは手早く撤収の準備を済ませたハイנטツも承知していたようで、指でこめかみを擦りながら困ったように首をかしげている。

「土地勘のある人——ウインブルグさんの代わりを探す？」

「そうだね。ここの村長に相談してみようと思う。謝礼も……懐が寂しくなるけど用意しよう」

リイタは腰に下げた道具袋をちらりと見やる。粉々になったマカライトの原石が詰まっているが、状態が状態だけに大した値もつかないだろう。

「いや待てよ。経費で落とすという手が」

「ラッセルにどやされそう」

「うぎぎ……」

虚空に向けて指を折りながら肩間にシワを寄せるハイנטツは、おそらく今月買える本との帳尻合わせをしていたのだろうか。支給品よさだけでは足りないのだから仕方がない。

「いやいや待てよ。そもそもここは鉾山だ……一攫千金もあり得るか」

「私たちの目的、忘れてない？」

「……そうだったね。暑さで趣旨がブレるとこだったよ」

あくまでも現地調査フィールドワーク。本来の目的を疎かにしては元も子もない。この後すぐにハイנטツ一行として身銭を切る決断とともに話はまとまる。

リイタも肯定の意思を向けると、帰路を見つめる前にもう一度、後方の火山に碧眼を向けた。もくもくと昇る白煙の先に”火山の泪”はあるのだろうか。



案内役は村長に掛けあつたところであつさりと候補が見つかった。なんでも火山にロマンを求めて移住した物好きな男だと村長は言う。ゆえに妻に愛想を尽かされてしまったのはここだけの話と、聞いてもいない話まで聞かされてしまった。

暑さから解放されて程良い疲労感が肩にのしかかり始める頃。

気付けば夕日も沈みかけていた。

回り道をしてしまったが、明日の予定をハインツと話しながら二人はウインブルグの見舞いに向かう。調査一日目の締めくくりである。

「腰、大丈夫かなあ」

「ミエール君も一緒に見てくれるから大丈夫かと」

この場にいない四人(？)目の調査班メンバーであるミエールは、ウインブルグの看病を口実に意図的にハインツが現場から引き離していた。その甲斐もあつてか、一日目の調査はウインブルグ不在なこと以外は滞りなく終わりを迎えたのだ。

「本能に忠実な奴だからなあ。サボってハチミツ探しに繰り出してゐる気がするよ」

乾いた笑みで返したハインツの答えにリイタも妙に納得してしまった。

「……でも、この辺りはハチミツが採れないと思う」

「そりや蜂の生息域とは離れてるだろうからね。この地域でハチミツはかなりの貴重品だよ」

「村から出て探しに行つてたりして」

「はは、考えすぎだよ。まさかね？」

大げさに腕を広げてハインツは笑い飛ばす。

辺りを見回せば、すでに景色は薄紫に染まりつつあつた。すっかり遠くなつた火山に今一度目を向けると、薄暗い闇が火山全体を覆い、マグマの熱が火口から天上の闇をうつすらと赤く照らし出している、ように見えた。

リイタの生まれ育つた雪山とは全く違うこの環境。あの火山の奥地に足を運ぶ日は果たしてくるのだろうか。

そんなことに思いを馳せるのは、今日という調査が終わろうとしていたからだろう。しかし、そんな時だった。

入山時には一度も引つかかることのなかつたリイタの直感（センサ）が揺れたのは。

物々しい雰囲気の村人が二人とすれ違つたのだ。沈みかけの夕日と強まる闇の気配

が余計に村人の表情を重く見せたのかもしれない。しかし穏やかな出来事でないであろうことは、隣のハインツも直感しているようだった。

二人が振り返ると、村人は真つすぐに村長の家に足を踏み入れていく。周りを見回し耳を澄ましてみると、村全体に何やらどよめきが広がっている。

「……ハインツさん」

「ああ、嫌な予感がするよ……」

しばらくすると、村長の家からは焦燥した色を隠せない村人と、神妙な面持ちで火山の方角を見つめる村長の姿があつた。矛先がゆらりと変わると、リイタはその視線が彼女の隣、ハインツへ向いていることにすぐ気が付いた。

視線が含む色の意味は、リイタのハンター観察術が読み取るに“期待”と“不安”。

村長に調査の旨を伝えた際、書士隊の知名度を上げようとハインツがやけに気合を入れて自己紹介してしまったことも一因だろう。

「君とのトレーニングのおかげかな？ 有難いことに、まだ首を突っ込む元気はありそうだよ」

「……しつかり感謝してください？」

「はは……でも、こういう雰囲気少し苦手かも」

「私はそれでも。尻込みしないで行きましょう」

「こういう時の君って頼りになるね」

弱腰な言葉をつくハインツだが、彼の瞳には調査開始時の活力が今も宿っている。言葉通り余力があるのだろう。

王立古生物書士隊は王国の威光のもと、常に大陸の民たちの味方であり続ける。この行動指針はリイタも気に入っていた。

調査に費やした疲労が残っているとは思えないほど、力強い一步を書士は踏み出す。隣のリイタも追隨する。調査にほんの少しの寄り道サブタレットができるくらいなのだ。



単刀直入に説明すると、子供が一人山の中へ入ってしまったらしい。それに山は山といえども火山の採石場だ。これだけでも事態は急を要すると言っても差し支えない。つい先程まで、二人はその手暑い歓迎を受けたばかりなのだから。

これから村人総出で捜索が始まると村長は言う。

「では、採石場周囲にモンスターの類は？」

ハインツが尋ねる。捜索の際に一番の懸念ネックとなりうるモンスターの存在は、たとえ事前情報ではないとされていても確認するに越したことはない。環境とは刻一刻と変

化し続けるものなのだ。

「……十数年、牙獣や飛竜も見られていませんな」

村長の話では最後に出現したバサルモスは、討伐後その地域を定期的にハンターの採集任務の地として提供し、定期的な巡回地域に設定しているそうだ。そして現在進行形でモンスターの予兆はないと言う。

「このン・ミカは平穏な採掘村なのが特色ゆえ。ただ——」

言い淀む村長の言葉に、ハインツとリイタは力強く耳を傾ける。

こうして”火山の泪”を巡る調査一日目の第二幕は突発的に上がるのだ。

エア採掘（Ⅲ）

大地からこぼれ出る灼熱の赤を包むのは、光を失い静かに天に張りつく夜の帳。とほり

日中は上下から襲う熱地獄をエリックは幸か不幸か知らないでいた。

それでも少年の息遣いは荒かった。

経験したことがないほどの渴きが空間を支配していたのも一つだろう。頭の中では分かつていたつもりでも、一呼吸ごとに生命活動を回す小さな体に対しては非常に大きな負荷ストレスとなる。

それに今のエリックは頭と同時に身体も全力で動かしてしまっている。そうせざる得ない理由があつたのだ。

どうしてこうなつてしまったのか。

少年の心情を表すのにはこの一言に尽きる。

走る。走る。走る。

堆積した灰と、その中からかき分けるように力強く芽吹く新芽を踏みしめながら、少年にとって待ち焦がれた火山の大地を突き進んでいく。

水筒ポトルの中に入れて水が振動で揺れ動く。それをエリックはひどく煩わしく感じるが、想像の世界でしか知らない少年にとつて未開の地を進むには、この水は僅かでも心を落ち着かせるためにも必要不可欠であつた。

広がる闇を密かに照らすのはエリックにとつて宝物である小さな紅蓮石の欠片だつた。

小瓶に入れて首からぶら下げ、灯りにしては幾ばくか心もとない小さな石に宿る光。一抹の不安が彼の心を掠める。しかしそれ以上に興奮もしていた。文字通り熱で浮かされていたのかもしれない。

たとえ不安であつてもエリックが走るのに必要だつた理由は、非常に単純で明快であつたのだ。

「どいにいるの?」

追いかけていたのだ。

少年の先を走っていた、一匹の客人を。

どうしてこうなつてしまったのだろう。

——時間は遡る。



「あいだダダダダ?! ぎ、ぎえ☒え☒エエツ!!」

村の一角にポツンと建つ診療所からは、中年ハンターのイヤンクックも顔負けの断末魔が立ち昇っていた。

三人がかりで無事にハンターを送り届けることはできた。までは良かったのだが、その後あれよあれよと事態は転がっていた。

「動くんじゃあない。鎧が脱げんだろ」

ハンターの常駐しない村、ン・ミカ。診療所の翁だつてもちろんハンター慣れをしていなかった。

だから鎧を脱がそうものなら手荒になるのは必然であり、それが今の中年ハンターにはとても堪えるらしい。エリックの目の前では、翁がのたうち回るハンターを強引に抑え込んで、燃えるような赤の際立つ鎧を引っぺがしにかかっていた。

「これはどこから脱がせばいいんだか? こうか? ここか?!」

「もう少し紳士的にツ……その角度は——いかなので、あ、るあああああ?!」

本当はエリックも手伝いたいのだが子供の順番はここまでだった。大人の纏う鎧の

重さは相当なもので力及ばず見守ることしかできない。強引に引つ剥がされた兜の下では、露わになった黄金のヒゲ面が苦痛に歪んでいた。

思わず中年ハンターの表情から目を背けて考える。

一体、あの火山で何があつたのだろう。

これまで間近でハンターを感じる機会のなかつたエリックにとって、考えれば考えるほどに気になることが増えていく。ハンターが火山から負傷して運ばれたのだから、どんなモンスターと死闘を繰り広げたのだろうか、心の隅で想像していた。

脱ぎ捨てられ、ところどころ修繕された痕の目立つ赤い鎧を興味本位で覗き込む。そして視線は再び鎧の主に向かう。叫んだ折に魂ごと放り出してしまったのか、中年ハンターはぐったりと床に臥せている。

ひと仕事を終えた翁が汗を拭っており、この空間にはエリックと翁、そして物言わぬ中年ハンターの三人だけ。凹凸の二人組の姿はない。炭鉱での作業が残っていたのか、ハンターを運び終えるなり立ち去っていたのだ。

ここでエリックは自分がこの場に付いてきた目的を思い起こした。

謝つてから、訊ねる。

たつた二つのことなのに二の足を踏んでしまう。

それにいざ実践しようとしても、今は難しいみたいだった。あまりにも中年ハンター

ハサ
ル
モ
ス

の擬態が完ぺきだったからだ。

「……」

”火山の泪”なんて気になる言葉。

立ち入ることが許されていないとはいえ、こんなにも間近で火山を感じていたというのに。

もしかすると本当に聞いてはいけない話だった、なんて考えが頭をよぎる。これがもし極秘の任務なんてものであったなら。それを盗み聞いてしまったエリックは一体どうなってしまうのか。

無防備に開けてあった窓から偶然聞こえてしまっただけ。そんな苦しい言い訳を考へつつも、やはり聞き耳を立てた自分に対して激しく後悔してしまう。

（出直そ……）

そうエリックの心が傾いた時であった。

「お悩みかニヤあ？」

「え……？」

いつの間にか、三人ではなくなっていた。

「ハチミツひと瓶くれたら悩みを聞いてやるニヤ」

不意に黄金のヒゲ面よりも更に本格的な、ただし非常に愛らしい不遜なヒゲ面が現れたのだ。

いつの間にか懐に入り込んでいたモノの姿を捉えた瞬間、ぎよつと飛び退いて木壁に頭をぶつけそうになる。何とかこらえて壁伝いに距離をとると、もう一度その姿をまじまじと見やる。見やるよりも先に、やけに甘い匂いが鼻を掠めた。

エリックへ声をかけてきたのは一匹のイルー。何の変哲のないイルー色に、間の抜けた顔と大きなまん丸の瞳で、少年の頭一つ分小さい位置から彼の驚いた顔を覗き込んでいる。

「言いたいことがあるならばつきりするニャー」

小ぶりな口から投げかけられる言葉は、まるで自分の心を見透かすように、ガツンとエリックの胸に殴りこんできた。

「それは……」

言い淀むエリックに対して、イルーは小ぶりな鼻をひくひくさせながら、ハンターよりも愛嬌のあるヒゲを揺らす。やがて大して間を置かず

「じゃあオイラから聞くニャ。この村最高の……ハチミツはどこにあるニャ？」

と、無遠慮に彼(?)の目的を吐き出してくるのだ。

病人は絶対安静。至極当然の話で、診療所は野次馬が集つて良い場所じゃない。すっかり話しかけるタイミングを逃したエリックは、例のアイルーともども表に放り出されていた。

少なくとも彼の傍らでハチミツを要求したアイルーの名はミエール。そしてエリックが覗き見たときにいた一匹のアイルーこそ、このミエールだったのだ。これはまたとなない機会だ。今のエリックはなし崩し的にこのミエールの話を聞くことになっている。

「でも、なんでハチミツ？」

「それはオイラが食べたいから……じゃニヤくて、ハチミツは万病に効くお薬ニヤー。ヒゲの旦那を治すにもハチミツが一番なのニヤー！　そしてお前、知りたいことある顔してたニヤー。だけど情報には対価タイカが必要、らしいのニヤ。これぞ“ういんういん”だニヤー！」

たしかにハチミツは、薬草と煎じることですらその効果をさらに高める、と行商人からエリックは聞いていた。

それらしいことを語るミエールだが、中年ハンターが気絶してしまった以上、無理に

起こして話を聞くわけにもいかない。

それにネコバアのアイルーと触れ合う機会が多かったエリックにとって、かえってこちらの方が気楽に話すことができるのも事実。アイルーは物々交換が好きなのだ、彼らの文化をエリックは知っていたのだ。

「鉱石ならいくつかあるけど」

「石で腹は膨れないニャ」

「やっぱり食べたいだけじゃんか」

エリックの提案はバツサリと切り捨てられる。おそらく万病に効くという話も建前なのだろう。

「あのね、ハチミツっていうけど、こんな村にあると思う？」

「ないのニャ？」

「大きい村シ・ガンカにならあると思うけど、ここは炭鉱の村だし」

「それは困るニャ!!」

まん丸の目を潤ませると、見るからにミエールは落胆して肩を落とす。

ハチミツがあつたとしても、それは定期の行商人が来た時くらいだ。次に来るまで時間も空いてしまう。今すぐ用意するのは難しいのだ。

何か代わりになるようなものがあればと、小さな頭をひねって考える。ハチミツ好き

と言うのだから、きつと甘いものは好物だろう。そう考えながら、

「代わりじゃだめなの？」

「ハチミツがいい……」

しゅんとしつぽを丸めるミエール。この正直者を見てみるとエリックもバツが悪く感じてしまう。さらに少し俯いて考え込むと、やがて思いついたとばかりにミエールに提案を試してみた。

「——あれなら」

「ニヤ？」

火山の村で甘味は貴重である。そんな彼らが古来から飢えを満たすために培ってきた知識は当然あるのだ。少なくともエリックにとっては当たり前でなじみ深い一品。

「熱帯イチゴって知ってる？ それをグツグツに煮詰めたジャム、僕の大好物さ。ハチミツにも引けをとらないよ」

「交渉成立ニヤっ!!」

一瞬である。先程まで落胆で丸めていた尻尾は快活さを取り戻し、ミエールの瞳は輝きを取り戻していた。

エリックもうまく話がまとまり、右手で握りこぶしを小さく作る。

「よし、なら家に戻って……あ」

「どうしたニヤ？」

「朝、全部食べちゃったかも……」

「なら問題ないニヤ！ 足りないものは現地調達っ！ ご主人も行ってたのニヤ！」

「あ、待つて……！」



そして時間は少し前に戻る。

はじめは村近辺に自生する熱帯イチゴを探し回っていたのだが、これがまた見つからない。次第に探索の範囲は広がっていき、遂にはエリックを阻み続けていた坑道の関所付近まで来ていたのだ。

「だめだよ！ これ以上行ったら危ないって」

「ニヤ？ この村にはモンスタ^ぁーはいないって知ってるニヤ！ あと少しだから心配いらないニヤー！」

ミエールが鼻息荒く周囲を見回していると、遂に何か見つけたのか、彼の尻尾が空に向かって舞い上がる。

「見えたニヤー！」

と、彼の一言が聞こえたが最後。ミエールは信じられないほど俊敏な動きでエリックのはるか先へ走り跳んで行ってしまった。

「……あ、行っちゃった」

坑道とは異なる火山へ向かう境界線。どうやらミエールは熱帯イチゴを見つけた様子であったが、これ以上は本当にまずい。大人たちから近寄るなど言われていた山の先を、彼はお構いなしに踏み越えて行ってしまった。

さすがに放っておくわけにもいかない。ミエールはあのハンターのオトモなのだから、きつと熱帯イチゴを取ったら戻ってくるだろう。

辺りも暗くなり始めた。小脇の袋から小瓶を取り出すと、ふわりと小さく暖かな光が少年の顔を照らした。常温で燃え盛る紅蓮石の欠片は非常時の光源となるのだ。本当はゲンコツが飛ぶから遅くに出回ることなんてないはずなのに、なぜか肌見放さず持っていた灯りを見てエリックの内心はワクワクに満ちていた。

経緯はどうあれ、ハンターたち一行が来てエリックの一日は目まぐるしく変わったのだ。それはなにかの始まりを告げているかのようで、なにかもわからず心は高揚してしまふのだ。

「ぎ、ギニャアアアアアア
!????」

絞り出されるような悲鳴が上がったのは、ちょうどその時だった。